

『八幡山遺跡』 正誤表

訂正箇所		誤
ページ	行	
30	13～14	砥石1点(112)、剥片・碎片42点、礫6点、計53点である。
		正
		砥石1点(112)、すり石1点、剥片・碎片42点、礫5点、計53点である。

余市町

八幡山遺跡

一般国道5号倶知安余市道路（共和～余市）工事施工に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.3

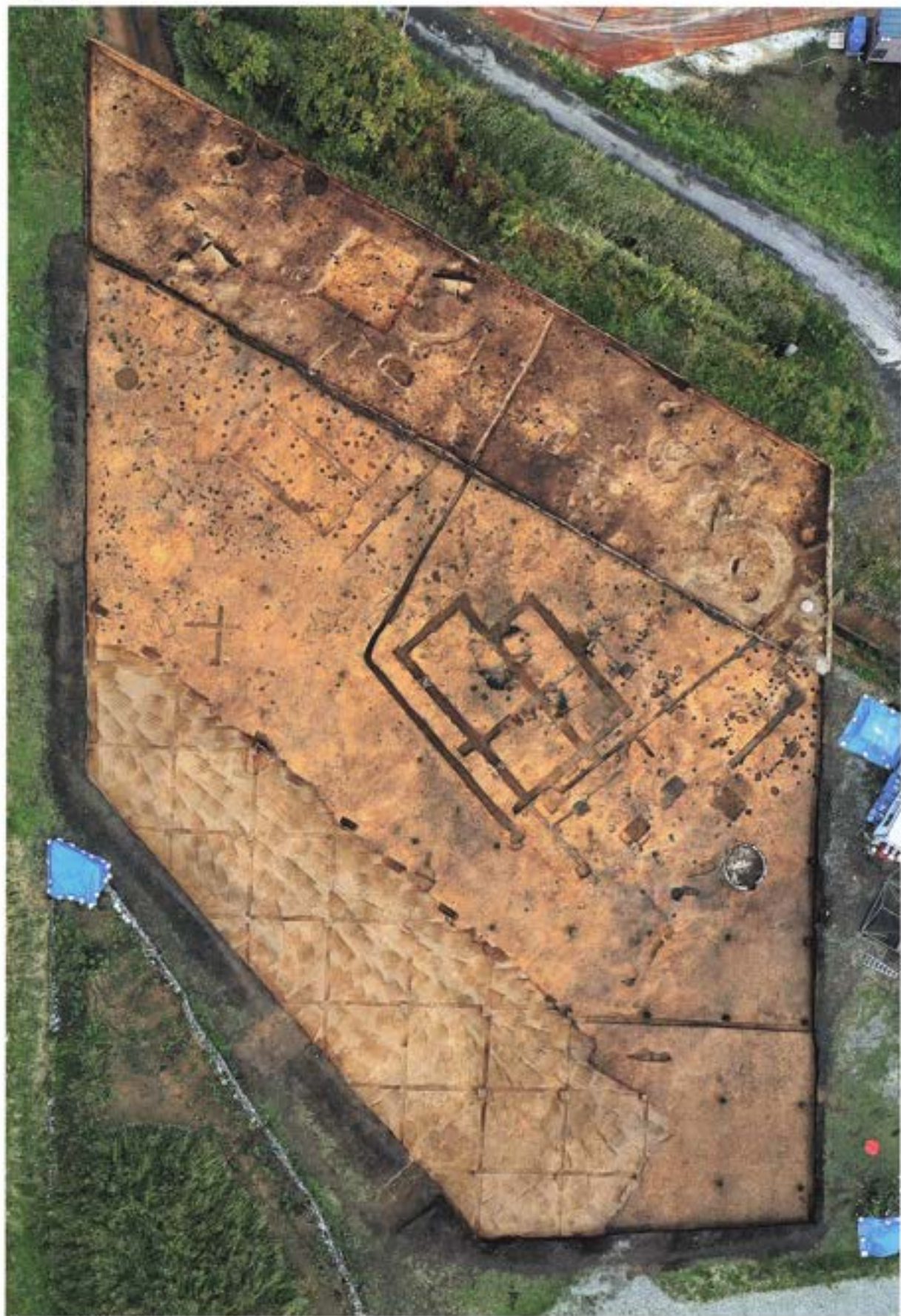
余市町教育委員会



八幡山遺跡遠景 余市湾を望む(南から)



八幡山遺跡遠景 後志自動車道余市IC、丸山を望む(西から)



八幡山遺跡調査区全景



II b層堆積状況 調査区南壁土層断面G M-6・7グリッド(北から)



II b層検出状況 調査区南側(南東から)



II b層堆積状況
調査区南壁土層断面G M-7グリッド(北から)



II b層堆積状況 H3(北東から)

口絵 4



SH1 出土復元土器



SH2 出土復元土器

序

余市町は北海道西部、積丹半島の基部に位置し、町の南側はゆるやかな丘陵地帯に囲まれ北側は日本海に面しています。北海道内では比較的温暖な気候に恵まれ、豊かな自然を背景に、江戸時代よりニシン漁に沸き、明治時代以降はりんごを始めとする果樹栽培が盛んで、ドラマでも話題となったニッカウヰスキー（株）北海道工場やワインぶどう栽培でも知られている町であります。

町内では現在64ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、太古よりこの地に生きた先人たちの営みの痕跡が数多く残されていることが、自然に恵まれ人々が住みやすい環境や条件が揃っていたことを何よりも雄弁に語っております。

昨年度より2年にわたり発掘調査が行われた八幡山遺跡もそのひとつであり、数多くの遺物や遺構がみつき、また新たな知見を得ることとなりました。今後はこれらの成果を広く紹介し、特に地域の方々には自らの土地の豊かさの一面にふれ、文化財への理解を頂き、文化財保護行政の推進に努めていかなければならないところです。

今回の調査にあたりましては、北海道教育庁より範囲確認調査から本発掘調査に至るまで種々のご指導を賜り、また関係者のお力添えや地域の皆様のご理解、ご協力により2年間の発掘調査を無事終了することとなりました。ここに衷心より厚く御礼申し上げ、発掘調査の成果報告書であります『八幡山遺跡』刊行の序文といたします。

令和2年3月

余市町教育委員会
教育長 佐々木 隆

例 言

1. 本書は一般国道5号倶知安余市道路(共和-余市)工事施工に伴う埋蔵文化財発掘調査(八幡山遺跡 登載番号D-19-030)の報告書である。
2. 本遺跡は、国土交通省北海道開発局小樽開発建設部から余市町教育委員会(以下、町教委)へ委託し、株式会社シン技術コンサル(以下、シン技術)が町教委の指導のもとに発掘調査、整理作業、及び報告書作成作業の支援業務を行った。
3. 本書の作成は余市町教育委員会社会教育課が行い、小川康和の指導のもと編集は石川博行が担当した。各章、及び各節の執筆は石川、岩橋由久、中塚風沙、高橋 理、田中哲郎、飯浜幹広が分担して行い、各文末に担当者名を表記した。
4. 自然科学分析については、種子同定を椿坂恭代(Project Seeds 考古植物研究会)、火山灰分析を岡 孝雄(アースサイエンス株式会社)・古澤 明(株式会社古澤地質)、花粉分析・放射性炭素年代測定・樹種同定・黒曜石産地推定を株式会社古環境研究所に委託し、分析結果を第七章附編に掲載した。
5. 2019年5月1日に改元された。このため、本書での元号表記は年度として記述する場合は平成、ある特定の年月日で記述する場合は令和とした。
6. 発掘調査、及び整理作業体制
 - ・受 託 期 間 平成30年7月24日～平成31年3月20日
平成31年4月2日～令和2年3月19日
 - ・調 査 期 間 平成30年9月3日～平成30年11月2日
令和元年5月13日～令和元年10月31日
 - ・整 理 期 間 平成30年11月1日～平成31年3月13日
令和元年11月1日～令和2年2月28日
 - ・調査区所在地 余市郡余市町黒川町707ほか
 - ・調 査 面 積 618㎡(平成30年度)、1,800㎡(平成31年度)
 - ・事 業 主 体 国土交通省北海道開発局小樽開発建設部

(平成30年度)

- | | | | |
|--------|------------|---------|-------|
| ・調査主体 | 余市町教育委員会 | 教 育 長 | 佐々木 隆 |
| | | 教 育 部 長 | 小俣 芳則 |
| | | 社会教育課長 | 奈良 論 |
| | | 同 主 幹 | 浅野 敏昭 |
| | | 同 主 幹 | 木村 律子 |
| | | 同 主 幹 | 櫻井 仁 |
| | | 同社会教育係長 | 小川 康和 |
| | | 同博物館学芸員 | 中塚 風沙 |
| ・調査担当者 | 小川康和(町教委) | | |
| ・調査員 | 石川博行(シン技術) | | |
| ・調査補助員 | 中塚風沙(町教委) | | |
| ・計測技術員 | 惣田 稔(シン技術) | | |

- ・発掘作業員 荒関 修 氏家洋子 小笠原純二 関 浩 樋口政晴 藤塚秀克
横山由紀子
 - ・整理作業員 氏家洋子
- (平成31年度)
- ・調査主体 余市町教育委員会 教 育 長 佐々木 隆
教 育 部 長 上 村 友 成
社会教育課長 奈良 論
同 主 幹 浅野敏昭
同 主 幹 小島祐子
同 主 幹 櫻井 仁
同文化財係長 小川康和
同博物館学芸員 中塚風沙
 - ・調査担当者 小川康和(町教委)
 - ・主任調査員 石川博行(シン技術)
 - ・調査員 岩橋由久(シン技術)
 - ・調査補助員 中塚風沙(町教委) 高橋 理 田中哲郎 飯浜幹広(シン技術)
 - ・管理技術員 惣田 稔(シン技術)
 - ・計測技術員 江口正実(シン技術)
 - ・発掘作業員 荒関 修 飯野貴子 伊藤 孝 氏家洋子 小笠原純二 門野昌宏
金山順幸 久慈詩織 久慈晴香 小林 博 笹木信之 鈴木せつ子
鈴木雅文 関 浩 中岡喜寛 藤塚秀克 松川奈々 横山由紀子
和島恵美子
 - ・整理作業員 氏家洋子 久慈詩織 久慈晴香 杉本春華 鈴木せつ子 松川奈々
横山由紀子

7. 本遺跡から出土した遺物については、余市町教育委員会が保管する。

8. 発掘調査、及び整理作業にあたって下記の方々より指導、助言、協力を頂いた(順不動、敬称略)。

石質同定：松田義章(日本地質学会会員)

北海道教育委員会 藤原秀樹 村本周三 赤井文人、北海道博物館 右代啓視 鈴木琢也、(公財)北海道埋蔵文化財センター 坂本尚史 鈴木 信 三浦正人、石狩市教育委員会 工藤義衛、江別市教育委員会 遠藤ゆきの、小樽市教育委員会 石川直章 大鐘卓哉、伊達市教育委員会 永谷幸人、知内町教育委員会 竹田 聡、松前町教育委員会 佐藤雄生、函館工業高等専門学校 中村和之、秋田市立秋田城跡歴史資料館 伊藤武士、国立歴史民俗博物館 林部 均、石橋孝夫(元石狩市教育委員会)、乾 芳宏(元余市町教育委員会)、氏江敏文(元名寄市教育委員会)、佐藤一夫(元苫小牧市教育委員会)、田才雅彦(元北海道教育委員会)、花岡正光(元北海道埋蔵文化財センター)、札幌国際大学 越田賢一郎 矢吹俊男、札幌大学 瀬川拓郎、北海道教育大学札幌校 百瀬 響、東北芸術工科大学 青野友哉、(株)イビソク 岡本香菜、仲鉢 浩

凡 例

1. 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。

H：縄文時代の住居跡 SH：擦文時代の住居跡 HP：住居跡に付属する小土坑

P：土坑 F：炉跡 SP：小土坑 FC：剥片集中

SS：集石・礫集中 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構

2. 本書に掲載されている図の縮尺については、原則として以下の通りである。

基本土層柱状図 1／50、住居・剥片集中遺構図 1／60、その他遺構図 1／40

遺物分布図(土器・石器) 1／1,000

土器(実測、拓本図) 1／3、土製品 1／3、磁器 1／3

剥片石器 2／3、石製品 1／3、礫石器 1／3

金属製品 1／2、ガラス製品 1／1、古銭 1／1

遺構図内遺物 土器 1／6、磁器 1／6、剥片石器 1／4

礫石器 1／6、金属製品 1／4

なお例外についてはスケールを参照されたい。

3. 写真の縮尺は、任意である。

4. 遺構図中にある遺物の種別は、以下の印で示した。

土器：○ 石器・石製品：△ 礫：▲ 金属製品：◆ 炭化物：■

5. Ⅲ～Ⅳ章本文中()で示した数字は遺物掲載番号を表す。

本文目次

序	i
例言	iii
凡例	v
第Ⅰ章 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 試掘調査	2
(1) 概要	2
(2) 遺物	3
3. 発掘調査の方法	3
4. 遺物整理の方法と報告書作成	5
5. 遺物の分類	5
(1) 土器・陶磁器	5
(2) 石器	6
第Ⅱ章 遺跡の環境	
1. 遺跡の立地と地形	9
2. 余市町内の遺跡と八幡山遺跡	10
3. 基本層序	12
第Ⅲ章 平成30年度調査地点	
1. 概要	15
2. 遺構	15
(1) 住居	15
(2) 土坑	18
(3) 炉跡	19
(4) 小土坑	21
(5) 剥片集中	21
(6) 集石	21
(7) 溝状遺構	22
(8) 性格不明遺構	22
3. 遺物	23
第Ⅳ章 平成31年度調査地点	
1. 概要	27
2. 遺構	27
(1) 住居	27
(2) 土坑	31
(3) 小土坑	41
(4) 剥片集中	41
(5) 性格不明遺構	43
3. 遺物	44
第Ⅴ章 遺構外出土遺物	
1. 概要	47
2. 土器・土製品・磁器	47
(1) 土器	47
(2) 土製品	49
(3) 磁器	49
3. 石器	50
(1) 剥片石器	50
(2) 礫石器	54
(3) 石製品	56
4. 金属製品	56
5. ガラス製品	56
第Ⅵ章 総括	
1. 余市町八幡山遺跡の墓塚について	57

2. 余市町八幡山遺跡の擦文時代の生業について	60
3. 余市町八幡山遺跡出土のイノシシについて	60
4. まとめ	62
引用・参考文献	64

第Ⅶ章 附編

<附編1> 花粉分析	139
<附編2> 余市町八幡山遺跡腐植土層中の 火山灰の分析と同定	142
<附編3> 放射性炭素年代測定	151
<附編4> 樹種同定	154
<附編5> 余市町八幡山遺跡から出土した植物遺体	157
<附編6> 黒曜石産地推定	161

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 試掘調査位置及び本発掘調査範囲図	2
第3図 グリッド配置図	4
第4図 八幡山遺跡周辺の地形図	9
第5図 明治12年の余市	10
第6図 八幡山遺跡周辺及び関連遺跡一覧	11
第7図 基本土層模式図	12
第8図 基本土層柱状図(1)	13
第9図 基本土層柱状図(2)	14
第10図 八幡山遺跡の墓塚配置図	58
第11図 北海道のイノシシ出土遺跡	61

挿表目次

表1 試掘調査出土遺物一覧(本発掘調査範囲分)	2
表2 八幡山遺跡周辺及び町内の 縄文、統縄文、擦文時代の遺跡一覧	11

別表目次

別表1 遺構観察表(平成30年度調査)	69
別表2 遺構観察表(平成31年度調査)	71
別表3 試掘出土土器観察表	74
別表4 試掘出土石器観察表	74
別表5 遺構内出土土器観察表(平成30年度調査)	75
別表6 遺構内出土石器 ・石製品観察表(平成30年度調査)	75
別表7 遺構内出土金属製品観察表(平成30年度調査)	76
別表8 遺構内出土土器観察表(平成31年度調査)	76
別表9 遺構内出土石器 ・石製品観察表(平成31年度調査)	77
別表10 遺構外出土石器・土製品・磁器観察表	78
別表11 遺構外出土石器・石製品観察表	79
別表12 遺構外出土金属製品・ガラス製品観察表	82

図版目次

図版1 遺構配置図	85
図版2 遺構分割図(1)	86

図版 3	遺構分割図(2)	87
図版 4	遺構分割図(3)	88
図版 5	遺構分割図(4)	89
図版 6	遺構分割図(5)	90
図版 7	遺構分割図(6)	91
図版 8	遺構分割図(7)	92
図版 9	遺構分割図(8)	93
図版 10	遺構分割図(9)	94
図版 11	平成30年度 SH1	95
図版 12	平成30年度 SH2	96
図版 13	平成30年度 P	97
図版 14	平成30年度 F・FC・SS	98
図版 15	平成30年度 SD・SX	99
図版 16	平成31年度 H1(1)	100
図版 17	平成31年度 H1(2)	101
図版 18	平成31年度 H2(1)	102
図版 19	平成31年度 H2(2)	103
図版 20	平成31年度 H3	104
図版 21	平成31年度 H4	105
図版 22	平成31年度 SH3(1)	106
図版 23	平成31年度 SH3(2)	107
図版 24	平成31年度 P(1)	108
図版 25	平成31年度 P(2)	109
図版 26	平成31年度 P(3)	110
図版 27	平成31年度 P(4)	111
図版 28	平成31年度 P(5)・SX	112
図版 29	平成31年度 FC	113
図版 30	試掘調査出土遺物 ・平成30年度遺構内出土遺物(1)	114
図版 31	平成30年度遺構内出土遺物(2)	115
図版 32	平成30年度遺構内出土遺物(3)	116
図版 33	平成30年度遺構内出土遺物(4)	117
図版 34	平成30年度遺構内出土遺物(5) ・平成31年度遺構内出土遺物(1)	118
図版 35	平成31年度遺構内出土遺物(2)	119
図版 36	平成31年度遺構内出土遺物(3)	120
図版 37	平成31年度遺構内出土遺物(4) ・遺構外出土石器(1)	121
図版 38	遺構外出土石器(2)・土製品・磁器	122
図版 39	遺構外出土石器(1)	123
図版 40	遺構外出土石器(2)	124
図版 41	遺構外出土石器(3)	125
図版 42	遺構外出土石器(4)	126
図版 43	遺構外出土石器(5)	127
図版 44	遺構外出土石器(6)	128
図版 45	遺構外出土石器(7)	129
図版 46	遺構外出土石器(8)	130
図版 47	遺構外出土石器(9)	131
図版 48	遺構外出土石器(10)	132
図版 49	遺構外出土石器(11)	133
図版 50	遺構外出土石器製品・金属製品・ガラス製品	134
図版 51	石器分布図(1)	134
図版 52	石器分布図(2)	135
図版 53	石器分布図(1)	136

図版 54	石器分布図(2)	137
図版 55	石器分布図(3)	138

写真目次

口絵 1	八幡山遺跡遠景 余市湾を望む(南から) 八幡山遺跡遠景 後志自動車道余市IC、丸山を望む (西から)	
口絵 2	八幡山遺跡調査区全景	
口絵 3	II b層堆積状況 調査区南壁土層断面G M-6・7グリッド(北から) II b層検出状況 調査区南側(南東から) II b層堆積状況 調査区南壁土層断面G M-7グリッド(北から) II b層堆積状況 H3(北東から)	
口絵 4	SH1 出土復元土器 SH2 出土復元土器	
写真 1	平成30年度調査区遠景(北西から) 平成30年度調査区遠景(北から)	167
写真 2	平成30年度調査区全景(北東から) 平成30年度調査区全景	168
写真 3	平成30年度調査前状況(北東から) 平成30年度調査前状況(南西から) 表土掘削状況(西から) 表土掘削状況(北東から) 調査区北壁土層断面E C-15グリッド(南から) 調査区東壁土層断面D D-17グリッド(北西から) 調査区東壁土層断面D I-14グリッド(北西から) 調査区東壁土層断面D L-13グリッド(北西から)	169
写真 4	SH1 完掘(北東から) SH1 土層断面 A-A' 南側(南東から) SH1 土層断面 A-A' 北側(南東から) SH1 土層断面 B-B' 西側(南西から) SH1 土層断面 B-B' 東側(南西から)	170
写真 5	SH1 遺物出土状況 床面1(西から) SH1 遺物出土状況 床面2(西から) SH1 遺物出土状況 床面(北東から) SH1 遺物出土状況 床面(南東から) SH1 遺物出土状況 床面3(西から) SH1 遺物出土状況 カマド付近(東から) SH1 カマド検出(北東から) SH1 煙道土層断面 A-A'(南東から)	171
写真 6	SH1 掘方完掘(北東から) SH1 カマド完掘(北東から) SH1 カマド被熱層断面 A-A'(南東から) SH1 貯蔵穴土層断面 I-I'(北東から) SH1 貯蔵穴完掘(北東から)	172
写真 7	SH2 完掘(北東から) SH2 検出(北東から) SH2 土層断面 A-A'(北西から) SH2 土層断面 B-B'(北西から) SH2 土層断面 C-C'(北西から)	173
写真 8	SH2 カマド袖崩落土検出(北西から) SH2 カマド袖崩落土土層断面(北から)	174

	SH2 遺物出土状況(北東から)		F27 土層断面(北西から)
	SH2 遺物出土状況(北から)		SD2 土層断面(南東から)
	SH2 カマド遺物出土状況1(北東から)		SD2 完掘(南東から)
	SH2 カマド遺物出土状況2(北東から)		SS1 遺物出土状況(南から)
	SH2 カマド遺物出土状況3(北東から)		SS2 遺物出土状況(南から)
	SH2 カマド遺物出土状況4(北東から)	写真16	SS3 遺物出土状況(北から) …………… 182
写真9	SH2 掘方完掘(北東から) …………… 175		SS4 遺物出土状況(東から)
	SH2 カマド完掘(北東から)		FC1 検出(南から)
	SH2 煙道土層断面 A-A'(北西から)		FC1 遺物出土状況(南から)
	SH2 カマド土層断面 E-E'(北東から)		FC2 検出(西から)
	SH2 カマド土層断面 F-F'(南東から)		SX1 土層断面 C-C'(南西から)
写真10	SH2 カマド火床土層断面 F-F'(南東から)… 176		SX1 土層断面 D-D'(南東から)
	SH2 カマド掘方完掘(北東から)		SX1 完掘(北東から)
	SH2 炉検出状況(西から)	写真17	平成31年度調査区全景(北から) …………… 183
	SH2 炉土層断面 G-G'(西から)		平成31年度調査区全景
	SH2 貯蔵穴土層断面 H-H'(北東から)	写真18	平成31年度調査区北側遺構分布(南東から)… 184
	SH2 貯蔵穴完掘(北東から)		平成31年度調査区北側完掘
	P1 土層断面(北東から)	写真19	平成31年度調査区南側完掘(南東から) …………… 185
	P1 完掘(東から)		平成31年度調査前状況(南から)
写真11	P2 土層断面(南西から) …………… 177		表土掘削状況(北から)
	P2 完掘(南東から)		作業風景(南から)
	P4 土層断面(南から)		作業風景(南東から)
	P4 完掘(南東から)	写真20	調査区北壁土層断面E
	P5 土層断面(南西から)		D-11グリッド(南から) …………… 186
	P5 完掘(南東から)		調査区北壁土層断面E D-12グリッド(南から)
	P6 土層断面(東から)		調査区北壁土層断面E D-13グリッド(南から)
	P6 完掘(南から)		調査区北壁土層断面E D-14グリッド(南から)
写真12	P7 土層断面(南西から) …………… 178		調査区西壁土層断面A L・M-3グリッド(東から)
	P7 完掘(北東から)		調査区西壁土層断面A K・L-3グリッド(東から)
	P8 土層断面(北東から)		調査区西壁土層断面A J・K-3グリッド(東から)
	P8 完掘(南東から)		メインベルト土層断面C
	P9 土層断面(南東から)		I・J-6グリッド(南東から)
	P10 土層断面(東から)	写真21	メインベルト土層断面C
	P10 完掘(東から)		H-7~I-6グリッド(南東から) …………… 187
	P13 土層断面(北東から)		メインベルト土層断面C
写真13	P13 完掘(北東から) …………… 179		F・G-8グリッド(南東から)
	P14 土層断面(南東から)		メインベルト土層断面C E-9グリッド(南東から)
	P14 完掘(南東から)		メインベルト土層断面F
	P15 土層断面(北西から)		G・H-12グリッド(北東から)
	F10 検出(南東から)		メインベルト土層断面F
	F10 土層断面(南から)		G-11・12グリッド(北東から)
	F11 検出(南東から)		メインベルト土層断面F E-10グリッド(北東から)
	F11 土層断面(南東から)		5ラインベルト土層断面B K-5グリッド(西から)
写真14	F21 検出(南西から) …………… 180		5ラインベルト土層断面B L-5グリッド(西から)
	F21 土層断面(南から)	写真22	H1 完掘(北東から) …………… 188
	F21 遺物出土・完掘(南から)		H1 土層断面 B-B'(西から)
	F22 土層断面(東から)		H1 土層断面 C-C'(北から)
	F24 検出(南西から)		H1 遺物出土状況(南から)
	F24 遺物出土状況(南から)		H1 遺物出土状況(北から)
	F25 検出(南東から)	写真23	H1 掘方完掘(北東から) …………… 189
	F25 土層断面(北から)		H1HP42 土層断面(西から)
写真15	F26 検出(南東から) …………… 181		H1HP42 完掘(西から)
	F26 土層断面(南西から)		H1HP18・39・40・63 土層断面(南東から)
	F27 検出(北西から)		H1HP18・39・40・63 完掘(南東から)

写真24	H1HP35 土層断面(南東から)……………	190	SH3 炭化材・礫集中検出(北から)	
	H1HP35 完掘(南東から)		SH3 遺物出土状況(北から)	
	H1HP9 土層断面(南から)		SH3 礫集中検出(北から)	
	H1HP9 完掘(南から)		SH3 煙道土層断面 E-E' 西側(北から)	
	H1HP19 土層断面(西から)		SH3 カマド完掘(北から)	
	H1HP19 完掘(西から)		写真34 SH3 完掘(北から)……………	200
	H1HP30 土層断面(東から)		SH3 カマド焼土検出(東から)	
	H1HP30 完掘(東から)		SH3 カマド火床土層断面 F-F' (西から)	
写真25	H2 完掘(西から)……………	191	SH3 炉検出(北から)	
	H2 検出(北東から)		SH3 炉土層断面 J-J' (南東から)	
	H2 土層断面 A-A' (南から)		写真35 P16 土層断面 A-A' (北から)……………	201
	H2 土層断面 B-B' (南から)		P16 土層断面(トレンチ部分)(東から)	
	H2 土層断面 C-C' (南東から)		P16 遺物出土状況(西から)	
写真26	H2 炉1 遺物出土状況1(北東から)……………	192	P16 完掘(北から)	
	H2 炉1 遺物出土状況2(北東から)		P17 土層断面 A-A' (北西から)	
	H2 炉1・2 検出(北から)		P17 土層断面 B-B' (北東から)	
	H2 炉1 土層断面 G-G' (南西から)		P17 遺物出土状況(南西から)	
	H2 炉2 土層断面 H-H' (南西から)		P17 完掘(北東から)	
	H2 炉1 完掘(南西から)		写真36 P18 土層断面(南西から)……………	202
	H2 炉2 完掘(南西から)		P18 完掘(南から)	
	H2 炉2 掘方土層断面 H-H' (南西から)		P19 土層断面 B-B' (西から)	
写真27	H2 掘方完掘(南西から)……………	193	P19 完掘(南西から)	
	H2HP18 土層断面(南から)		P20 遺物出土状況(西から)	
	H2HP18 完掘(南から)		P20 遺物出土・完掘(西から)	
	H2HP32 完掘(南西から)		P21・22 土層断面(東から)	
	H2HP3 炭化材出土状況(南から)		P21 遺物出土・完掘(東から)	
写真28	H3 完掘(北東から)……………	194	写真37 P22 完掘(東から)……………	203
	H3 土層断面 A-A' (東から)		P23 土層断面 A-A' (北東から)	
	H3 土層断面 B-B' (北から)		P23 土層断面 B-B' (南東から)	
	H3 遺物出土状況(北東から)		P23 完掘(南西から)	
	H3 掘方完掘(北東から)		P24 土層断面 A-A' (南東から)	
写真29	H4 完掘(南東から)……………	195	P24 土層断面 B-B' (南西から)	
	H4 土層断面 A-A' (南から)		P24 遺物出土状況(南東から)	
	H4 土層断面 B-B' (東から)		P24 完掘(南東から)	
	H4 土層断面 C-C' (南東から)		写真38 P25・26 土層断面(南東から)……………	204
	H4 遺物出土状況(南東から)		P25 遺物出土状況(北東から)	
写真30	H4 掘方完掘(南東から)……………	196	P25 遺物出土・完掘(南東から)	
	H4 遺物出土状況(東から)		P25・26 完掘(南東から)	
	H4 遺物出土状況(南から)		P27 土層断面(南西から)	
	H4 炉検出(北西から)		P27 遺物出土状況(南西から)	
	H4 炉土層断面 D-D' (北西から)		P27 完掘(南西から)	
写真31	SH3 完掘……………	197	P28 土層断面(南から)	
	SH3 遺物出土状況 平成30年度調査(南東から)		写真39 P28 完掘(南から)……………	205
	SH3 土層断面 平成30年度調査 A-A' (南東から)		P29 土層断面(南西から)	
	SH3 完掘 平成30年度調査(南西から)		P29 完掘(南西から)	
	SH3 掘方完掘 平成30年度調査(南西から)		P30 土層断面(南から)	
写真32	SH3 掘方完掘(西から)……………	198	P30 遺物出土状況(南から)	
	SH3 検出(北西から)		P30 完掘(南から)	
	SH3 土層断面 B-B' (南から)		P31 土層断面 A-A' (北から)	
	SH3 土層断面 C-C' 北側(北西から)		P31 土層断面 B-B' (東から)	
	SH3 土層断面 C-C' 南側(北西から)		写真40 P31 遺物出土状況(南東から)……………	206
写真33	SH3 遺物出土状況 覆土1(西から)……………	199	P31 完掘(東から)	
	SH3 遺物出土状況 覆土2(西から)		P32 土層断面(南東から)	
	SH3 炭化材出土状況(北から)		P32 完掘(南から)	

	P33 上層断面 (東から)		P55 土層断面 (北西から)	
	P33 遺物出土状況 (東から)		P55 完掘 (北東から)	
	P33 遺物出土状況 (北東から)		写真 47 P56 土層断面 (北東から) ……………	213
	P33 完掘 (東から)		P56 完掘 (北東から)	
写真 41	P34 土層断面 (南東から) ……………	207	P57 土層断面 (西から)	
	P34 完掘 (南東から)		P57 完掘 (西から)	
	P35 上層断面 A-A' (南から)		P58 土層断面 (北から)	
	P35 上層断面 B-B' (西から)		P59 土層断面 (東から)	
	P35 完掘 (北から)		P60 土層断面 (北から)	
	P36 遺物出土状況 (北東から)		P61 土層断面 (南から)	
	P36 土層断面 B-B' (北東から)		写真 48 P62 土層断面 (南東から) ……………	214
	P36 完掘 (北東から)		P62 完掘 (南東から)	
写真 42	P36 南東壁被熱痕 (北西から) ……………	208	P63 上層断面 (南から)	
	P36 南東隅テラス検出 (南西から)		P63 完掘 (南から)	
	P39 上層断面 (南東から)		P64 土層断面 (北から)	
	P39 完掘 (南東から)		P64 完掘 (北から)	
	P40 上層断面 (南東から)		SX2 土層断面 (南西から)	
	P40 完掘 (南東から)		SX2 掘方完掘 (南西から)	
	P41 上層断面 (南から)		写真 49 FC4 検出 (南から) ……………	215
	P41 完掘 (南から)		FC5 検出 (南東から)	
写真 43	P42 土層断面 (北から) ……………	209	FC6 検出 (南東から)	
	P42 完掘 (東から)		FC6 ~ 8 検出 (北西から)	
	P43 土層断面 (南から)		FC9-1 検出 (南から)	
	P43 遺物出土状況 (南から)		FC9-2 検出 (南西から)	
	P43 完掘 (南東から)		FC10 検出 (南東から)	
	P44 土層断面 (東から)		FC11 検出 (東から)	
	P44 遺物出土状況 (北東から)		写真 50 現場見学 1 ……………	216
	P44 完掘 (東から)		現場見学 2	
写真 44	P45 上層断面 (北から) ……………	210	近隣小学校 現場見学 1	
	P45 遺物出土状況 (北から)		近隣小学校 現場見学 2	
	P45 完掘 (北から)		遺跡現場見学会 1	
	P46 土層断面 (南から)		遺跡現場見学会 2	
	P46 完掘 (南から)		遺跡現場見学会 3	
	P47 土層断面 (北東から)		遺跡現場見学会 4	
	P47 遺物出土状況 (北西から)		写真 51 試掘調査出土遺物	
	P47 完掘 (南東から)		・平成 30 年度遺構内出土遺物 (1) ……………	217
写真 45	P48 土層断面 (北西から) ……………	211	写真 52 平成 30 年度遺構内出土遺物 (2) ……………	218
	P48 完掘 (北西から)		写真 53 平成 30 年度遺構内出土遺物 (3)	
	P49 上層断面 (南から)		・平成 31 年度遺構内出土遺物 (1) ……………	219
	P49 完掘 (南から)		写真 54 平成 31 年度遺構内出土遺物 (2) ……………	220
	P50 土層断面 (南東から)		写真 55 平成 31 年度遺構内出土遺物 (3) ……………	221
	P50 完掘 (南東から)		写真 56 平成 31 年度遺構内出土遺物 (4) ……………	222
	P51 土層断面 (南東から)		写真 57 遺構外出土土器・土製品・磁器 ……………	223
	P51 完掘 (南東から)		写真 58 遺構外出土土器 (1) ……………	224
写真 46	P52 土層断面 (東から) ……………	212	写真 59 遺構外出土土器 (2) ……………	225
	P52 完掘 (東から)		写真 60 遺構外出土土器 (3) ……………	226
	P53 土層断面 (東から)		写真 61 遺構外出土土器 (4) ……………	227
	P53 完掘 (東から)		写真 62 遺構外出土土器 (5)	
	P54 上層断面 (南から)		・石製品・金属製品・ガラス製品 ……………	228
	P54 完掘 (南から)			

第 I 章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

余市町は北海道西部、小樽市の西側に隣接する(第1図)。北海道内では比較的温暖な気候に恵まれ、余市町や南側に隣接する仁木町には春から秋にかけて、旬の果実等を求めて町外から多くの人を訪れる。また余市町から西側の日本海沿岸の積丹方面には夏期の海水浴のほか、一年を通して釣りや海産物を求め、内陸の倶知安やニセコ方面にはアウトドアや温泉等を目的に、特に冬期には日本国内はもとより、海外からのスキー客が増加している。しかし、公共交通機関は運行本数が少なく、主要道路である一般国道5号は大型バスや一般車両が行き交うのに加え、農作物を中心に道内外への物資輸送ルートとして利用されている。また、周辺地域から小樽市や札幌市への通勤・通学・買物・通院等、地域住民にとって日常生活における重要な役割を担っている。このような状況の中、交通渋滞や事故の多発、自然災害等による通行止め時の代替路が存在しない事が以前からの大きな課題となっていた。

このような状況に対応するため、一般国道5号倶知安余市道路は余市町から倶知安町までを全体計画区間として、道路構造令による第1種第3級の規格に基づく2車線の自動車専用道路を建設する「一般国道5号改築工事(倶知安余市道路)」が計画された。当該事業の完成によって、平成30年12月に開通した北海道横断自動車道黒松内釧路線と連絡する事で、利便性の向上や交通混雑の緩和、交通事故の減少を図り安全性の向上を目的とするものである。

当該事業にともない平成27年8月に北海道開発局小樽開発建設部より埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出され、同年10月8日北海道教育委員会より回答、平成30年4月に北海道教育委員会は小樽開発建設部、余市町教育委員会各担当者が立会いのもと試掘調査を実施し、当該地は



第1図 遺跡位置図

周知の埋蔵文化財包蔵地「八幡山遺跡」の範囲にあり、工事に先立ち発掘調査を行い記録保存が必要である旨の回答があった。これを受け三者で協議を重ね、平成30年7月小樽開発建設部と余市町で発掘調査委託契約を締結、同年9月3日～11月2日に618㎡を発掘調査し、同年11月1日～平成31年3月13日に一次整理を行った。平成31年4月1日には小樽開発建設部と余市町で発掘調査委託契約を締結し、令和元年5月13日～10月31日に1,800㎡を発掘調査し、同年11月1日より翌年3月13日まで整理作業を行った。(小川)

2. 試掘調査

(1) 概要

当該地域では国道5号道路建設にともなう試掘調査を実施した。調査期間は平成29年4月23～24日の2日間で、対象面積は約0.2ha、試掘坑は約1m×1m規模のものを53ヵ所設定した。試掘坑配置図は第2図に示した。調査は20mごとにバックホウで表土から徐々に掘削した後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。

調査の結果、現地表面下0.3～0.4mで黒褐色を呈する遺物包含層が部分的に確認され、調査対



第2図 試掘調査位置及び本発掘調査範囲図

表1 試掘調査出土遺物一覧(本発掘調査範囲分)

地点	遺物
CL87920 L20	黒曜石剥片1点
CL87940 L20	土器片2点、チャート製石器1点、黒曜石剥片5点、頁岩剥片1点
CL87930 L30	土器片1点、黒曜石砂片3点
CL87960 L40	土器片3点、黒曜石剥片1点、黒曜石砂片1点
CL87940 L40	土器片3点、黒曜石剥片15点、黒曜石砂片16点、チャート剥片1点、チャート砂片1点、礫片1点
CL87920 L40	黒曜石剥片2点、黒曜石砂片1点、チャート砂片1点
トレンチ	土器片4点、黒曜石剥片13点、チャート剥片1点、礫片1点

象範囲の北東側4ヵ所の試掘坑及びトレンチで遺物と黒褐色土の両方を確認した。表1には発掘調査区内の各坑、トレンチ出土の遺物を一覧にした。遺物は、縄文時代早期～続縄文時代の土器のほかに石器等が出土している。主な遺物については図版30に掲載した。

以上の調査を踏まえて協議した結果、当該地域の北東側について本発掘調査を行い、南東側については工事立会で対応することとなった。(中塚)

(2) 遺物(図版30-1～10)

1はII群の胴部破片。RLの斜縄文が施され、胎土には繊維が含まれている。2はIII群a類の深鉢の大型破片。口縁部から胴部中央付近に相当する。口唇は山形の突起を有し、断面形状は三角形である。口唇直下や胴部には円形刺突文や押引文が施されるが、押引文が刺突文を覆っている状態が観察される。胴部の地文はRLとLRの結束第2種の羽状縄文である。胎土には長さ最大12mmまでの角礫が多く含まれている。内面の調整は十分ではなく凹凸に富む。

3・4はVI群a類土器の胴部破片である。3は長さ2cmほどのLR縄文が幅2cm単位で施されている。4は屈曲する肩部付近の破片。上位に斜め下から上方向への刺突が3ヵ所残る。地文は縦方向の細いRL縄文である。内面は付着物によって覆われている。(高橋)

5はb類凹基石鏃で黒曜石製。先端は使用による衝撃剥離がある。6は石錐c類でメノウ製。厚めの剥片背面を全面加工し、腹面の左右側縁の一部に加工を施している。錐の機能部の右側縁を欠損する。7は黒曜石を素材とするスクレイパーa類。背面の左右側縁に刃部を作出している。腹面側縁には使用による微細な剥離がみられる。剥片下半を欠損する。8は両面調整石器で黒曜石製。9は黒曜石のRフレイク。背面下端にスクレイパー様の急角度の刃部が作り出されている。(高橋)

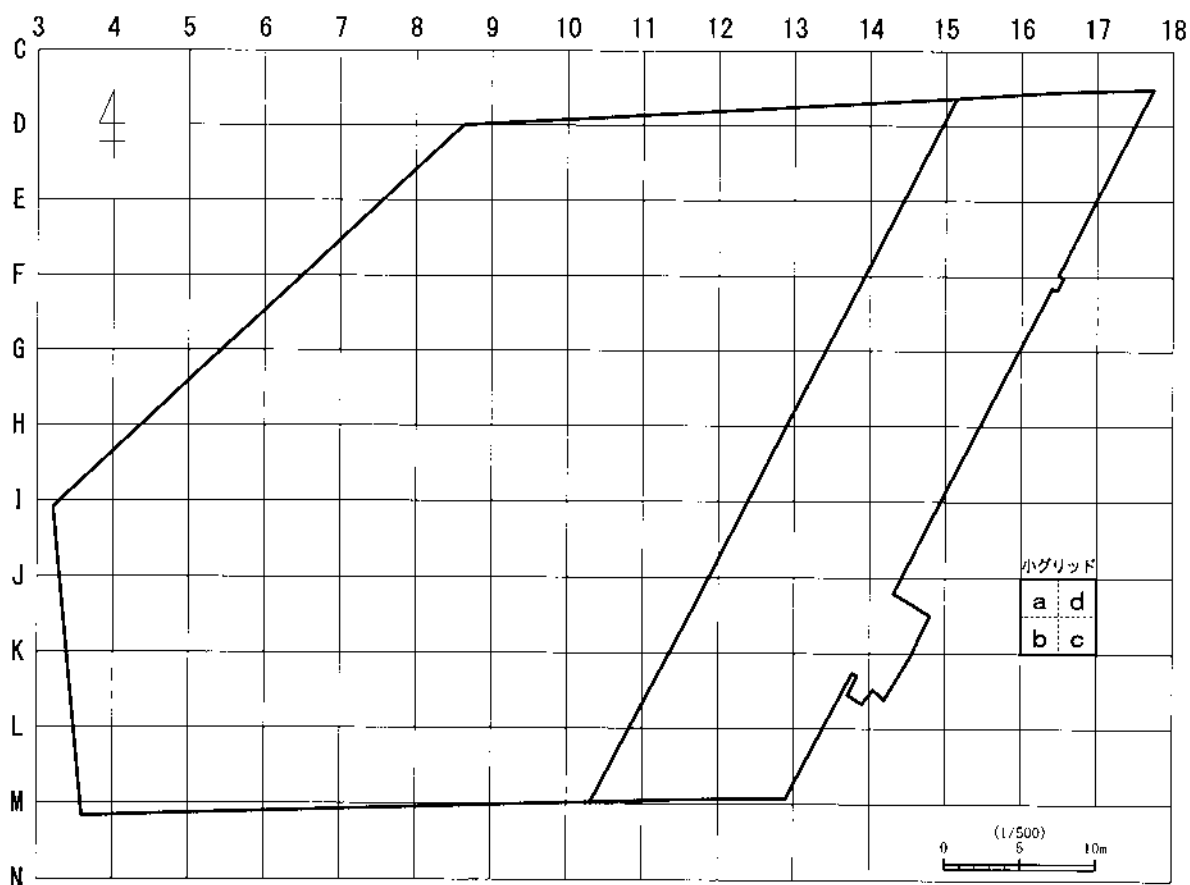
10は石斧基部。厚みのある石斧で、素材の硬質頁岩の葉理に直交して作られている。石斧表面はかなり風化が進み、破断面も含め淡緑色を呈するが、ごく新しい割れ口は濃緑色であり一見黒色にみえる。図正面右側方の稜がしっかり残っている。(田中)

3. 発掘調査の方法

八幡山遺跡の調査は平成30年度と平成31年度の2ヵ年行った。調査区を含む周辺は、道路用地となる以前は宅地と果樹畑であった。宅地の建造物や基礎等はすでに解体・撤去されており、また果樹畑は以前から休耕地となっている状況であった。果樹畑部分は草刈りを行い表土掘削の準備とした。宅地部分は解体後の埋め戻しや整地はされていたが、平成30年度調査区範囲内南側に電柱が残されていたため、初年度はその撤去から行った。

グリッドの設定は、器械点名H30T1(4級基準点 X座標:-90975.866000 Y座標:46259.097000)を基準点とした。グリッドは公共座標(世界測地系)に従い、日本平面直角座標系XII系を用いて大グリッドを設定した。グリッドの表記は北→南にアルファベット、西→東に算用数字を付した。グリッドの規格は5m×5mとし、呼称は北西隅のライン交点で表示した(第3図)。大グリッドをさらに2.5mに区分して4つの小グリッドを設定した。小グリッドは北西を基点に反時計回りにa～dとした。アルファベットと数字のラインの交点に見出しとして木杭を打設し、掘削や遺物の取り上げ等を行う際の基準とした。

表土掘削については、重機を使用した。果樹畑部分は遺物包含層を耕作土としていたため、遺物等を見逃さないように慎重に掘削を行った。一方、宅地部分は解体の際に発生したコンクリート等が埋まっており、遺物包含層の残りも良くなかった。平成31年度調査区の南側は沢地形を呈しており、標高が低くなっている分、削平は遺物包含層までは及んでいなかった。2ヵ年とも残土



第3図 グリッド配置図

は調査区外の近くに仮置きし、砂埃が近隣に飛散しないよう努めた。表土掘削を行った後は、調査面が乾燥しないようブルーシートによって全面養生を行った。

遺物包含層掘削については、全て人力で行った。遺物の有無によって、スコップや移植ゴテ等を使い分け作業を進めた。掘削によって発生した残土は一輪車に積み込み、調査区外にある残土置き場に搬出した。調査区外に出る際は、低い段差であれば歩み板を渡すことで対応し、高低差が大きい箇所では調査区壁をスロープ状に削り、迅速に搬出できるよう努めた。

安全対策については、朝礼の際に全体に伝え、さらに作業中にも確認するよう行った。調査区周辺は斜面地となっており、転倒しやすい状況にあった。そのため雨天となった場合は、作業を止め待機し、また雨量が多い場合は調査区の養生を行い、作業を中止することで対応した。その他、夏期の暑さや熱中症対策は、個々人の体調管理に加え、小休憩を小まめにとることや休憩場所に寒冷紗を使用した日よけを設置した。

記録については、トータルステーションやデジタルカメラ(35mm一眼レフデジタルカメラ、最大1,220万画素)を使用した。主要遺物(住居床面出土や一括性の高いもの等)が出土した場合は、作業の迅速化を図るため、写真測量(デジタルカメラ)で出土状況を撮影し、そこにNo.を付して取り上げを行った。その他の遺物は5m×5mのグリッドを四分割した小グリッド単位で各層位毎に取り上げた。これらの遺物出土状況や遺構検出状況、土層断面等の記録データは、遺跡管理システム(シン技術コンサル開発)と画像処理ソフトIllustratorを併用し、デジタル処理、データ化を図った。調査区全体の写真撮影については、ローリングタワーやマルチコプター(ドローン)を使用して記録を行った。

(石川)

4. 遺物整理の方法と報告書作成

平成30年度の一次整理作業は、11月1日から開始した。余市水産博物館横に仮設ハウスを設置し、そこを整理作業室とした。主な作業は遺物注記で、また発掘調査時に水洗できなかった分の遺物洗浄や採取した土壌の選別等も行った。その他、図面や写真類の整理、台帳化を行い、平成31年3月13日に一次整理にかかわる全ての作業を終了した。

平成31年度の整理作業は、11月1日から開始した。前年度と同様に余市水産博物館横に仮設ハウスを設置し、整理作業室とした。主な作業は平成31年度分の一次整理作業と2ヵ年分の二次整理作業及び報告書作成で、3月13日に全ての業務を終了した。

遺物の水洗や注記作業等については、発掘調査と並行して行った。天候不良等による発掘調査休止時は特に集中的に行い、現地調査終了後も一部継続した。土器片の接合作業については、同一遺構内、包含層では同一グリッド内での接合関係を確認後、遺構内出土のものは同時期の遺構、包含層は隣接するグリッドやさらに離れた別グリッド間での確認も行った。一括遺物以外の土器片の接合率は低く、口縁部や底部といった個体数が分かるものや、文様等から時期が特定できる胴部片を抽出した。一部の土器片については表面が脆弱な状態であったため、必要に応じてバインダーを用い補強を行った。剥片や礫についても、可能な限り接合作業を行った。

復元が可能な土器については、バイサムを使用し足りない部分の補強等を行った。また、接合した土器のうち、接着面がわずかしかないものについても同様に補強を行った。

その他、発掘調査で特に重要と考えた遺構や剥片集中等の微細な出土遺物がみられる遺構については、土壌を採取し、前者はフローテーションや水洗選別、後者は水洗選別を行った。これらの作業も遺物の水洗と同様に発掘調査と並行して進めた。

遺物の実測・トレース作業については、シン技術コンサル平岸分室、報告書作成にかかわる編集作業については同東北支店で行った。報告書作成にあたって2ヵ年分の調査成果を1冊の報告書とするため、遺構と遺構内出土遺物については調査年度毎に、遺構外出土遺物については2ヵ年分をまとめて説明を行い、図版と写真もそれに従った。なお、SH3については2ヵ年にわたって調査を行っているので、調査面積の多い平成31年度分の中で記載した。(石川)

5. 遺物の分類

(1) 土器・陶磁器

八幡山遺跡の出土土器については以下の通りとした。

I 群土器 縄文時代早期に属する土器群

a 類 貝殻条痕文系の土器群

b 類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等が施される東釧路式系の土器群

b-1 類 東釧路Ⅲ式に相当するもの

b-2 類 中茶路式に相当するもの

b-3 類 東釧路Ⅳ式に相当するもの

II 群土器 縄文時代前期に属する土器群

a 類 網文式に相当するもの

b 類 中野式に相当するもの

III 群土器 縄文時代中期に属する土器群

a 類 北筒式に相当するもの

b類 大自在B式に相当するもの

c類 ノダツプⅡ式に相当するもの

Ⅳ群土器 縄文時代後期に属する土器群

a類 余市式に相当するもの

b類 タブコブ式に相当するもの

c類 手稲式に相当するもの

Ⅴ群土器 縄文時代晩期に属する土器群

太い沈線、燃糸圧痕文、刻み目、縄文等が施文されるタンネットウシ式等に相当するもの

Ⅵ群土器 続縄文時代に属する土器群

a類 恵山式に相当するもの

b類 後北式に相当するもの

Ⅶ群土器 擦文時代に属する土器群

a類 甕、鉢等が無文または沈線、刺突、刻みを有するもの

b類 土師器甕に相当し、ロクロによる成型を受け、回転糸切りによる底部切り離し痕があるもの

Ⅷ群土器 近世以降に属する陶磁器類

(高橋)

(2) 石器

石器の分類については以下の通りとした。

〈剥片石器〉

石鏃

周辺ないし両面が調整加工され、尖頭形を呈する小型のもの

a類 平基のもの

b類 凹基のもの

c類 茎が不明瞭で、菱形、五角形、円基、尖基のもの

d類 茎を持つもの

石槍

a類 茎を持つもの

b類 明瞭な茎を持たない木葉形のもの

c類 破損のため、ナイフとの分類が不能であるものを「石槍・ナイフ」とした。

石錐

不定形の剥片を素材として、特に先端部に調整加工が施され、断面が三角形もしくは四角形状の錐状の突出部を作出したもの

a類 剥片の一端に突出部を作出したもので黒曜石を素材とするもの

b類 剥片の一端に突出部を作出したもので黒曜石以外(主に頁岩)を素材とするもの

c類 棒状のもの

d類 ほかの石器を転用したもの

e類 つまみ部を作り出したもの

ナイフ

縦長剥片の片面ないし両面が加工され、尖頭形を呈するもの

- a 類 長軸の一端に調整加工によってつまみ部を作出したものを「つまみ付きナイフ」とする。片面加工が多く、両面加工はわずかである。
- b 類 つまみ部を持たないものを「ナイフ」とする。

スクレイパー

不定形な剥片を素材として、側縁や端部等に二次加工が施された刃部の角度がやや大きなもの

- a 類 剥片の側縁や端部にやや角度の大きな刃部を作出しているもの
縦長剥片の側縁に刃部を持つサイドスクレイパー、下端に刃部を持つエンドスクレイパー、側縁から下端にかけて刃部を持つものがある。
- b 類 側縁に抉りがあるスクレイパーを「ノッチ Sc」とする。
- c 類 剥片を円形に加工して縁辺に刃部を作出するもの
縄文時代後半から擦文時代の小型のラウンドスクレイパーを含む。

楔形石器

小型の剥片の両端に階段状の剥離痕が対になって認められ、全体の形状は四角形や三角形、紡錘形を呈するもの

両面調整石器

厚みのある剥片の両面に形状を整える加工が施されるもの

Rフレイク

不定形の剥片を素材として、周辺の一部に簡易な二次加工が施されるが、上記の分類基準にはあてはまらないもの

Uフレイク

剥片に使用による痕跡がみられるもの

石核

素材に厚みがあり、2点以上の剥片を同方向に剥離した痕跡のあるもの

- a 類 転石を使用したもの
- b 類 脈岩を使用したもの
- c 類 棒状原石を使用したもの

原石

剥片素材を得るための剥離が行われていないもの、あるいはその痕跡が不明瞭なもの（高橋）

<礫石器>

石斧

出土量は少なく、破損品がほとんどで細分類項目は設けていない。なお、小型のものを「石のみ」と呼称したほか、擦切残片がわずかに出土している。

砥石

平坦～浅く窪む作業面を持つもの、U字の溝状作業面を持つものに区別されるが、素材とする礫の形状、大きさも様々であり細分類項目は設けていない。なかには金属製品に使用したと考えられる鋭利な使用痕が残るものが観察された。

たたき石

棒状、楕円形（不整円）の礫を利用し、礫の縁辺や端部、平坦面に敲打の使用痕を持つもので、珩岩や硬質頁岩製のものがみられる。

すり石

たたき石と同様の礫を利用し、すりの使用痕を持つもので、特に、断面三角形の棒状礫稜部を使用している。なお、同個体に敲打痕・すり面を持つものは、「たたき石・すり石」としている。

くぼみ石

礫平坦面に円形もしくは不定形の凹みを持つもので、大半は敲打により凹みを形成し、凹み底面は凸凹する一方、側面は平滑になっている。

石皿・台石

やや人型の自然礫の平坦面に敲打痕やすり面を持つ。

石製品

勾玉の垂飾品、石棒等の実用具でないものを一括した。また、球状の自然礫も含めている。

礫

以下の通り、便宜的に呼称した。

- ・ 礫：転石等素材そのものの原形を残すもの
- ・ 破断礫：自然的・人為的営力にかかわらず、大きく割れたもの（接合し易いもの）
- ・ 礫片：小破片（接合しにくいもの）

カマドに使用した礫や礫石器の事実記載にあたって、「破断礫」・「破断面」と表記している。

（付記） 礫の石質について

報告書掲載礫石器類の石質同定は、松田義章氏（日本地質学学会員）にお願いした。大半のものは詳しく同定いただいたが、報告者の準備不足等もあり、すべてをみていただくことができなかった。このため、一覧表に記載する石質の一部については報告者の肉眼観察によるものであり、その責はすべて報告者にあるものです。また、松田義章氏同定のものは、別表備考欄に「※」を記入し区別できるようにしている。 (田中)

〈金属・ガラス製品〉

これらの多くは後世の攪乱層から出土したもので、近世に溯る可能性あるものについて、特徴的なものを報告書に掲載した。金属製品では古銭、和釘、キセル等があり、ガラス製品には玉がある。これらの遺物の成分分析は実施していない。過去の事例等を参考として推定している。

なお、鉄製品には蹄鉄やその破損品が多く出土している。現場ではコンクリート製のサイロ跡基礎が検出され、後世の馬耕や馬運にかかわる物品と考えられる。 (田中)

第二章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と地形

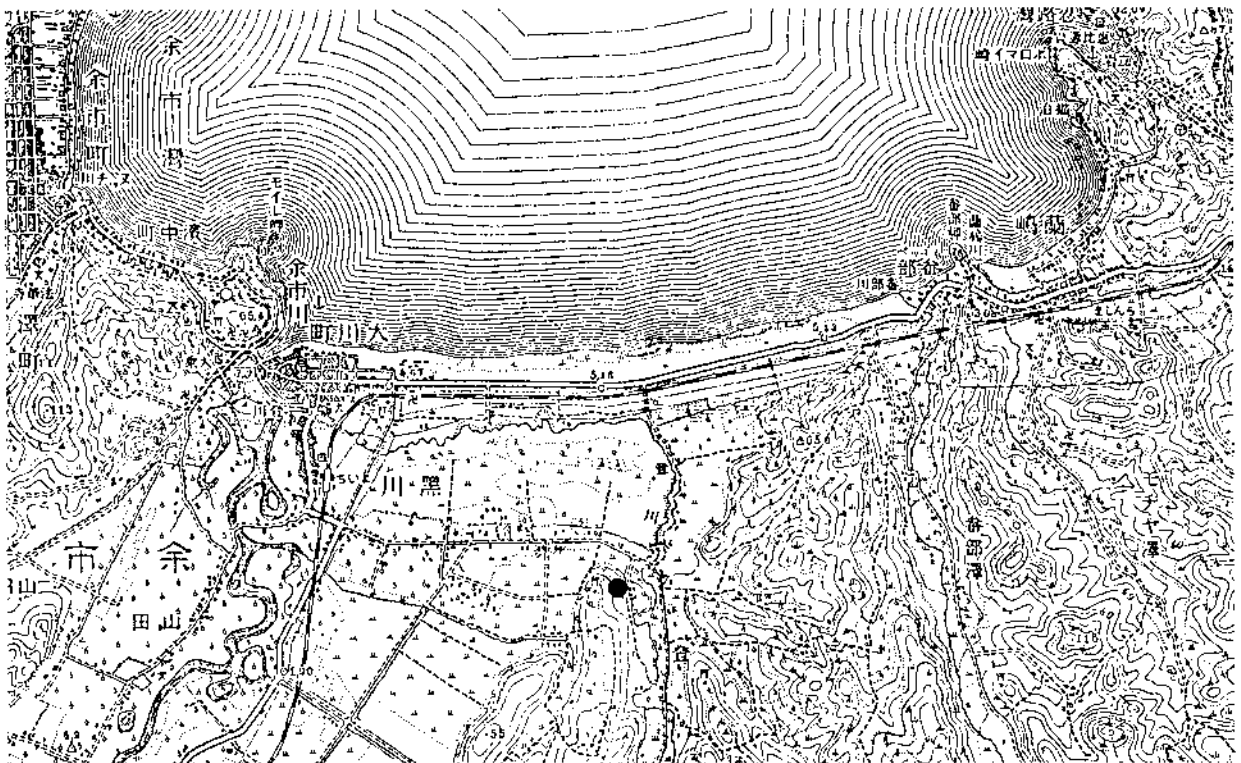
余市町は北海道西部に位置し、日本海に面している。シリパ岬、忍路岬の両岬に囲まれた余市湾には、内陸部の山地からヌッチ川や余市川、登川が流れ込んでいる。その海岸沿いは、余市川河口から大浜中海岸を経て畚部（フゴッペ）岬付近までの6 kmほどのゆるやかな弧を描く砂浜地帯である（第4図）。

町内の市街地は東西に分かれており、ヌッチ川流域である西部地区はニシン漁の振興によって旧市街地として町の礎を築いた。その後、余市川流域周辺で湿地が埋め立てられ、ニッカウキスキー（株）の創設やりんご、ぶどう栽培をはじめとする農地開発、余市駅周辺の市街化によって東部地区の人口増加が進んだ。

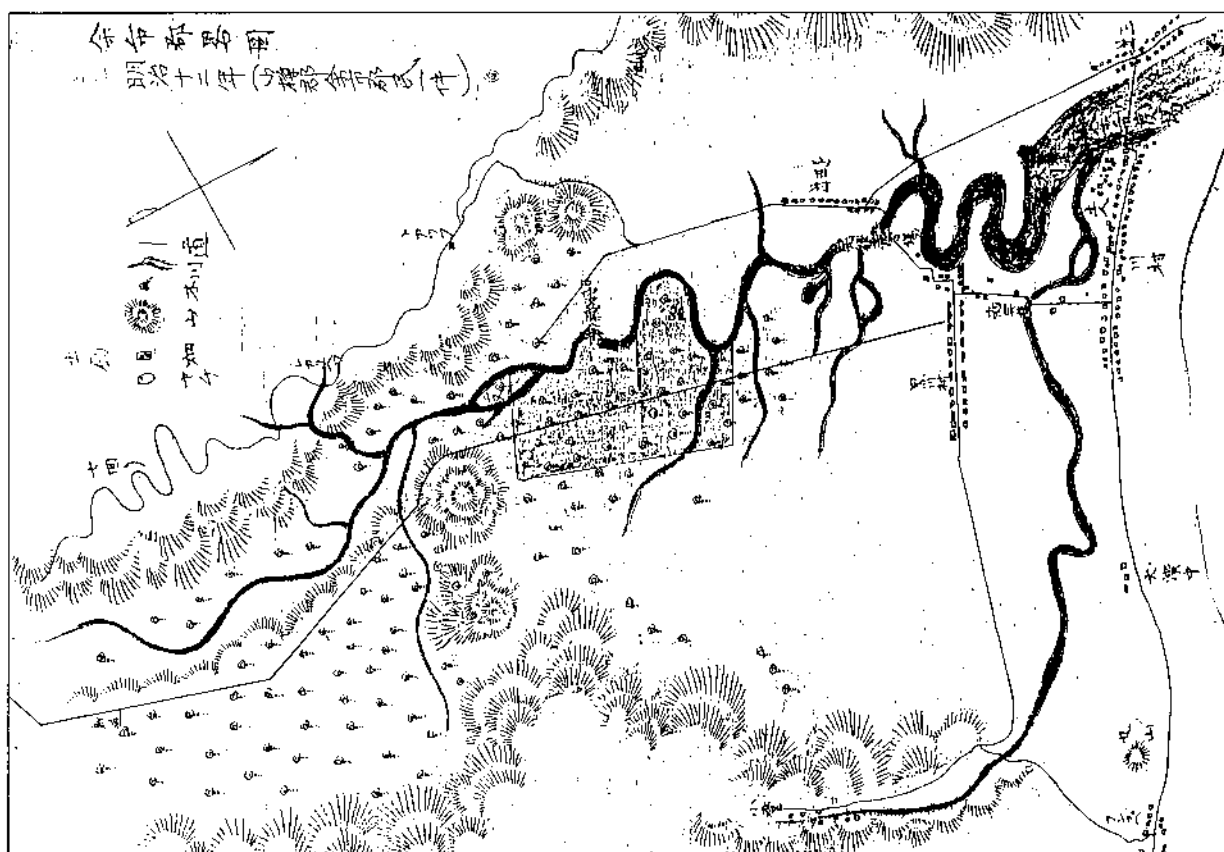
余市平野周辺は、第四紀完新世に入り温暖化の影響によって海水面が上昇し、縄文時代前期ごろまで海岸線が仁木町に至るまで奥深く浸入し「古余市湾」を形成していた。縄文時代中期ごろになると気温が下降し、海水面が下がるとともに「古余市湾」の海岸線が退き、現海岸線に並行する2列の砂丘が形成された。ひとつは、内陸側に位置する黒川砂丘、もうひとつが海側に位置する大川砂丘である。

町内の主だった河川は、本来ひと続きであった梅川、豊丘、美園、登、栄地区等の丘陵地が赤井川火山や海底火山の影響を受け、ほぼ南北に走る幾つかの断層が生じた結果、それに沿って内陸部に位置する山地から余市湾に向かって概ね並行して流れるようになった。また、旧登川は蛇行しており、年に何度も決壊した水害の多い川であった（第5図）。現在、調査区付近を流れる登川は、昭和26（1951）年に下流の川幅拡張と堤防を築く改修工事が行われたものである。

調査区は、丘陵の裾野に広がる標高7～10 m程度の概ね東向きの緩斜面に位置する。『登郷土



第4図 八幡山遺跡周辺の地形図（黒丸は八幡山遺跡の位置を示す）
（「小樽西部」大正7年（1918）大日本帝国陸地測量部1：50,000に一部加筆）



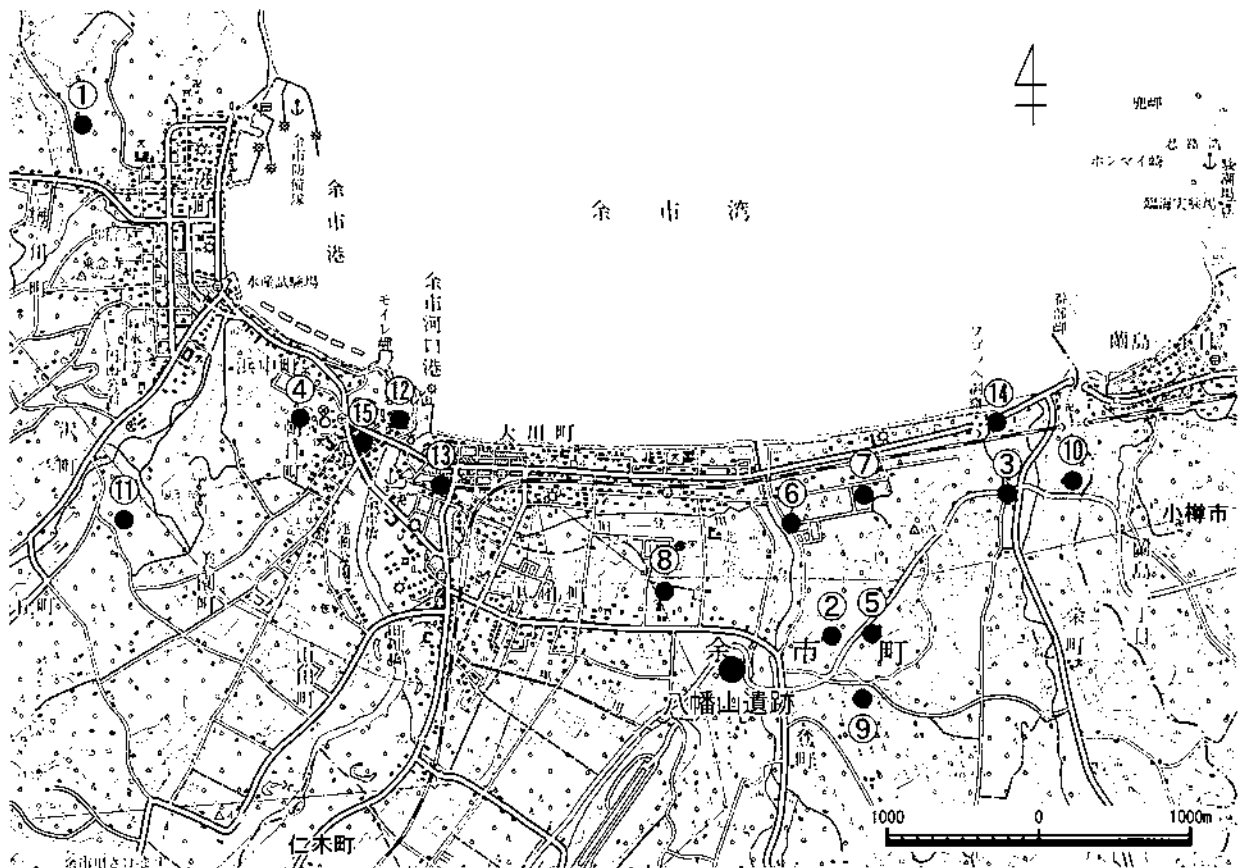
第5図 明治12年の余市(『余市郡略図』)

史』(1986)によれば明治34(1901)年に遺跡名の由来となった八幡神社(旧登八幡神社)が丘陵頂上部に建立されたが、昭和29年9月の台風で社殿が大きな被害を受けたことにより、昭和31年に現在の登街道沿いへ移設された。その後、同地は昭和43年に地元青年団の共同試験地となり、その造成中にブルドーザーで削平した際、縄文時代後期ごろと考えられる環状列石が発見された。発見地点はかつての八幡神社の境内にあたるため、一部の環状列石が偶然破壊をまぬがれていた状況であった。町内で環状列石が確認されている遺跡は、西崎山環状列石、警察裏山遺跡等があり、いずれも高台で見晴らしのよい場所である。なお、八幡山遺跡では昭和48年7月に完形の石棒も確認された。(中塚)

2. 余市町内の遺跡と八幡山遺跡

町内では、縄文時代早期から近世まで各時代の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)が64ヵ所確認されている。今回調査した八幡山遺跡は登川の左岸に位置し、直線距離にして約1.5km北には余市湾が広がっている。これまでの調査で縄文時代の遺跡は古余市湾を囲む丘陵地帯に前期以前の遺跡、黒川砂丘(現在の道道登余市停車場線753号線黒川通線、通称登街道周辺)上に中期以降の遺跡、海側に発達した大川砂丘(現在の国道5号線周辺)上に晩期以降の遺跡が多く確認されている。

八幡山遺跡は黒川砂丘のやや内陸に位置するが、縄文時代早期～擦文時代の遺構や遺物が確認された。当遺跡周辺では、安芸遺跡、東側丘陵に登町2・4・11遺跡等、主に縄文時代早期～後期ごろの遺跡が確認されている。遺跡から500mほど北側の安芸遺跡では、水辺での儀式を思わせる遺物の集中や配石遺構等が確認され、こちらは主に縄文時代中・後期ごろの遺跡であった。これま



第6図 八幡山遺跡周辺及び関連遺跡一覧 (1 : 50,000)

表2 八幡山遺跡周辺及び町内の縄文、続縄文、擦文時代の遺跡一覧

No	遺跡名	調査機関	主な時期	備考
①	木村台地遺跡	余市町教育委員会	縄文時代早期	貝殻文土器
②	登町4遺跡	余市町教育委員会	縄文時代早期～中期	住居跡3軒
③	フゴッベ貝塚	北海道埋蔵文化財センター	縄文時代前・中期	住居跡39軒、土壇150基
④	警察裏山遺跡	---	縄文時代前期～晩期	配石遺構
⑤	登町2遺跡	北海道埋蔵文化財センター	縄文時代中期	珪質頁岩製石錐の集中
⑥	登川右岸遺跡	余市町教育委員会	縄文時代中期	剥片集中20基
⑦	大谷地貝塚	余市町教育委員会	縄文時代中・後期	国指定史跡、余市式土器の標識遺跡
⑧	安芸遺跡	余市町教育委員会	縄文時代中・後期	大型構造部材等の木製品、土製品
⑨	登町11遺跡	余市町教育委員会	縄文時代中・後期	住居跡1軒、土壇6基
⑩	西崎山環状列石	北海道埋蔵文化財センターほか	縄文時代後期	道指定史跡、配石遺構、配石下の土坑
⑪	沢町遺跡	余市町教育委員会	縄文時代晩期～擦文時代	晩期の壘壇群、徳利形土器、ヒスイ玉
⑫	入舟遺跡	余市町教育委員会	縄文時代晩期～近世	近世の貝塚と墓壇群
⑬	大川遺跡	余市町教育委員会	縄文時代晩期～近世	晩期～近世の墓壇群と副葬品
⑭	フゴッベ洞窟	フゴッベ洞窟調査団ほか	続縄文時代後期	国指定史跡、洞窟内壁面800以上の刻画
⑮	天内山遺跡	余市町教育委員会	続縄文時代～アイヌ文化期	墓壇

で町内で発掘調査が行われた遺跡のうち、大川遺跡、沢町遺跡において擦文時代の住居跡が発見されており、天内山遺跡からも擦文時代の遺物が多く確認されている。このように擦文時代の遺跡は町内の西側から発見されていたのであるが、今回の調査によって町内東側にも広がりを確認することができた。町内の主要な遺跡の概要について第6図と表2を合わせて参照されたい。(中塚)

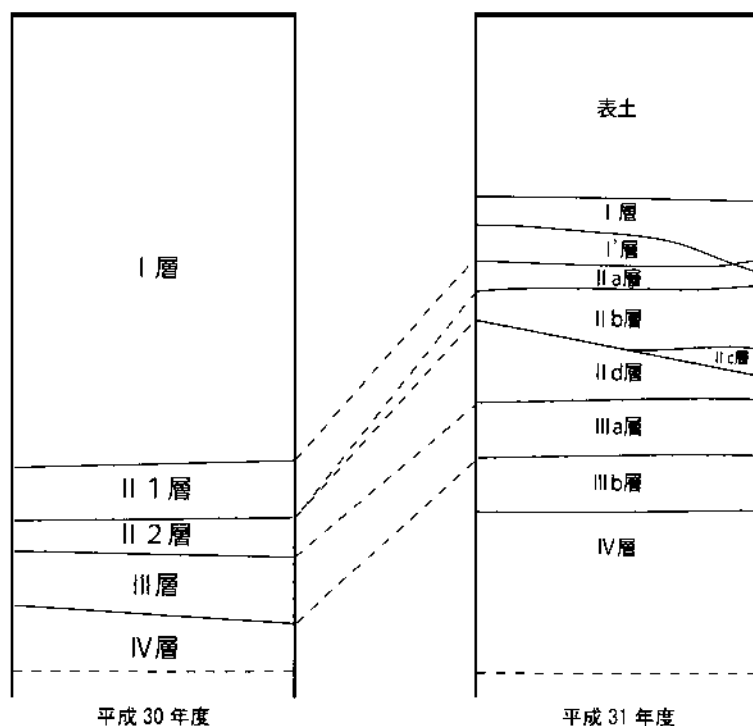
3. 基本層序

調査区は西から東に傾斜する緩い斜面地形を呈し、標高は約7～10mである。調査区は宅地や畑として利用されていたため、住宅基礎や水道管及び耕作による攪乱がみられた。また、宅地部分は著しい転圧を受けていたため、平成30年度（以下、30年度）調査区の西側では各層とも状態が悪く土層を詳細に確認できなかった。平成31年度（以下、31年度）調査区では、東側は30年度調査と同様に宅地の範囲にあたり、さらに、西側は耕作による大規模な攪乱を受けていたため、これらの範囲では土層の観察はできなかった。南側（K～Lライン）は沢地形を呈しているため攪乱の影響は深部に及んでおらず、各層とも良好な状態で確認された（図版1）。

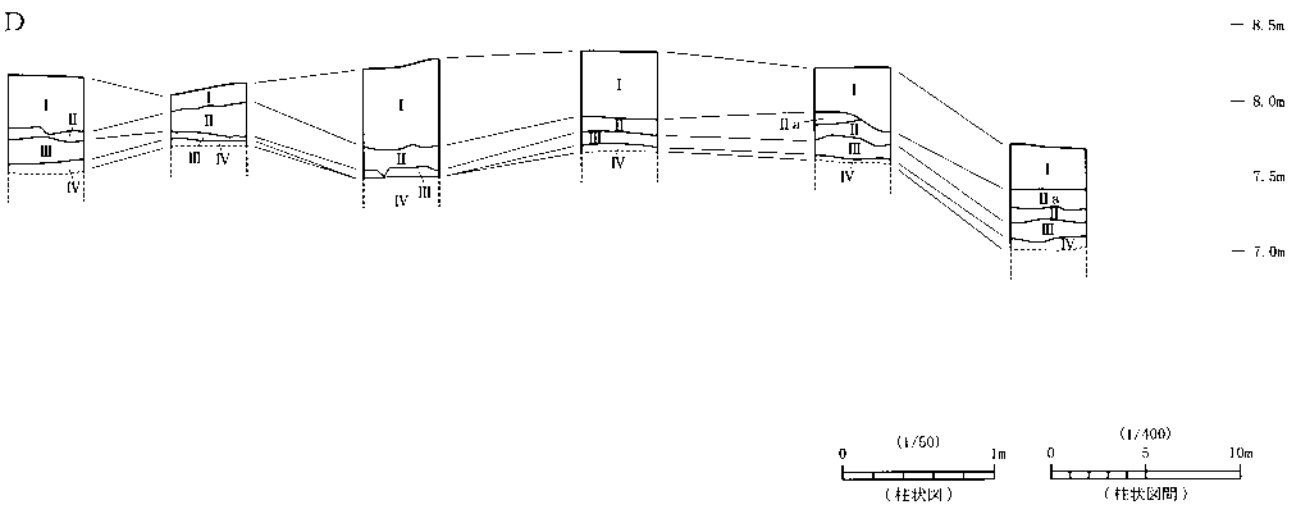
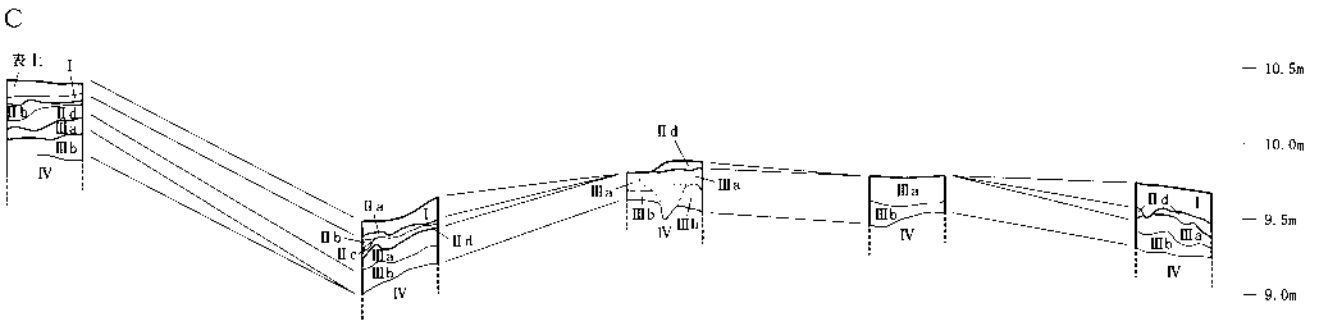
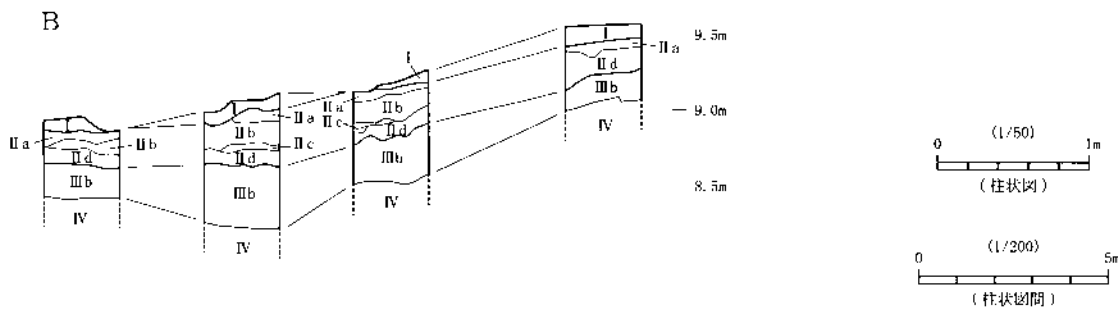
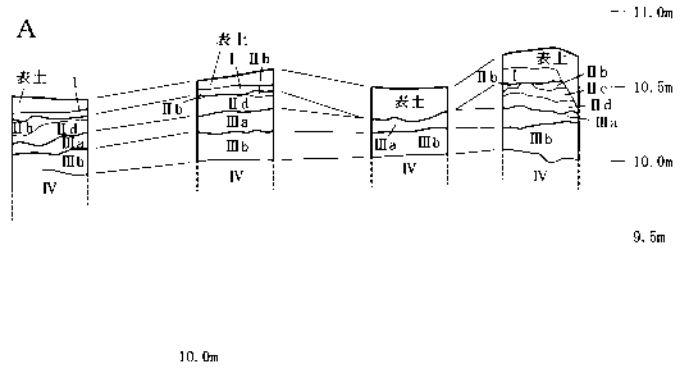
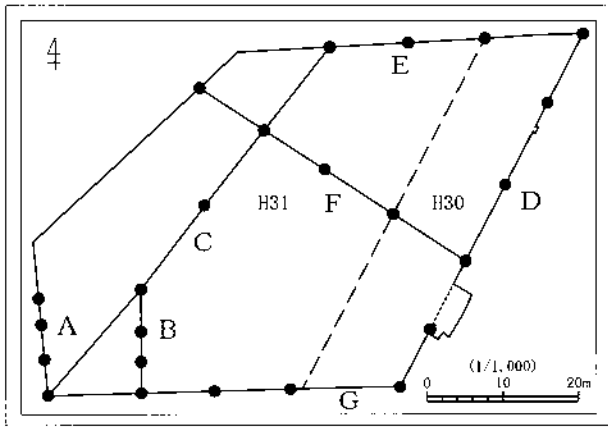
土層の堆積状況については、各年度の調査区壁面及び31年度調査のメインベルトC・Fで確認した（第8・9図）。土層は大きく4つに分けられ、これらの各層を上から順にⅠ～Ⅳ層とした。30年度調査では試掘の成果に基づいて基本層序を、Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ・Ⅱ）・Ⅲ・Ⅳ層に分けて調査を行った。31年度調査では、造成にかかわる客土を表土とし、Ⅰ層がⅠ・Ⅰ'層の2層、Ⅱ層は明瞭な色調の違いや土の締まりによる違い等がみられたため、Ⅱa層・Ⅱb層・Ⅱc層・Ⅱd層の4層、Ⅲ層はⅢa層・Ⅲb層の2層に細分した。遺物包含層はⅡ層及びⅢa層である。両年度の土層の対応関係は、以下の通りである。表土（30年度ではⅡ層よりも上層をⅠ層としていたが、31年度では客土を表土とした）、Ⅰ・Ⅰ'層（30年度のⅠ層に相当）、Ⅱa層（30年度のⅡ1層に相当）、Ⅱc・Ⅱd層（30年度のⅡ2層に相当）、Ⅲa層（30年度のⅢ層に相当）、Ⅲb・Ⅳ層（30年度のⅣ層に相当）となる。なお、31年度調査のⅡb層に相当する層は、30年度では焼土として確認していた。また、Ⅱb層については31年度に科学分析を行った。分析結果は第Ⅶ章〈附編2〉を参照されたい。

Ⅰ・Ⅰ'層は耕作土層または旧耕作土層である。Ⅱa層はボソボソとした土層で、団粒構造を呈する自然堆積層である。Ⅱb層は赤褐色を呈する層で、調査区内の南側、特に沢地形の北東側岸辺に顕著にみられ、層厚最大19cmを測る。Ⅱc層は漸移層で、層厚は10cm以下である。Ⅱb層の下位にのみ認められる。Ⅱd層は黄褐色の小礫（5～30mm）を部分的に含み、層厚最大23cmを測る。Ⅲa層は黒褐色を呈し、黄褐色の小礫（5～20mm）や風化した礫（10～50mm）を部分的に含む。Ⅲb層は暗褐色を呈した漸移層で、Ⅲa層より色調がわずかに明るい。

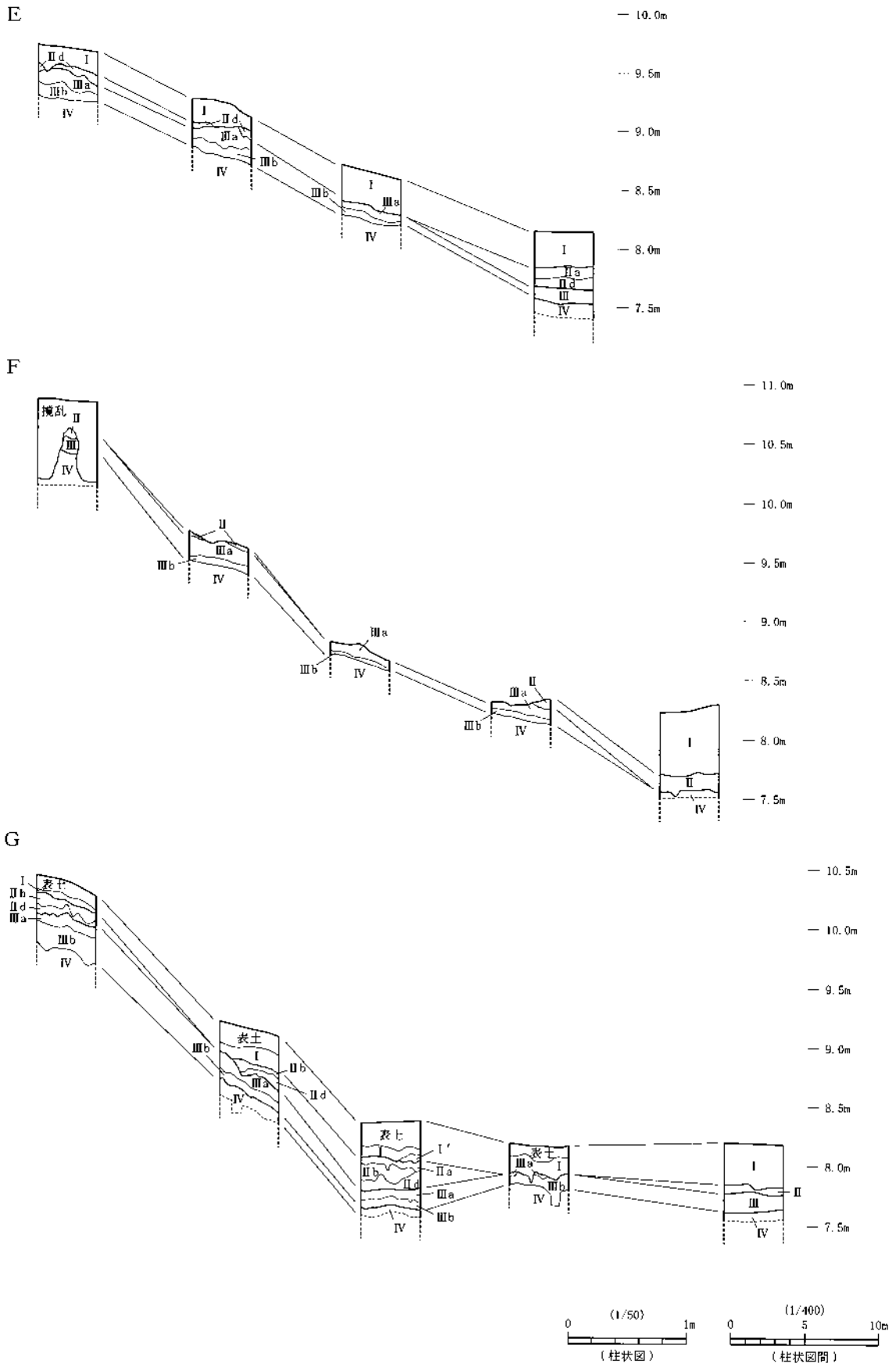
なお、土層の色調は『新版標準土色帖2006年版』（小山・竹原1967）に基づいている。（中塚）



第7図 基本土層模式図



第8图 基本土层柱状图(1)



第9图 基本土层柱状图(2)

第三章 平成30年度調査地点

1. 概要

平成30年度の調査では、検出された遺構は住居3軒、土坑12基、炉跡8基、小土坑66基、剥片集中2基、集石4基、溝状遺構1基、性格不明遺構1基である。出土した遺物は、コンテナ(59×38.5×15cm)37箱分である。その内訳は土器、土製品、陶磁器、石器、石製品、金属製品、ガラス製品、その他骨片、炭化材等である。

平成30年度の調査区は、斜面地形の低位地点にあたる。耕作や宅地にとまなう攪乱は、最も標高の低い調査区東側ではⅢ層まで及んでおらず、住居を含む多くの遺構は壊されていなかった。遺構の分布は、調査区の北東側(E~G-14~16グリッド)と中央南寄り(H~K-11~14グリッド)に集中する傾向がみられる。北東側の中では、特にE-15・16グリッド付近に土坑や小土坑、炉跡が集中する。一方、中央南寄りでは、J-14とK-13グリッドでほかよりも多少集中しているが、全体としては密集というよりは散漫な状況であるといえる。

土坑・小土坑は、長軸が0.60m(推定値含む)以上のものを土坑とし、0.60m未満を小土坑とした。ただし、長軸が0.60mに満たなくても覆土や埋土に共通性が認められる等の状況によって土坑としたものがある。遺構観察表にある計測値のうち、()内のものは最大残存値であることを示す。調査区壁で確認された土坑・小土坑は、遺構分割図中ではその位置に遺構名のみを記した。

遺構種別の略号は、凡例に示した通りである。遺構番号は種別毎に通し番号としたが、土坑に関しては墓壙との区別をせず土坑として通し番号を付した。また、住居に係する小土坑にはSH1HP1のように遺構毎に番号を付した。調査の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。なお、平成30年度に検出された住居3軒のうち1軒(SH3)は、遺構の大半が次年度調査区にあるため、記載は第IV章で行うこととした。

出土した遺物は土器と石器が大半を占める。土器は縄文時代、続縄文時代、擦文時代の各時期のものがみられる。縄文時代では早期が最も多く、遺構内外から出土している。早期土器の器表面は磨耗・風化が著しく、また遺構内の覆土上層から出土しているため、本遺跡の時期を直接示すものではないと考えられる。続縄文土器は調査区の東側、特にJ-13・14グリッドに分布する。調査区外東側に当該期の遺構群が広がる可能性が高い。擦文土器は遺構にとまなうものがほとんどである。石器は石鏃やスクレイパー、砥石が目立つ。(石川)

2. 遺構

(1) 住居

SH1(図版11)

F・G-14・15グリッドに位置する。平面形は北西壁がやや長い歪な正方形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸5.34m、短軸5.30m、確認面からの深さ0.33mを測る。南西壁中央にカマドを持つ。住居内には、カマドのほかに貯蔵穴1基、小土坑19基(このうち6基は掘方埋土除去後の検出)、周溝が認められた。

床面はほぼ平坦で、壁付近では部分的に周溝が確認された。南西隅付近・南東側の一部及び中央から北東隅にかけて硬化が認められ、特に中央から北東隅にかけての部分が顕著である。壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、北西壁ではややゆるやかである。

覆土については、1～6・10・11層は自然堆積土、7～9層は壁崩落土、12層は掘方埋土と考えられる。6層は基本層序のⅡb層が流れ込んだものであるが、カマドのある南西壁付近でのみ認められた。6層の土壌を採取しフローテーションを行った結果、炭化物・堅果・野草の種子・オオムギ(?)が確認された。詳細については、第Ⅶ章〈附編5〉を参照されたい。

カマドは南西壁中央にあり、左右の袖石付近に壁体がわずかにブロックとして残っているほかは、すべて崩落している。袖石は板状礫で、煙道口左右に直立しているものは原位置をほぼ保っていると考えられるが、その手前右側の礫は大きく傾いている。左側の袖石は抜き取られたのか確認されなかった。

煙道は壁から1.00m張り出し、その底面はカマド燃焼部からゆるやかに立ち上がり、確認面付近で角度をやや急にする。煙道口上部には長さ60cmに及ぶ角礫が渡され、煙出しまでは長さ30cmほどの板状礫2枚で煙道上部が塞がれる。礫下面は被熱のため黒ずむが、その度合いは弱い。また煙道自体も被熱の痕跡はほとんど認められない。

燃焼部は床面から0.10mほど掘り込まれ、焼土の厚さは5cmほどである。焼土を含むカマド10層の土壌を採取しフローテーションを行った結果、骨片・炭化材が認められた。被熱痕が火床面より5cmほどの深さに及んでいることから、ある程度の期間の使用が推定される。しかしながら、カマド10層が黒褐色土に焼土が少量混入している状態で検出されていることから、カマド廃絶時に燃え滓の除去が行われたことが窺える。

カマドの左に隣接して、黒褐色土の落ち込みが確認された。平面形は円形で、深さは0.15mである。その位置と規模から貯蔵穴と考えられる。覆土中から擦文土器片1点が出上した。

小土坑は19基確認されたが、そのうち、HP1～3・12はその位置・深さから支柱穴と考えられ、底面形状から掘立柱であったことが窺える。HP1・3にはわずかに外踏ん張りの傾向がみられる。

遺物は土器片121点(縄文時代13点(11)、続縄文時代4点、擦文時代96点(12～22)、時期不明8点)、石鏃1点(23)、スクレイパー3点(24・25)、楔形石器2点(26・27)、Uフレイク1点、原石1点(28)、石斧1点(29)、砥石5点(30～34)、たたき石1点(35)、くぼみ石1点(36)、剥片・碎片73点、石製品1点(37)、礫60点、計271点である。土器片の6割は床面付近からの出土で、うち8割は擦文時代のものである。石器・礫はほとんどが覆土からの出土である。土器片の分布は南東壁付近に大きく偏っている。これらからは大型の甕、鉢、甕の底部が復元された。また、カマド焚口付近から残存部内面に被熱痕がみられる鉢が出土している。

本住居の廃絶については、袖石の抜き取りからカマドの破壊行為、カマド燃焼部の清掃、大型土器の破却による土器片出土位置の偏り等から、何らかの儀礼行為が行われた可能性がある。また、土層断面図では薄く確認されるだけであるが、6層(Ⅱb層)が南西壁付近に堆積している。立地状況から南西側からのみ遺構内に流入することは不自然である。廃絶儀礼にかかわる2次的作用による可能性も考えられる。

遺構の時期は、出土土器から9世紀ごろの擦文時代と考えられる。

(岩橋)

SH2(図版12)

J・K-13・14グリッドに位置する。東側は調査区外にある。平面形は確認形状から南西辺がやや長い歪な正方形を呈すると想定され、断面形は台形状を呈する。規模は長軸4.68m、短軸3.58m(残存値)、確認面からの深さ0.18m(残存値)を測る。南西壁中央にカマドを持つ。住居内にはカマドのほかに、炉1基、貯蔵穴1基、小土坑6基(このうち4基は掘方埋土除去後の検出)、周溝が認められた。

床面はほぼ平坦で、北東辺には周溝が掘り込まれている。カマド前と北東側の一部を除いて硬化しているが、その度合いは弱い。壁は垂直に近い急角度で立ち上がる。

覆土については、自然堆積土と考えられる。4層は基本層序のⅡb層が流れ込んだものであるが、カマドのある南西壁付近でのみ認められた。4層の土壌を採取しフローテーションを行った結果、骨片とオオムギ(?)が検出された。8層下面で薄い焼土が部分的に確認された。また、13層は掘方埋土である。

カマドは南西壁中央にあり、壁体の遺存はほとんどない。わずかに、左袖石の上に構築土が、12層に挟まれたブロックとして崩落土が確認されたのみである。袖石は左袖に長円礫2本、右袖に角礫1本が原位置を保って残る。中央部には大型の甕が倒置されているが、支脚として使用したには高すぎ、また被熱もほとんど受けていないことから、カマド廃絶後に置かれたものと考えられる。この土器の脇から小型の甕が2個体、底面を上にして出土している。一方は器高10cmほど、他方は高さ15cm程度に口縁部が打ち欠かれている。また、両個体とも器面に強い被熱が認められることから、これらの土器が支脚として使用されていたのであろう。

煙道は壁から1.02m張り出し、その底面はカマド燃焼部からゆるやかに立ち上がり、0.9m付近ではほぼ垂直に角度を変える。煙道の被熱は弱く、表面がわずかに赤化している程度である。

燃焼部は床面から0.10mほど掘り込まれ、焼土の厚さは5cmほどである。焼土上位のカマド5層は、上層観察段階では炭化粒が微量確認できたのみで、灰や骨片等は認められなかったが、土壌を採取しフローテーションを行った結果、骨片数点とアワ・キビが検出された。このカマド5層によって燃焼部の掘り込みは埋められ、その上に大型土器が倒置される。これらから、灰等の燃え滓は取り除かれ、その後カマド5層で平坦に埋められたことが窺える。

炉は住居中央付近で確認された。平面形は0.66m×0.39mの卵型で、浅く掘り込まれている。下位層は強く被熱している。焼土を採取しフローテーションを行ったが骨片等は検出されなかった。

カマドと北西壁の間、南西壁に接して黒褐色上の落ち込みが確認された。平面形は歪な円形で、深さ0.11mである。その位置から貯蔵穴と考えられる。覆土中から土師器が1/2個体分出土した。

小土坑は6基確認されたが、支柱穴と考えられるものは、その位置や掘り込みの深さからHP2のみと考えられる。ほかの支柱穴は、攪乱による破壊や調査区外にあるものと思われる。HP3～6は掘方埋土下からの検出であるが、直線的に並ぶことから何らかの構造物の支柱とも考えられる。

8層下面の焼土は、平面的にも中央部に広く分布しているが、その厚さは薄く濃淡が認められ、炭化材も検出されているが数は多くない。このことから、この焼土は上屋の焼失によるものではなく、カマドの燃え滓を散布した可能性が考えられる。

遺物は土器片140点(縄文時代12点(38)、続縄文時代36点(39・40)、擦文時代81点(41～48・50～52)、土師器1点(49)、時期不明10点)、スクレイパー5点(53～56)、石斧1点(57)、砥石2点(58・59)、剥片・碎片40点、磁器片1点、金属器1点(60)、礫13点、計203点で、ほとんどが覆上からの出土である。なお、炭化材、炭化種子の詳細については、第七章<附編4・5>を参照されたい。

本住居の廃絶については、カマド壁体の除去、燃焼部の清掃、大型土器の倒置、燃え滓の散布等から、何らかの儀礼的行為が行われたものと考えられる。また、4層(Ⅱb層)の流入が南西壁側からだけなのは立地状況と照らし合わせても不自然である。廃絶儀礼にかかる行為として、カマ

ド側上屋の破壊等が行われた可能性も考慮しなければならないのかもしれない。

遺構の時期は、出土土器から9世紀ごろの擦文時代と考えられる。(岩橋)

(2) 土坑

P1(図版13)

J-13グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.94m、短軸0.83m、深さ0.19mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黒色土を主体とする。

遺物は土器片7点(縄文時代早期1点、同中期1点、続縄文時代5点(61～64))、石鏃1点(65)、スクレイパー2点(66・67)、楔形石器1点(68)、剥片・碎片3点、礫1点、和釘3点(69・70)が出土している。すべて流れ込みによるものと思われる。遺構の時期は、出土した遺物から擦文時代以降であると推定される。(石川)

P2(図版13)

K・L-11グリッドに位置する。検出面はⅢ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸1.01m、短軸0.73m、深さ0.06mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は剥片・碎片13点、礫1点が出土している。遺構の時期は不明である。(石川)

P4(図版13)

J-11グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.03m、短軸0.86m、深さ0.08mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は磁器片1点が出土している。遺構の時期は、出土した遺物から近世以降であると推定される。(石川)

P5(図版13)

I・J-12グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.82m、短軸0.52m、深さ0.10mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は砥石1点(71)が出上している。遺構の時期は不明である。(石川)

P6(図版13)

L-11・12グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。SP72を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸1.65m、短軸1.38m、深さ0.18mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられ、それぞれ黒色土と黒褐色土を主体とし、自然堆積によるものと思われる。

遺物は土器片4点(縄文時代中期3点、時期不明1点)、Rフレイク1点(72)、剥片・碎片5点が出土している。土器片は遺構底面付近から出土しているため、遺構の時期は縄文時代中期である。(石川)

P7(図版13)

E-16グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.99m(残存値)、短軸0.67m、深さ0.11mを測る。底面は概ね平坦であるが、東側に若干傾斜する。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は剥片2点が出土している。遺構の性格は、規模や形状から墓壙と推測される。遺構の時期

は、覆土の特徴、周辺の状況に鑑み縄文時代であると推定される。(石川)

P8 (図版 13)

E-16 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.59 m、短軸0.36 m、深さ0.06 mを測る。底面は概ね平坦で、底面付近から大型礫が出土している。覆土は単層で、暗褐色土を主体とする。

遺物は、土器片1点(縄文時代(73))、剥片2点、大型礫1点が出土しており、大型礫の石質はデイサイトである。遺構の性格は、形状や大型礫の状況から墓塚と推測される。遺構の時期は、出土遺物から縄文時代であると推定される。(石川)

P9 (図版 13)

E-15 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。P13を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.73 m、短軸0.50 m、深さ0.07 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、覆土の特徴から縄文時代であると推定される。(石川)

P10 (図版 13)

C-16 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.52 m、短軸0.42 m、深さ0.08 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は覆土の特徴から縄文時代であると推定される。(石川)

P13 (図版 13)

E-15 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。P9に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.57 m、短軸0.37 m(残存値)、深さ0.14 mを測る。底面は概ね平坦で、底面付近から大型礫が出土している。覆土は2層に分けられ、黄褐色土を主体とする。

遺物は大型礫1点、石質はデイサイトである。遺構の性格は、形状や大型礫の状況から墓塚と推測される。遺構の時期は、覆土の特徴、周辺の状況に鑑みて縄文時代であると推定される。(石川)

P14 (図版 13)

E-16 グリッドに位置する。検出面はⅢ層中である。F22、SP65に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.62 m(残存値)、短軸0.57 m、深さ0.08 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黄褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、覆土の特徴から縄文時代であると推定される。(石川)

P15 (図版 4・5・7)

G-15 グリッドに位置する。調査区東壁土層断面で確認された。検出層位はⅢ層である。確認された範囲内では、断面形が弧状を呈するものと推定され、深さ0.14 mを測る。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、覆土の特徴から縄文時代であると推定される。(石川)

(3) 炉 跡

F10 (図版 14)

J-14 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F24・25より新しく、FC2より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.94 m、短軸0.44 m、深さ0.05 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は碎片4点が出土している。遺構の時期は、重複関係から縄文時代以降であると推定される。(石川)

F11 (図版14)

J-13・14グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F27より新しく、FC2より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.34m、短軸0.21m、深さ0.03mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は土器片1点(縄文時代)、碎片2点が出土している。遺構の時期は、出土した遺物と、周辺の状況に鑑み、縄文時代であると推定される。(石川)

F21 (図版14)

E-16グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.69m、短軸0.46m、深さ0.10mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は、土器片4点(縄文時代早期2点、同中期2点(74))、剥片1点が出上している。縄文時代早期土器片は流れ込みによるものと判断し、遺構の時期を縄文時代中期以降と考えたい。(石川)

F22 (図版14)

E-16グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。P14より新しい。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.36m、短軸0.23m、深さ0.06mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は出土していない。遺構の時期は、周辺の状況に鑑み、縄文時代以降としたい。(石川)

F24 (図版14)

J-14グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F25・26より新しく、F10、FC2より古い。平面形は不整形、断面形は弧状を呈するものと推定される。規模は長軸0.93m(残存値)、短軸0.18m(残存値)、深さ0.07mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は、土器片21点(縄文時代(75・76))、石鏃1点、碎片5点が出上している。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代である。(石川)

F25 (図版14)

J-14グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F10・24、FC2より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈するものと推定される。規模は長軸0.22m(残存値)、短軸0.24m(残存値)、深さ0.02mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は出土していない。遺構の時期は、重複関係から縄文時代以降であると推定される。(石川)

F26 (図版14)

J-14グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F24、FC2より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.27m(残存値)、短軸0.16m、深さ0.05mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は確認できず、火床面のみが残存していた。

遺物は、土器片1点(時期不明)が出土している。遺構の時期は、重複関係から縄文時代以降であると推定される。(石川)

F27 (図版14)

J-13グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。F11、FC2より古い。形状や規模は不明である。火床面は残存していない。Ⅱ層中に若干変色した範囲がみられたため、サブトレンチを設定

し土層断面を観察したところ、同心円状に広がる被熱範囲を確認した。

遺物は出土していない。遺構の時期は、周辺の状況に鑑みて縄文時代以降としたい。(石川)

(4) 小土坑

平成30年度調査では66基確認された。これらのうちの一部は、周辺で検出された縄文時代や続縄文時代の遺構、擦文時代住居の状況に鑑みると建物の柱穴や柵、または柱列を構成するものと推察される。小土坑の分布がE-15・16、J-14、K-13を中心に調査区東側に展開する可能性が高いため、調査した範囲内では十分に検討することができないと判断した。そのため、個々の形状や規模は遺構分割図(図版2～10)、また属性については遺構観察表(別表1)の記載にとどめた。

(石川)

(5) 剥片集中

FC1(図版14)

C-16グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形を呈するものと推定される。厚さ5～10cmほどの範囲内に遺物の集中する状況が確認されたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸2.68m、短軸1.58m(残存値)を測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

主な遺物は、剥片9点、碎片304点(65.1g)である。また、水洗選別を行った土壌から、石器細片3点(時期不明)、碎片843点(30.5g)、このほか炭化材片を確認した。剥片・碎片の石質は黒曜石と頁岩である。内訳は、剥片が黒曜石8点、頁岩1点、碎片は黒曜石1,088点(90.3g)、頁岩59点(5.3g)である。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代以降であると推定される。(石川)

FC2(図版14)

I-14、J-13・14グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC2範囲を含む周辺の下層には、F10・11・24～27、SP6～9・32が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後に本遺構が形成されたものと判断した。平面形は不整形を呈する。厚さ5～10cmほどの範囲内に遺物の集中する状況が確認されたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸5.11m、短軸2.24m(残存値)を測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

主な遺物は、土器片16点(縄文時代早期7点(79)、同前期1点(80)、続縄文時代6点(81～85)、擦文時代1点、時期不明1点)、石鏃5点(86・87)、石槍1点、スクレイパー1点(88)、Rフレイク1点(89)、剥片39点、碎片655点(158.3g)である。また、水洗選別を行った土壌から、土器細片18点(時期不明)、碎片4,450点(123.3g)、このほか骨片3点、炭化種子、炭化材片を確認した。剥片・碎片の石質は大部分が黒曜石で、このほかに頁岩、チャート等がみられる。内訳は、剥片が黒曜石31点、頁岩8点、碎片は黒曜石4,817点(263.9g)、頁岩219点(12.2g)、チャート25点(4.6g)、それら以外の石質44点(0.9g)である。骨片は哺乳類に属するもので、被熱・黒色化している。部位は不明である。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代早期以降であると推定される。(石川)

(6) 集石

SS1(図版14)

H-14グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。9点の礫で構成され、

最大長0.38 m、直交する最大長0.37 mの範囲に集中する。礫は安山岩を主体とする。礫の下には掘り込み等は確認されなかった。

遺物は構成礫9点が出土しており、そのうち1点はたたき石(90)である。遺構の時期は不明である。(石川)

SS2(図版14)

I-13グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。25点の礫で構成され、最大長0.66 m、直交する最大長0.38 mの範囲に集中する。礫は安山岩を主体とする。礫の下には掘り込みが確認された。掘り込みの形状は平面形が円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.42 m、短軸0.35 m、深さ0.05 mを測る。底面は概ね平坦である。

遺物は構成礫以外出土していない。遺構の時期は不明である。(石川)

SS3(図版14)

K-13グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。SP22より新しい。8点の礫で構成され、最大長0.24 m、直交する最大長0.23 mの範囲に集中する。礫は安山岩を主体とする。礫の下には掘り込み等は確認されなかった。

遺物は構成礫8点が出土しており、そのうち1点は砥石(91)である。遺構の時期は不明である。(石川)

SS4(図版14)

I-13グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。32点の礫で構成され、最大長0.37 m、直交する最大長0.29 mの範囲に集中する。礫は安山岩を主体とする。礫の下には掘り込みが確認された。掘り込みの形状は平面形が楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸0.46 m、短軸0.33 m(残存値)、深さ0.07 mを測る。底面は概ね平坦である。

遺物は構成礫以外出土していない。遺構の時期は不明である。(石川)

(7) 溝状遺構

SD2(図版15)

H-13・14グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。北西から南東方向に延び、南東端は攪乱により壊されている。断面形は弧状を呈する。規模は長軸3.42 m(残存値)、短軸0.12～0.33 m、深さ0.06 mを測る。底面は概ね平坦ではあるが、北西から南東に向かって9 cmほど傾斜する。覆土は単層で、黒色土を主体とする。

遺物は、碎片11点、不明金属製品4点が出土している。遺構の時期は、出土した遺物から近世以降と推定される。(石川)

(8) 性格不明遺構

SX1(図版15)

H-13、I-12・13グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は不整形、断面形は階段状を呈する。規模は長軸2.29 m(残存値)、短軸2.24 m(残存値)、深さ0.07～0.13 mを測る。底面には平面形が不整長楕円形を呈する窪みが確認された。窪みの規模は、長軸1.93 m、短軸1.12 m、深さ0.04 mを測る。窪みやその周辺は、火床は確認できなかったものの著しく被熱しており、周辺よりも地山の硬化が顕著であった。覆土は2層に分けられ、焼上粒子を含む。

本遺構については、土層断面を観察するために残したベルト部分の土壌を採取しフローテーションを行った。フローテーションによって得られた炭化材は放射性炭素年代測定と樹種同定、炭化種子は種子同定を行った。詳細については、第VII章〈附編3～5〉を参照されたい。

遺物は、土器片5点(時期不明)、石鏃1点(92)、スクレイパー2点(93・94)、剥片・碎片51点、たたき石1点(95)、金属製品1点(96)、礫3点が出土しているが、いずれも流れ込みによるものと思われる。

遺構の性格については不明である。遺構の時期は、覆土の特徴や出土した遺物から近世以降と推定される。(石川)

3. 遺物

SH1 出土遺物(図版30-11～17、31-18～37)

11はV群土器タンネトウシ式の口縁部破片。口唇を角状に調整後、Lの細い燃糸を口唇上面に3条、器表面に6条押圧する。また、細い粘土紐を口唇角端部に貼付し、その上にやや幅の広い刻みを施す。器表面には燃糸に直交する幅広の沈線がみられる。4層出土。12～22はVII群a類。12は胴部破片。1層出土。5条の平行する沈線を施文後、刺突列を1条巡らせている。13～17はすべて4層床出土の一括土器。13はVII群a類の大型の甕。器高34.5cm、口径30.6cm、重量2,580gを測る。口唇断面は角状で、上面に沈線が施される。器表面には縦方向のハケメ調整後、口縁部文様帯には複数の沈線が施される。胴部には縦方向のミガキ調整、底部ではナデ調整が行われる。内面は横方向のハケメ調整後、口縁部には横方向のミガキ、胴部には縦方向のミガキ調整が施される。内面のミガキ調整は粗雑であり、ハケメ調整痕が多く残る。底部径は小さい。器形は肩部がやや張り出し、口縁部は大きく開く。14は甕。口唇は角状でやや波打つ。口縁部文様帯は幅が不整な段状の沈線が5条巡り、肩部に段が残る。胴部上半はハケメ痕が残り、胴部下半はミガキ調整が施されている。底部はやや張り出す。内面は口縁部では横方向、胴部上半では斜め、下部では縦方向のミガキが施される。諸処にハケメ痕が残る。器形は口縁部がゆるやかに開く。15は小型の鉢。器高5.1cm、口径10cmほどでゆるやかに口縁部が開く器形。ケズリやミガキ痕がみられるが、全体に調整は粗雑で、粘土の積み上げ痕等が明瞭に残る。16は器高5.8cm、口径11.5cmの小型の鉢。口唇は丸いが明瞭な稜を持つ。ケズリやミガキによって調整される。内面上部には一部ミガキによる調整痕がみられるが、多くは被熱による剥落が著しい。17は甕の胴部から底部。底部は著しく外に張り出す。器表面は縦方向のミガキ調整が顕著である。内面はケズリ、ミガキ調整が施される。18は甕の口縁部破片。口唇は角状で、上面は沈線によって凹む。口唇直下はミガキによる調整が行われ、器表面は横走する沈線間に一部ハケメ痕が残る。貯蔵穴1層出土。19は甕の口縁部破片。口唇は角状。20は口縁部破片。口唇上面に押引状の刻みが巡る。3条の段状沈線の下にハケメ痕が残る。内面はミガキ痕がみられる。2層出土。21は甕の口縁部破片。6条の沈線の下に刺突が巡る。1層出土。22は胴部破片。沈線と刺突が巡り、その下には斜めの沈線に沿って三角形の列点が施される。一部にハケメ痕が残る。4層床の出土。

23は1層出土の石鏃b類。平基に近い凹基鏃。やや厚手の黒曜石を素材とする。24は1層出土のスクレイパーa類。黒曜石製。背面下端にやや急角度の刃部を作出し、腹面左側縁に抉りを有する。上半を欠損する。背面に原石面を残す。25は1層出土の頁岩製のスクレイパーb類で、腹面右側縁に大きな抉りを有する。背面の剥離面は磨滅している。26は1層出土の黒曜石製楔形石器。上下端に両極剥離による圧縮型の剥離痕がみられる。背面下端に原石面を残す。27は4層出土の楔

形石器。黒曜石製。28は4層出土の黒曜石の原石。

(高橋)

29は石斧の刃部破片。刃部、破断面も含め全面磨滅し、稜はすべて丸みを帯びている。礫石器の素材として、遺跡に持ち込まれたものと判断される。30～34は砥石。棒状礫を素材とするものが多い(31～34)。作業面は痕跡的に残るものが多く、30・32はやや窪んだ2面で構成されている。また、33の下方端部には敲打痕がみられる。35は丸みを帯びた楕円礫素材のたたき石。下端部に明瞭な敲打痕がある。36は棒状礫のくぼみ石。平坦面2面にそれぞれ凹みを持つもの。凹みは円錐状を呈し、中央が一段深くなり、凹み側面は平滑である。37は球状の自然礫で、石製品に含めている。

(田中)

SH2 出土遺物 (図版 32-38 ～ 52、33-53 ～ 60)

38は床面下から出土したV群タンネトウL式の口縁部破片。口唇を角状に調整し、細い粘土帯を貼り付けて切出状の断面となっている。口唇上面にはRL縄文を押圧し、器表面にはRL斜縄文を施文後、6mmほどの幅広の浅い沈線を縦横に施している。口唇上面から器表面に黒色の付着物がみられる。39はVI群a類の胴部破片。5条の細い平行沈線の上に左上から右下方向の短刻線が巡る。地文は細いRL縄文が縦方向に施される。内面は丁寧なミガキ調整。3層出土。40は床面出土のVI群a類の胴部破片で、RL縄文が縦方向に施される。41～48・51・52はVII群a類。49はVII群b類。41は大型の甕。器高30.9cm、口径27.1cm、重さ2,105gを測る。口唇形状は角形で、上面は沈線によって凹む。口縁部から胴部上半はハケメ調整、下部はミガキが施される。口縁部下半は数条の沈線が巡る。内面上半はミガキ、下半はハケメ調整が施されている。器形は口縁部がゆるやかに開く。底部の張り出しは弱い。12層出土。42は小型の甕。口唇断面はやや丸みを帯びているが、上面に細い沈線を施文し、さらに左斜めからの刻みが施されている。口縁部文様帯には複数の沈線が巡り、胴部はミガキ調整が施されているが、一部にハケメ痕が残る。内面は上半がミガキ、下半はハケメ、ミガキが施される。底部外面は接合部が明瞭に残されている。8層出土。43は小型の甕。器表面はケズリ調整後に、黒色処理の上から縦方向のミガキ調整が行われている。内面は口唇直下には横のミガキ、下半にはケズリ痕が残る。貯蔵穴1層出土。44は小型の甕。口縁部の1/3は人為的に破損・除去され、破断面は滑らかとなっている。口縁部文様帯には不整な2条の沈線が巡る。器表面は縦方向のミガキ調整が施される。12層出土。45は甕。口縁部は人為的に破壊されており、破断面は滑らかである。器表面下半は縦方向のミガキ、内面上部は横方向、下半は縦方向のミガキ調整が施される。内外面とも一部にハケメ痕が残る。12層出土。46はやや大振りの鉢。器高10.2cm、口径18.2cmで口縁部が大きく開く器形。器表面は横方向のミガキ調整、内面は上位から横、縦、横のミガキが施される。12層出土。47は鉢の口縁部から胴部の破片。器表面は斜位のミガキ、内面は口唇直下に横、斜位のミガキが残るが、ほかは被熱による破損・剥落が著しい。7層出土。48はやや大型の甕の口縁部から胴部の破片。口唇断面は角状で、上面に沈線が巡る。肩部はやや大きく張り出し、口縁部がやや開く。器表面はケズリ、内面はミガキ、ハケメ痕が残る。8層出土。49は貯蔵穴1層出土の七師器。器高8.7cm、口径12.1cmの小型の甕。口縁が「くの字」形に短く開く器形。器表面・内面とも横・斜位のミガキ調整が施される。ロクロ成型により、底部は糸切りによる切り離しが行われている。50は甕の口縁部破片。口唇断面は角状で、さらに細い粘土帯を端部に貼付する。上面には沈線を施す。口唇直下の器表面には6条の不整な沈線及びごく細い沈線が1条巡る。胴部器表面はミガキ調整が施される。内面は横方向のミガキ痕が残る。12層出土。51は甕の胴部破片。段状気味の沈線が数条巡り、胴部下半はハケメ痕が残る。内面は横方向のハケメ、ミガキ痕がみられる。4層出土。52は甕の胴部破片。8層出土。器表面に沈線、ハケ

メ、ミガキ痕が残る。内面は横のミガキがみられるが、大部分は剥離している。

53は大型のスクレイパー a 類で頁岩製。背面の左右側縁及び腹面下端に刃部を作り出している。刃部は磨滅している。54はスクレイパー a 類で黒曜石製。背面下端に刃部がある。原石面の打面を残す。2層出土。55はスクレイパー b 類。黒曜石製で、背面左側縁に抉りがある。床面出土。56は黒曜石を素材とするスクレイパー a 類。背面周縁に急角度の刃部がある。13層掘方出土。(高橋)

57は刃部の一部が欠けるが、ほぼ完形に近い石斧。右肩部に敲打痕があり、たたき石として再利用したと考えられる。刃部の割れ口や器表面はあまり風化が認められず、薄緑色の色調に変化はない。なお、着柄部平坦面の両面には黒色を呈する部分があり、刃部近くでは使用により色調が薄くなっている。黒色の成因は不明。58・59は砥石で、ともに礫平坦面に直線的な断面U字状の作業面を持つもの。58には下端部に短刻の条痕が2条みられるが、調査時の道具キズの可能性が高いため図示を省略した。59は礫表面が風化により灰白色となっているが、被火熱によりかなり赤色を呈している。U字状の条痕は赤色化した礫表面をめぐり取っている。なお、破断面は灰色で、礫本来の色調を示す。

60は鉄製の円環。径3 cmほど、断面形は横置き of 長方形とみられる。用途不明。(田中)

P1 出土遺物(図版 33-61 ~ 70)

61 ~ 64はVI群 a 類の恵山式の胴部破片ですべて1層出土。61はやや粗雑な平行沈線を5条巡らせている。62は細いRL斜縄文を施文後、上端に左方向からの刺突を巡らせている。63はごく細いRL斜縄文を地文として、3条のやや幅広の沈線が施される。64は細いRL縄文を縦方向に縞状に施文後、沈線を施している。

65は下半部を欠く石鏃。1層出土。黒曜石製。66はスクレイパー c 類。黒曜石製の剥片を円形に加工し周縁に刃部を作出したもの。1層出土。67はスクレイパー c 類。円形の剥片の周縁に急角度の刃部を作り出す。黒曜石製。1層出土。68は1層出土の楔形石器。上下端に圧縮型の剥離痕が多数残る。背面の一部に原石面を残す。黒曜石製。(高橋)

69・70は頭部平折、断面形状長方形の鉄製の和釘。69は全長9 cmほどで、頭から3分の1ほどの部位で直角に折れ曲がる。70は折れ曲がった部位で過半が欠損したものとみられる。(田中)

P5 出土遺物(図版 33-71)

71は厚みある扁平礫素材のすり石。一縁辺にやや凸の作業面を持ち、一部は風化面が除かれ礫本来の灰色の色調がみえる。(田中)

P6 出土遺物(図版 33-72)

72は黒曜石製のRフレイク。1層出土。背面左側縁に急角度の刃部を持つ。(高橋)

P8 出土遺物(図版 33-73)

73はVI群 a 類の胴部破片。1層出土。細いRL縄文を縦方向に施文している。(高橋)

F21 出土遺物(図版 34-74)

74はIII群 a 類北筒式の胴部破片。地文はRLとLRの斜縄文を羽状に施文。下端に粘土紐を貼付している。1層出土。(高橋)

F24 出土遺物(図版 34-75・76)

75・76は1層出土のVI群 a 類の胴部破片。75は外反する。RL縄文を施文後、一部を磨り消して沈線で区画を施している。76はRL斜縄文4単位が縦に並んで施文されている。(高橋)

SP68 出土遺物(図版 34-77)

77は1層出土の石鏃 a 類。薄く丁寧に加工されている。黒曜石製。(高橋)

SP70 出土遺物 (図版 34-78)

78 は 1 層出土のスクレイパー a 類。黒曜石製。 (高橋)

FC2 出土遺物 (図版 34-79 ~ 89)

79 は I 群 b - 3 類東釧路 IV 式の胴部破片。R の撚糸の絡条体圧痕が残る。80 は II 群土器の胴部。太い LR 縄文が施される。胎土に繊維がみられる。81 は VI 群 b 類後北 D 式の胴部破片と考えられる。ごく薄手の土器で、細い沈線に沿って三角形の刺突が施されている。82 ~ 85 は VI 群 a 類の胴部破片。82 は沈線内に縦の RL 縄文が、83・84 は RL 斜縄文が残る。85 は縦方向の RL 縄文を地文として、4 条の平行沈線がみられる。

86 は石鏃の先端部。黒曜石製。87 は基部が平基の石鏃 a 類で、上半を欠く。黒曜石製。88 はスクレイパー a 類で、背面の右側縁に急角度の刃部がある。上下端を欠損する。頁岩製。89 は黒曜石製の R フレイク。背腹両面の同側縁に加工があり、刃つぶれがみられる。すべて II 層出土。 (高橋)

SS1 出土遺物 (図版 34-90)

90 は厚みある楕円形扁平礫素材のたたき石。下端部及び平坦面の一部に敲打痕を持つ。 (田中)

SS3 出土遺物 (図版 34-91)

91 は楕円形礫素材の砥石。平坦面にゆるい窪みを呈する作業面を持つもので、縁辺部の作業面は作業痕跡の明瞭さに欠ける。なお、裏面には敲打による剥落がある。 (田中)

SX1 出土遺物 (図版 34-92 ~ 96)

92 は 2 層出土の石鏃 a 類。黒曜石製。先端と基部の一部を欠く。93 は黒曜石製のスクレイパー a 類。背面左側縁に急角度の刃部を持つ。1 層出土。94 は 2 層出土のスクレイパー b 類。背面左側縁に抉り状の刃部を有する。黒曜石製。 (高橋)

95 は断面四角形の棒状礫素材のたたき石。上下両端部に敲打痕を持つ。

96 は残存長 2 cm ほど、銅製の小延べ板破片。用途不明。 (田中)

第IV章 平成31年度調査地点

1. 概 要

平成31年度の調査では、検出された遺構は住居4軒、土坑47基、小土坑106基、剥片集中8基、性格不明遺構1基である。土坑のうち25基は墓壙、4基は陥し穴と考えられる。出上した遺物は、コンテナ(59×38.5×15cm)40箱分である。その内訳は、土器、陶磁器、石器、石製品、金属製品、ガラス製品、その他骨片、炭化材等である。

遺構の分布は、調査区北東部(D～F-10～12グリッド)と中央付近(F・G-8グリッド)、及び南西部(J・K-5～7グリッド)にまとまりが認められる。北東部のまとまりには今回検出された遺構の大部分があり、特にD・E-10・11グリッドに集中する。縄文時代の住居はすべてこの範囲から検出された。これは、攪乱の影響が少なかったこともあるが、緩斜面の中でも傾斜がゆるやかであること、南西部にある沢地形から距離があることが理由として考えられる。中央付近からは墓壙が4基検出された。平面形は北東部の墓壙にみられる隅丸長方形は認められず、楕円形または円形である。時期差によるものと考えられるが、構築時期の判明したものが少なく確たることは不明である。南西部からは土坑8基が検出された。このうち2基は墓壙、4基は陥し穴と考えられる。このことから、沢地形の中は、遺構構築時にはすでに水がつかない状態になっていたと考えられる。

土坑・小土坑は、長軸が0.60m(推定値含む)以上のものを土坑とし、0.60m未満を小土坑とした。ただし長軸が0.60mに満たなくても、覆土や埋土に共通性が認められる等の状況によって土坑としたものがある。また逆に長軸が0.60m以上であっても覆土の状況や形状によっては小土坑としたものがある。遺構観察表にある計測値のうち、()内のものは最大残存値であることを示す。調査区壁で確認された土坑・小土坑は、遺構分割図中ではその位置に遺構名のみを記した。

遺構種別の略号は、凡例に示した通りである。遺構番号は種別毎に通し番号としたが、土坑に関しては墓壙・陥し穴等の区別をせず土坑として通し番号を付した。なお、各遺構番号は平成30年度調査からの連番とした。住居のほか、それぞれの遺構に関する小土坑にはH1HP1やP41SP2のように、遺構毎に番号を付した。調査の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。

出土した遺物は、平成30年度調査同様に土器と石器が大半を占める。土器は各時代のものがみられるが、縄文時代のものが卓越する。縄文時代では早期が最も多く、中期が続く。両時期とも遺構内外から出土しているが、早期土器の器表面は磨耗・風化が著しく、また遺構内の覆土上層から出土しているため、平成30年度調査同様に本遺跡の時期を直接示すものではないと考えられる。

一方、中期土器は遺構の下層や底面から出土している。石器は石鏃や石錐、砥石やすり石が多く、特に頁岩製石錐の出土が目立つ。(岩橋)

2. 遺 構

(1) 住 居

H1(図版16・17)

D・E-11・12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC5・6よりも古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸3.95m、短軸2.94m、深さ0.15mを測る。住居内には、小土坑65基(このうち10基は掘方埋土除去後に検出)が認められた。炉は確認されなかった。

調査開始段階では、本遺構のプランが調査面で確認できなかったため包含層という認識で掘削を行ったが、遺物の出土が周辺よりも多かったため、遺物を残しながら掘削を進めた。10cmほど掘り下げたところで、遺物の垂直位置が保てなくなったため、いったん包含層として遺物を取り上げた。改めてⅡ層中で遺構面を精査したところ、土質や色調のわずかな違いが認められた。その後、土層観察用のサブトレンチを設定し、土層断面の観察を行った。その結果、土層断面による遺構範囲と遺物の集中する範囲、調査面での土質の異なる範囲が整合したため、先に取り上げた遺物については本遺構にともなうものであるとした。

覆土は6層に分けられ、1・2層は自然堆積土、3・4層は壁崩落土、5・6層は掘方埋土である。3層については設定した土層断面Aのみで観察された。床面は黒色土とⅢ層土ブロックを混ぜて貼床面とし、よく締まる。掘方は基盤層のⅣ層まで達しておらず、Ⅲa～b層で止まる。

支柱穴は住居中央にあるHP42と北東側にあるHP35が考えられる。住居の長軸線上に設定したエレベーションDをみると、HP35とHP42の深さはいずれも同程度であることが分かる。また両者とも柱痕跡が確認された。HP35の北側には4基の小土坑が構築されている(HP18・39・40・63)。住居の北東側は南西側と比べて小土坑が少ないこと、また標高が低いことから、出入口である可能性が高い。HP18・39・40・63の4基とそれに並行し住居の長軸線上にあるHP17とHP36は出入口にかかわる付帯施設と考えられる。HP18・39・40・63とHP17・36の芯芯間の距離は0.60～0.70mを測り、人が通るには十分な幅である。住居南側の壁には、壁柱穴(HP4・8～16・19～22・30～33・45～47)が巡る。このうちHP4・9・10・14・19・20・22・30・45～47は、住居内側に傾く。平面位置をみると住居コーナー部分にそれぞれ構築されていることが分かる。HP20(北側)とHP47(東側)は2基一対、HP4・9・10・22・45・46(南側)とHP14・19・30(西側)は複数基が対となる位置にあることから、住居構造にかかわるものと推測される。複数基の斜位の壁柱穴が対になる南西側は住居入口の反対に位置する。以上のことから、本住居は、長軸線上に並ぶ支柱穴2基(HP35・42)と壁柱穴21基(HP4・8～16・19～22・30～33・45～47)で上屋や壁を造るものと考えられる。

遺物は土器片110点(縄文時代早期67点(98)、同中期28点(97・99)、時期不明15点)、石鏃2点(100)、ナイフ1点(101)、石錐5点、楔形石器2点、たたき石1点(102)、剥片・碎片329点、礫32点、計482点である。遺物の出土層位は1・2層が多く、4層にも若干みられた。出土土器の時期は縄文時代早期に帰属するものが大半を占めるが、磨耗が著しく流れ込みによるものと思われる。床面からの遺物はごくわずかで礫のみである。遺構の時期は、住居の平面形状や壁柱穴、周辺の調査事例から判断して縄文時代中期北筒式期であると考えられる。(石川)

H2(図版18・19)

C・D-10・11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。P47を切り、FC9より古い。遺構の西側一部は攪乱によって失われており、北側は調査区外に伸びていることから調査対象は遺構の南側である。平面形は卵形に近い楕円形であり、断面形は台形状を呈する。調査規模は長軸5.57m(残存値)、短軸2.97m(残存値)、深さ0.14mを測る。床面は遺構が位置する緩斜面を反映して南東方向にやや傾斜する。西壁には最大幅0.5m程度のテラス状の掘り残し部分がある。

覆土は3層に分かれ、1・2層は自然堆積土、3層は堀方埋土である。床面は黒色土とⅢ層土ブロックが混在する貼床面としており、かたく締まる。また、床面の3.7m×2.2mほどの範囲が特にかたく締まる。

卵形の尖端近くに2基の石囲炉が検出された。炉1は礫がすべて抜き取られており、抜き跡が

16カ所認められた。炉2は部材の礫が6点残り、11カ所の抜き跡が確認された。掘り込みの最大径は炉1で0.68m、炉2で0.86mを測る。

貼床面上面ではHP4～17・20・21・23・32が確認された。HP32は長軸0.46m、深さ0.22mのいわゆる「先端部ピット」である。床面中央のHP11・12・21は垂直に掘り込まれており、特にHP12は長軸0.24m、深さ0.34m、HP21は深さ0.43mを測る。HP4～10・13～16は住居の壁近くに掘り込まれており、住居の内側に傾くものが多いことから、住居の上屋を支える柱痕跡と考えられる。貼床の下からはHP1～3・19・22・24～31を検出した。これらはいずれも貼床上面の小土坑よりも小さい。同じく貼床下検出のHP18は、長軸0.96m、深さ0.16mを測るやや大型の土坑である。これは炉1を廃棄して新しい炉を構築するために掘り込まれたものであるが、何らかの理由で掘削直後に埋め戻され、別地点に炉2が構築されたものと考えられる。

住居は改築・拡張が行われており、炉1は旧住居、炉2は拡張後の住居に帰属する。貼床面の下に確認されたHPの配置から、炉1を有する旧住居は本来長軸4.9m、短軸3.2m程度であったと推定される。また、住居の南側には2個一対の小土坑(HP33～40)が確認され、住居の上屋を支える外踏ん張りの柱痕跡と考えられる。このことを考慮すると、住居の居住面は壁面から外側に1mほど拡張されることとなり、H2の居住空間はさらに大きなものであったことが理解される。

出土遺物は、土器片28点(縄文時代早期9点、同前期1点、同中期9点(103・104)、同後期9点)、石鏃2点(105・106)、石槍・ナイフ1点(107)、つまみ付きナイフ1点(108)、ナイフ2点、スクレイパー1点(109)、剥片・碎片130点、計165点である。また、炉1の焼土からは炭化したクルミ(オニグルミ)殻と哺乳類骨片(焼骨10点)、炉2の焼土・火床面では哺乳類骨片(焼骨5点)を検出した。クルミ殻を資料として本住居の年代測定を行っている。炉2の骨片にはイノシシ(*Sus scrofa leucomystax* イノシシ科 Suidae)の幼体の臼歯歯冠破片2点を確認した。さらにHP3の覆土中には炭化した柱の一部が残っており、その材質を同定している。詳細については、第VII章〈附編3・4〉を参照されたい。

炉1・2とも焼土あるいは厚い火床面が残ることから、H2は炉の造り替えと改築・拡張をはさんで安定した長期間の使用が想定される。その時期は炉出土の土器に鑑みて、縄文時代中期末ノダップⅡ式期であったと考えられる。(高橋)

H3(図版20)

E-9・10グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。H4、FC8よりも古い。遺構西側の大部分は攪乱され、北西隅はH4により壊されているが、平面形は不整の隅丸長方形と推測され、断面形は箱状を呈する。規模は長軸3.00m、短軸1.96m(残存値)、深さ0.32mを測る。住居内には、小土坑10基(このうち3基は掘方埋土除去後に検出)が認められた。炉は確認されなかった。

床面は地形に沿って造られているようで南東側に傾斜し、さらに中央南西寄りには若干窪む。また南西端は張出状の掘り込みを持つ。

覆土は12層に分けられ、1～7層は自然堆積土、8・9層は壁崩落土、10層は小土坑覆土、11・12層は掘方埋土である。床面は、黒色土とⅢ層土ブロックを混ぜて貼床面とし、やや締まる。

遺物は土器片10点(縄文時代早期7点、同中期2点、時期不明1点)、Rフレイク1点(110)、剥片・碎片34点、礫6点、計51点である。遺構の性格は、平面規模が小さいこと、焼土や炭化物といった炉の痕跡が検出できなかったこと、また規則性のある柱穴等が確認できなかったことから、簡易的な建物であることが推測される。張出部分は出入口の可能性もあるが、幅が狭く、また標高の高いほうにあるため、はっきりと断定はできない。出土した縄文時代早期の土器片は磨耗して

おり、取上層も上層であるため本遺構の時期を直接示すものではないと判断した。遺構の時期は、周辺の状況に鑑み、縄文時代中期であると考えたい。(石川)

H4 (図版 21)

D・E-10グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。H3を切り、P36、FC8よりも古い。遺構の北西側大部分が攪乱され、北東の一部はP36により壊されているが、平面形は隅丸長方形と推測され、断面形は箱状を呈する。規模は長軸2.83 m、短軸2.07 m、深さ0.23 mを測る。住居内には、炉1基、小土坑8基(このうち5基は掘方埋土除去後に検出)が認められた。

炉は住居内の中央西寄りにあり、わずかな焼土と微量な炭化物の広がりのみで、被熱痕等は確認できなかった。床面は地形に沿って造られているようで南東側に傾斜し、南東端は若干張出す。

覆土は6層に分けられ、1・2層は自然堆積土、3層は壁崩落土、4層床面直上土、5層は掘方埋土、6層は床面下の小土坑覆土である。床面は、黒色土とⅢ層土ブロックを混ぜて貼床面とし、締まる。

遺物は土器片4点(縄文時代早期3点、同中期1点(111))、砥石1点(112)、剥片・碎片42点、礫6点、計53点である。このうち縄文時代中期の土器片と剥片十数点は床面から出土しており、剥片は意図的に置かれたような状況であった(写真30)。遺構の性格は、規模が小さいこと、床面には規則性のある柱穴等が確認できなかったことから、簡易的な建物であることが推測される。張出部分は標高の低い方にあるため出入口の可能性が高い。遺構の時期は、出土した遺物や周辺の状況に鑑み、縄文時代中期である。(石川)

SH3 (図版 22・23)

D・E-13・14グリッドに位置する。平成30年度の調査で南東側1/4の確認と調査を行い、残存部の調査を平成31年度に行った。以下に両年合わせて記述する。南西壁・北東壁は直線的であるが、南東壁・北西壁は中央部が弧状に張出し、平面形は胴張の隅丸方形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸4.56 m、短軸5.06 m、確認面からの深さ0.28 mを測る。南西壁中央にカマドを持つ。住居内にはカマドのほかに、炉1基、小土坑4基(うち1基は掘方埋土除去後の検出)、礫集中1基が認められ、住居外に小土坑9基が確認された。

床面はほぼ平坦である。周溝は確認されなかった。非常にかたい面が不規則に広がる。当初、硬化面と考えたが、部分的に深く掘削した際、非常にかたい構造土様の地山が床面に表れていることが判明した。エレベーションK・Lは掘方面での計測であるが、この図からも地山が大きく起伏していることがわかる。壁は急角度で立ち上がる。

覆土については、1～3層は自然堆積土、4～9層は屋根土、10・11層は壁崩落土、12層は掘方埋土と考えられる。3層は基本層序のⅡb層が流れ込んだものである。2層下面の起伏が激しいことから、4層以下は自然堆積とは考えられず、また、Ⅲb・Ⅳ層由来の褐色土を含むことから掘り上げ土を利用した屋根土であると考えた。9層には炭化材が多く含まれ、直上の6層は焼土層であることから、上屋が焼失した結果の堆積であると判断した。

カマドは南西壁中央にあり、壁体は残っていない。袖石痕と考えられる楕円形の浅い窪みが、燃焼部左に1つ、右には2つの窪みが接して確認された。燃焼部右側、袖石痕の上位から袖石と思われる角礫が出土したが、大きく傾き、原位置を保っているとは考えにくい。

煙道は壁から1.18 m張り出す。その底部はカマド燃焼部からゆるやかに上昇し、煙出し付近で浅く窪んだのち急角度に立ち上がる。煙道口付近から、煙道上部を覆っていたと考えられる板状礫が出土している。礫下面は被熱のためわずかに黒ずむ。煙道に被熱痕は認められない。煙道覆

土3・5層の土壌を採取しフローテーションを行ったところ、炭化物を確認した。

燃焼部は床面から浅く掘り込まれ、焼土の厚さは5 cmほどである。焼土及び火床の土壌を採取しフローテーションを行ったが、骨片や炭化物等は検出されなかった。このことから、焼土はカマド使用により生成されたものではない可能性が考えられる。

炉は住居中央部で確認された。平面形は0.21 m×0.18 mのハート形で浅く掘り込まれている。焼土の堆積は薄く、下位層に被熱痕は認められなかった。

住居内からは小土坑4基が検出された。このうちHP1は平面形が直径およそ0.60 mの円形で、深さは0.17 mを測る。カマド周辺にはかたい地山が広がるため、掘りやすいこの場所に貯蔵穴を構築したのかもしれない。覆土が掘方埋土とほぼ同質であることを考慮すると、構築直後に埋め戻されたとも考えられる。HP14は、その位置と深さから支柱穴の可能性もあるが、ほかに支柱穴らしきものは確認されなかった。住居外周から小土坑9基が検出されたが、これらが上屋構造にかかわるかは不明である。

住居北側、HP1の上に礫集中が認められた。出土点数は169点を数える。大きさの平均値は、長軸9.8cm、短軸5.4cm、厚さ3.4cm、重量235.6gである。長軸で見ると、9.1～11.0cmの範囲に117点が含まれ、8.1～12.0cmまで範囲を広げると160点と実に95%の礫が含まれる。この高い選択性と大きさから、これらは錘であると考えられる。また、29点には浅く窪んだ使用痕が認められた(図版23)。なお、遺物間の土壌を採取しフローテーションを行った。詳細については、第Ⅶ章<附編5>を参照されたい。

遺物は土器片57点(縄文時代18点(113)、続縄文時代4点(114)、擦文時代32点(121～123)、土師器2点、時期不明1点)、石鏃2点(124・125)、石錐2点(126)、スクレイパー3点(115～117)、楔形石器2点、Rフレイク1点(118)、石核1点、砥石12点(127・128)、たたき石3点(119・129)、砥石1点(120)、錘170点(うち169点は礫集中出土)(130)、剥片・碎片69点、石製品1点(131)、礫33点、計357点で礫集中を除くと大部分は覆土からの出土である。床面付近から出土した遺物は少なく、その分布はカマド周辺、そして器種も礫石器に偏る。

床面から9層にかけて多くの炭化材が出土した。炭化材は棒状のものがほとんどだが、数点幅広い板状のものも確認された。北西側では材が直交するかの様子もみてとれるが、残存状態が悪く確たることは不明である。炭化物は住居西側にのみ分布する。残存状態の良好なものについて樹種同定、及び放射性炭素年代測定を行った。詳細については、第Ⅶ章<附編3・4>を参照されたい。焼土は、カマド周辺が濃く、炭化物と同様住居西側にのみ分布する。

カマドの破却、床面出土遺物の少なさ、焼土・炭化材から窺える上屋の焼失から、住居廃絶時に何らかの儀礼的行為があったと考えられる。

遺構の時期であるが、カマドの方向や、煙道を板状礫で覆う構築法等からSH1・2と同時期、9世紀ごろの擦文時代と考えられる。(岩橋)

(2) 土 坑

P16(図版24)

E-10・11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC6・8、SP85に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.42 m、短軸1.15 m、深さ0.35 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は5層に分けられ、4・5層は黄褐色土を主体とし、水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片4点(縄文時代早期3点、同前期1点)、すり石2点、剥片・碎片281点、礫1点が出土している。遺構内南側の3層中に剥片・碎片が集中している状況が確認された。このため、土壌を採取し水洗選別を行ったところ、黒曜石の剥片13点、碎片52点(0.9g)、頁岩の碎片2点(1.0g)を確認した。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。出土した土器片については、小破片で磨耗しているため流れ込みによるものと判断した。遺構の時期は、周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P17(図版24)

E-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP142～144、SX2を切り、SP76、FC6・7より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.65m、短軸1.16m、深さ0.16mを測る。底面は概ね平坦であるが、西側が若干窪む。覆土は3層に分けられ、2・3層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片43点(縄文時代早期31点、同前期2点、同中期6点、時期不明4点)、スクレイパー1点(132)、剥片・碎片17点、礫5点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。出土した土器片については、ほぼ1層からのもので本遺構の時期を示すものとは考えられないと判断した。そのため、遺構の時期は周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P18(図版24)

E-12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP137を切り、SP77・78に切られる。平面形は長楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.85m、短軸0.48m、深さ0.14mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられ、水平堆積を呈していることからいずれも埋土と考えられる。

遺物は土器片1点(縄文時代中期(133))、剥片1点が出土している。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代中期である。(石川)

P19(図版24)

F-10・11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP83・84、FC11より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.72m、短軸1.20m、深さ0.20mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は3層に分けられ、2・3層は褐色土を主体とし、水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、石鏃1点(134)、剥片・碎片4点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。出土した遺物については、埋土からのものとはいえ本遺構の時期を直接示すものとは考えられないと判断した。そのため、遺構の時期は周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P20(図版24)

F-10グリッドに位置する。検出面はⅢb層中である。本遺構はⅡ層中から遺物が集中している状況が確認されたが、明確な掘り込みや土質の差異等は分からなかった。そのため、Ⅲb層まで掘削を行い、遺構の範囲を確認した。重複関係は無い。平面形は隅丸長方形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸2.00m、短軸0.78m、深さ0.05mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黄褐色土を主体とする。検出層位からおそらく埋土であると考えられる。

遺物は剥片・碎片23点で、底面から原石(頁岩)1点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴から縄

文時代であると推測される。

(石川)

P21 (図版 24)

E-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。P22、SP79を切り、FC7より古い。平面形は長楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.81 m、短軸0.40 m、深さ0.24 mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は褐色土を主体とする。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、剥片・碎片8点、礫1点が出土した。遺物は主に1層からである。2層出土の礫は割れているが、これが敲打によるかは不明である。遺構の時期は、FC7の下位にあることや覆土の特徴から縄文時代であると推定される。

(岩橋)

P22 (図版 24)

E-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。P21、SP79、FC7より古い。平面形は南側がP21により大きく破壊されているため不明である。断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.37 m(残存値)、短軸0.37 m(残存値)、深さ0.16 mを測る。底面は平坦で、北側に小土坑をとまなう。覆土は2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は褐色土を主体とする。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、剥片3点が出土した。遺構の時期は、FC7の下位にあることやP21に切られていることから縄文時代であると推定される。

(岩橋)

P23 (図版 24)

F-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC11より古い。平面形は隅丸長方形で、南西側が若干広がる。断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.20 m(残存値)、短軸1.01 m、深さ0.15 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は3層に分けられ、2・3層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は剥片・碎片80点が出土しており、2層に集中する。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壇と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。

(石川)

P24 (図版 25)

F-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP131・132を切り、FC11より古い。平面形は隅丸長方形で、南東側が若干広がる。断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.69 m、短軸0.92 m、深さ0.15 mを測る。底面は概ね平坦であるが、南東側に若干傾斜する。覆土は3層に分けられ、2・3層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、石鏃3点(135～137)、剥片・碎片476点、礫1点が出土している。遺物の分布は、遺構内の中央西寄りと東寄りにみられ、前者が1層、後者は2層に集中する状況が確認された。各々の土壌を採取し水洗選別を行ったところ、1層からは黒曜石の剥片5点、碎片79点(3.0g)、2層からは黒曜石の剥片4点、碎片34点(0.9g)を確認した。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壇と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。

(石川)

P25 (図版 25)

G-11・12 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。P26を切る。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.73 m(残存値)、短軸0.70 m、深さ0.15 mを測る。底面は平坦である。覆土は6層に分けられるが主体は黒褐色土である。

遺物は土器片10点(縄文時代早期)、剥片1点、礫1点が出土した。土器片は南側覆土中位からまとまって出土した。器面の磨耗が激しく、遺構中央に傾斜して出土したことから流れ込みと判

断した。遺構の時期は覆土の特徴や周辺の状況に鑑み縄文時代中期であると考えたい。(岩橋)

P26 (図版 25)

G-11 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。P25 に切られる。北東側を P25 に、南西側を攪乱に大きく壊されているため、平面形・断面形ともに不明であるが、おそらく P25 と同様の形状と考えられる。規模は長軸 0.67 m、短軸 0.26 m (残存値)、深さ 0.13 m を測る。底面は概ね平坦であるが、北東に向かってやや下がる。覆土は 2 層に分けられ、暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。覆土の特徴や検出状況から縄文時代中期であると推定される。(岩橋)

P27 (図版 25)

F-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP88・89 を切り、SP86、FC11 より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 0.82 m、短軸 0.56 m、深さ 0.17 m を測る。底面は概ね平坦である。覆土は 3 層に分けられ、1 層は黒色土、2・3 層は褐色土を主体とする。堆積状況から 2・3 層は埋土と考えられる。

遺物は土器片 9 点 (縄文時代早期 2 点、同中期 4 点、時期不明 3 点)、碎片 1 点、礫 1 点が出土した。多くは 2・3 層からの出土で、壁面に沿うように分布している。遺構の時期は出土遺物から縄文時代中期である。(岩橋)

P28 (図版 25)

I-11 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。攪乱により大部分が壊されているため平面形及び断面形は不明である。規模は長軸 0.41 m (残存値)、短軸 0.24 m (残存値)、深さ 0.10 m を測る。底面は平坦である。覆土は 5 層に分けられ、1・3 層は黒色土、2・4 層は褐色土、5 層は黄褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は不明である。(岩橋)

P29 (図版 25)

D-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC6・9 より古い。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 1.11 m、短軸 0.70 m、深さ 0.15 m を測る。底面は概ね平坦であるが、中央部がわずかに窪む。覆土は 3 層に分けられ、2・3 層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片 13 点 (縄文時代早期 12 点、時期不明 1 点)、剥片・碎片 7 点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓塚と推測される。出土した土器片については、小破片で磨耗しているため流れ込みによるものと判断した。そのため、遺構の時期は検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P30 (図版 25)

F-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC11 より古い。平面形は楕円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 0.76 m、短軸 0.56 m、深さ 0.15 m を測る。底面は平坦である。覆土は 3 層に分けられ、暗褐色土を主体とする。堆積状況から埋土と考えられる。

遺物は剥片・碎片 75 点が出土した。過半が 1 層からの出土で、分布は北側に大きく偏る。埋土中に剥片・碎片が多く含まれる可能性が高いため、土壌を採取し水洗選別を行った。土器細片 1 点 (時期不明)、剥片 2 点、碎片 82 点 (2.8g)、を確認した。内訳は剥片は黒曜石、碎片は黒曜石 80 点 (2.8g)、頁岩 2 点 (0.1g 以下) である。遺構の時期は、埋土の状況や周辺の環境から縄文時代中期と推定される。(岩橋)

P31 (図版 25)

F・G-8・9グリッドに位置する。検出面はⅢa層上面である。SP91に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈するものと推定される。規模は長軸1.23m(残存値)、短軸1.30m、深さ0.34mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられ、いずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片209点(縄文時代早期(138～140))、剥片・碎片115点、礫1点が出土しており、ほぼ1層に限定される。土器片は胎土が共通することから同一個体と考えられ、土器片を取り上げた後、剥片・碎片が出土し、その下にまた土器片がみられた。このことから土器に剥片・碎片を収納していた状況が窺える。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓塚と推測される。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代早期である。(石川)

P32 (図版 25)

G-8グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸1.33m、短軸1.22m、深さ0.34mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は3層に分けられ、2・3層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は剥片1点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓塚と推測される。遺構の時期は、覆土の特徴がP31と類似することから、縄文時代早期であると推定される。(石川)

P33 (図版 26)

D-10・11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP163を切り、P42、FC8・9より古い。平面形は概ね隅丸長方形であるが、東辺のみ弧状となる。断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.76m、短軸0.97m、深さ0.22mを測る。底面は概ね平坦で、3基の小土坑がともなう。覆土は3層に分けられ、2・3層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は石錐2点、石核1点、剥片・碎片640点、礫3点が出土している。遺物は、主に遺構中央北西寄りと東側の1・2層に多い状況が確認された。北西寄りの遺物は多くが碎片であったため、出土状況を確認しながら一括で取り上げを行った。また、埋土中に剥片・碎片が多く含まれる可能性が高いため、土壌を採取し水洗選別を行い、剥片7点、碎片74点(2.7g)を確認した。内訳は剥片が黒曜石220点、頁岩18点、碎片は黒曜石469点(23.0g)、頁岩14点(0.7g)である。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓塚と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P34 (図版 26)

D-13グリッドに位置する。検出面はⅢ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.80m、短軸0.50m、深さ0.10mを測る。底面は中央部がわずかに窪むが、概ね平坦である。覆土は単層で黒褐色土を主体とする。

遺物は碎片が1点1層より出土した。遺構の時期は不明である。

(岩橋)

P35 (図版 26)

D・E-12・13グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸2.19m、短軸1.76m、深さ0.18mを測る。底面は中央部に凹凸が認められるが、全体にほぼ平坦である。覆土は5層に分けられ、褐色土を主体とする。

遺物は土器片5点(縄文時代早期3点、擦文時代1点、時期不明1点)、剥片5点、礫6点が出土した。分布に偏りは認められない。遺構の時期は、出土遺物から擦文時代以降としたい。(岩橋)

P36 (図版 26)

D-10 グリッドに位置する。検出面はⅡ d 層中である。H4、SP115 を切る。平面形は隅丸長方形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 2.02 m、短軸 0.95 m、深さ 0.30 m を測る。底面は概ね平坦であるが、南東隅にテラスを持つ。小土坑等は確認されなかった。底面やすべての壁面で被熱痕がみられた。覆土は 9 層に分けられる。全体的に黒色や黒褐色を呈するが、焼土層 (2・4・8 層)、炭化物層 (3・9 層) といった特徴的な層も確認された。また、1 層の西側には礫 35 点が集石されていた。

本遺構については、土層観察を行った遺構中央から西側半分の土壌を採取し、フローテーションや水洗選別を行った。それらによって得られた炭化材は放射性炭素年代測定と樹種同定、炭化種子は種子同定を行った。分析結果は、第Ⅶ章〈附編 3～5〉を参照されたい。

遺物は土器片 2 点 (縄文時代前期 1 点、同中期 1 点)、たたき石 1 点 (141)、すり石 2 点 (142)、剥片・碎片 10 点、礫 35 点が出土している。礫の石質は流紋岩や輝石安山岩を主体する。遺構の性格は、遺構の形状や規模、壁面や底面の被熱痕、覆土中の焼土・炭化物層と 1 層の集石といった状況から人骨等は出土しなかったものの、墓壙と推測される。遺構の時期は、重複関係や検出層位から擦文時代以降であると推定される。 (石川)

P39 (図版 26)

D-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ 層中である。FC9 より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸 0.76 m、短軸 0.55 m、深さ 0.14 m を測る。底面は概ね平坦である。覆土は 2 層に分けられ、いずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片 1 点 (縄文時代中期)、石鏃 1 点 (143)、剥片・碎片 5 点が出土している。遺構の性格は、形状的な特徴や遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、出土した遺物や覆土の特徴から縄文時代中期である。 (石川)

P40 (図版 26)

D-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ 層中である。FC9・10 より古い。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 0.78 m、短軸 0.52 m、深さ 0.08 m を測る。底面は概ね平坦であるが、南西隅に小土坑を持つ。覆土は単層で暗褐色土を主体とする。

遺物は石錐 1 点、剥片・碎片 21 点が出土している。遺構の性格は、形状的な特徴や遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。 (石川)

P41 (図版 26)

D-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ 層中である。SP109、FC9 より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 1.28 m、短軸 0.98 m、深さ 0.30 m を測る。底面は概ね平坦であるが、中央南西寄りと北東寄り、東隅に小土坑を持つ。覆土は 3 層に分けられ、2・3 層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片 1 点 (縄文時代早期)、石核 1 点 (144)、剥片・碎片 71 点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴や遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。 (石川)

P42 (図版 27)

D・E-10 グリッドに位置する。検出面はⅡ 層中である。P33 を切り、FC8 より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 0.87 m、短軸 0.74 m、深さ 0.20 m を測る。底面は概

ね平坦であるが、北東と南西側に小土坑を持つ。覆土は2層に分けられる。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、剥片・碎片2点、礫1点が出土している。出土した土器片については、小破片で磨耗しているため流れ込みによるものと判断した。遺構の時期は、周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P43(図版27)

D-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC9より古い。平面形は楕円形、断面形は階段状を呈する。規模は長軸0.58m、短軸0.42m、深さ0.20mを測る。底面は中央西寄りにテラスを持つ。覆土は3層に分けられ、1層は黒色を呈し小土坑状に窪む。2・3層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片16点(縄文時代早期1点、同中期13点、時期不明2点)、石鏃1点(145)、石錐17点、石核1点、剥片・碎片289点が出土している。1層上部から剥片・碎片が多く出土したため、覆土を採取し水洗選別を行った。剥片36点、碎片482点(23.1g)、を確認した。内訳は、剥片が黒曜石89点、頁岩58点、メノウ?6点、泥岩1点、碎片は黒曜石392点(17.0g)、頁岩243点(12.1g)、珪岩3点(3.0g)、メノウ?15点(1.4g)である。遺構の性格は、形状の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。なお、1層は窪み部分に遺物が若干落ち込んでいることが確認された。これは底面付近まで棒状のものが立っていて、その後に腐朽、あるいは抜き取りした結果によるものであると推察される。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代中期である。(石川)

P44(図版27)

D-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC9より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.09m、短軸0.81m、深さ0.24mを測る。底面は概ね平坦であるが、北と南西側に小土坑を持つ。覆土は4層に分けられ、3・4層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片4点(縄文時代中期1点、同後期1点(146)、続縄文時代1点、時期不明1点)、剥片・碎片9点が出土している。遺構の性格は、形状の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、146が3層下面付近から出土していることから縄文時代後期である。(石川)

P45(図版27)

D-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP154・155を切り、FC9より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.67m、短軸0.41m、深さ0.10mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。

遺物は剥片・碎片54点が出土している。遺構の性格は、形状の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P46(図版27)

D-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。SP113、FC9より古い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.58m(残存値)、短軸0.42m、深さ0.12mを測る。底面は概ね平坦であるが、中央付近に小土坑を持つ。覆土は3層に分けられ、2・3層はいずれも水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は剥片・碎片9点が出土している。遺構の性格は、形状の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P47 (図版 27)

D-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。H2HP38、SP110・112、FC9 より古い。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸 0.78 m、短軸 0.43 m、深さ 0.20 m を測る。底面は概ね平坦であるが、中央付近に小土坑を持つ。覆土は 3 層に分けられ、3 層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は剥片・碎片 6 点が出土している。遺構の性格は、形状の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考える。(石川)

P48 (図版 27)

C・D-14 グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係は無い。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 0.80 m、短軸 0.74 m、深さ 0.19 m を測る。底面は中央部がわずかに高いが、ほぼ平坦である。覆土は 4 層に分けられ、1 層は黒褐色土、2・4 層は暗褐色土、3 層は明るい褐色土を主体とする。

遺物は礫が 2 層中位から 1 点出土した。遺構の時期は不明である。(岩橋)

P49 (図版 27)

G-8 グリッドに位置する。検出面はⅢa 層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形と推定され、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 1.71 m、短軸 0.55 m (残存値)、深さ 0.24 m を測る。底面は東側がテラス状とまではいかないがわずかに下がる。覆土は 3 層に分けられ、2・3 層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓壙と推測される。遺構の時期は、覆土の特徴が P31 と類似することから、縄文時代早期であると推定される。(石川)

P50 (図版 27)

F-8 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈するものと推定される。規模は長軸 1.70 m、短軸 0.53 m (残存値)、深さ 0.24 m を測る。底面は概ね平坦である。覆土は 2 層に分けられ、1・2 層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓壙と推測される。遺構の時期は、覆土の特徴が P31 と類似することから、縄文時代早期であると推定される。(石川)

P51 (図版 27)

J・K-6 グリッドに位置する。検出面はⅡd 層中である。SP130 を切り、P53 に切られる。平面形は長楕円形、断面形は V 字状を呈する。規模は長軸 1.76 m (残存値)、短軸 0.62 m、深さ 0.45 m を測る。底面は北西側に下がっているが、ほぼ平坦である。壁は底面から急角度で直線的に立ち上がる。覆土は壁崩落土の堆積と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状から陥し穴と考えられる。時期は周辺の調査事例から縄文時代と推定される。(飯浜)

P52 (図版 28)

J-6 グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。重複関係は無い。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 0.67 m、短軸 0.60 m、深さ 0.20 m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は単層で暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は不明である。(岩橋)

P53 (図版 28)

K-6・7 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。P51 を切る。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.97 m、短軸0.97 m、深さ0.25 mを測る。底面は南に下がるがほぼ平坦である。覆土は3層に分けられ、1層は黒褐色上、2・3層は褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、P51 を切って構築されていることや、覆土の状況から縄文時代中期と推定される。(岩橋)

P54 (図版 28)

J・K-5 グリッドに位置する。検出面はⅡd層中である。重複関係は無い。平面形は長楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸2.74 m、短軸0.98 m、深さ0.42 mを測る。底面はほぼ平坦である。壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がり、西壁では崩落により大きく、東壁ではゆるい角度で徐々に開く。覆土は壁崩落上の堆積と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状から陥し穴と考えられる。時期は周辺の調査事例から縄文時代と推定される。(飯浜)

P55 (図版 28)

J・K-5 グリッドに位置する。検出面はⅡd層上面である。重複関係は無い。遺構南西側の大部分は攪乱により壊されているが、平面形は長楕円形と推定され、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.53 m (残存値)、短軸0.76 m (残存値)、深さ0.31 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられ、1・2層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は土器片1点(縄文時代早期)、剥片・碎片218点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴、遺物の出土状況から墓壙と推測される。出土した土器片については、小破片で磨耗しているため流れ込みによるものと判断した。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P56 (図版 28)

H-12 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は不明、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.52 m (残存値)、短軸1.16 m、深さ0.09 mを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられ、1・2層は水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は剥片1点が出土している。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。

(石川)

P57 (図版 28)

K-5・6 グリッドに位置する。検出面はⅢa層上面である。重複関係は無い。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸1.46 m (残存値)、短軸1.03 m、深さ0.14 mを測る。底面は北側の一部が安定しないが、ほかは概ね平坦である。覆土は単層で褐色土を主体とし、水平堆積を呈していることから埋土と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓壙と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P58 (図版 8)

M-6 グリッドに位置する。調査区南壁土層断面で確認された。検出層位はⅡd層である。確認された範囲内では、断面形は階段状を呈するものと推測され、深さ0.60 mを測る。覆土は3層に分けられ、いずれの層にも小礫が混入する。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴から縄文時代であると推測される。(石川)

P59 (図版 1)

K-3 グリッドに位置する。調査区西壁土層断面で確認された。検出層位はⅡc層である。確認された範囲内では、断面形は箱状を呈するものと推測され、深さ0.35 mを測る。覆土は2層に分けられ、黒色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴から擦文時代以降であると推測される。(石川)

P60 (図版 8)

M-7 グリッドに位置する。調査区南壁土層断面で確認された。検出層位はⅢa層である。確認された範囲内では、断面形は台形状を呈するものと推測され、深さ0.36 mを測る。覆土は2層に分けられ、暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴から縄文時代であると推測される。(石川)

P61 (図版 3)

C-12 グリッドに位置する。調査区北壁土層断面で確認された。検出層位はⅢa層である。SP169・183に切られる。確認された範囲内では、断面形は台形状を呈するものと推測され、深さ0.35 mを測る。覆土は2層に分けられ、暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状や規模等の特徴から墓壇と推測される。遺構の時期は、検出層位や覆土の特徴、また周辺の状況に鑑みて縄文時代中期であると考えたい。(石川)

P62 (図版 28)

K-7 グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。重複関係は無い。平面形は長楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.96 m、短軸0.73 m、深さ0.10 mを測る。底面は平坦である。壁は北西側では底面からゆるやかに立ち上がり、南東側では急角度に立ち上がる。覆土は壁崩落土の堆積と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状から陥し穴と考えられる。時期は周辺の調査事例から縄文時代と推定される。(飯浜)

P63 (図版 28)

J-5・6 グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。重複関係は無い。遺構西側の大部分は、土層断面観察トレンチを掘削した際に破壊した。平面形は長楕円形と推定され、断面形は台形状を呈する。規模は長軸1.64 m、短軸0.26 m (残存値)、深さ0.12 mを測る。底面は概ね平坦で、両端がやや窪む。壁は底面から垂直に近い急角度で立ち上がる。覆土は、壁崩落土による堆積と考えられる。

遺物は出土していない。遺構の性格は、形状から陥し穴と考えられる。時期は周辺の調査事例から縄文時代と推定される。(飯浜)

P64 (図版 28)

G-11・12 グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。重複関係は無い。北側が攪乱により壊されているため平面形は不明、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.47 m (残存値)、短軸0.54 m、深さ0.08 mを測る。底面は平坦である。覆土は単層で暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。遺構の時期は不明である。(岩橋)

(3) 小土坑

本年度調査では106基確認された。これらの大部分は調査区北側、縄文時代の住居周辺で確認された。その分布から、住居や墓壇に関連した柱穴や柵、柱列を構成するものと考えられ、E・F-11では、小土坑が南北に0.9mほどの間をおいて平行に2列あるようにも見える。しかしながら、D-11の密集度や調査区北壁からの検出状況から、小土坑の集中域が更に北側へと広がる可能性が高いため、調査した範囲内ではその性格等を十分に検討することができないと判断した。このため、個々の形状や規模は遺構分割図(図版2～10)に、属性については遺構観察表(別表2)の記載にとどめた。(岩橋)

(4) 剥片集中

FC4(図版29)

D・E-12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。重複関係は無い。平面形は不整形である。厚さ5～10cmほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸2.20m、短軸1.50mを測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片2点(縄文時代早期)、剥片14点、碎片2点(0.1g)である。また、水洗選別を行った土壌から、剥片1点、碎片7点(0.5g)を確認した。剥片・碎片的石質は、大部分が黒曜石である。内訳は、剥片が黒曜石14点、頁岩1点、碎片は黒曜石5点(0.1g)、頁岩4点(0.5g)である。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC5(図版29)

E-11・12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC5の範囲を含む周辺の下層にはH1、F29、SP80が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後にFC5が形成されたものと判断した。平面形は不整形である。厚さ5cmほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸3.90m、短軸1.00mを測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片4点(縄文時代早期)、石錐4点、剥片27点、碎片36点(1.6g)が出土している。また、水洗選別を行った土壌から、土器細片2点(時期不明)、剥片10点、碎片78点(3.5g)、炭化物片を確認した。剥片・碎片的石質は、大半が黒曜石で、このほかに頁岩がみられる。内訳は、剥片が黒曜石28点、頁岩9点、碎片は黒曜石67点(2.5g)、頁岩47点(2.6g)である。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC6(図版29)

D・E-11・12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC6の範囲を含む周辺の下層にはH1、P16・17・29、SP142が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後にFC6が形成されたものと判断した。平面形は不整形である。厚さ5cmほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸6.10m、短軸2.80mを測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片44点(縄文時代早期40点、同中期1点、時期不明3点)、石錐3点(148・149)、石錐20点、石核1点、石斧2点、剥片272点、碎片443点(23.4g)が出土している。また、水洗選別

を行った土壌から、土器細片 57 点 (時期不明)、剥片 433 点、碎片 2,093 点 (93.0g)、骨片 7 点を確認した。剥片・碎片の石質は、大半が黒曜石で、このほかに頁岩やメノウ?等がみられる。内訳は、剥片が黒曜石 326 点、頁岩 378 点、メノウ? 1 点、碎片は黒曜石 1,759 点 (61.9g)、頁岩を含むその他の石質が 777 点 (54.5g) である。骨片 7 点は焼骨である。種の同定には至らなかったが、哺乳類の骨と考えられる。このうち 1 点にはネズミ等の小動物の嚙跡が認められた。今回検出された剥片集中の中で、最も多くの遺物が確認された。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC7 (図版 29)

E-11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC7 の範囲を含む周辺の下層には P17・21・22、SP79・143・144・147・148 が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後に FC7 が形成されたものと判断した。平面形は不整形である。厚さ 5～10cm ほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸 2.30 m、短軸 1.20 m を測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片 2 点 (縄文時代早期)、石核 1 点、剥片 19 点、碎片 20 点 (0.7g) が出土している。また、水洗選別を行った土壌から、土器細片 4 点 (時期不明)、剥片 12 点、碎片 76 点 (2.7g) を確認した。剥片・碎片の石質は、多くが黒曜石で、このほかに頁岩やメノウ?がみられる。剥片が黒曜石 13 点、頁岩 17 点、メノウ? 1 点、碎片は黒曜石 61 点 (1.9g)、頁岩 35 点 (1.5g) である。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC8 (図版 29)

D・E-10・11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC8 の範囲を含む周辺の下層には H3・4、P16・33・42、SP85・103 が確認されているが、上層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後に FC8 が形成されたものと判断した。平面形は不整形である。厚さ 5 cm ほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸 2.50 m、短軸 1.60 m を測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片 1 点 (続縄文時代)、石錐 1 点、剥片 17 点、碎片 15 点 (0.8g)、礫 1 点 が出土している。また、水洗選別を行った土壌から、土器細片 2 点 (時期不明)、剥片 17 点、碎片 53 点 (3.5g) を確認した。剥片・碎片の石質は、多くが黒曜石で、このほかに頁岩がみられる。内訳は、剥片が黒曜石 19 点、頁岩 15 点、碎片は黒曜石 43 点 (2.7g)、頁岩 25 点 (1.6g) である。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC9 (図版 29)

C-11、D-10・11 グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC9 の範囲を含む周辺の下層には H2、P29・33・39～41・43～47、SP106・108～114・117・119～124・152～158・172～178 が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後に FC9 が形成されたものと判断した。剥片・碎片が集中する密度により、FC9-1 と FC9-2 に分けた。FC9-1 の平面形は不整形である。厚さ 5～10cm ほどの範囲内に遺物の集中する状況が確認されたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸 5.90 m、短軸 3.60 m を測る。FC9-2 の平面形は円形である。規模は長軸 1.80 m、短軸 1.50 m を測る。FC9-1 のほぼ中央に位置し、FC9-1 より剥片・碎片が集中する (写真 49)。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、土器片7点(縄文時代早期)、石鏃1点(150)、石錐25点、楔形石器5点、Uフレイク1点、石核2点、剥片272点、碎片529点(17.0g)、礫1点が出土している。また、水洗選別を行った土壌から、土器細片4点(時期不明)、剥片164点、碎片829点(39.7g)を確認した。剥片・碎片的石質は、大半が黒曜石で、このほかに頁岩等がみられる。内訳は、剥片が黒曜石284点、頁岩152点、碎片は黒曜石974点(35.2g)、頁岩を含むその他の石質が384点(21.5g)である。今回検出された剥片集中の中で、2番目に遺物が多く確認され、そのほとんどがFC9-2とした範囲内に集中していた。遺構の時期は、出土した遺物から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC10(図版29)

C・D-11・12グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC10の範囲を含む周辺の下層にはP40、SP107・168・170が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後にFC10が形成されたものと判断した。平面形は楕円形である。厚さ5～10cmほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸2.90m、短軸2.30mを測る。

集中範囲では、掘削土中の微細遺物を確認するため、水洗選別のための土壌を採取した。

遺物は、剥片31点、碎片78点(4.1g)が出土している。また、水洗選別を行った土壌から、剥片72点、碎片276点(14.1g)を確認した。剥片・碎片的石質は、大半が黒曜石で、このほかに頁岩がみられる。内訳は、剥片が黒曜石87点、頁岩16点、碎片は黒曜石313点(15.8g)、頁岩を含むその他の石質が41点(2.4g)である。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

FC11(図版29)

F-11グリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。FC11の範囲を含む周辺の下層にはP19・23・24・27・30、SP88・89・131～133・150が確認されているが、土層の堆積や遺物の出土状況から、これらの遺構が埋没した後にFC11が形成されたものと判断した。平面形は楕円形である。厚さ5～10cmほどの範囲内に遺物が集中していたが、明確な掘り込みや立ち上がりは確認できなかった。規模は長軸4.70m、短軸2.50mを測る。

遺物は、土器片1点(縄文時代早期)、剥片11点、碎片2点(重量計測不能)が出土している。遺構の時期は、検出層位から縄文時代以降であると推定される。(中塚)

(5) 性格不明遺構

SX2(図版28)

E-11グリッドに位置する。P17、FC5より古い。平面形は不整な方形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.27m、短軸0.22m、確認面からの深さ0.13mを測る。Ⅳ層上面を精査中、砂質の赤褐色土を検出したので、トレンチを入れたところ被熱層と掘り込みを確認した。1・2層とも土壌を採取しフローテーションを行ったが何も検出されなかった。

土壌採取の際に、1層は締まりがあり2層から形状を保ったまま容易に分離できた。また1層は全体が均一に赤化しているが、2層は上部にのみ赤化が認められる。これらのことから、掘り込み後底面を白粘土で成形、2層土を充填して火を使用し、しかる後に、中央を掘り込み赤化した1層土で埋めた、といった構築過程が推定されるわけであるが、これが何を意味しているのかは不明である。

遺構の性格は不明である。遺構の時期は検出状況から縄文時代と推定される。(岩橋)

3. 遺物

H1 出土遺物 (図版 34-97 ~ 102)

97はⅢ群 a 類北筒式の口縁部破片で 2 層出土。口縁断面は三角形で、2 条の押引文が巡る。直下に円形刺突文が 2 ヶ所残る。内面の凹凸が著しい。98はⅠ群 b - 3 類東釧路Ⅳ式の胴部破片で 2 層出土。組紐の圧痕文が施される。99は 2 層出土のⅢ群 a 類北筒式の胴部破片。厚手の土器で、口縁部に近い部分と考えられる。破片上端近くに円形刺突文が残る。下端近くに粘土帯が 1 条貼付されており、その上に押引文が施される。地文は結束第一種の RL 斜縄文である。胎土に小礫の混入が多く、表面に礫の脱落痕が 2 ヶ所ある。

100は石鏃 d 類で 2 層出土。腹面に一次剥離面を残す。背面右側縁下部は破損後に再調整を施している。黒曜石製。101は b 類のナイフ。2 層出土。背腹両面の周縁に刃部加工を施し、両面に一次剥離面を残す。黒曜石を素材とする。(高橋)

102は厚みのある長楕円形棒状礫素材のたたき石。下端部に敲打痕を持つ。礫表面は全体的に鉄分の固着なのか赤味を帯びるが、敲打部分は部分的に風化面が剥落し、礫本来の灰色を呈する。

(田中)

H2 出土遺物 (図版 35-103 ~ 109)

103は炉 1 内焼土出土の口縁部破片でⅢ群 c 類ノダツプⅡ式。口唇直下は薄い貼付帯によって肥厚し、断面は三角形を呈する。貼付帯下端まで LR の斜縄文、胴部に別単位で LR 斜縄文が施される。104は 3 層出土のⅢ群土器の胴部破片。明瞭で条の深い LR 斜縄文が施される。

105は石鏃 d 類で 2 層出土。先端と茎下端を使用による衝撃剥離によって欠損する。黒曜石製。106はやや大型の石鏃 d 類で 2 層出土。茎を含む周縁だけを加工し、背面に大きく原石面を残す。黒曜石製。107は 1 層出土の石槍 c 類。周縁に加工が施され、背腹両面に大きく一次剥離面を残す。上半を大きく欠損する。黒曜石製。108はナイフ a 類のつまみ付きナイフ。2 層出土。長軸 7.7cm の大型のもので、両面に加工が施され、腹面右側縁に刃部が作出されている。黒曜石製。109は 1 層出土のスクレイパー a 類。縦長断面三角形の黒曜石剥片を素材とし、背面のみに加工を施す。左側縁に急角度の刃部を有するが、刃部再生の繰り返しのよって内湾や抉り形状を呈する。

(高橋)

H3 出土遺物 (図版 35-110)

110は黒曜石製の R フレイクで 4 層出土。薄く大きめの剥片の背面の周縁、腹面の右側縁に加工がみられる。(高橋)

H4 出土遺物 (図版 35-111・112)

111はⅢ群 b 類大安在 B 式の口縁部破片で 4 層出土。口唇断面は角状で、口縁はやや波状を呈する。縄線文が 2 条巡り、その下に RL の斜縄文が施文される。(高橋)

112は大型の砥石。礫のあらゆる面にほぼ平坦な作業面が部分的にみられるが、使い込んだものではない。台石とみるべきかもしれない。(田中)

SH3 出土遺物 (図版 35・36)

平成 30 年度出土分 (図版 35-113 ~ 119、36-120)

113は 1 層出土のⅠ群 b - 3 類東釧路Ⅳ式の胴部破片。撚糸による絡条体圧痕がみられる。114は 2 層出土のⅥ群 a 類の胴部破片。細い RL 縄文が斜位に施文されている。

115はスクレイパー a 類で頁岩製。2 層出土。下半を大きく欠損する。背面を加工後、背腹面の左右側縁に刃部を作出している。剥片上端に打面を残す。116は 3 層出土のスクレイパー a 類。黒

曜石製。背面左側縁に刃部を有するが、一部未加工で原石面を残す。上半を大きく欠く。117は両面加工のスクレイパー a 類。黒曜石製で5層出土。背面左側縁にやや急角度の刃部を作出する。上端一部に原石面を残す。118は大型のRフレイクで頁岩製。周縁に細かな剥離がみられる。(高橋)

119は棒状礫素材のたたき石。上端部を除くいたるところに敲打痕がみられるが、裏面平坦面中央に深い敲打痕が集中している。120は破断した扁平な礫を素材とする砥石。一平坦面を利用しており、ゆるやかな窪みの2つの作業面で構成されている。(田中)

平成31年度出土分(図版36-121～131)

121～123は1層出土のⅦ群 a 類である。121は鉢の口縁部破片で、破片下部に2条の横走沈線、その上に不整な「X」字状の短沈線あるいは刻みを施している。器表面と内面は丁寧なミガキ調整が施されているが、内面には一部ハケメ痕が残る。右上端に補修孔がある。122は甕の口縁部破片。わずかに残る口唇は角状、器表面には7条ほどの段状沈線が巡る。直下に右斜めからの刺突列がみられる。胴部には縦のハケメ、ミガキ、内面には横方向のミガキ調整が施される。123は甕の胴部破片。段状沈線、刺突の列点は122に共通する。刺突下のハケメ、縦方向のミガキ調整も同様であり、同一個体の可能性がある。内面はやや斜位のミガキ調整が行われる。

124は石鏃 c 類の五角形鏃。1層出土で黒曜石製。背腹両面が加工され、非常に薄く丁寧に仕上げられている。背面左側を一部欠く。125は大型の石鏃 b 類。2層出土で黒曜石製。背面は全面が、腹面は周縁が加工され一次剥離面を大きく残す。上半を大きく欠く。126は c 類の棒状の石錐。2層出土。黒曜石製で両面加工の石器。錐の機能部先端を欠損する。(高橋)

127・128は砥石。127は大型礫の破片を利用したもので、一面のゆるやかな作業面以外は凹凸の激しい破断面のままである。128は硬質頁岩の扁平礫素材の大型のもの。ゆるく窪んだ作業面2面で構成され、石目が細かい今でいう「仕上げ砥」に相当する。作業面は礫表面の茶色の葉理面が研がれ、次の明茶色の葉理部分となっている。129は棒状礫素材のたたき石。上下端部に敲打痕がみられる。130は長楕円形扁平礫の長軸両端に打ち欠きを入れた石錘。

131は3層中位から出土した勾玉。松脂岩とみられるもの。礫表面は風化のため黒灰色を呈し、光沢がある。光のあたり方によっては銀色に見える。割れ口はより黒味が強い。(田中)

P17 出土遺物(図版36-132)

132は1層出土のスクレイパー c 類。黒曜石製。円形に加工された素材の背面周縁にやや急角度の刃部を作出している。長軸3.3cm。(高橋)

P18 出土遺物(図版36-133)

133は1層出土のⅢ群 a 類北筒式の口縁部破片。口縁断面は三角形を呈し、口唇上及び口唇直下に押し文が巡る。その下に円形刺突文が1カ所みられ、その内面には剥離した突瘤の剥離痕跡が残る。地文は横回転のRL斜縄文。内面は凹凸に富む。(高橋)

P19 出土遺物(図版36-134)

134は1層出土の石鏃 c 類で五角形鏃。黒曜石製。背腹両面が加工され、非常に薄く丁寧に仕上げられている。(高橋)

P24 出土遺物(図版36-135～137)

135は1層出土の石鏃 a 類。黒曜石製で先端を一部欠く。136は2層出土の石鏃。黒曜石製で基部付近を欠損する。背面左側縁に自然面を残す。137は1層出土の石鏃 a 類。両面加工で基部のみを残す。黒曜石製。(高橋)

P31 出土遺物 (図版 36-138 ~ 140)

138 ~ 140 は I 群 b - 3 類東釧路IV式の同一個体の胴部破片。1 層出土。L の撚糸絡条体が羽状に施文されている。同一個体の破片がほかに 200 点ほど出土しており、墓壙に供献されたものと考えられる。(高橋)

P36 出土遺物 (図版 37-141・142)

141 は長楕円形棒状礫素材のたたき石で、上下両端部及び平坦面中央付近に敲打痕が集中する。142 は長楕円形扁平礫素材のすり石で、礫右側稜部下半に作業面を持つ。この作業面及び逆側の礫過半が被火熱のためか赤色を呈する。特に作業面に著しい。(田中)

P39 出土遺物 (図版 37-143)

143 は 1 層出土の石鏃 a 類。小型の平基鏃で黒曜石製。(高橋)

P41 出土遺物 (図版 37-144)

144 は SP2 1 層出土の石核 a 類で黒曜石製。墓壙に供献された石器素材と考えられる。(高橋)

P43 出土遺物 (図版 37-145)

145 は 3 層出土の石鏃 a 類で頁岩製。被熱のためか器面に弾けがみられる。背面右基部端を欠く。(高橋)

P44 出土遺物 (図版 37-146)

146 は IV 群 a 類余市式の口縁部破片。3 層出土。最大幅 1.5cm、最大厚 0.5cm の粘土帯を口唇直下に貼り付け、口唇上面から粘土帯、胴部のそれぞれに RL 斜縄文を施文している。粘土帯直下に円形刺突文が 1 ヲ所残り、その内面に突瘤の剥離痕跡がみられる。内面に浅い凹凸があるが、全体的に丁寧に仕上げられている。(高橋)

SP80 出土遺物 (図版 37-147)

147 は 1 層出土の石槍 a 類。幅広の茎を有し、基部付近に最大厚がある。先端と基部端に使用による衝撃剥離の痕跡がある。黒曜石製。(高橋)

FC6 出土遺物 (図版 37-148・149)

148 は II 層出土の石鏃 c 類で黒曜石製。先端と基部端に衝撃剥離がみられる。149 は背面左上半を大きく欠くが、石鏃 a 類の平基鏃と考えられる。背腹とも周縁のみが加工されており、両面に一次剥離面が残されている。黒曜石製。II 層出土。(高橋)

FC9 出土遺物 (図版 37-150)

150 は II 層出土の石鏃 b 類。平基に近い凹基で先端を欠損する。全体に薄く丁寧に仕上げられている。黒曜石製。(高橋)

第V章 遺構外出土遺物

以下に各遺物の分類について述べるが、個々の遺物の出土地点や層位、測定値等は遺物観察表を参照されたい。

1. 概 要

遺構外から出土した遺物は、コンテナ(59×38.5×15cm)20箱分である。内訳は、土器(898点)、土製品(1点)、陶磁器(158点)、石器(8,212点)、石製品(5点)、金属製品(29点)、ガラス製品(8点)、その他骨片、炭化材等である。

土器は縄文土器が最も多く626点、擦文土器、続縄文土器がそれに続く。縄文土器は早期～晩期の各時期のものがみられる。特に早期が474点出土しており卓越しているが、全体的に器表面は磨耗・風化が著しく遺存状態は良くない。次に多いのは中期で、前期・後期・晩期は多くない。続縄文土器は恵山式期のものが目立つ。擦文土器は遺構外出土のものに限ると小破片が多い。

石器は、石鏃、石槍、石錐、ナイフ、スクレイパー、楔形石器、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、剥片・碎片、石斧、砥石、たたき石、すり石、くぼみ石、石皿、台石等の多様な器種がみられる。このうち剥片・碎片を除いた石器の数量は405点で、剥片石器では、石鏃が71点と最も多く出土しており、石錐も64点と目立つ。礫石器では砥石、すり石が多く、特に砥石では使用面が浅く窪むもののほかに、U字状の溝状作業面を持つものがみられる。(石川)

2. 土器・土製品・磁器

(1) 土 器(図版37・38)

遺構外で出土した土器は縄文時代の早期から晩期、続縄文時代、擦文時代、近世以降に属する。主体は縄文時代早期後半の東釧路系の土器(I群b類)であり、中期末の北筒式(Ⅲ群a類)がそれに次ぐ。

I群a類

貝殻条痕文系の土器の胴部破片がごく少量出土している。表裏に貝殻条痕がみられる。

I群b類(図版37-151～163・167・168・38-175)

外に張り出す平底で、その直上に短縄文を施すものをb-1類東釧路Ⅲ式、微隆起線を胴部に平行に貼り付け、細い短縄文を施文する土器をb-2類中茶路式、口縁部及び胴部に対して横位に平組紐の圧痕文や絡糸体の撚糸文を施文し、丸底を有する土器をb-3群東釧路Ⅳ式とした。

152はb-1類の土器片で、外に張り出す平底の直上にRL短縄文が施文される。

b-2類土器は12点が出土している。すべて胴部破片で、微隆起線とごく細い短縄文を有する。

151、153～163、167・168、175は絡糸体の撚糸文が施されるb-3類の土器。151は口縁部破片、ほかは全て胴部破片である。151は口唇直下に数条の撚糸の絡糸体圧痕文が平行に施される。153は底部近く、154は胴部下半の土器片で、同一個体の可能性がある。154には赤色顔料の塗布がみられる。157は平組紐の圧痕文のある土器片。158は口縁付近の破片で、撚糸の絡糸体圧痕文の下に撚糸文と縄文が羽状に施される。

Ⅱ群a類

太い縄文を施文した後に節をなで消し、深い条を作り出している。胴部破片が3点出土。

II群b類(図版37-164・169・38-177)

3点とも胎土に繊維を含む胴部破片。177はLRとRL縄文が整然と羽状に施されている。条のつぶれが観察され、特にLR縄文に著しい。

II群(図版37-165・166、図版38-170)

類別できていないが、165・166・170は前期胴部破片で、LR縄文が施文される。

III群a類(図版38-171・173・174)

すべて口縁部破片であり、断面形状は三角形を呈する。171は口唇が平坦に削られ、貼付帯の下端を境に上下に分けてLR縄文が施文されている。また、貼付帯直下に円形刺突文が複数施される。中央と左端の円形刺突文間に幅5mmの沈線があり、刺突文の直径と一致することから同一の工具によるものと考えられる。

173は山形の口縁部破片で、貼付帯上には幅11mmの押引文が施される。内面の口唇直下にLR縄文が施文。貼付帯直下に円形刺突文が2カ所みられる。胎土には小礫が含まれている。174は口唇が平坦に近く削られ、貼付帯下端を境に上下に分けてLR縄文が施文される。貼付帯上の縄文は一部口唇上面まで及んでいる。また、内面口唇直下に数条のLR縄文がある。貼付帯直下に1カ所の円形刺突文、それによる内面の突瘤が剥離した痕跡が残る。

III群b類(図版35-111)

H4から口縁部破片が1点(111)出土している。

III群c類(図版38-172)

口縁部破片。口唇直下に薄い粘土が貼付され、工具で平坦に整えられた口唇上面に刺突文が施されている。刺突は口唇に沿って斜め上から下方向に行われ、それによって各刺突の間には粘土の盛り上がりが見られる。胴部にはやや太いRLの斜縄文が施される。内面は横方向のミガキによって滑沢に整えられている。

III群(図版38-176)

類別できていないが、176は中期の胴部破片で正反の合の縄文が施されている。

IV群a類(図版38-178)

口縁部破片で、口唇直下に薄い貼付帯があるもの。胴部にRL縄文が縦方向に施された後に貼付帯が施され、その上にRL縄文が横方向に回転施文され、原体端部の粘上が盛り上がる。口唇上面及び内面が工具によって丁寧に整えられている。

IV群b類(図版38-180～183)

すべて胴部破片で、器壁が厚く、太い縄文が施されるもの。胎土には砂粒が多く含まれる。縄文の条間は押さえによってつぶれ太い縄文が多い。180は胴部下半で二次被熱によって非常に脆い。LRとRLの縄文が施される。181も胴部下半でLRとRLの縄文が施される。182はRL縄文、183はLRとRL縄文が施文されている。

IV群c類(図版38-179)

外反する口縁部破片で、口唇直下に縄文を施文した後に4条の沈線が施される。

V群(図版38-186・190)

186は胴部の小破片。RLの斜縄文が浅く施されている。190は舟形土器の胴部の屈曲部である。幅広の刻みが2カ所確認される。下半にはRLの斜縄文が浅く施文される。なお、本群土器1点がⅢ層より出土しているが、根への落ち込み、あるいは攪乱によると考えられる(図版52)。

VI群 a 類 (図版 38-184・185・187～189・191～198)

185・187～189は口縁部破片である。185は口唇角に丸みのある刻みが施されている。口唇直下には細いRL縄文が施され、その上に2条の平行沈線が付けられる。187はやや外反する口縁部を持つ土器片。口唇直下に細いRL縄文が浅く施され、幅1mmほどの細い沈線が5条平行して施されている。188はやや屈曲外反する口縁部破片。細く尖った口唇角にやや幅のある刻みが施される。RL斜縄文が施された後に、口唇直下の幅7mmほどを残して縄文がナデ消され、幅3mm弱のやや浅い沈線が6条施されている。189は横方向のLR縄文施文後、口唇上面が工具でごく平坦に整えられており、その結果口唇角に粘土が張り出している。

184・191～198は胴部破片。184は細いRL縄文の施文後に沈線によって無文の区画部が作られている。沈線による区画内にRL縄文が3条ずつ施文されている。192はやや内湾する胴部破片。縦に細いRL縄文施文後、平行沈線や短刻線が施される。193は沈線による区画の中に細いRL縄文が施文される。短刻線がみられる。194～198は細いRL縄文が縦方向に施文されている。

VI群 b 類 (図版 34-81)

FC2から後北D式の胴部破片が1点(81)出土している。

VII群 a 類 (図版 38-199～206)

199・200は甕の口縁部、201～206は胴部破片。199は口唇形状が角状で上面に凹みが巡る。補修孔が残る。200は口唇上面に凹みが巡り、角に刻みが施される。

201は口縁部文様帯に7条の横走沈線があり、その上に不整な「X」状の沈線が施される。内面はミガキ調整が行われている。202は胴部上半の破片。ハケメ痕が残る口縁部文様帯には細い平行沈線が7条巡り、やや幅広の沈線によって「X」状の沈線文が描かれる。203は段状の沈線が施され、器内面にはハケメ調整が残されている。204は細い横走沈線が5条、端部に1条の沈線が残る。205はハケメ痕が残る胴部破片。沈線の下に刺突状の刻みが1条巡り、「V」字状の沈線に沿って刺突が施されている。内面はミガキによる調整痕が残る。206は段状の沈線が2条残る破片。内面調整はミガキ。

VII群 b 類

土師器はSH2の甕(49)のほかには、SH3から口縁部破片2点、遺構外から口縁部破片1点、胴部破片4点が出上している。(高橋)

(2) 土製品 (図版 38-207)

207はSH1内にある攪乱から検出された紡錘車。貫通孔の直径1.0cm。截頭形で各所に赤色顔料の塗布がみられる。(高橋)

(3) 磁器 (図版 38-208～210)

VIII群土器：陶磁器と分類したもののうち、近世に帰属するとみられる染付磁器を図示した。208は端反形碗の口縁部破片。胎土は明灰色を呈し、呉須の発色はにぶい。器表口唇直下1本の圈線に二重線の格子文、内面口唇直下に2本の圈線がある。類品が大川遺跡、フゴッペ貝塚から出土している。210は皿の底部破片とみられる。見込みに竹笹葉文が円形に配され、呉須の発色は淡い青色となる。高台畳付部分は剥落しており、高台外に2本、内に1本の圈線がある。これらは19世紀ごろの肥前磁器とみられる。

209は碗口縁部破片で、胎土は明灰白色。器表口唇直下に1本の圈線、銅板転写による丸に風景

文?で、にじみがある。当初、近世に遡るかと考えたものであるが、大正まで下るものとみられる。

報告書記載にあたっては、松前町教育委員会佐藤雄生学芸員に種々ご教示いただいた。(田中)

3. 石 器

(1) 剥片石器(図版39～45)

石鏃(図版39-211～255)

石鏃は71点出土し、素材は頁岩1点、チャート1点、黒曜石69点である。使用による破損が著しい。

a類(211～223)

平基の三角形鏃。215はチャート製、ほかはすべて黒曜石製。211・214・219・220は腹面に一次剥離面を残している。212～214・216～218・222・223は破損している。

b類(224～235)

黒曜石製の凹基鏃。三角形から側縁にふくらみのある木葉形を含む。225は腹面に一次剥離面を残し、周縁に加工が施されている。227～229・231・232・235は破損している。

c類(236～242)

鏃の茎が不明瞭のもので、すべて黒曜石製。236は五角形の小型鏃。237は基部が円形のもの。238・239・242は菱形、240・241は基部が尖り最大幅が下位にある石鏃。242は背腹面ともに一次剥離面を残し、周縁に微細な加工が施されている。236～241は破損している。

d類(243～251)

茎を持つ黒曜石製の石鏃。251は長さ5.1cmの大型鏃であるが、厚さ0.5cmと薄く丁寧に仕上げられている。L-4cグリッドとL-5bグリッドから出土した破片2点が接合したもの。243～247・250は破損している。

破損資料(252～255)

252～255は破損により分類不能のもの。254は頁岩製、ほかは黒曜石製。

石槍(図版39-256～258、40-259～265)

石槍は20点出土。頁岩製が2点、黒曜石製が18点である。

a類(256～258)

茎を持つものですべて黒曜石製。やや小型のいわゆる石銛で、Ⅲ群a類の北筒式にともなうもの。3点とも幅広の茎の基部に最大厚があり、形状は左右非対称となる。いずれも先端に衝撃による剥離が観察される。

b類(259)

木葉形の大型の石槍で黒曜石製。長さ11.3cm、厚さ1.1cm、重さ40.7gを測る両面加工のもの。先端と基部に衝撃による剥離がみられる。

c類(260～265)

両面加工が施されており、破損しているために石槍とナイフの区別が困難なもので「石槍・ナイフ」と表記した。262は頁岩製、ほかはすべて黒曜石製。

石錐(図版40-266～273)

石錐は64点出土している。頁岩製が47点、黒曜石製が17点である。頁岩製の石錐はD・E-11グリッドにおいて著しい集中を示す(図版54)。

a 類 (266・269・272・273)

黒曜石を素材とするもので、266はごく小型のもの。273は未成品と考えられる。

b 類 (267・268)

頁岩製で267は小型のもの。硬質頁岩の小剥片の端部に機能部のみを作出する石錐は、本遺跡において特に多く出土している。

c 類 (271)

棒状の石錐で黒曜石製。断面三角形の剥片に加工を施す。錐の機能部である先端を欠損する。

d 類 (270)

ナイフ a 類のつまみ付きナイフを石錐に転用したもので、下端に調整加工を施して錐の機能部を作り出している。黒曜石製。

ナイフ (図版 40-274～278、41-279～291)

ナイフは20点出土しており、a 類つまみ付きナイフが19点、b 類ナイフが1点である。つまみ付きナイフの素材は頁岩12点、黒曜石7点、ナイフは黒曜石である。

掲載したものはすべて a 類のつまみ付きナイフで、274～278、282、291が黒曜石製、279～281、283～290が頁岩製。長さは2.5cm (276：黒曜石製) から9.7cm (290：頁岩製) までと変異が大きく、幅広い用途が想定される。刃部再生によって機能部が大きく内湾する例 (283：頁岩製)、端部に石錐の機能部を備える例 (275・278・282・291：黒曜石製、283：頁岩製) があることから、石錐への転用とした石錐 d 類 (270：黒曜石製) は本来的に錐の機能も有しているとも考えられ、本類石器の使用頻度の高さや用途の広さを裏付けている。

274・275・278は両面加工、ほかには片面加工のつまみ付きナイフ。274は下半を欠損するもの。275はやや幅広いつまみを持つもので、背面の右側縁に急角度の刃部が作出される。下端が突出して錐としての機能を併有する。278は両面加工のナイフでつまみ部が欠損している。背面の右側縁にやや角度がある刃部が作られる。276は小型のナイフで背面一部に原石面を残す。剥片の末端につまみ部がある。背面の右側縁に微細な加工が施され、背面左側縁と腹面下端に刃部が作出される。277は薄い素材の背面を加工したもので、左側縁に刃部が作られ右側縁に微加工が施されている。

279はバルブの側につまみ部があり、背面の右側縁に連続してやや角度のある刃部が作出されている。280は片面加工のもので、背面左側縁にやや直線的な刃部が作出され、右側縁が磨滅している。また、腹面の左側縁に細加工が施される。281は片面加工のナイフで、背面右側縁に直線的な刃部が連続して作出されている。腹面の右側縁に細加工が施される。282は片面加工のナイフで、つまみ部作出にあたり背腹両面に加工が施されている。背面右側縁に急角度の刃部が作出される。また、下端には錐の機能部が作出され、錐としての機能も有する。

283は片面加工のもので、背面の右側縁は直線的で急角度の刃部が作出されている。またそれは、破損のたびに刃部再生が繰り返されて大きく内湾している。腹面の下端には錐の突出部を作る調整加工が施されている。284は片面に全面加工が施されたナイフ。背面の右側縁にやや角度のある刃部が作出され、腹面の右側縁には細加工が加えられている。左側縁には使用による微細剥離がみられる。285は薄い剥片を素材として背面周縁に加工が施されたもの。下半を欠損する。背面の左側縁と腹面の右側縁に細加工がある。刃部は背面の右側縁で角度は小さく、使用による微細剥離がある。

286は剥片の下端につまみ部を持つナイフで、背面の周縁に加工を施している。下半の多くを欠

損。背面の右側縁に角度のある刃部を作り出している。287は剥片のバルブの側につまみ部を作り出す。背面の全面に加工を施し、その右側縁にやや急角度の刃部を持つ。体部下半の多くを欠損する。288は薄い剥片を素材とするもの。背面の右側縁にやや急角度の刃部調整が施される。下半を欠損する。289は幅広のつまみ部を有するナイフで背面全面に加工が施される。背面左側縁に角度の小さな刃部が調整される。腹面の左側縁に細加工が施される。体部下半を欠損する。

290は半切した2点が隣り合うグリッドから出土したもの。大型で厚みのある縦長剥片を素材とするもので、背面に加工が施されて一部に原石面を残している。背面の右側縁に直線的な刃部を作り出している。291は幅の細い小剥片を素材としたナイフで、腹面全面を加工している。端部に厚みのないつまみ部を作出する。背面左側縁に使用による微細剥離がみられ、右側縁は磨耗している。

スクレイパー（図版41-292～295、42-296～311、43-312～332、44-333～335）

スクレイパーは71点出土、頁岩素材が16点、黒曜石製が55点、ほかにチャート1点、メノウ1点がある。

a類（292～306・314～335）

293～295・302・303・330・332・334・335は頁岩製、327はメノウ、333はチャート、ほかはすべて黒曜石製。

292は腹面の下端及び両側縁、背面の左側縁と下端に刃部が施される。上半を欠く。293は頁岩の剥片を素材とし、背面は原石面を全面に残す。腹面の下端及び両側縁、背面の両側縁と上端に刃部が施されている。294は幅の広い剥片を素材としたもので、腹面にバルブを残す。背面の下端と両側縁に刃部が施され、腹面右側縁に細加工がみられる。また、背面上半を欠損した後に欠損部に急角度の刃部を新たに作出している。295は上端と下半を欠損するもので、背面に加工が施されている。背面の右側縁は直線的で角度のある刃部が作出され、腹面の右側縁に細加工が行われていることから、上端のつまみ部が欠損した「つまみ付きナイフ」であった可能性もある。

296は体部中央をわずかに残すもので、背面は両側縁から全面加工され、腹面の両側縁に角度の大きな刃部が作出されている。297は打面やバルブを残す剥片を素材とするもの。背面の右側縁に急角度の刃部が作出されている。腹面の左側縁に加工が施される。298は打面やバルブが残る剥片を素材とするもので、背面の両側縁に刃部が作られている。299はやや厚みのある剥片を素材とし、背面下端に一部原石面を残す。背面の両側縁に細かな刃部が作られている。300は背面の下端と側縁に原石面を残す剥片を素材とするもの。左側縁上半及び上端に刃部を加工している。

301は、背面の両側縁に刃部が加工され、下端は錐の機能部が調整加工されている。背面に原石面を残す。302はやや大きな縦長剥片を素材とし、背面の両側縁に急角度の刃部を作り出している。下端を欠損する。背面右側縁は刃部再生を繰り返して大きく内湾する。背面は全面に磨滅が進んでいる。303は、剥片の背面の左側縁と腹面の右側縁に加工を施して刃部としている。下半の多くを欠損する。304は厚めの剥片を素材とする。

305は厚手で大型の剥片を素材とするもので、上半の多くを欠損する。背面の右側縁への加工後に、腹面の左側縁に大きな角度の刃部を連続して作り出している。306は大型の薄い剥片を素材とする。背面の左右側縁に連続して刃部を作り出し、上下両端部に細加工を施す。

314は小型のスクレイパーで背面下端にほぼ直角の刃部を有する。黒曜石脈岩の原石面を背面に残す。315は厚みのある剥片を素材とするもので、原石面を多く残しながら下端に急角度の刃部を連続して作り出している。316は背面縁辺に急角度の刃部を作出し、細加工によって微細な刃部

を整えている。317は数度の加工を連続して行い、ごく幅の狭い急角度の刃部を備えている。318は厚みのある剥片を素材とするもので、左右側縁に刃部加工が施される。左側縁部には刃つぶれがみられる。

319は厚みのある剥片を素材とするもので、両側縁に刃部加工を施す。320も厚みのある剥片を素材とするスクレイパーで、背面右側縁にやや角度の大きな刃部を連続して作出している。左側縁及び端部には直角の刃部を備える。321は断面三角形の縦長剥片を素材とする。上半を欠損する。背面左側縁から下端に刃部が作出され、腹面右側縁に細加工が施される。322はやや厚みのある剥片を素材とするもので、背面下端の狭い範囲に急角度の刃部がみられる。323は背面全面に原石面を残し、下端に急角度の刃部を施したエンドスクレイパーである。

324は断面三角形のやや厚い縦長剥片を素材とする。背面の左右両側縁及び下端に刃部加工を施す。腹面の特に左側縁には使用による微細剥離がみられる。上半を欠損する。325はやや厚い剥片を素材とし、背面左右側縁及び下端に急角度の刃部加工を施すもの。左側縁には顕著な刃つぶれがみられる。326は断面三角形の縦長剥片を素材とする。背面の左右両側縁に直角に近い刃部を作出する。剥片の上端に急角度の刃部を有する。剥片の下端を欠く。

327は左右側縁と下端に刃部が作られる。腹面の右側縁に細加工が施される。328は剥片の背面下端にやや急角度の刃部を作出したもの。329は背面下端に急角度の刃部を持つスクレイパー。330は打面付近を除く背面全周に刃部加工が、腹面の全周に細加工が施されている。背面中央部に凹部がある。331は背面下端及び左右側縁下部に刃部を持つ。両側縁上半の欠損部には刃部再生を行っている。剥片上端に打面を残す。332は、両面加工である。背面下端に急角度の刃部が作出されている。

333は背面下端及び両側縁に刃部を有する。打面の一部とバルブを残す。334はやや大型で厚みのある剥片を素材とするスクレイパー。左右側縁と下端に大小の急角度の刃部が作られている。335は縦長剥片を素材とするもので、背面下端に刃部を持つエンドスクレイパー。背面に原石面を残す。

b類 (307～313)

縁辺に抉りのあるスクレイパー。出土数15点で頁岩製2点、黒曜石製13点。307～313はすべて黒曜石製。

307は両面加工が施される。背面下端に刃部が作られ、左右側縁には背腹両面に抉りが入る。背面全体に磨耗が進行している。308は腹面上端に微細な刃部が作られ、腹面の両側縁に細加工による抉りがある。下半を半切欠損後に下端に細加工が施されている。309は背面左側縁に1カ所、右側縁に2カ所の細加工による抉りを有する。310は背面下端に剥離のやや長い刃部が作出され、左側縁に2カ所、右側縁に1カ所の抉りを有する。311は背面左側縁下半から下端にかけて刃部が作られ、それぞれに1カ所ずつ抉りがある。312は背面の下端に抉りが施される。313は剥片背面の下端及び厚みのある左下端にやや急角度の刃部を持つ。刃は磨滅が進んでいる。右側縁に3カ所の抉りが施されている。

楔形石器 (図版 44-336～338)

頁岩製1点、黒曜石製14点の計15点が出土。336～338は黒曜石製。336は原石面が残る剥片を素材とする。上下端に両極剥離による圧縮型の剥離痕が集積する。337は横型のもので、上下端に圧縮型の剥離痕があり刃つぶれが著しい。338はやや大型で厚みのある剥片を素材とするもの。背面下端、腹面上端に圧縮型の剥離痕が残る。

両面調整石器(図版44-339・340)

出土した6点はすべて黒曜石製。339は背面周縁に加工を施す。背面一端に原石面が残る。340はやや厚い剥片を素材とし、両面に粗い加工を施している。

Rフレイク(図版44-341～347、45-348～352)

48点が出土。頁岩製6点、黒曜石製42点。341～352はすべて黒曜石製。341は背面右側縁及び腹面左側縁に加工を施し、一部に原石面を残す。342は背面の左右側縁に細かな加工がある。343は剥片背面の末端及び腹面縁にやや急角度の加工がある。344は背面上端に加工がある。腹面側縁を欠く。345は剥片の側縁に背腹両面から加工が施される。346・347は背面の左右側縁が加工され、346の左側縁では抉り状を呈する。347は上半を欠く。348は原石面側に加工がある。349～351では背面に、352は腹面下端に加工がみられる。

Uフレイク(図版45-353・354)

25点が出土。頁岩製が8点、黒曜石製が17点。353・354は頁岩製。353は腹面に、354は背腹両面に微細な剥離がある。

石核(図版45-355)

出土総数8点で、すべて黒曜石製。355は石核b類で、原石面を打面として3枚の剥片をとっている。

原石(図版46-356～358)

6点出土し、頁岩1点、メノウ?2点、黒曜石3点である。黒曜石には棒状原石1点が含まれる。356は黒曜石、357・358はメノウ?の原石。(高橋)

(2) 礫石器(図版46～49)

石斧(図版46-359～363)

石斧は遺構出土品を含めても出土量は極めて少なく、図示したものがそのほとんどである。

359～361は刃部破片。359・361は硬質頁岩製で、斧は素材の葉理に並行して作られる。破断面の磨滅はあまりみられない。359の表面には各葉理の段差を部分的に残し、凸凹している。361は鋭利な刃を残し、刃に直交した使用痕が目立つ。表面は被火熱のためか全体に赤味を帯びている。360は輝石安山岩製。厚身の蛤刃の石斧。石質のせいか破断面も含め磨滅が著しく、刃部は鋭利さに欠ける。362は片岩製の石のみ。刃部・両側縁は丁寧に研磨、調整しているが、身両面は素材の剥離面をそのまま残す部分が多く、裏面はゆるやかな凹面となっている。より大きな石斧の破損品を再利用した可能性がある。363は基部で、輝石安山岩製。身表面は平滑に研磨され、同じ石質の360に比べ磨滅は顕著でない。破断後にたたき石に転川されたものとみられ、敲打による窪みや剥離痕がある。

なお、擦切残片がわずかに出土している以外に、石鋸の出土はなく、積極的に石斧製作を意識できる調査結果となっていない。

砥石(図版46-364～370、47-371～378、48-379)

砥石は、棒状礫(364・365)や扁平礫(366・367・369・371・372)等、大小様々な礫を素材としている。366は扁平な楕円形礫を素材としているもので、平坦面の作業面のほか、縁辺に作業面が部分的にみられ、すり石としてよいものかもしれない。369には、作業面の中央に浅い条痕が残る。珪岩製の371はかたい岩石で、作業面の痕跡はあまりはっきりしないが、風化した表面が削られ滑らかな感触がある。今の砥石で言えば、「仕上げ砥」と考えられるもの。大型の377は礫全体に鉄分

の固着が著しく赤味の強い礫表面である。作業面も明瞭さにかげ、台石とみるべきかもしれない。

破断礫を素材とするもの(368・370・373～376・378)もみられる。368は破断面を利用したものの。主要な平滑な2面の作業面で構成され、その区切りにU字状の窪みがある。370は唯一砂岩製で、なだらかな凸の作業面を残し、破断面には新しいV字状の削り痕や棒状クサビの痕跡がある。ほかに砂岩製の礫石器はなく、表土出土品でもあることから、近・現代に属する可能性が高い。379は流紋岩製。SH3内の攪乱坑から出土したもので、7点の破片が接合した。礫の一面に浅いU字状の作業面が幾条もみられる。擦文期の住居内から出土する砥石に多くみられる。図示が不十分であるが、375にも側面にU字状の作業面がある。376は礫面の各所にいくつもの線条痕が残るが、攪乱の出土であり、線条痕内には礫素材そのものの色調がみられることから後世のものと判断し、図示を省略した。

たたき石・すり石(図版48-380・381)

380は礫の長軸端に明瞭な敲打痕を残し、平坦面向面にすりの痕跡がある。珪岩製で、硬質のため、すりは明瞭さに欠ける。381は破断礫を素材とし、平坦面中央に敲打による窪みを残す。礫平坦面や縁辺稜部にすりの痕跡を持っている。破断面の風化が進んでおり、この形状で遺跡に持ち込まれたと考えられる。

たたき石(図版48-382)

1点を掲載した。緑色の硬質頁岩製。石斧の素材として多用されるが、礫の周縁に敲打痕が連続するもの。台形状の断面形で、平坦面は頁岩の葉理に直交している。調査範囲の中では石斧製作を意識できる調査結果となっていないことを考え併せ、たたき石としている。

すり石(図版48-383～385)

383は断面三角形の棒状礫素材のすり石。図示しきれなかったが、平坦面及び稜部に使用面を持つもので、図面左側の稜部の使用痕が顕著。礫表面全体が鉄分の固着により、暗赤色を呈する。384は扁平礫素材の割れたもの。両平坦面に使用面を持ち、被火熱のためか全体に赤味を帯びる。385は三角形の破断礫を素材とするもの。尖端稜部に使用面を持ち、炭を吸着したものか黒くなっている。破断面の磨滅が激しく人為的に割ったものかは不明である。

くぼみ石(図版48-386～388)

図示の3点は扁平な破断礫を素材とするもので、平坦面のほぼ中央に凹み部を持つ。386の礫表面がかなり火熱を受け、赤色化している。平坦面中央の凹み面はやや平滑で、赤色化層を除いている。U字状の作業面2条を持つ。387は破断面を含め礫表面はかなり磨滅している。凹み部は敲打によるとみられるが、明瞭さに欠ける。388の凹み部は敲打後、擦られているようで全体的に平滑となっているが、断面図にみられる通り敲打による凹凸が残る。

石皿・台石(図版49-389～393)

389は断面台形の接地が安定するもの。図示しきれなかったが平坦面の敲打後、すり作業が行われたようで中央の敲打痕を中心にかなり窪んでいる。390は図示した平坦面及び側縁部が被火熱のためか赤色化している。平坦面は礫破断部に向けてかなり窪んでおり、使用によって赤色表面が削られている。明瞭なすり面を持つ側縁は赤色表面のままであり、平坦面が最後の使用面であろうか。391には礫平坦面中央部に凹みがあり、その周辺部がゆるやかに窪み、平滑である。凹みは鉋物の抜けた跡を利用しているようで、凹み右側が一段深くなっている。392は台石としたもの。大型の扁平礫の一面に成因不明の黒色化した使用面を持つ。窪みなく、平滑である。393は礫中央部の使用面が相対的に窪んでおり、周縁部には敲打による礫表面の剥離が多くみられる。図下方

の破断面はあまり風化が進んでおらず礫本来の黒色の色調がみえる。

(田中)

(3) 石製品 (図版 50-394 ~ 397)

394は石棒かと考えられるもの。断面形は楕円形で、図右側がやや平坦に成形されている。下端部は敲打によって潰れている。全体的に緑色を帯び、松田義章氏によれば大きな捕獲岩が特徴的で、ほかの安山岩にはみられない。395・396は礫表面の肌理細かく、風化によって明灰白～灰白色を呈する。古い破断面が0.5～1mmほど風化しているが、遺跡に持ち込まれた後の新しい打割面もみられる。全体像は不明であるが、石製品として扱う。特に395の新しい割れ口は黒色を呈し、松田義章氏によれば、せたな町に産出する玄武岩とのことである。397は加工の痕跡のみられない球状礫。鉄分の固着か、礫表面全体に赤味を帯びている。

(田中)

4. 金属製品 (図版 50-398 ~ 402)

古銭は、2枚が出土している。398は北宋銭の至道元寶(初鑄年西暦995年)。真書体で、「道」・「寶」の字が磨滅して読みづらくなっている。また、銭左上部は何かの圧がかかり反り返っている。大川遺跡でも「至道元寶」は出土しているが、行書体のものである。399は寛永通寶四文銭。「永」字の二画目が下にさがる「俯永」と分類されるもので、裏に11波の青海波がある。

なお、古銭の計測は、『発掘調査のてびき—整理・報告書編—』(国立文化財機構 奈良文化財研究所編2016)によっている。

キセルは400の雁首、401の吸い口各1点が出土している。出土地点が離れており、同一個体かは不明。また、雁首は後述のボタンとともにⅡ層出土として取り上げているが、多くの攪乱があった建物敷地部分で誤認の可能性がある。雁首(400)は一枚の銅板を巻いて溶接した筒に火皿をつけたもの。火皿は潰れている。筒の中には羅字部分が残るが、材質は不明。吸い口(401)も銅板を巻いて溶接したもので、口に含む部分が折り返しにより肉厚になっている。

402はボタンの裏側糸かがりの部分。何用のボタンかは不明。

(田中)

5. ガラス製品 (図版 50-403)

蜻蛉玉を1点図示した。403は、濃いオレンジ色のガラス玉に、丸の青地に白の放射模様が4カ所配されたもの。球形で、図下段中央には孔があるが貫通はせず、浅いものである。カンザシ等の飾りかと考えられる。

また、ビン類が攪乱から出土している。カプトビールの瓶・ワイン用の瓶と分かるものもあるが図示はしていない。金属製品・ガラス製品及び陶磁器類については、その帰属年代が近・現代に及ぶものと判断され、参考資料としたものも多い。

(田中)

第Ⅵ章 総 括

1. 余市町八幡山遺跡の墓壙について

第Ⅲ・Ⅳ章でもふれたように、本書では性格が異なる長軸規模0.60m以上の掘り込み59基をすべて上坑として記載した。このうちの28基は、遺物の出土状況や平面形状の特徴等から、縄文時代の墓壙の可能性が高いと考えられる。本項では八幡山遺跡で検出された墓壙について、その特徴を整理し、まとめとしたい。

まず初めに今回の調査で検出された墓壙の特徴を述べる。①平面形状は円形や楕円形、あるいは長楕円形や隅丸長方形を呈する。円形・楕円形は長楕円形や隅丸長方形を呈するものよりも多くみられる。②平面規模は、円形や楕円形のは長軸1.3～1.7mのものと、1.0m前後のものがあり、長楕円形や隅丸長方形のは長軸1.4～2.0mほどを測る。③土層は下層が埋土で、上層は覆土が堆積する。④埋土上面及び覆土下部から遺物が出土する傾向にある。⑤出土遺物は、黒曜石の剥片・碎片が多く、一部で石鏃や土器等もみられる。⑥遺構の掘り込みは、Ⅳ層まで及ばずⅢ層中で止まる。なお、上記した特徴のうち遺物の出土条件を満たしていない遺構もあるが、上部が削平されているため確認できなかつたと判断し、墓壙として含めているものもある。

次に墓壙が検出された位置を第10図に示した。墓壙は大きく4つの範囲にまとまること分かる。このまとまりをA～D群とし、各群の特徴と各墓壙の主軸方位をみってみる。

A群 平成31年度調査地点の中央北西寄り(F・G-8・9グリッド)に位置する。西側の範囲は、大規模な攪乱によって壊されており、不明である。P31・32・49・50の4基が検出された。形状は楕円形や円形を呈し、規模が1.3～1.7mを測る墓壙群である。P32から副葬品とみられる土器や剥片・碎片が多量に出土している。ほかの3基からは出土していないが、平面形状や規模、また堆積上層に共通性が認められた。なお、出土した土器片は縄文時代早期後半に帰属する。

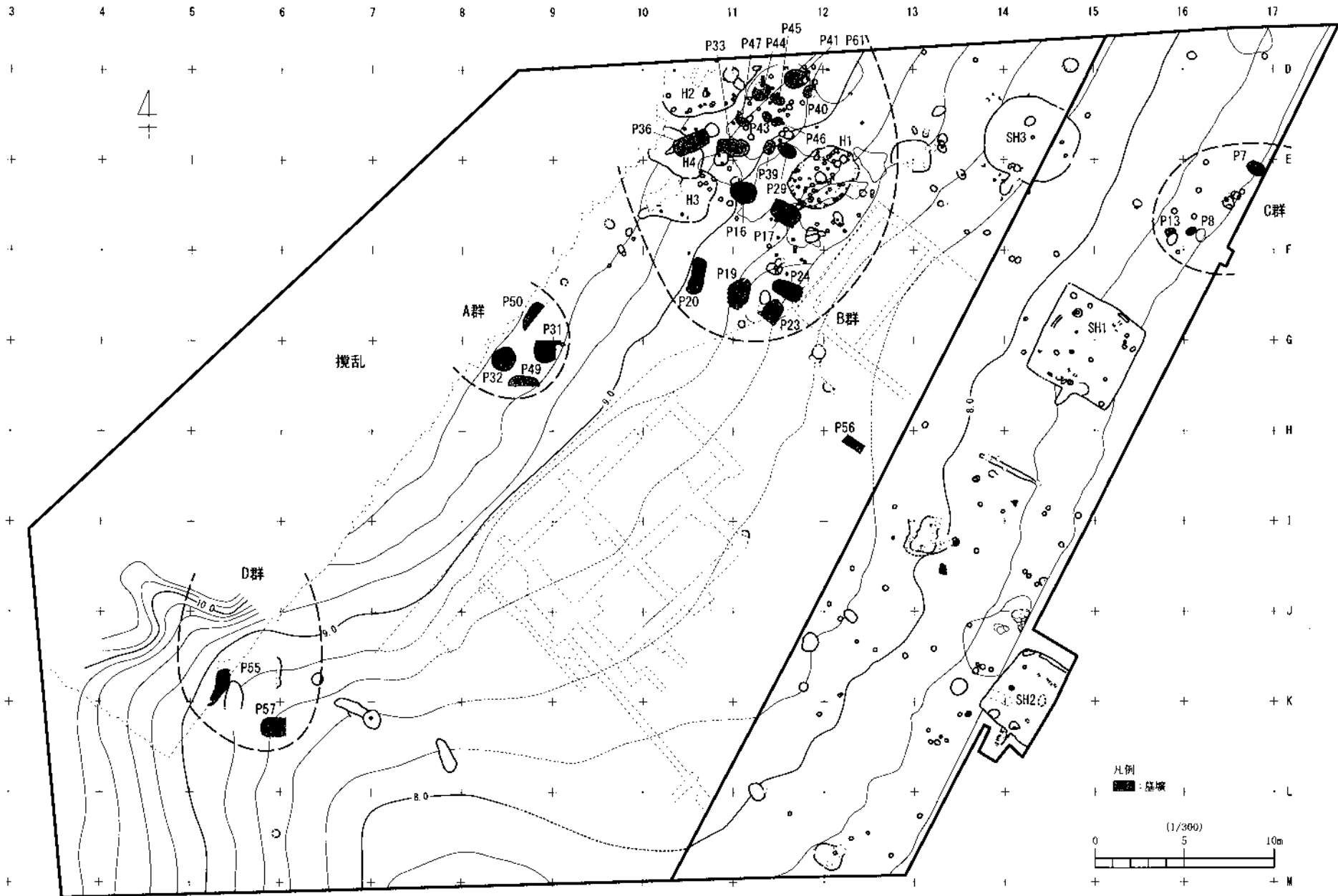
墓壙の主軸方位は、P31・32がN-23～43°-Eを指し、振れ幅は21°以内となるが、ほかのP49・50は主軸方位が計測できなかったため、全体では不明である。

B群 平成31年度調査地点の北側(C～F-10～12グリッド)に位置する。北側の範囲は、調査区外のため不明である。P16・17・19・20・23・24・29・33・36・39～41・43～47・61の18基が検出された。墓壙のほかにも多くの遺構が集中する地点である。平面形状は、円形や楕円形を呈するもの(P29・39～41・43～47)と、長楕円形や隅丸長方形(P16・17・19・20・23・24・33・36)を呈するものに分けられる。規模は、それぞれ長軸1m前後と1.4～2.0mである。堆積土や遺物の出土状況については、P36以外は概ね共通する。いずれも下層が埋土、上層が覆土、埋土上面及び覆土下部に、剥片・碎片といった石器類が出土している。このうち剥片・碎片以外の遺物が出土している墓壙をいくつか挙げたい。

P41は遺構底面に小土坑をともない、その一部からは副葬品とみられる石核(144)が出土している。P43は、覆土から埋土上面にかけて多くの剥片・碎片が出土している。剥片・碎片の石質は黒曜石に限らず、頁岩やメノウ?、泥岩といったものがみられる(写真43)。また第Ⅳ章でもふれたように、覆土の1層は墓標痕の可能性が考えられ、その付近から石鏃1点(145)が出土している。P44は埋土下部や遺構底面付近から、石器のほかにも後期初頭余市式の土器片(146)が出土している。このほか、P16・33・47からは枕石と思われる礫が底面から出土している(写真35・40・44)。

なお、P36については平面形状や規模は共通するが、内部構造が底面の一部に階段状のテラスを

第10図 八幡山遺跡の墓塚配置図



持つこと、壁面や底面に被熱痕が認められること、覆土中に焼土や炭化物といったものが堆積すること、IV層までしっかり掘り込んでいること、といった大きな違いがみられた。H4との重複関係から縄文時代よりも新しい遺構として扱う。

墓墳の主軸方位は、円形・楕円形の一群では、北～西の間に主軸をとるP29・45はN-59～80°-Wを指し、振れ幅の変位が大きい。北～東の間に主軸をとるP40・43・44・47はN-47～60°-Eを指し、振れ幅は14°以内にまとまるが、P39・41・46は、N-20～80°-Eを指し、振れ幅の変位が大きい。一方、長楕円形や隅丸方形の一群は、北～西の間に主軸をとるP16・17・24はN-13～68°-Wを指し、振れ幅の変位が大きい。北～東の間に主軸をとるP19・20・23はN-15～40°-Eを指し、振れ幅は26°以内にまとまる。北～東の間に主軸をとる複数の墓墳である程度主軸方位がまとまるものの、北～西の間に主軸をとる墓墳では振れ幅の変位が大きく、群全体としても規則性が窺える状況とはいえない。

C群 平成30年度調査地点の北東側(E-16・17グリッド)に位置する。東側の範囲は、調査区外のため不明である。P7・8・13の3基が検出された。平面形は楕円形で、規模は1m前後の墓墳群である。本群は大型礫を持つ。なお、P7からは大型礫が検出されなかったが、平面形状や覆土から剥片が出土しているため墓墳に含めた。近隣の小樽市蘭島餅沢遺跡の11-51A土壌、11-51C土壌等に大型礫を持つ土坑の検出例がみられる。なお、P8からは大型礫の傍から続縄文時代の土器片が出土している。

主軸方位はP7がN-67°-W、P8はN-61°-E、P13がN-82°-Eを指し、調査範囲内では、主軸方位に共通性はみられない。

D群 平成31年度調査地点の南側(I～K-5・6グリッド)に位置する。周辺は旧沢地形を呈しておりA～C群の立地条件とは異なる。北側の範囲は、大規模な攪乱によって壊されており、不明である。P55・57の2基が検出された。2基ともに攪乱やトレンチによって全体の形状は不明であるが、2基とも長楕円形を呈するものと推測される。P55では覆土下部から埋上上面にかけて多量の剥片・碎片が出土している。

主軸方位は、P55はN-35°-E、P13がN-89°-Eを指し、調査範囲内では、主軸方位に共通性はみられない。

以上のように、各群の特徴を概観し、各墓墳の主軸方位を検討した。各群それぞれで、平面形状や規模に一定の共通性がみられたものの、主軸方位については規則性がみられなかった。

最後に、墓墳群の帰属時期についてふれてみたい。出土した遺物や周辺の状況に鑑み、A群は縄文時代早期、B群は同中～後期であることが窺える。中期の墓の副葬品は不明瞭で、墳口部～覆土に大型土器片や礫・礫石器といったものが検出されるようである(遠藤・鈴木2010)。また墓墳と居住域の関係は、道内でも時期や地域によって様々で、本遺跡が所在する後志管内の日本海側では様相が明らかになっていない。ただし、道央部の事例では後期中葉以降になると居住域から離れて墓域が形成されるようだが、後期前葉以前では近接し居住域と墓域は明確に分かれない(藤原2019)。本遺跡においても、墓墳と住居が混在しており、当該期の道央部の様相と合致する。C群は、大型礫を持つこと、図版52に示されたように周辺は続縄文土器の分布範囲であること、P8から続縄文土器が出土していること等から、当該期の可能性が考えられる。なお、D群については検出された墓墳が少ないため、詳細不明としたい。いずれの墓墳群も攪乱によって壊され、また調査区外へと広がるため、全体の様相は明確には分からなかった。本項の検討でA～D群にもれたP56は、遺構周辺が旧宅地であったため住宅基礎によって大きく削平されており、本来は新たな一群

に入る可能性も考えられる。これまで、余市町内では本遺跡が立地するような標高10～20m前後の縄文時代集落の様相は不明であった。墓域を含む集落内の検討は今後の課題とし、余市町内及び小樽市、仁木町等を含む周辺地域の類例の増加を待ちたい。(石川)

2. 余市町八幡山遺跡の擦文時代の生業について

八幡山遺跡では9世紀の擦文時代の住居が3軒(SH1～3)確認され、それらのカマド焚口や煙道等から土壌を採取し、フローテーション法によって土壌内の微細遺物を悉皆回収する作業を行った。その結果、SH1のカマド周辺覆土6層からオオムギ(?)粒3点、SH2ではカマド5層からアワ粒3点、キビ粒2点、覆土4層からオオムギ(?)粒1点等の栽培植物の炭化種子が確認された。このことによって、八幡山遺跡の9世紀擦文人が、現地における栽培あるいは他地域からの入手のいずれかは判断しかねるものの、ある程度の栽培雑穀類の摂取・利用を行っていたことを指摘できた(第VII章5参照)。

しかし、3軒の住居から知りうる当時の生業活動については、植物利用以外はまったくふれることができない。すなわち、サケ類やエゾシカをはじめとする先史時代の北海道の主たる狩猟・漁労対象動物の利用のあり方を指摘することができないのである。サケ類やシカは豊富な栄養を提供する重要なダイエツトリストであり、また日常生活に欠かせない道具の素材として最大限に利用されてきたことはよく知られている。

瀬川拓郎は、擦文文化期の10世紀以降、特定種の過剰な利用を組み込んだ交易適応としての生態系への適応＝アイヌエコシステムが成立したとする(瀬川2005)。これは、多方面の動植物資源を自己消費する生業活動であった縄文エコシステムから、交易品と位置づける特定資源を過剰捕獲する商業狩猟への本格的な転換であり、石狩川や天塩川水系を舞台として本州の製品や技術に対する干サケやシカ、ヒグマの皮等の交易品が大量に搬出されることとなった。しかし、日本海沿岸の擦文集落ではその傾向は認められないという(瀬川2007)。

八幡山遺跡が臨む登川の中・上流部は赤井川カルデラの外輪山に迫り、河川斜度が大きく狭隘な谷地形となることから、ここにおける大規模なサケ類の産卵床や、その利用を目的とした擦文人の大規模集落の存在を予測することは確かに困難である。海岸にほど近く、低位の丘陵を背負う本遺跡の集落においては、多方面の動植物資源を自己消費する縄文時代以来の生業活動を想定せざるを得ない。しかしながら、カマドや炉等の日常生活への諸条件を具備した住居を有し、かつその使用痕跡をも残しているにもかかわらず、植物利用以外の生業活動の実態を伺うことができない点が八幡山遺跡の擦文集落の大きな特徴であることを指摘し、その理由の解明を今後の課題としたい。(高橋)

3. 余市町八幡山遺跡出土のイノシシについて

かつてイノシシは更新世(258万年前から1万2千年前)に4種類が生息していたと考えられていたが、近年になって*Sus scrofa*ただ1種であったことがわかっている(Fujita *et al.*2001)。この*Sus scrofa*(以下「イノシシ」とする)は、北緯60度以北を除くユーラシア大陸全体、アフリカ大陸の一部、インドネシア等きわめて広い分布を持つ。

発掘調査の遺物回収法が精密となってからイノシシ骨の発見例が急増してきたこと、本来分布しない地域や島嶼部でも出土する意味が再考されてきたこと等を背景として、単なる「遺跡に残る骨」という視点から、異なる地域へのイノシシの「導入」や「飼育(の可能性)」の動態という視

座が必要となっている。

北海道・関東・伊豆諸島の縄文遺跡のイノシシの出土例がまとめられている (Hongo *et al.* 2007) が、これをもとに北海道のイノシシについて述べてみる。

イノシシは北海道には自然分布しないとされている。イノシシが完新世(1万2千年前から現在まで)以前に、津軽海峡を東西に横切るブラキストン線をこえて本州から北海道に拡散したこ



番号	遺跡名	時期				縄文	出土部位		備考
		縄文					顎骨 & 歯牙	四肢骨	
		前期	中期	後期	晩期				
1	船泊遺跡					○			
2	船泊砂丘遺跡群					1		大歯加工品も1点あり	
3	無道川遺跡						○		
4	相生1遺跡						○		
5	緑ヶ岡遺跡					2			
6	幣舞遺跡					○	○	約半数は焼骨	
7	油駒遺跡					○	○		
8	旭町1遺跡				?		○		
9	長沼町12区B遺跡					2			
10	末広遺跡(1996)						○		
11	梅川3遺跡							焼骨あり、詳細不明	
12	カウス4遺跡					○	○		
13	美々4遺跡					39	29	四肢骨には焼骨もあり	
14	ママチ遺跡					○	23		
15	美沢東6遺跡(1996)						○		
16	柏原18遺跡					○	○		
17	柏原5遺跡					○	○		
18	共和遺跡					○	○		
19	社台1遺跡						4		
20	度杖浜2遺跡(2000)						○		
21	本輪西貝塚		?			6			
22	南有珠6遺跡						1		
23	南有珠7遺跡					○			
24	有珠モシリ遺跡				?	○	○		
25	有珠善光寺遺跡					3			
26	有珠善光寺2遺跡					○	○		
27	入江貝塚					○	○	大歯加工品もあり	
28	蟹ノ木4遺跡					1	1		
29	恵山貝塚						1	大歯加工品も3点あり	
30	戸井貝塚					1		吉崎昌一氏記述	
31	稲倉岩陰遺跡群					2(幼)	2(成)		
32	三ツ谷貝塚					○	○		
33	栄蔵岩陰遺跡					1			
34	東三川遺跡					○	○	成獣・幼獣あり 焼骨	
35	厚真町遺跡群					○	○		
36	八幡山遺跡					○			

※出土部位欄の◎は多量、○は少量を意味する。また、実数は資料数(NISP)を表す。

第11図 北海道のイノシシ出土遺跡
(※大歯加工品のみ出土した遺跡を除く)

とはなかった。また、ロシア沿海州からアムール川（黒竜江）下流域のイノシシが、サハリン（旧：樺太）を通過して八田線を渡り、北海道に拡散したこともなかった。つまり、更新世開始後およそ260万年近くにわたり、イノシシが自然条件下で北海道に生息したことはなかったのである。

にもかかわらず、縄文時代前期以降の北海道の諸遺跡ではイノシシの検出が相次いでおり（高橋2017など）、その地域的広がりには東は釧路、北は礼文島にまで及ぶ。特に北海道南部から石狩・空知地方に多く、日高沿岸から内陸の帯広方面等と合わせるとその数は40カ所に近く（高橋2001）、現在も出土例は増加している。このうち、石狩低地帯から胆振太平洋沿岸・噴火湾沿岸、函館の沿岸では全体の8割をこえている（第11図）。このことは、北海道におけるイノシシの受入れは北海道南西部太平洋沿岸域を中心として行われ、その搬出元は本州島（の北部）であった可能性が高いことを示している。

また、イノシシが出土する時代は縄文時代後期と晩期に多く、骨の出土数は縄文時代後期に突出して多い。該期は環状列石や周堤墓等の大規模な墓域が構築され、さらにそれを取り巻く空間が強く意識された時代であり、千歳市キウス4遺跡のように周堤墓につながる巨大な盛土遺構において葬送儀礼が執り行われていた例もある（(財)北海道埋蔵文化財センター2004）。このことから、北海道に導入されたイノシシは食料や道具の材料としてだけでなく、儀礼行為に供される動物としての役割を有していた可能性が指摘される。

余市町八幡山遺跡のイノシシは、縄文時代中期末～後期初頭のH2住居内の炉2（石囲炉）火床面から出土しており、強く熱を受けていた。これは道内のイノシシ骨の出土状況と共通するものである。炉2は6個の炉石が残るだけで多くは抜き去られていたことから、H2は廃絶された住居と判断される。このことは、イノシシを焼く行為が炉の廃絶、住居の廃絶にともなう儀礼行為に供された可能性を示しているのではないだろうか。また、炉1内に残されていた焼上においても哺乳類の骨片が検出されている。H2住居は改築・拡張が行われており、炉1は旧住居にともなうもので、炉石はすべて抜き去られていた。このことから、種の同定には至らなかった哺乳類骨が、廃絶された炉1の送りの儀礼行為にともなうイノシシであった可能性も否定できないと思われる。

いずれにしても、今回の八幡山遺跡の調査によって余市町で初めて縄文時代のイノシシ骨が確認された。第11図に示すように、これまで石狩低地帯北部から積丹半島に至る沿岸域ではイノシシの検出例はなく、後志日本海沿岸では島牧栄磯岩陰遺跡において確認されているだけであった。しかし、余市町では本州島東北北部と同様の環状列石が構築され、また同町沢町遺跡のように縄文時代晩期亀ヶ岡文化の影響を強く示す遺跡も所在することから、縄文時代における本州北部との強い紐帯（おそらく日本海ルートによる）を十分に予測させる。

八幡山遺跡の調査ではフローテーション法によって土壌内の微細遺物の悉皆回収を試みた。イノシシ骨の検出も本方法の成果である。本方法の継続的な採用によって、当該地域における縄文時代のイノシシの「導入」や「飼育」の動態がさらに明らかになることを強く期待する。（高橋）

4. まとめ

平成30年度と平成31年度にわたる八幡山遺跡の発掘調査が終了した。調査面積は兩年度合わせて2,418㎡で、さらに南東側は家屋や倉庫等の建物により、北西側は耕作による攪乱が顕著で広範囲に及ぶにもかかわらず、調査開始時には想定していなかった多数の遺構や遺物が確認された。遺構は住居7軒、土坑59基、小土坑172基、剥片集中10基、炉跡8基、集石4基、溝状遺構1基、性格不明遺構2基、遺物は土器1,833点、土製品1点、石器14,687点、石製品7点、陶磁器160

点、金属製品38点、ガラス製品8点を数えるほか、フローテーションにより抽出した土器細片91点、剥片・碎片10,286点、炭化物、種子、骨片等がある。土器は縄文時代早期～晩期、続縄文時代、擦文時代のものがみられるが、出土量としては東釧路IV式を主体とする縄文時代早期のものが最も多く、次いで北筒式を中心とする縄文時代中期のものが多くみられる。また、擦文時代のものでは9世紀ごろの甕・鉢や本州から搬入されたと思われる上師器がみられ、続縄文時代とその他の時期のものは僅少である。

縄文時代の遺構としては、住居4軒のほか、土坑、小土坑が多数確認された。住居の時期は3軒が中期、1軒は判然としない。いずれも規模は小さく、H1以外はやや歪な平面形を呈する。H2・4に炉が検出され、H2では炉の造り替えも確認された。土坑は伴出遺物が少なく時期が判然としないものが多いが、うち墓壙と思われるものが28基、陥し穴と思われるものが4基確認された。墓壙は一部を除いて縄文時代中期に属すると思われる。また、陥し穴については、登川を挟み北東側の丘陵斜面に位置する登町4遺跡(TP-1・2)に次ぐ検出例となる。

続縄文時代の遺構では、墓壙と思われるものが3基、炉跡2基が確認されたのみで、墓壙のうち2基は大型礫をともなっている。続縄文時代の遺物分布は平成30年度調査区の東側に集中し、これら遺構の位置とも合致し、当該期の集落本体はさらに東側に広がると思われる。

擦文時代の遺構では住居3軒のほか、小土坑が多数確認された。住居の時期は、床面直上やカマド内から土器が出土した2軒(SH1・2)は9世紀ごろのものと思われる。残りの1軒(SH3)は土器が伴出していないことに加え平面形がほかの2軒とはやや異なるが、同時期に属するものと思われる。いずれも南西側にカマドと煙道を設け、住居廃絶時に儀礼的行為が行われた可能性が高いと考えられる。これら住居はともに調査区東側より検出されており、当該期の集落本体はさらに東側に続くと思われる。

余市町においてこれまで行われてきた発掘調査で、擦文時代に属する遺構や遺物が確認されたのは、70軒もの住居と多数の墓壙が確認された大川遺跡、その対岸に位置し土器・土製品・鉄製品等が出土した入舟遺跡、土器や鉄製品が副葬された墓壙が検出された天内山遺跡、4軒の住居が確認された沢町遺跡、前庭部において鉄製品が副葬された墓壙が検出されたフゴッペ洞窟の5カ所であった。フゴッペ洞窟以外の4カ所は町の中央部を流れる余市川の河口部周辺やさらに西側に位置しており、これまで東側では擦文時代の住居は皆無であったため、八幡山遺跡が東側で初出となった。

また、大川遺跡・入舟遺跡・天内山遺跡は余市川、沢町遺跡はヌッチ川、フゴッペ洞窟は畚部川と主だった河川の周辺には擦文時代遺跡が存在する。今回の八幡山遺跡の発掘調査によって登川の周辺にも擦文遺跡が確認され、改めて当時の暮らしに河川の存在が密接に関係し、余市湾の中央に位置する大規模集落の大川遺跡を中心に、その東西にも集落を形成していた様子が窺える。

これまで八幡山遺跡を認識するうえで指標となっていたのは、丘頂部において検出された環状列石と余市水産博物館収蔵の完形の石棒であり、遺跡は縄文時代後期ごろと認識されていたが、本発掘調査における3軒の擦文住居の検出によって複合遺跡であることが確認された。また、余市町では、時期を特定する火山灰がこれまで確認されていなかった。本発掘調査においてそれに類するⅡb層(赤褐色土)が検出されたが、科学分析の結果、想定した白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)ではないことが判明し、その起源は今のところ不明である。詳細は第Ⅶ章〈附編2〉を参照されたい。このように余市平野を見下ろす丘陵上の遺跡の様相は依然として不明な点が多いため、今後の周辺地域の調査による新たな情報の蓄積、資料の増加が期待される。(小川)

引用・参考文献（著者五十音順）

【単行本】

阿部 永

2000 『日本産哺乳類頭骨図説』北海道大学図書刊行会

石川茂雄

1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会

宇田川 洋

1988 『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター

岡本 勇編

1982 『縄文土器大成1 早・前期』芹沢長介, 坪井清足監修 講談社

小樽先史懇話会編

1997 『大谷地貝塚と五十嵐縄 余市式土器をめぐって』(小樽先史懇話会研究論集 1)

加藤嘉太郎

1979 『第二次増訂改版 家畜比較解剖図説 上巻』養賢堂

木下亀城・小川留太郎

1967 『岩石鉱物』(標準原色図鑑全集 6) 保育社

国立文化財機構 奈良文化財研究所編

2016 『定本 発掘調査のてびき—整理・報告書編—』文化庁文化財部記念物課監修 同成社

小林達雄

1994 『縄文土器の研究』小学館

榊田朋広

2016 『擦文土器の研究 古代日本列島北辺地域土器型式群の編年・系統・動態』北海道出版企画センター

佐藤一夫

2017 『北海道出土銭貨地名表』

佐藤美智雄

2011 『考古学マニアのための北海道の縄文土器』

2013 『考古学マニアのための北海道後志の遺跡』

2016 『考古学マニアの北海道続縄文土器・オホーツク式土器』

鈴木道之助

1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房

瀬川拓郎

2005 『アイヌ・エコシステムの考古学 異文化交流と自然利用からみたアイヌ社会成立史』北海道出版企画センター

2007 『アイヌの歴史 海と空のノマド』(講談社選書メチエ 401) 講談社

2015 『アイヌ学入門』(講談社現代新書 2304) 講談社

2016 『アイヌと縄文—もうひとつの日本の歴史』(ちくま新書 1169) 筑摩書房

2017 『縄文の思想』(講談社現代新書 2454) 講談社

戸沢充則編

1994 『縄文時代研究辞典』東京堂出版

永井久美男編

1996 『日本出土銭総覧 1996年度版』兵庫埋蔵銭調査会

野口義麿編

1981 『縄文土器大成3 後期』芹沢長介, 坪井清足監修 講談社

藤本 強

1982 『擦文文化』(教育社歴史新書 日本史 36) 教育社

(財)北海道埋蔵文化財センター

1994 『遺跡が語る北海道の歴史 財団法人北海道埋蔵文化財センター 15周年記念誌』

1997 『美々・美沢—新千歳空港の遺構と遺物—』

2004 『遺跡が語る北海道の歴史 財団法人北海道埋蔵文化財センター 25周年記念誌』

南北海道考古学情報交換会編

1995 『円筒下層式図録集—円筒土器下層式とその周辺の様相—』南北海道情報交換会

南北海道考古学情報交換会 30周年記念誌編集委員会編

2017 『北海道の縄文土器』南北海道考古学情報交換会

三宅俊彦編

2016 『コタン浜出土銭』(淑徳大学人文学部歴史学科調査研究報告 1) 淑徳大学人文学部歴史学科

【雑誌・論考・論集】

石岡憲雄

1994 「燃糸文」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』191-202 雄山閣

乾 芳宏

2000 「八幡山ストーンサークルについて」『余市水産博物館研究報告』3 25-32 余市水産博物館

遠藤香澄・鈴木克彦

2010 「北海道南部の縄文集落の葬墓制」『葬墓制』(シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ) 51-84 雄山閣

大沼忠春

1982 「道央地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』75-93 雄山閣

大橋康二

1992 「大川遺跡出土の近世磁器」『1991年度大川遺跡発掘調査概報—余市川改修事業にともなう埋蔵文化財発掘調査の概要—』24-29 余市町教育委員会

岡村道雄

1983 「ピエス・エスキュー, 楔形石器」『縄文文化の研究 7 道具と技術』106-116 雄山閣

加藤邦雄

1981 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究 3 縄文土器Ⅰ』164-176 雄山閣

久保武夫

1965 「余市海岸の砂丘」『余市高校研究紀要』2 4-11 北海道余市高等学校

瀬川拓郎

1996 「擦文時代住居の上屋について—アイヌ住居の成立を考えるための一作業—」『アイヌ民族博物館研究報告』15 57-68 アイヌ民族博物館

高倉 純

2010 「北海道の縄文時代晩期から続縄文時代前半期にかけての石器群の変遷」『北海道考古学』46 43-58 北海道考古学会

高瀬克範

1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34 21-41 北海道考古学会

高橋 理

2000 「完新世における Subsistence—植物利用の積極的評価からの Feedback—」『北海道考古学』36 1-13 北海道考古学会

2005 「ニホンイノシシの分布・サイズ・変異」『動物地理の自然史 分布と多様性の進化学』129-142 北海道大学図書刊行会

2014 「北海道勇払郡厚真町オニキシベ6遺跡の動物」『オニキシベ6遺跡』94-96 厚真町教育委員会

2018 「エゾシカと人の関係史—縄文から近代まで」『BIOSTORY 30 特集北海道における人と鳥獣』16-22 誠文堂新光社

高橋正勝

1981 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』10-20 雄山閣

千代 肇

1982 「道南地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』60-74 雄山閣

椿坂恭代

1998 「オオムギについて」『時の絆 道を辿る』245-250 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会

戸田哲也

1994 「縄文」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』170-190 雄山閣

藤原秀樹

2019 「北海道地方における葬墓制研究の現状」『第2回研究集会発表要旨 縄文時代葬墓制研究の現段階』5-12 縄文時代文化研究会

松田宏介

2005 「日高地方東部における続縄文期の上器様相－えりも町東歌別遺跡出土土器群の検討から－」『北海道考古学』41 1-20 北海道考古学会

森 秀之

1993 「北海道の遺跡から出土した金属製煙管の実年代」『北海道考古学』29 57-68 北海道考古学会

山戸大知

2015 「北海道・東北北部における擦文土器編年の現状と課題－主に道央部・陸奥湾周辺の擦文土器の編年・年代観について－」『北海道考古学』51 77-84 北海道考古学会

余市町登町区会編

1986 「登町の先史時代」『登郷土誌』39-41

Masakatsu Fujita, Yoshinari Kawamura, Naomitsu Murase

2000 「Middle Pleistocene wild boar remains from NT Cave, Nijimi, Okayama Prefecture, West Japan」
『Journal of Geosciences, Osaka City University』43 57-95 Graduate School of Science, Osaka City University

Hitomi Hongo, Tomoko Anezaki, Kyomi Yamazaki, Osamu Takahashi, Hiroki Sugawara

2007 「Hunting or management? The status of *Sus* in the Jomon period in Japan」
『PIGS AND HUMANS 10,000years of interaction』109-130 Oxford University Press

【報告書】

旭川市教育委員会

1995 『旭町1遺跡』(北海道旭川市埋蔵文化財発掘調査報告 20)

2003 『川端2遺跡』(北海道旭川市埋蔵文化財発掘調査報告 28)

厚真町教育委員会

2003 『厚幌1遺跡』(厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書)

2004 『厚幌1遺跡』(厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)

2006 『上幌内モイ遺跡(1)』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1)

2007 『上幌内モイ遺跡(2)』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2)

2009a 『上幌内モイ遺跡(3)』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3)

2009b 『ニタツナイ遺跡(1)』(国営土地改良事業勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1)

2010a 『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』(国営土地改良事業勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2)

2010b 『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツナイ遺跡(2)』(国営土地改良事業勇払東部(二期)地区厚幌導水路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3)

2013a 『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5)

2013b 『オニキシベ5遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6)

2014a 『厚幌1遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7)

2014b 『オニキシベ4遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8)

2014c 『ヲチャラセナイ遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9)

2014d 『シヨロマ3遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11)

2015 『シヨロマ1遺跡(1)』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12)

2017 『上幌内2遺跡』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 15)

2018 『シヨロマ1遺跡(2)』(厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 17)

江別市教育委員会

1981 『元江別遺跡群』(江別市文化財調査報告書 13)

- 1982 『葦ヶ岡遺跡』(江別市文化財調査報告書 15)
1990 『西野幌3・4遺跡』(江別市文化財調査報告書 43)
1992 『西野幌3遺跡(2)』(江別市文化財調査報告書 53)
1993 『西野幌3遺跡(3)』(江別市文化財調査報告書 59)

小樽市教育委員会

- 1985 『忍路11遺跡』
1991 『蘭島餅屋沢遺跡』(小樽市埋蔵文化財調査報告書 2)
1992 『蘭島遺跡D地点』(小樽市埋蔵文化財調査報告書 5)
1996 『蘭島餅屋沢2遺跡』(小樽市埋蔵文化財調査報告書 12)
2004 『鮎澗2遺跡Ⅲ・鮎澗3遺跡Ⅳ』(小樽市埋蔵文化財調査報告書 21)

小平町教育委員会

- 1983 『おびらたかさごⅡ』(小平町文化財調査報告 2)

白老町教育委員会

- 1980 『アヨロ遺跡』

千歳市教育委員会

- 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』(千歳市文化財調査報告書 19)

泊村教育委員会

- 1997 『ヘロカルウス遺跡E～G地点』
1999 『ヘロカルウス遺跡A地点』
2004 『堀株1遺跡』

仁木町教育委員会

- 1998 『モンガクB遺跡』(仁木町埋蔵文化財調査報告 1)

登別市教育委員会

- 1982 『札内台地の縄文時代集落址』

北斗市教育委員会

- 2017 『村前ノ沢遺跡』

北海道教育委員会

- 1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』
1978 『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』
1979 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』

北海道大学

- 1986 『サクシュコトニ川遺跡』

北海道文化財研究所

- 1989 『茶津遺跡』(北海道文化財研究所調査報告書 4)
1990 『茶津貝塚』(北海道文化財研究所調査報告書 5)

(財)北海道埋蔵文化財センター

- 1981 『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』(北埋調報 3)
1982 『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』(北埋調報 7)
1987a 『千歳市ママチ遺跡Ⅲ』(北埋調報 36)
1987b 『西野幌3遺跡』(北埋調報 39)
1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』(北埋調報 53)
1990a 『余市町栄町5遺跡』(北埋調報 66)
1990b 『余市町登町2遺跡・登町3遺跡』(北埋調報 67)
1990c 『美沢川流域の遺跡群ⅣⅣ』(北埋調報 69)
1991 『余市町フゴッペ貝塚』(北埋調報 72)
1998 『千歳市キウス4遺跡(2)』(北埋調報 124)
2001 『千歳市ウサクマイN遺跡』(北埋調報 156)
2012 『松前町福山城下町遺跡』(北埋調報 290)

八雲町教育委員会

2009 『浜中1遺跡発掘調査報告書』

由仁町教育委員会

2011 『東三川遺跡』

余市町教育委員会

1989 『沢町遺跡』

1992 『1991年度大川遺跡発掘調査概報』

1995 『1994年度大川遺跡発掘調査概報』

1996 『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』

1998a 『余市町登川右岸遺跡』

1998b 『大谷地貝塚』

1998c 『入舟遺跡・大川遺跡発掘調査概報』

1999 『入舟遺跡における考古学的調査』

2000a 『大川遺跡発掘調査概報』

2000b 『入舟遺跡(1998・1999年度)』

2000c 『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』

2000d 『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』

2000e 『大川遺跡における考古学的調査Ⅲ』

2001a 『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』

2001b 『大川遺跡(1999年度)』

2002a 『安芸遺跡』

2002b 『大川遺跡(2000年度・2001年度)』

2003 『安芸遺跡』

2004 『余市町大川遺跡(2003年度)』

2006 『大川遺跡(2005年度)』

2007 『安芸遺跡』

2009 『栄町7遺跡』

2013 『登町4遺跡(2012年度)』

2014 『登町4遺跡(2013年度)』

2015 『登町4遺跡・登町13遺跡(2014年度)』

2016 『登町4遺跡(2015年度)』

別表 1 遺構観察表(平成30年度調査)

計測値：()内は残存値 形状：()内は推定

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
SH1	11	F・G-14・15	N29°E	5.34	5.30	0.33	7.62~7.71	正方形	台形状	—	カマド1.76×0.63
SH2	12	J・K-13・14	N39°E	4.68	(3.58)	(0.18)	7.31~7.42	(正方形)	台形状	—	カマド1.38×(0.60)
P1	13	J-13	N33°E	0.94	0.83	0.19	7.52	円形	台形状	—	
P2	13	K・L-11	N32°W	1.01	0.73	0.06	7.91	楕円形	弧状	—	
P4	13	J-11	N9°W	1.03	0.86	0.08	8.11	楕円形	台形状	—	
P5	13	I・J-12	N49°W	0.82	0.52	0.10	8.08	楕円形	台形状	—	
P6	13	L-11・12	N37°W	1.65	1.38	0.18	7.61	楕円形	弧状	>SP72	
P7	13	E-16	N67°W	(0.99)	0.67	0.11	7.50	楕円形	弧状	—	墓壇
P8	13	E-16	N61°E	0.59	0.36	0.06	7.59	楕円形	弧状	—	墓壇
P9	13	E-15	N36°E	0.73	0.50	0.07	7.65	楕円形	弧状	>P13	
P10	13	C-16	N74°W	0.52	0.42	0.08	7.85	楕円形	台形状	—	
P13	13	E-15	N82°E	0.57	(0.37)	0.14	7.61	楕円形	台形状	<P9	墓壇
P14	13	E-16	N31°W	(0.62)	0.57	0.08	7.51	楕円形	台形状	<F22、SP65	
P15	4・5・7	G-15	—	—	—	0.14	7.41	—	(弧状)	—	調査区東壁
F10	14	J-14	N86°E	0.94	0.44	0.05	7.81	楕円形	弧状	>F24・25 <FC2	
F11	14	J-13・14	N52°W	0.34	0.21	0.03	7.92	楕円形	弧状	>P27 <FC2	
F21	14	E-16	N18°E	0.69	0.46	0.10	7.73	楕円形	弧状	—	
F22	14	E-16	N62°W	0.36	0.23	0.06	7.70	楕円形	弧状	>P14	
F24	14	J-14	N26°E	(0.93)	(0.18)	0.07	7.82	(不整形)	(弧状)	>F25・26 <F10、FC2	
F25	14	J-14	N6°W	(0.22)	(0.24)	0.02	7.83	(楕円形)	(弧状)	<F10・24、FC2	
F26	14	J-14	N20°W	(0.27)	0.16	0.05	7.83	楕円形	弧状	<F24、FC2	
F27	14	J-13	—	—	—	—	—	—	—	<F11、FC2	火床面なし
SP1	5	C-16	—	0.16	0.15	0.28	7.63	円形	階段状	—	
SP2	4	E-15	—	0.49	0.39	0.13	7.69	楕円形	台形状	>SP69	
SP4	7・10	I-14	—	0.20	0.19	0.90	7.64	円形	弧状	—	
SP5	6・9	J-11	—	0.49	0.46	0.14	7.94	円形	弧状	—	
SP6	7・10	J-13	—	0.22	0.13	0.06	7.65	楕円形	弧状	<FC2	
SP7	7・10	J-13	—	0.28	0.27	0.22	7.53	円形	箱状	<FC2	
SP8	7・10	J-13	—	0.24	0.22	0.15	7.56	円形	階段状	<FC2	
SP9	7・10	J-13	—	0.34	0.29	0.19	7.56	円形	漏斗状	<FC2	
SP10	4	D-14	—	0.30	0.24	0.09	8.10	楕円形	弧状	—	
SP11	7・10	I-14	—	(0.34)	0.46	0.04	7.66	—	台形状	—	
SP12	4	F-14	—	0.30	0.26	0.10	7.92	円形	台形状	—	
SP13	4	F-14	—	0.35	0.26	0.11	7.99	楕円形	台形状	—	
SP14	4	F-14	—	0.28	0.27	0.11	7.99	円形	階段状	—	
SP16	7	G-13	—	0.34	0.26	0.17	7.92	楕円形	箱状	—	
SP17	7	H-13	—	0.40	0.29	0.18	7.74	楕円形	階段状	—	
SP18	7	H-13	—	(0.32)	0.34	0.03	7.88	楕円形	台形状	—	
SP19	7	H-13	—	0.22	0.21	0.19	7.71	円形	U字状	—	
SP20	7・10	I-14	—	0.25	0.22	(0.11)	7.63	円形	台形状	—	
SP21	7・10	I-14	—	0.22	0.21	0.13	7.62	円形	U字状	—	
SP22	10	K-13	—	0.20	0.17	0.13	7.57	円形	U字状	<SS3	
SP23	7	H-14	—	0.24	0.20	0.14	7.59	円形	弧状	—	
SP24	7	H-14	—	0.22	0.19	0.06	7.67	円形	台形状	—	
SP25	6・9	J-12	—	0.14	0.11	0.06	7.97	円形	台形状	>SP56	
SP26	7	H-14	—	0.32	0.30	0.12	7.45	円形	台形状	—	
SP27	7・10	I-14	—	0.29	0.26	0.21	7.43	円形	箱状	—	
SP28	5	E-16	—	0.28	0.27	0.17	7.42	円形	箱状	—	
SP29	5	E-16	—	0.27	0.26	0.08	7.62	円形	箱状	—	
SP31	7・10	I-13	—	0.29	0.24	0.14	7.76	円形	階段状	—	
SP32	7・10	J-13	—	0.22	0.21	0.06	7.79	円形	弧状	<FC2	

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
SP33	7・10	J-13	—	0.29	0.26	0.13	7.78	円形	U字状	—	
SP34	6・9	J-12	—	0.22	0.20	0.14	7.89	円形	U字状	—	
SP35	6・9	J-12	—	0.17	0.16	0.04	8.10	円形	弧状	—	
SP37	6・7	H-12	—	0.23	0.19	0.08	8.08	円形	台形状	—	
SP39	6・7・9・10	J-12	—	0.28	0.25	0.14	7.72	円形	U字状	—	
SP40	6・9・10	I-12	—	0.30	0.28	0.18	7.97	円形	U字状	—	
SP41	6・9	J-12	—	0.26	0.21	0.07	8.14	円形	弧状	—	
SP43	6・9	J-12	—	0.27	0.23	0.09	8.12	円形	台形状	—	
SP44	6・9	I-12	—	0.22	0.20	0.11	8.11	円形	U字状	—	
SP45	4・7	G-14	—	0.24	0.20	0.06	7.89	円形	弧状	—	
SP46	4・7	F-14	—	0.21	0.18	(0.07)	7.91	円形	—	—	
SP47	7	H-13	—	0.19	0.16	0.10	7.77	円形	U字状	—	
SP48	6・7・9・10	I-12	—	0.16	0.13	0.10	8.08	円形	U字状	—	
SP49	10	K-13	—	0.19	0.18	0.07	7.69	円形	U字状	—	
SP50	10	K-13	—	0.23	0.19	0.08	7.65	円形	U字状	—	
SP51	10	K-13	—	0.32	0.25	0.23	7.48	楕円形	階段状	—	
SP52	10	K-13	—	0.16	0.13	0.05	7.68	円形	台形状	—	
SP54	9	K-11	—	0.23	0.19	0.04	7.45	円形	弧状	—	
SP56	6・9	J-12	—	0.16	(0.14)	0.10	7.93	円形	階段状	<SP25	
SP57	10	K-13	—	0.21	0.19	0.36	7.36	円形	U字状	—	
SP58	10	L-13	—	0.25	0.23	0.07	7.55	円形	台形状	—	
SP59	9・10	L-12	—	0.23	0.19	0.06	7.53	円形	箱状	—	
SP60	10	K-13	—	0.21	0.18	0.08	7.64	円形	台形状	—	
SP61	9	L-12	—	0.16	0.15	0.07	7.62	円形	箱状	—	
SP62	9	L-12	—	0.21	0.19	0.26	7.47	円形	箱状	—	
SP63	9	L-11	—	0.21	0.18	0.05	7.86	円形	弧状	—	
SP64	4・5	E-15	—	0.29	0.29	0.28	7.50	円形	U字状	—	
SP65	5	E-16	—	0.22	0.18	0.13	7.41	円形	階段状	>P14	
SP66	5	E-16	—	0.27	0.25	0.15	7.59	円形	台形状	—	
SP67	5	E-16	—	0.28	0.25	0.25	7.43	円形	箱状	—	
SP68	4・5	F-15	—	0.19	0.19	0.13	7.52	円形	箱状	—	
SP69	4	E-15	—	0.20	(0.10)	0.08	7.80	—	弧状	<SP2	
SP70	5	E-16	—	0.40	0.38	0.22	7.36	円形	V字状	>SP71	
SP71	5	E-16	—	0.29	(0.16)	0.07	7.51	—	弧状	<SP70	
SP72	9	L-12	—	0.18	0.16	0.08	7.53	円形	弧状	<P6	
SP74	7	I-14	—	—	—	0.09	7.65	—	階段状	—	調査区東壁
SP75	4	C-15	—	—	—	0.17	7.67	—	半円状	—	調査区北壁
FC1	14	C-16	N69°W	2.68	(1.58)	—	—	(楕円形)	—	—	
FC2	14	I-14 J-13・14	N36°E	5.11	(2.24)	—	—	不整形	—	>F10・11・24～27、SP6～9・32	
SS1	14	H-14	—	0.38	0.37	—	—	—	—	—	
SS2	14	I-13	N20°E	0.66 0.42	0.38 0.35	— 0.05	8.29	円形	弧状	—	規模の上段は集石範囲 下段は土坑 小土坑有り
SS3	14	K-13	—	0.24	0.23	—	—	—	—	>SP22	
SS4	14	I-13	N3°W	0.37 0.46	0.29 (0.33)	— 0.07	8.30	楕円形	弧状	—	規模の上段は集石範囲 下段は土坑 小土坑有り
SD2	15	H-13・14	N63°W	(3.42)	0.12 ～0.33	0.06	7.82～7.90	—	弧状	—	
SX1	15	H-13 I-12・13	N24°E	(2.29) 1.93	(2.24) 1.12	0.07 ～0.13 0.04	8.05	不整形	階段状	—	主軸は土坑部分 規模上段は全体 下段は窪み

別表2 遺構観察表(平成31年度調査)

計測値:()内は残存値 形状:()内は推定

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
H1	16・17	D・E-11・12	N48°E	3.95	2.94	0.15	8.75 ~8.99	楕円形	台形状	<FC5・6	
H2	18・19	C・D-10・11	N76°E	(5.57)	(2.97)	0.14	9.39 ~9.67	楕円形 (卵形)	台形状	>P47 <FC9	
H3	20	E-9・10	N22°E	3.00	(1.96)	0.32	9.19 ~9.22	不整隅丸長方形	箱状	<H4, FC8	張出部を持つ 張出部2.10×0.46 底面標高9.26~9.49
H4	21	D・F-10	N65°W	2.83	2.07	0.23	9.21 ~9.57	隅丸長方形	箱状	>H3 <P36, FC8	張出部を持つ
SH3	22・23	D・E-13・14	N32°E	4.56	5.06	0.28	8.08 ~8.31	隅丸長方形	台形状	—	カマド1.86×0.60
P16	24	E-10・11	N13°W	1.42	1.15	0.35	8.96	楕円形	台形状	<FC6・8, SP85	墓壇
P17	24	E-11	N29°W	1.65	1.16	0.16	8.76	楕円形	台形状	>SX2, SP142~144 <FC6・7, SP76	墓壇
P18	24	E-12	N22°W	0.85	0.48	0.14	8.57	長楕円形	箱状	>SP137 <SP77・78	
P19	24	F-10・11	N24°E	1.72	1.20	0.20	8.80	楕円形	台形状	<FC11, SP83・84	墓壇
P20	24	F-10	N15°E	2.00	0.78	0.05	8.99	隅丸長方形	台形状	—	墓壇
P21	24	E-11	N78°E	0.81	0.40	0.24	8.50	長楕円形	箱状	>P22, SP79 <FC7	
P22	24	E-11	—	(0.37)	(0.37)	0.16	8.72	—	箱状	<P21, FC7, SP79	
P23	24	F-11	N40°E	(1.20)	1.01	0.15	8.63	隅丸長方形	台形状	<FC11	墓壇
P24	25	F-11	N68°E	1.69	0.92	0.15	8.65	隅丸長方形	台形状	>SP131・132 <FC11	墓壇
P25	25	G-11・12	N32°E	(0.73)	0.70	0.15	8.33	円形	台形状	>P26	
P26	25	G-11	—	0.67	(0.26)	0.13	8.36	—	—	<P25	
P27	25	F-11	N66°W	0.82	0.56	0.17	8.83	楕円形	台形状	>SP88・89 <FC11, SP86	
P28	25	I-11	N80°E	(0.41)	(0.24)	0.10	8.36	—	—	—	
P29	25	D-11	N59°W	1.11	0.70	0.15	8.91	楕円形	箱状	<FC6・9	墓壇
P30	25	F-11	N9°E	0.76	0.56	0.15	8.68	楕円形	U字状	<FC11	
P31	25	F・G-8・9	N43°E	(1.23)	1.30	0.34	9.38	(楕円形)	台形状	<SP91	墓壇
P32	25	G-8	N23°E	1.33	1.22	0.34	9.48	円形	弧状	—	墓壇
P33	26	D-10・11	N90°	1.76	0.97	0.22	9.12	隅丸長方形	台形状	>SP163 <P42, FC8・9	墓壇
P34	26	D-13	N65°E	0.80	0.50	0.10	8.64	楕円形	箱状	—	
P35	26	D・E-12・13	N89°E	2.19	1.76	0.18	8.60	楕円形	箱状	—	
P36	26	D-10	N67°E	2.02	0.95	0.30	9.26	隅丸長方形	台形状	>H4, SP115	墓壇
P39	26	D-11	N20°E	0.76	0.55	0.14	9.01	楕円形	弧状	<FC9	墓壇
P40	26	D-11	N47°E	0.78	0.52	0.08	9.15	楕円形	箱状	<FC9・10	墓壇
P41	26	D-11	N80°E	1.28	0.98	0.30	9.02	楕円形	台形状	<FC9, SP109	墓壇
P42	27	D・E-10	N44°E	0.87	0.74	0.20	9.18	楕円形	台形状	>P33 <FC8	
P43	27	D-11	N49°E	0.58	0.42	0.20	9.12	楕円形	階段状	<FC9	墓壇
P44	27	D-11	N55°E	1.09	0.81	0.24	9.17	楕円形	台形状	<FC9	墓壇
P45	27	D-11	N80°W	0.67	0.41	0.10	9.16	楕円形	台形状	>SP154・155 <FC9	墓壇
P46	27	D-11	N74°E	(0.58)	0.42	0.12	9.10	楕円形	台形状	<FC9, SP113	墓壇
P47	27	D-11	N60°E	0.78	0.43	0.20	9.17	楕円形	弧状	<B2HP38, FC9, SP110・112	墓壇
P48	27	C・D-14	N5°E	0.80	0.74	0.19	8.10	円形	台形状	—	
P49	27	G-8	—	1.71	(0.55)	0.24	9.41	(楕円形)	台形状	—	墓壇
P50	27	F-8	—	1.70	(0.53)	0.24	9.55	(楕円形)	台形状	—	墓壇
P51	27	J・K-6	N66°W	(1.76)	0.62	0.45	8.20	長楕円形	V字状	>P130 <P53	陥し穴
P52	28	J-6	N15°E	0.67	0.60	0.20	8.46	円形	U字状	—	
P53	28	K-6・7	N25°E	0.97	0.97	0.25	8.22	円形	台形状	>P51	
P54	28	J・K-5	N0°	2.74	0.98	0.42	8.68	長楕円形	箱状	—	陥し穴
P55	28	J・K-5	N35°E	(1.53)	(0.76)	0.31	8.95	長楕円形	台形状	—	墓壇
P56	28	H-12	N34°E	(0.52)	1.16	0.09	8.21	—	台形状	—	墓壇

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
P57	28	K-5・6	N89°E	(1.46)	1.03	0.14	8.61	楕円形	箱状	—	墓壇
P58	8	M-6	—	—	—	0.60	7.30	—	(階段状)	—	調査区南壁
P59	1	K-3	—	—	—	0.35	9.59	—	(箱状)	—	調査区西壁
P60	8	M-7	—	—	—	0.36	6.79	—	(台形状)	—	調査区南壁
P61	3	C-12	—	—	—	0.35	8.60	—	(台形状)	<SP169・183	調査区北壁 墓壇
P62	28	K-7	N22°W	1.96	0.73	0.10	7.98	長楕円形	台形状	—	陥し穴
P63	28	J-5・6	N1°E	1.64	(0.26)	0.12	8.66	(長楕円形)	(台形状)	—	陥し穴
P64	28	G-11・12	N0°	(0.47)	0.54	0.08	8.26	—	台形状	—	
SP76	3	E-11	—	0.31	0.26	0.34	8.67	楕円形	階段状	>P17	
SP77	3	E-12	—	0.08	0.07	0.21	8.57	円形	V字状	>P18	
SP78	3	E-12	—	0.16	0.14	0.22	8.52	円形	U字状	>P18	
SP79	3	E-11・12	—	0.49	0.31	0.12	8.70	楕円形	弧状	>P22 <P21, FC7	
SP80	3	E-12	—	(0.39)	0.35	0.12	8.65	円形	弧状	<FC5	
SP81	3	E-12	—	0.15	0.15	0.07	8.58	円形	U字状	>SP82	
SP82	3	E-12	—	0.27	2.00	0.09	8.57	楕円形	弧状	<SP81	
SP83	3・6	F-11	—	0.36	0.21	0.19	8.74	楕円形	U字状	>P19 <FC11	
SP84	3・6	F-11	—	0.21	(0.09)	0.19	8.80	円形	U字状	>P19	
SP85	3	E-10・11	—	(0.36)	0.34	0.20	9.05	楕円形	半円形状	>P16 <FC8	
SP86	3	F-11	—	0.46	0.34	0.19	8.67	楕円形	U字状	>P27	
SP87	3・6	F-11	—	0.38	0.36	0.12	8.74	円形	弧状	—	
SP88	3	F-11	—	0.21	0.20	0.11	8.68	円形	V字状	<P27, FC11	
SP89	3	F-11	—	0.19	0.16	0.11	8.68	円形	弧状	<P27, FC11	
SP90	2	E-9	—	(0.29)	0.47	0.23	9.52	楕円形	台形状	—	
SP91	2	G-9	—	0.23	(0.08)	0.27	9.24	(楕円形)	V字状	>P31	
SP92	4	E-13	—	0.39	0.30	0.11	8.36	楕円形	弧状	—	
SP93	4	E-13	—	0.38	0.27	0.13	8.08	楕円形	弧状	—	
SP94	4	E-13	—	(0.57)	0.40	0.16	8.34	楕円形	台形状	—	
SP95	4	E-13	—	0.24	0.22	0.17	8.12	円形	U字状	—	
SP96	4	E-13	—	0.32	0.31	0.06	8.36	円形	弧状	—	
SP97	4	D-13	—	0.54	0.42	0.14	8.52	楕円形	台形状	<SP99	
SP98	4	D-13	—	(0.38)	0.50	0.11	8.56	楕円形	台形状	<SP99	
SP99	4	D-13	—	(0.31)	0.19	0.18	7.77	楕円形	V字状	>SP97・98	
SP100	4	C-13	—	0.24	0.23	0.09	8.52	円形	弧状	—	
SP101	2・3	E・F-9	—	(0.42)	0.32	0.26	9.36	楕円形	階段状	<SP159	
SP102	2・3	E-9	—	0.49	0.33	0.20	9.39	楕円形	箱状	—	
SP103	3	E-10	—	0.24	0.20	0.14	9.11	円形	U字状	<FC8	
SP104	3	E-10	—	0.31	0.30	0.08	9.11	円形	台形状	—	
SP105	3	C-11	—	0.24	0.19	0.24	9.01	円形	U字状	—	
SP106	3	D-11	—	0.17	0.14	0.10	9.13	円形	U字状	<FC9	
SP107	3	D-11	—	0.29	0.28	0.08	9.14	円形	台形状	<FC10	
SP108	3	D-11	—	0.31	0.31	0.10	9.17	円形	台形状	<FC9	
SP109	3	D-11	—	0.15	0.12	0.13	9.11	円形	U字状	>P41 <FC9	
SP110	3	D-11	—	0.28	0.25	0.10	9.22	円形	弧状	>P47 <FC9	
SP111	3	D-11	—	0.18	0.15	0.08	9.14	円形	弧状	<FC9	
SP112	3	D-11	—	0.42	0.28	0.12	9.21	楕円形	台形状	>P47 <FC9	
SP113	3	D-11	—	0.16	0.11	0.08	9.03	円形	U字状	>P46 <FC9	
SP114	3	D-11	—	0.16	0.16	0.20	9.16	円形	U字状	>SP117 <FC9	
SP115	3	D-10	—	0.77	0.73	0.28	9.22	円形	弧状	<P36	
SP117	3	D-11	—	0.09	0.07	0.11	9.16	円形	U字状	<FC9, SP114	
SP118	3	E-11	—	0.22	(0.06)	0.11	8.98	(楕円形)	弧状	—	
SP119	3	D-11	—	0.33	0.31	0.10	9.02	円形	弧状	>SP121 <FC9	
SP120	3	D-11	—	0.29	0.20	0.11	9.04	楕円形	台形状	>SP121 <FC9	

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
SP121	3	D-11	—	0.47	0.45	0.10	8.95	楕円形	階段状	>SP124 <FC9、SP119・120	
SP122	3	D-11	—	0.17	0.14	0.07	8.95	円形	U字状	<FC9	
SP123	3	D-11	—	0.11	0.11	0.11	9.05	円形	U字状	<FC9	
SP124	3	D-11	—	(0.13)	0.09	0.07	8.99	(楕円形)	台形状	<FC9、SP121	
SP125	4	D-12・13	—	(0.28)	0.21	0.04	8.70	楕円形	弧状	—	
SP126	3	E-10	—	0.24	0.19	0.14	9.05	円形	U字状	—	
SP127	4	C-13	—	0.23	0.22	0.21	8.57	円形	U字状	—	
SP128	4	D-13	—	(0.19)	0.31	0.14	8.59	楕円形	弧状	—	
SP129	2	F-9	—	(0.18)	0.36	0.28	9.52	円形	階段状	—	
SP130	8	K-6	—	(0.28)	(0.24)	0.37	8.19	—	—	<P51	
SP131	3・6	F-11	—	0.15	0.14	0.10	8.50	円形	U字状	<FC11、P24	
SP132	3・6	F-11	—	0.14	0.12	0.09	8.46	円形	箱状	<FC11、P24	
SP133	3	F-11	—	0.16	0.09	0.12	8.52	楕円形	階段状	<FC11	
SP134	3	F-11	—	0.15	0.15	0.17	8.58	円形	U字状	—	
SP135	3	E-12	—	0.15	0.15	0.15	8.47	円形	U字状	—	
SP136	3	E-12	—	0.21	0.17	0.15	8.46	円形	U字状	—	
SP137	3	E-12	—	0.19	0.17	0.12	8.52	円形	U字状	<P18	
SP138	3	E-12	—	0.18	0.17	0.13	8.52	円形	U字状	—	
SP139	3	E-11	—	0.18	0.17	0.13	8.58	円形	U字状	—	
SP140	3	E-11	—	0.13	0.12	0.13	8.72	円形	階段状	—	
SP141	3	E-11	—	0.12	0.11	0.11	8.75	円形	V字状	—	
SP142	3	F-11	—	0.22	0.19	0.17	8.69	円形	漏斗状	<P17、FC6	
SP143	3	F-11	—	0.12	0.12	0.07	8.70	円形	U字状	<P17、FC7	
SP144	3	E-11	—	0.15	0.14	0.09	8.65	円形	階段状	<P17、FC7	
SP145	3	E-11	—	0.14	0.13	0.16	8.65	円形	U字状	—	
SP146	3	E・F-11	—	0.16	0.15	0.10	8.62	円形	U字状	—	
SP147	3	E-11	—	0.19	0.14	0.10	8.62	楕円形	U字状	<FC7	
SP148	3	E-11	—	0.17	0.16	0.08	8.68	円形	弧状	<FC7	
SP149	3	F-11	—	0.14	0.13	0.06	8.62	円形	弧状	—	
SP150	3	F-11	—	0.17	0.14	0.13	8.51	円形	U字状	<FC11	
SP151	2	F-9	—	0.20	0.15	0.16	9.24	円形	U字状	—	
SP152	3	D-11	—	0.18	0.16	0.13	9.11	円形	U字状	<FC9	
SP153	3	D-11	—	0.15	0.14	0.09	9.15	円形	弧状	<FC9	
SP154	3	D-11	—	0.19	0.18	0.09	9.17	円形	U字状	>SP155 <P45、FC9	
SP155	3	D-11	—	(0.14)	0.18	0.09	9.21	楕円形	弧状	<P45、FC9、SP154	
SP156	3	D-11	—	0.15	0.12	0.07	9.22	円形	弧状	<FC9	
SP157	3	D-11	—	0.16	0.13	0.08	9.17	円形	弧状	<FC9	
SP158	3	D-11	—	0.22	0.22	0.22	8.96	円形	U字状	<FC9	
SP159	2・3	F-9	—	0.24	0.21	0.11	9.24	円形	弧状	>SP101	
SP160	2・3	E-9	—	0.20	0.15	0.12	9.24	円形	階段状	—	
SP161	3	F-10	—	0.12	(0.05)	0.07	8.94	楕円形	弧状	—	
SP163	3	D-10	—	0.12	0.11	0.10	9.11	円形	U字状	<P33	
SP166	3	E-11	—	0.23	0.21	0.14	8.65	円形	弧状	—	
SP167	3	D-12	—	0.14	0.14	0.09	8.79	円形	U字状	—	
SP168	3	D-12	—	0.16	(0.08)	0.08	8.85	円形	U字状	<FC10	
SP169	3	C-12	—	0.12	(0.07)	0.10	8.89	円形	U字状	>P61	
SP170	3	C・D-12	—	0.15	(0.06)	0.15	8.93	(円形)	U字状	<FC10	
SP171	3	D-11	—	0.12	(0.06)	0.15	8.85	(楕円形)	U字状	—	
SP172	3	D-11	—	0.25	0.22	0.08	9.09	円形	弧状	<FC9	
SP173	3	D-11	—	0.35	0.26	0.09	9.07	楕円形	階段状	<FC9	
SP174	3	D-11	—	0.15	0.12	0.12	9.04	円形	V字状	<FC9	
SP175	3	C-11	—	0.17	(0.06)	0.13	9.02	楕円形	U字状	<FC9	

遺構名	図版No.	グリッド	主軸方位	規模(m)				形状		重複関係	備考
				長軸	短軸	深度	底面標高	平面形	断面形		
SP176	3	C-11	—	0.23	(0.11)	0.12	9.05	円形	弧状	<FC9	
SP177	3	C-11	—	0.20	(0.07)	0.13	9.10	楕円形	U字状	<FC9	
SP178	3	D-11	—	0.21	(0.12)	0.22	9.05	円形	U字状	<FC9	
SP179	8	L-5	—	0.44	(0.20)	0.25	8.70	円形	U字状	—	
SP180	8	M-7	—	—	—	(0.28)	7.90	—	V字状	—	調査区南壁
SP181	—	K-3	—	—	—	(0.30)	10.12	—	V字状	—	調査区西壁
SP182	4	C-13	—	—	—	(0.13)	8.73	—	弧状	—	調査区北壁
SP183	3	C-12	—	—	—	(0.20)	9.30	—	U字状	>P61	調査区北壁
SP184	3	C-11	—	—	—	(0.25)	9.33	—	U字状	—	調査区北壁
SP186	8	M-8	—	—	—	(0.17)	7.80	—	V字状	—	調査区南壁
FC4	29	D・E-12	—	2.20	1.50	—	—	不整形	—	—	
FC5	29	E-11・12	—	3.90	1.00	—	—	不整形	—	>H1、F29、SP80	
FC6	29	D・E-11・12	—	6.10	2.80	—	—	不整形	—	>H1、P16・17・29、SP142	
FC7	29	E-11	—	2.30	1.20	—	—	不整形	—	>P17・21・22、SP79・143・144・147・148	
FC8	29	D・E-10・11	—	2.50	1.60	—	—	不整形	—	>H3・4、P16・33・42、SP85・103	
FC9	29	C-11 D-10・11	—	5.90	3.60	—	—	不整形	—	>H2、P29・33・39 ～41・43～47、 SP106・108～114・ 117・119～124・ 152～158・172～ 178	
FC10	29	C・D-11・12	—	2.90	2.30	—	—	楕円形	—	>P40、SP107・168・170	
FC11	29	F-11	—	4.70	2.50	—	—	楕円形	—	>P19・23・24・27・30、SP88・89・131～133・150	
SX2	28	E-11	N30°E	0.27	0.22	0.13	8.68	不整形	箱状	<P17、FC5	

別表3 試掘出土土器観察表

報告No.	図版No.	出土地点	層位	部位	時代	時期	型式	分類		備考
								群	類	
1	30	87880R40	黒色土	胴部	縄文	前期	—	II群	—	
2	30	87540R140	—	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
3	30	87720L40	—	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
4	30	87540L40	—	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	

別表4 試掘出土石器観察表

計測値：()内は残存値

報告No.	図版No.	出土地点	層位	器種	分類	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
						長さ	幅	厚さ			
5	30	—	表探	石鏃	b類	2.1	1.4	0.3	0.8	黒曜石	破損
6	30	87940L20	耕作土下面	石錐	c類	4.9	1.7	0.8	8.7	メノウ	破損
7	30	87740L20	—	スクレイパー	a類	(3.4)	2.6	0.8	7.3	黒曜石	破損
8	30	87640R100	耕作土	両面調整石器		5.2	3.9	1.2	21.1	黒曜石	
9	30	87960L40	耕作土下面	Rフレイク		5.0	3.0	1.3	21.4	黒曜石	
10	30	—	表探	石斧		(5.6)	4.4	2.6	96.9	硬質頁岩	破損

別表5 遺構内出土土器観察表(平成30年度調査)

報告No.	図版No.	遺構名	層位	部位	時代	時期	型式	分類		備考
								群	類	
11	30	SH1	4	口縁部	縄文	晩期	タンネットウル式	V群	—	床面出土
12	30	SH1	1	胸部	擦文	—	—	VII群	a類	
13	30	SH1	4	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
14	30	SH1	4	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
15	30	SH1	4	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
16	30	SH1	4	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
17	30	SH1	4	胸部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
18	31	SH1貯蔵穴	1	口縁部	擦文	—	—	VI群	a類	
19	31	SH1	2	口縁部	擦文	—	—	VI群	a類	
20	31	SH1	2	口縁部	擦文	—	—	VI群	a類	
21	31	SH1	1	口縁部	擦文	—	—	VI群	a類	
22	31	SH1	4	胸部	擦文	—	—	VI群	a類	床面出土
38	32	SH2	13	口縁部	縄文	晩期	タンネットウル式	V群	—	床面下
39	32	SH2	3	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
40	32	SH2	8	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	床面出土
41	32	SH2カマド	12	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
42	32	SH2	8	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
43	32	SH2貯蔵穴	1	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	
44	32	SH2カマド	12	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
45	32	SH2カマド	12	胸部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	口縁部打欠き
46	32	SH2カマド	12	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
47	32	SH2	7	口縁部～胸部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土 貯蔵穴出土と接合
48	32	SH2	8	口縁部～胸部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
49	32	SH2貯蔵穴	1	口縁部～底部	擦文	—	—	VII群	b類	土師器
50	32	SH2	12	口縁部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
51	32	SH2	4	胸部	擦文	—	—	VII群	a類	
52	32	SH2	8	胸部	擦文	—	—	VII群	a類	床面出土
61	33	P1	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
62	33	P1	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
63	33	P1	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
64	33	P1	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
73	33	P8	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
74	34	F21	1	胸部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
75	34	F24	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
76	34	F24	1	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
79	34	FC2	II	胸部	縄文	早期	東鋤路IV式	I群	b-3類	
80	34	FC2	II	胸部	縄文	前期	—	II群	—	
81	34	FC2	II	胸部	続縄文	—	後北D式	VI群	b類	
82	34	FC2	II	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
83	34	FC2	II	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
84	34	FC2	II	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
85	34	FC2	II	胸部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	

別表6 遺構内出土石器・石製品観察表(平成30年度調査)

計測値:()内は残存値 備考:※(松田義章氏石質鑑定)

報告No.	図版No.	遺構名	層位	器種	分類	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
						長さ	幅	厚さ			
23	31	SH1	1	石鏃	b類	2.4	1.5	0.5	1.8	黒曜石	
24	31	SH1	1	スクレイパー	a類	(3.0)	2.8	0.9	7.4	黒曜石	破損
25	31	SH1	1	スクレイパー	b類	2.2	1.9	0.8	3.1	頁岩	
26	31	SH1	1	楔形石器		3.5	3.3	1.4	15.4	黒曜石	
27	31	SH1	4	楔形石器		3.9	2.3	1.2	9.3	黒曜石	床面出土
28	31	SH1	4	原石		5.4	3.9	4.1	101.7	黒曜石	床面出土
29	31	SH1	4	石斧		(7.7)	4.8	2.4	173.9	硬質頁岩	※ 床面出土 破損

報告No.	図版No.	遺構名	層位	器種	分類	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
						長さ	幅	厚さ			
30	31	SH1	3	砥石		8.9	11.0	4.7	750.0	輝石安山岩	※
31	31	SH1	1	砥石		10.9	5.0	3.3	260.8	輝石安山岩	※
32	31	SH1	覆土	砥石		11.8	4.2	4.5	293.0	安山岩	サブトレンチ出土
33	31	SH1	覆土	砥石		10.9	5.5	2.5	213.8	安山岩	サブトレンチ出土 端部に敲痕
34	31	SH1	3	砥石		10.8	5.1	4.8	268.1	安山岩	
35	31	SH1	1	たたき石		9.8	7.5	3.8	404.4	輝石安山岩	※
36	31	SH1	4	くぼみ石		10.7	5.2	4.3	236.8	凝灰岩	※ 床面出土
37	31	SH1	4	球状礫		5.3	3.8	3.0	56.9	輝石安山岩	※ 床面出土
53	33	SH2	覆土	スクレイパー	a類	7.4	6.2	1.3	58.6	頁岩	
54	33	SH2	2	スクレイパー	a類	3.6	3.2	0.7	8.1	黒曜石	
55	33	SH2	8	スクレイパー	b類	2.0	1.6	1.1	3.3	黒曜石	床面出土
56	33	SH2	13	スクレイパー	a類	4.1	4.1	0.9	16.2	黒曜石	掘方出土
57	33	SH2	8	石斧		9.9	4.4	10.3	162.9	硬質頁岩	※ 床面出土 破損
58	33	SH2	覆土	砥石		6.2	5.3	1.5	77.4	輝石安山岩	※ 床面出土
59	33	SH2	13	砥石		(7.2)	11.3	6.8	740.0	安山岩	掘方出土 破損
65	33	P1	1	石鏃	—	(1.7)	1.6	0.4	0.8	黒曜石	破損
66	33	P1	1	スクレイパー	c類	3.0	2.7	0.6	5.3	黒曜石	
67	33	P1	1	スクレイパー	c類	3.0	2.9	0.7	8.3	黒曜石	
68	33	P1	1	楔形石器		2.9	2.9	1.0	10.4	黒曜石	
71	33	P5	1	すり石		12.5	10.1	5.7	990.0	輝石安山岩	※
72	33	P6	1	Rフレイク		2.3	1.6	0.8	2.1	黒曜石	楔形石器?
77	34	SP68	1	石鏃	a類	2.1	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
78	34	SP70	1	スクレイパー	a類	3.2	2.7	1.7	16.3	黒曜石	接合 未成品?
86	34	FC2	II	石鏃	—	(1.1)	0.6	0.2	0.1	黒曜石	破損
87	34	FC2	II	石鏃	a類	(1.9)	2.0	0.5	2.2	黒曜石	破損
88	34	FC2	II	スクレイパー	a類	(2.2)	1.5	0.4	2.0	頁岩	破損
89	34	FC2	II	Rフレイク		3.4	2.0	0.8	3.7	黒曜石	
90	34	SS1	—	たたき石		56.2	25.6	1.6	275.0	輝石安山岩	※
91	34	SS3	—	砥石		100.8	79.5	40.5	320.0	輝石安山岩	※ 風化
92	34	SX1	2	石鏃	a類	(2.3)	(1.3)	0.3	1.0	黒曜石	破損
93	34	SX1	1	スクレイパー	a類	2.8	2.0	1.0	4.3	黒曜石	
94	34	SX1	2	スクレイパー	b類	3.5	2.2	0.5	4.0	黒曜石	
95	34	SX1	2	たたき石		6.1	3.8	3.4	93.5	輝石安山岩	※

別表7 遺構内出土金属製品観察表 (平成30年度調査)

計測値: ()内は残存値

報告No.	図版No.	遺構名	層位	器種 分類	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
					長さ	幅	厚さ			
60	33	SH2	覆土	円環	3.1	3.1	0.4	8.00	鉄	
69	33	P1	1	和釘	3.7 5.2	1.2	0.7	25.06	鉄	長さは折れている箇所をそれぞれで計測。頭部平折
70	33	P1	1	和釘	(3.8)	1.2	0.7	8.57	鉄	頭部平折 欠損
96	34	SX1	2	不明	(2.0)	0.5	—	0.20	銅?	破損

別表8 遺構内出土土器観察表 (平成31年度調査)

報告No.	図版No.	遺構名	層位	部位	時代	時期	型式	分類		備考
								群	類	
97	34	H1	2	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
98	34	H1	2	胴部	縄文	早期	東鋤路IV式	I群	b-3類	
99	34	H1	2	胴部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
103	35	H2好1	上面	口縁部	縄文	中期	ノダップII式	III群	c類	
104	35	H2	3	胴部	縄文	中期	—	III群	—	
111	35	H4	4	口縁部	縄文	中期	大安在B式	III群	b類	
113	35	SH3	1	胴部	縄文	早期	東鋤路IV式	I群	b-3類	H30年出土十分

報告No.	図版No.	遺構名	層位	部 位	時代	時期	型 式	分 類		備 考
								群	類	
114	35	SH3	2	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	H30年出土分
121	36	SH3	1	口縁部	擦文	—	—	VII群	a類	
122	36	SH3	1	胴部	擦文	—	—	VII群	a類	
123	36	SH3	1	胴部	擦文	—	—	VII群	a類	
133	36	P18	1	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
138	36	P31	1	胴部	縄文	早期	東剣路IV式	I群	b-3類	
139	36	P31	1	胴部	縄文	早期	東剣路IV式	I群	b-3類	
140	36	P31	1	胴部	縄文	早期	東剣路IV式	I群	b-3類	
146	37	P44	3	口縁部	縄文	後期	余市式	IV群	a類	

別表9 遺構内出土石器・石製品観察表(平成31年度調査)

計測値:()内は残存値 備考:※(松田義章氏石質鑑定)

報告No.	図版No.	遺構名	層位	器 種	分 類	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ	幅	厚さ			
100	34	H1	2	石鏃	d類	3.2	1.2	0.3	0.8	黒曜石	
101	34	H1	2	ナイフ	b類	2.9	2.0	0.6	4.0	黒曜石	
102	34	H1	5	たたき石		8.9	5.3	4.5	280.2	輝石安山岩	※
105	35	H2	2	石鏃	d類	(2.7)	1.3	0.4	1.3	黒曜石	破損
106	35	H2	2	石鏃	d類	3.8	2.3	0.4	2.4	黒曜石	
107	35	H2	1	石槍・ナイフ	c類	(4.1)	(3.2)	(0.6)	5.5	黒曜石	破損
108	35	H2	2	ナイフ	a類	7.7	2.6	0.8	17.0	黒曜石	
109	35	H2	1	スクレイパー	a類	5.2	2.2	0.9	6.2	黒曜石	
110	35	H3	4	Rフレイク		5.3	3.8	0.7	10.6	黒曜石	
112	35	H4	4	砥石		17.3	19.8	17.1	6500.0	輝石安山岩	※
115	35	SH3	2	スクレイパー	a類	(4.2)	2.3	0.6	4.9	頁岩	破損 H30年出土分
116	35	SH3	3	スクレイパー	a類	(1.8)	2.8	0.6	3.9	黒曜石	破損 H30年出土分
117	35	SH3	5	スクレイパー	a類	5.5	3.4	0.9	12.9	黒曜石	H30年出土分
118	35	SH3	覆土	Rフレイク		9.3	4.7	1.8	41.8	頁岩	H30年出土分
119	35	SH3	2	たたき石		11.0	5.3	4.7	330.4	輝石安山岩	※ H30年出土分
120	36	SH3	3	砥石		(11.4)	15.7	3.7	1160.0	輝石安山岩	※ 破損 H30年出土分
124	36	SH3	1	石鏃	e類	1.8	(0.8)	0.2	0.2	黒曜石	破損
125	36	SH3	2	石鏃	b類	(2.0)	2.7	(2.7)	2.1	黒曜石	破損
126	36	SH3	2	石鏃	c類	(5.7)	2.0	1.1	11.4	黒曜石	破損
127	36	SH3	1	砥石		10.9	6.8	5.1	285.9	輝石安山岩	※
128	36	SH3	9	砥石		28.7	12.7	3.7	2000.0	硬質頁岩	※
129	36	SH3	9	たたき石		6.4	5.3	3.2	240.6	輝石安山岩	※
130	36	SH3	2	石鏃		8.3	7.4	2.7	235.3	輝石安山岩	※
131	36	SH3	3	勾玉		3.3	2.3	0.9	7.6	松脂岩	※
132	36	P17	1	スクレイパー	c類	3.3	2.7	0.6	5.4	黒曜石	
134	36	P19	1	石鏃	c類	1.5	1.0	0.1	0.2	黒曜石	
135	36	P24	1	石鏃	a類	(1.7)	1.0	0.3	0.5	黒曜石	破損
136	36	P24	2	石鏃	—	(2.1)	1.3	0.4	1.1	黒曜石	破損
137	36	P24	1	石鏃	a類	(1.5)	1.7	0.4	1.0	黒曜石	破損
141	37	P36	1	たたき石		14.4	7.2	5.4	840.0	輝石安山岩	※ 塩谷丸山か?
142	37	P36	1	すり石		15.7	7.2	3.4	620.0	輝石安山岩	※
143	37	P39	1	石鏃	a類	1.6	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
144	37	P41SP2	1	石核	a類	8.4	2.0	2.8	136.1	黒曜石	
145	37	P43	3	石鏃	a類	1.7	(1.4)	0.3	0.5	頁岩	破損
147	37	SP80	1	石槍	a類	4.5	2.5	0.9	7.0	黒曜石	
148	37	FC6	II	石鏃	c類	2.6	1.3	0.4	1.1	黒曜石	
149	37	FC6	II	石鏃	a類	(1.8)	(1.5)	(0.2)	0.6	黒曜石	破損
150	37	FC9	II	石鏃	b類	(1.6)	1.4	0.3	0.6	黒曜石	破損

別表10 遺構外出土土器・土製品・磁器観察表

(調査年：H30=平成30年度)

報告No.	図版No.	調査年度	グリッド	層位	部位	時代	時期	型式/器種/産地	分類		備考
									群	類	
151	37	H30	G-15	II	口縁部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
152	37	H30	K-13d	II	底部	縄文	早期	東釧路III式	I群	b-1類	
153	37	H30	C-17	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	底部付近
154	37	H30	C-17	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	赤色顔料付着
155	37	H30	F-16a	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
156	37	H30	F-16a	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
157	37	H30	E-16a	表上	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
158	37	H30	C-17b	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
159	37	H30	E-16b	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
160	37	H30	I-14b	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
161	37	H30	F-15a	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
162	37	H30	F-15	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
163	37	H30	I-12	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
164	37	H30	F-16	攪乱	胴部	縄文	前期	中野式	II群	b類	
165	37	H30	H-14c	II	胴部	縄文	前期	—	II群	—	
166	37	H30	F-16	攪乱	胴部	縄文	前期	—	II群	—	
167	37	H30	H-13b	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
168	37	H30	G-15d	II	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
169	37	H30	G-15	II	胴部	縄文	前期	中野式	II群	b類	
170	38	H30	F-15	II	胴部	縄文	前期	—	II群	—	
171	38	H30	E-16d	II	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
172	38	H30	G-15	II	口縁部	縄文	中期	ノダツプII式	III群	c類	
173	38	H30	E-16c	II	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
174	38	H30	L-13	II	口縁部	縄文	中期	北筒式	III群	a類	
175	38	H30	F-16	攪乱	胴部	縄文	早期	東釧路IV式	I群	b-3類	
176	38	H30	F-16	攪乱	胴部	縄文	中期	—	III群	—	
177	38	H30	J-13	II	胴部	縄文	前期	中野式	II群	b類	
178	38	H30	D-14a	II	口縁部	縄文	後期	余市式	IV群	a類	
179	38	H30	E-16d	II	口縁部	縄文	後期	手箱式	IV群	c類	
180	38	H30	G-15	II	胴部	縄文	後期	タブコブ式	IV群	b類	
181	38	H30	G-15	II	胴部	縄文	後期	タブコブ式	IV群	b類	
182	38	H30	F-15	表上	胴部	縄文	後期	タブコブ式	IV群	b類	
183	38	H30	F-15c	II	胴部	縄文	後期	タブコブ式	IV群	b類	
184	38	H30	E-16d	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
185	38	H30	L-13	II	口縁部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
186	38	H30	F-16a	II	胴部	縄文	晩期	タンネットウI式	V群	—	
187	38	H30	J-14	II	口縁部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
188	38	H30	L-10	II	口縁部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
189	38	H30	J-14a	II	口縁部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
190	38	H30	F-15d	II	胴部	縄文	晩期	タンネットウI式	V群	—	
191	38	H30	J-14	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
192	38	H30	J-13c	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
193	38	H30	J-14a	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
194	38	H30	K-13b	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
195	38	H30	G-15	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
196	38	H30	F-16	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
197	38	H30	F-16a	表上	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
198	38	H30	E・F-16	II	胴部	続縄文	—	恵山式	VI群	a類	
199	38	H30	G-15	II	口縁部	擦文	—	—	VII群	a類	
200	38	H30	F-16a	II	口縁部	擦文	—	—	VII群	a類	
201	38	H30	F-16a	II	胴部	擦文	—	—	VII群	a類	

報告No.	図版No.	調査年度	グリッド	層位	部位	時代	時期	型式/器種/産地	分類		備考
									群	類	
202	38	H30	F-15	II	胸部	擦文	-	-	VII群	a類	
203	38	H30	L-12b	攪乱	胸部	擦文	-	-	VII群	a類	
204	38	H30	J-13	表土	胸部	擦文	-	-	VII群	a類	
205	38	H30	E-16c	II	胸部	擦文	-	-	VII群	a類	
206	38	H30	F-16a	II	胸部	擦文	-	-	VII群	a類	
207	38	H30	G-14	攪乱	-	擦文	-	-			紡錘車(貫通孔直径1.0cm 各所に赤色顔料残る)
208	38	H30	C-17	表土	口縁部	近世	19C	肥前	VII群	-	染付碗 端反形碗
209	38	H30	J・K-14	表土	口縁部	近代	大正元	有田?	VII群	-	染付碗 銅版転写
210	38	H30	J・K-14	表土	底部	近世	19C	肥前	VII群	-	染付皿

別表11 遺構外出土石器・石製品観察表

調査年: H30=平成30年度 H31=平成31年度 計測値:()内は残存値 備考:※(松田義章氏石質鑑定)

報告No.	図版No.	調査年度	グリッド	層位	器種	分類	計測値(cm)			重量(g)	石質	備考
							長さ	幅	厚さ			
211	39	H31	J-4	攪乱	石鏃	a類	2.1	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
212	39	H30	D-16d	II	石鏃	a類	(1.7)	1.3	0.3	0.6	黒曜石	破損
213	39	H30	F-15c	II	石鏃	a類	(1.4)	1.4	(0.3)	16.7	黒曜石	破損
214	39	H31	J-5	攪乱	石鏃	a類	(1.2)	1.5	(0.2)	0.4	黒曜石	破損
215	39	H31	E-9	攪乱	石鏃	a類	2.1	1.7	0.4	1.0	チャート	
216	39	H31	L-8b	II d	石鏃	a類	(2.1)	(1.2)	(0.3)	0.6	黒曜石	破損
217	39	H30	J-13c	II	石鏃	a類	(1.5)	1.8	(0.4)	1.1	黒曜石	破損
218	39	H31	G-10a	I'	石鏃	a類	(1.7)	1.6	0.3	0.6	黒曜石	破損
219	39	H30	E-16b	II	石鏃	a類	1.8	1.1	0.2	0.5	黒曜石	
220	39	H31	I-11b	II	石鏃	a類	2.0	1.2	0.2	0.5	黒曜石	
221	39	H30	D-16c	II	石鏃	a類	2.1	1.5	0.4	0.8	黒曜石	
222	39	H31	L-5c	II d	石鏃	a類	3.0	(1.5)	0.4	1.4	黒曜石	破損
223	39	H30	I-14b	II	石鏃	a類	(3.2)	1.6	0.4	1.6	黒曜石	破損
224	39	H30	J-13	I	石鏃	b類	1.6	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
225	39	H31	I-11c	II	石鏃	b類	2.0	1.4	0.2	0.5	黒曜石	
226	39	H30	D-16c	II	石鏃	b類	1.9	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
227	39	H31	M-8a	III	石鏃	b類	2.2	(1.7)	0.3	0.7	黒曜石	破損
228	39	H31	J-10c	III	石鏃	b類	(1.9)	1.5	0.3	0.7	黒曜石	破損
229	39	H31	I-5	攪乱	石鏃	b類	(2.0)	1.6	0.3	0.7	黒曜石	破損
230	39	H31	J-4	攪乱	石鏃	b類	2.8	1.6	0.3	1.1	黒曜石	
231	39	H31	E-10c	II	石鏃	b類	(2.1)	(1.5)	(0.3)	0.7	黒曜石	破損
232	39	H31	J-4	攪乱	石鏃	b類	(2.5)	1.8	0.3	1.1	黒曜石	破損
233	39	H31	D-8	攪乱	石鏃	b類	1.8	1.1	0.3	0.6	黒曜石	
234	39	H31	J-4	攪乱	石鏃	b類	4.3	1.3	0.4	2.0	黒曜石	
235	39	H31	J-6c	II b	石鏃	b類	(3.4)	1.6	0.3	1.9	黒曜石	破損
236	39	H30	J-13c	II	石鏃	c類	1.4	0.7	0.2	0.2	黒曜石	
237	39	H30	F-16d	II	石鏃	c類	2.0	1.1	0.4	0.8	黒曜石	
238	39	H31	J-6a	I'	石鏃	c類	(2.2)	(1.0)	0.3	0.4	黒曜石	破損
239	39	H30	F-15a	II	石鏃	c類	2.4	1.0	0.3	0.6	黒曜石	
240	39	H31	D-9	攪乱	石鏃	c類	(2.5)	(1.1)	0.3	0.8	黒曜石	破損
241	39	H30	F-16a	II	石鏃	c類	(3.3)	1.3	0.4	1.4	黒曜石	破損
242	39	H30	C-17b	II	石鏃	c類	3.0	1.8	0.3	1.4	黒曜石	
243	39	H31	K-5c	II a	石鏃	d類	(1.7)	1.2	0.3	0.5	黒曜石	破損
244	39	H30	D-15d	表土	石鏃	d類	(1.7)	1.1	0.4	0.5	黒曜石	破損
245	39	H31	K-6a	II a	石鏃	d類	(1.6)	1.0	0.3	0.5	黒曜石	破損
246	39	H31	F-6	攪乱	石鏃	d類	(2.3)	(1.3)	0.3	0.7	黒曜石	破損
247	39	H31	J-4	攪乱	石鏃	d類	(2.6)	1.5	0.3	1.0	黒曜石	破損
248	39	H31	J-5b	I'	石鏃	d類	3.0	1.4	0.4	1.3	黒曜石	
249	39	H31	L-8b	II a	石鏃	d類	3.1	1.5	0.5	1.4	黒曜石	
250	39	H31	J-5	攪乱	石鏃	d類	(2.3)	1.2	0.3	1.0	黒曜石	破損

報告 No.	図版 No.	調査 年度	グリッド	層位	器 種	分類	計測値 (cm)			重量 (g)	石 質	備 考
							長さ	幅	厚さ			
251	39	H31	L-4c・5b	I'	石鏃	d類	5.1	1.8	0.5	2.8	黒曜石	
252	39	H30	I-14a	II	石鏃	-	(1.4)	(0.8)	(0.2)	0.3	黒曜石	破損
253	39	H30	J-13c	II	石鏃	-	(2.3)	(1.5)	(0.4)	0.9	黒曜石	破損
254	39	H30	E-16b	II	石鏃	-	(3.8)	1.6	0.3	1.4	頁岩	破損
255	39	H31	G-12a	攪乱	石鏃	-	(2.4)	1.4	0.3	1.0	黒曜石	破損
256	39	H30	E-16b	II	石槍	a類	4.0	2.2	0.8	4.9	黒曜石	
257	39	H31	K-5b	I'	石槍	a類	4.4	1.9	0.8	4.8	黒曜石	
258	39	H30	D-16c	II	石槍	a類	4.5	2.0	0.8	5.4	黒曜石	
259	40	H30	D-17	II	石槍	b類	11.3	3.9	1.1	40.7	黒曜石	
260	40	H30	I-10	表土	石槍・ナイフ	c類	(5.1)	(2.7)	(0.7)	6.9	黒曜石	破損
261	40	H30	L-12c	II	石槍・ナイフ	c類	(1.9)	(2.2)	(0.5)	1.6	黒曜石	破損
262	40	H30	F-15c	II	石槍・ナイフ	c類	(3.3)	(2.1)	(0.5)	4.5	頁岩	破損
263	40	H31	G-12c	I'	石槍・ナイフ	c類	(1.9)	2.1	0.5	3.4	黒曜石	破損
264	40	H31	D-11	攪乱	石槍・ナイフ	c類	(2.6)	(1.8)	0.5	1.9	黒曜石	破損
265	40	H30	J-13c	II	石槍・ナイフ	c類	(2.1)	(2.4)	(0.5)	2.2	黒曜石	破損
266	40	H30	D-17	II	石鏃	a類	2.3	1.2	0.4	0.9	黒曜石	
267	40	H30	D-16a	表土	石鏃	b類	2.5	1.3	0.6	1.9	頁岩	
268	40	H30	I-13c	II	石鏃	b類	(2.4)	3.2	1.1	6.0	頁岩	破損
269	40	H30	F-14b	II	石鏃	a類	4.5	5.2	1.0	14.8	黒曜石	
270	40	H30	-	攪乱	石鏃	d類	3.6	1.9	0.6	4.4	黒曜石	
271	40	H30	H-15	II	石鏃	c類	(5.5)	1.8	1.4	11.9	黒曜石	破損
272	40	H30	D-16b	表土	石鏃	a類	6.6	2.5	1.5	19.5	黒曜石	
273	40	H30	E-15d	II	石鏃	a類	4.8	2.5	1.4	13.3	黒曜石	未成品
274	40	H31	H-10	攪乱	ナイフ	a類	(3.5)	(2.4)	(0.7)	4.3	黒曜石	破損
275	40	H30	C-17	II	ナイフ	a類	4.9	2.9	1.0	12.3	黒曜石	
276	40	H30	D-15b	表土	ナイフ	a類	2.5	1.2	0.3	0.8	黒曜石	
277	40	H31	E-10c	II	ナイフ	a類	3.3	1.9	0.4	2.1	黒曜石	
278	40	H31	L-7a	II d	ナイフ	a類	(4.7)	2.7	0.7	8.2	黒曜石	破損
279	41	H30	E-16b	II	ナイフ	a類	4.4	2.9	0.6	6.4	頁岩	
280	41	H30	E-15a	I	ナイフ	a類	5.2	2.2	0.5	5.6	頁岩	
281	41	H31	E-12d	攪乱	ナイフ	a類	5.6	2.5	0.8	9.8	頁岩	
282	41	H31	K-6b	I'	ナイフ	a類	4.5	1.7	0.7	4.6	黒曜石	
283	41	H31	-	表土	ナイフ	a類	5.5	2.0	0.9	7.2	頁岩	
284	41	H31	E-11c	攪乱	ナイフ	a類	5.7	2.4	0.6	9.6	頁岩	
285	41	H30	F-14	攪乱	ナイフ	a類	(5.1)	3.2	0.5	7.2	頁岩	破損
286	41	H31	I-5	攪乱	ナイフ	a類	(4.5)	(3.0)	(0.6)	5.5	頁岩	破損
287	41	H31	K-9d	攪乱	ナイフ	a類	(3.4)	(2.6)	(0.6)	4.4	頁岩	破損
288	41	H30	F-16a	攪乱	ナイフ	a類	(3.7)	(2.7)	(0.4)	4.0	頁岩	破損
289	41	H31	E-11b	攪乱	ナイフ	a類	(2.5)	(2.8)	(0.6)	3.6	頁岩	破損
290	41	H31	K-9b	攪乱	ナイフ	a類	9.7	2.8	1.1	28.4	頁岩	
291	41	H31	L-10c	III	ナイフ	a類	4.5	1.3	0.6	2.2	黒曜石	
292	41	H30	D-17a	II	スクレイパー	a類	(2.3)	2.8	(0.7)	3.8	黒曜石	破損
293	41	H30	D-16b	表土	スクレイパー	a類	5.5	3.0	0.8	17.3	頁岩	
294	41	H31	I-4	攪乱	スクレイパー	a類	4.3	3.4	0.7	10.3	頁岩	
295	41	H30	F-15	II	スクレイパー	a類	(5.6)	3.4	0.9	16.5	頁岩	破損
296	42	H30	G-14	攪乱	スクレイパー	a類	(2.9)	(5.0)	(0.7)	9.9	黒曜石	破損
297	42	H30	J-13	攪乱	スクレイパー	a類	3.7	1.4	0.6	3.0	黒曜石	
298	42	H31	F-11a	II d	スクレイパー	a類	4.4	2.7	0.7	9.3	黒曜石	
299	42	H31	D-8	攪乱	スクレイパー	a類	5.0	1.9	0.7	6.3	黒曜石	
300	42	H31	F-11	攪乱	スクレイパー	a類	4.7	2.3	1.0	9.9	黒曜石	
301	42	H31	-	表土	スクレイパー	a類	5.5	2.1	0.8	10.7	黒曜石	
302	42	H31	I-6d	I'	スクレイパー	a類	(6.4)	3.0	1.1	17.0	頁岩	破損
303	42	H31	D-14d	I'	スクレイパー	a類	(3.9)	5.7	1.1	19.5	頁岩	破損
304	42	H31	I-5	攪乱	スクレイパー	a類	3.9	4.6	1.5	20.2	黒曜石	
305	42	H30	D-15b	表土	スクレイパー	a類	(3.3)	(4.0)	1.3	12.8	黒曜石	破損
306	42	H30	C-17	II	スクレイパー	a類	4.7	4.6	0.3	12.0	黒曜石	

報告 No.	図版 No.	調査 年度	グリップト	屑位	器 種	分類	計測値 (cm)			重量 (g)	石 質	備 考
							長さ	幅	厚さ			
307	42	H31	L-8	Ⅱa	スクレイパー	b類	1.5	1.1	0.4	0.9	黒曜石	
308	42	H31	I-3	攪乱	スクレイパー	b類	1.3	1.2	0.4	1.1	黒曜石	
309	42	H30	H-12c	表土	スクレイパー	b類	2.6	1.3	0.5	1.6	黒曜石	
310	42	H30	—	表土	スクレイパー	b類	2.5	1.5	0.6	2.2	黒曜石	
311	42	H30	J-12c	Ⅱ	スクレイパー	b類	2.9	2.2	1.0	5.0	黒曜石	
312	43	H31	C-14	表土	スクレイパー	b類	2.5	1.9	0.5	1.7	黒曜石	
313	43	H30	C-17	Ⅱ	スクレイパー	b類	2.3	3.1	0.6	3.7	黒曜石	
314	43	H30	D-16a	表土	スクレイパー	a類	2.2	1.9	0.8	2.8	黒曜石	
315	43	H31	J-5b	Ⅱb	スクレイパー	a類	3.6	3.0	1.9	18.1	黒曜石	
316	43	H30	H-14	—	スクレイパー	a類	3.5	3.7	2.0	23.6	黒曜石	
317	43	H30	J-13a	表土	スクレイパー	a類	2.7	4.2	1.8	18.3	黒曜石	
318	43	H31	I-4	攪乱	スクレイパー	a類	5.3	2.7	1.2	14.8	黒曜石	
319	43	H31	—	表土	スクレイパー	a類	5.4	2.7	1.4	20.5	黒曜石	
320	43	H30	C-15c	表土	スクレイパー	a類	5.3	3.4	1.8	26.2	黒曜石	
321	43	H31	I-6	攪乱	スクレイパー	a類	(2.7)	1.3	0.6	2.1	黒曜石	破損
322	43	H30	J-13	表土	スクレイパー	a類	2.4	1.9	1.1	5.3	黒曜石	
323	43	H30	G-15	Ⅱ	スクレイパー	a類	2.7	1.9	0.8	4.3	黒曜石	
324	43	H30	K-12b	Ⅱ	スクレイパー	a類	(3.9)	2.4	1.1	10.3	黒曜石	破損
325	43	H31	—	表土	スクレイパー	a類	4.6	2.9	1.0	14.0	黒曜石	
326	43	H31	L-8c	I'	スクレイパー	a類	(5.7)	2.4	1.7	18.7	黒曜石	破損
327	43	H31	E-12d	I'	スクレイパー	a類	3.6	3.7	0.8	9.5	メノウ	
328	43	H30	G-15	Ⅱ	スクレイパー	a類	3.4	2.9	0.9	7.6	黒曜石	
329	43	H31	I-3	攪乱	スクレイパー	a類	3.3	2.7	1.0	10.5	黒曜石	
330	43	H30	D-17a	Ⅱ	スクレイパー	a類	3.8	3.3	0.7	9.0	貞岩	
331	43	H30	L-13	Ⅱ	スクレイパー	a類	3.8	2.8	1.0	8.8	黒曜石	
332	43	H30	D-15d	表土	スクレイパー	a類	4.6	2.3	0.7	9.7	貞岩	
333	44	H30	D-16c	Ⅱ	スクレイパー	a類	4.7	3.5	1.5	23.7	チャート	
334	44	H30	D-15a	表土	スクレイパー	a類	6.4	4.0	1.5	41.2	貞岩	
335	44	H30	H-14c	Ⅱ	スクレイパー	a類	6.6	3.0	1.1	24.1	貞岩	
336	44	H30	D・E-14	攪乱	模形石器		2.6	2.5	0.7	4.6	黒曜石	
337	44	H31	I-5	攪乱	模形石器		4.1	2.6	0.9	8.7	黒曜石	
338	44	H30	E-13d	Ⅱ	模形石器		4.7	4.9	1.7	24.2	黒曜石	
339	44	H30	E-16d	Ⅱ	凹面調整石器		4.9	2.6	1.0	11.1	黒曜石	
340	44	H30	F-16a	Ⅱ	凹面調整石器		4.0	5.3	1.4	26.8	黒曜石	
341	44	H30	I-13	Ⅱ	スクレイク		1.9	1.9	0.4	1.5	黒曜石	
342	44	H30	C-17	Ⅱ	スクレイク		2.3	1.5	0.4	1.1	黒曜石	
343	44	H31	I-3	攪乱	スクレイク		3.7	3.0	0.6	6.9	黒曜石	
344	44	H30	G-15d	Ⅱ	スクレイク		(4.2)	(2.6)	0.4	4.6	黒曜石	破損
345	44	H31	E-11d	Ⅱ	スクレイク		4.8	2.0	0.5	4.5	黒曜石	
346	44	H30	C-15c	表土	スクレイク		4.3	2.7	0.6	5.4	黒曜石	
347	44	H30	F-16	Ⅱ	スクレイク		(4.4)	(3.4)	(1.2)	7.7	黒曜石	破損
348	45	H30	D-15b	表土	スクレイク		5.0	3.2	1.8	27.2	黒曜石	
349	45	H30	E-15	Ⅱ	スクレイク		6.7	3.8	0.9	17.3	黒曜石	
350	45	H31	—	表土	スクレイク		3.7	3.4	0.8	11.8	黒曜石	
351	45	H30	E-16	Ⅱ	スクレイク		5.2	5.1	1.1	22.3	黒曜石	
352	45	H30	C-17	Ⅱ	スクレイク		5.4	5.6	1.7	34.7	黒曜石	
353	45	H30	H-14a	Ⅱ	スクレイク		2.4	6.2	0.9	9.0	貞岩	
354	45	H30	G-14	攪乱	スクレイク		5.8	7.4	1.6	66.9	貞岩	
355	45	H31	D-9	攪乱	石核	b類	5.9	4.1	3.2	80.2	黒曜石	
356	46	H30	F-15	表土	原石		7.3	6.8	3.2	125.3	黒曜石	
357	46	H30	I-14	Ⅱ	原石		3.3	3.0	2.3	30.7	メノウ?	
358	46	H31	—	表土	原石		5.2	3.6	2.0	45.1	メノウ?	
359	46	H30	F-16d	Ⅱ	石斧		(5.8)	4.4	1.3	55.3	緑色硬質貞岩	※破損
360	46	H30	F-15c	Ⅱ	石斧		(8.2)	5.6	4.1	240.9	輝石安山岩	※破損
361	46	H31	K-5b	Ⅲa	石斧		(6.6)	4.7	2.3	107.3	緑色硬質貞岩	※破損
362	46	H30	D-17a	Ⅱ	石斧		7.5	3.6	0.7	32.7	緑泥片岩	※日高・高牧

報告No.	図版No.	調査年度	グリッド	層位	器種	分類	計測値 (cm)			重量 (g)	石質	備考
							長さ	幅	厚さ			
363	46	H31	D-13a	II	石斧		(7.3)	5.4	3.5	161.2	輝石安山岩	※ 破損
364	46	H30	—	残土	砥石		11.0	5.1	3.7	339.4	安山岩	
365	46	H30	F-15c	表土	砥石		14.0	4.8	3.1	376.7	輝石安山岩	※
366	46	H30	H-14	風倒木	砥石		12.5	7.1	2.7	384.0	珪岩	※
367	46	H31	L-5d	II d	砥石		13.2	7.2	3.8	620.0	輝石安山岩	※ 角閃石が入る
368	46	H30	D-17b	II	砥石		5.9	3.4	2.3	26.4	凝灰岩	※ 緑色?
369	46	H30	D-16c	II	砥石		7.1	4.0	1.6	52.9	輝石安山岩	※
370	46	H30	E-15	表土	砥石		(6.6)	5.6	2.0	97.5	砂岩	※ 破損
371	47	H30	H-14	風倒木	砥石		9.2	6.0	3.5	311.7	輝石安山岩	※
372	47	H31	J-3	攪乱	砥石		12.4	11.2	3.7	730.0	安山岩	
373	47	H30	E-15b	II	砥石		8.6	7.5	4.1	160.3	凝灰岩?	※ 泥岩の可能性あり
374	47	H30	F-15b	II	砥石		(7.0)	9.1	2.3	167.8	輝石安山岩	※ 破損
375	47	H30	D-14a	II	砥石		16.2	6.3	8.3	800.0	流紋岩質凝灰岩	※
376	47	H31	E-12d	攪乱	砥石		11.6	11.1	7.1	740.0	安山岩	
377	47	H31	K-5b	III a	砥石		17.0	12.7	6.2	1840.0	輝石安山岩	※
378	47	H31	J-6c	II d	砥石		(15.6)	(10.9)	7.6	1290.0	輝石安山岩	※ 破損
379	48	H30	D-14	攪乱	砥石		18.3	(13.7)	11.5	2000.0	流紋岩	接合 破損
380	48	H30	E-16d	II	たたき石・すり石		7.4	7.2	3.4	229.7	流紋岩質珪岩	※
381	48	H30	H-14	風倒木	たたき石・すり石		(10.8)	7.1	4.4	457.5	輝石安山岩	※ 破損
382	48	H31	M-3	表土	たたき石		10.2	7.7	3.5	520.0	硬質頁岩	
383	48	H31	I-3	攪乱	すり石		(4.5)	6.5	3.0	149.4	安山岩	破損
384	48	H31	E-13c	II	すり石		(3.0)	(5.1)	1.4	21.7	輝石安山岩	※ 破損
385	48	H31	D-13a	II	すり石		(5.7)	4.4	2.5	80.3	輝石安山岩	※ 破損
386	48	H31	—	排土	くぼみ石		7.1	8.7	3.6	192.5	安山岩	
387	48	H30	F-15a	II	くぼみ石		(8.0)	(11.0)	3.9	239.7	凝灰岩?	※ 破損
388	48	H31	F-8d	III	くぼみ石		(11.7)	9.2	4.0	620.0	輝石安山岩	※ 破損
389	49	H30	G-13b	表土	石皿		12.0	9.0	6.4	1060.0	安山岩	
390	49	H31	I-4	攪乱	石皿		(14.5)	12.1	4.7	1010.0	安山岩	破損
391	49	H30	E-16c	表土	石皿		16.7	13.7	5.5	1680.0	輝石安山岩	※
392	49	H31	L-6c	II a	台石		(17.0)	18.4	4.5	2500.0	輝石安山岩	※ 破損
393	49	H31	I-8a	攪乱	石皿・台石		(16.6)	19.6	9.3	3000.0	安山岩	破損
394	50	H30	E-16	II	石製品	石棒?	(14.4)	4.9	3.6	388.5	輝石安山岩	※ 破損 天狗山?
395	50	H31	J-4	攪乱	石製品		(4.2)	(3.7)	2.6	59.0	玄武岩	※ 破損
396	50	H30	E-16d	II	石製品		(4.2)	4.2	2.1	45.4	輝石安山岩	※ 破損
397	50	H30	F-14	II	球状礫		3.5	3.2	3.3	47.9	輝石安山岩	※

別表12 遺構外出土金属製品・ガラス製品観察表

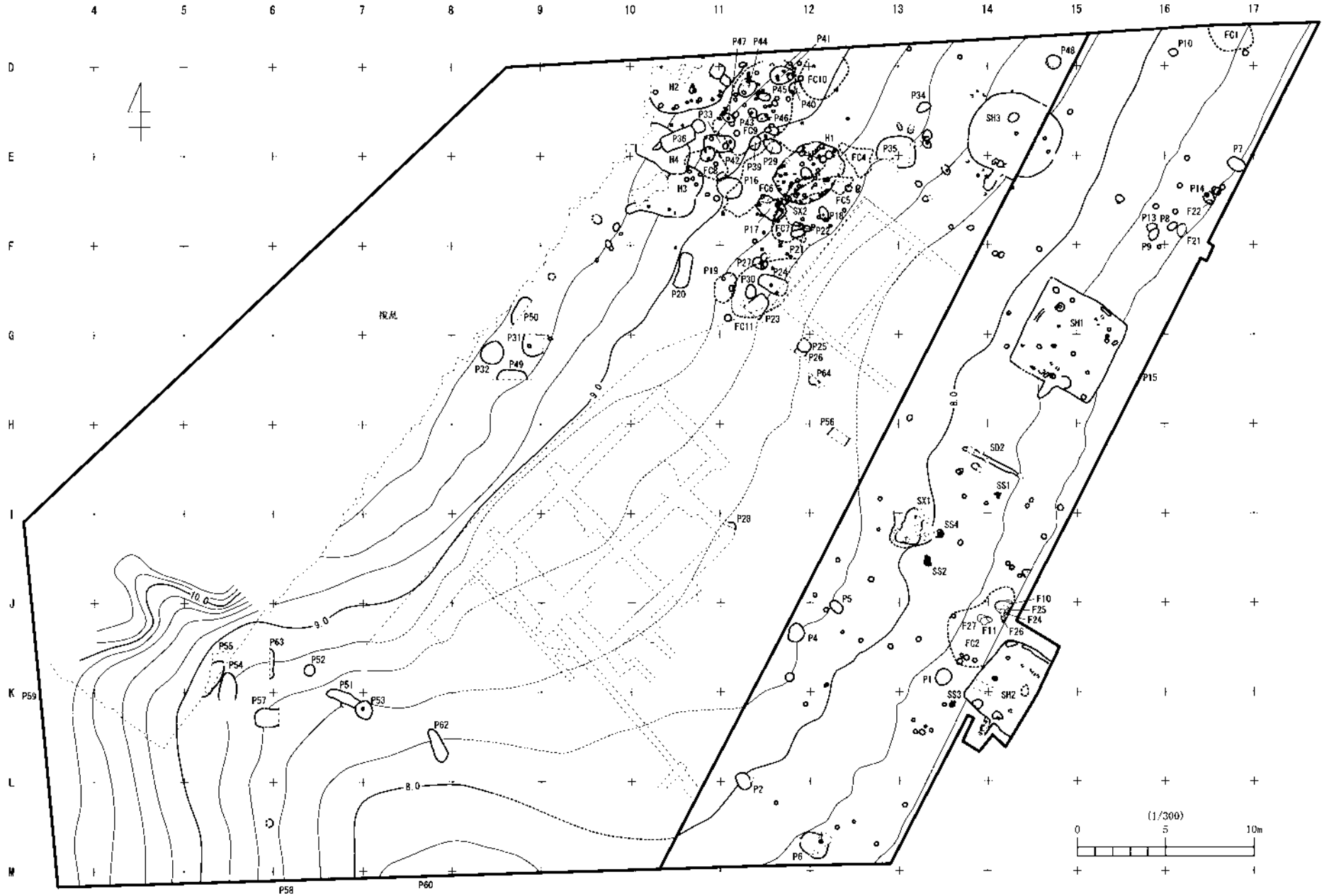
調査年：H30=平成30年度 H31=平成31年度 計測値：()内は残存値

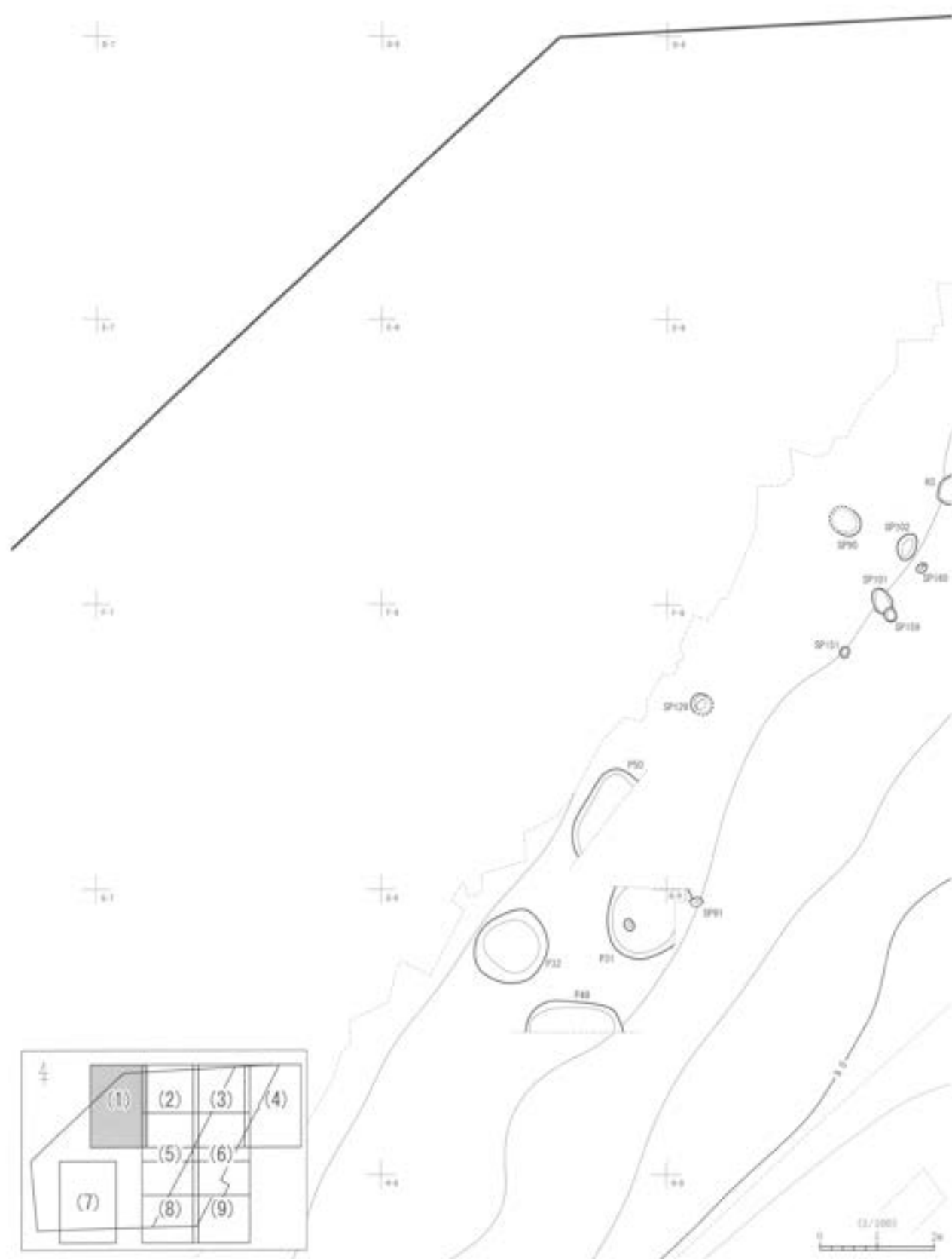
報告No.	図版No.	調査年度	グリッド	層位	器種分類	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考	
						長さ	幅	厚さ				
398	50	H31	J-10d	攪乱	古銭	外縁外径 a	2.4	外縁外径 b	2.5	2.28	銅	北宋銭 至道元寶 初鑄995年 貞書、同銭
						外縁内径 a	1.8	外縁内径 b	1.8			
						内縁外径 a	0.8	内縁外径 b	0.8			
						内縁内径 a	0.6	内縁内径 b	0.6			
399	50	H30	E-16d	II	古銭	外縁外径 a	2.8	外縁外径 b	2.8	4.46	貞鍮	寛永通寶 四文銭 「俯水」11波
						外縁内径 a	2.1	外縁内径 b	2.1			
						内縁外径 a	0.8	内縁外径 b	0.9			
						内縁内径 a	0.6	内縁内径 b	0.6			
400	50	H30	K-14a	II	煙管	4.6	0.1	10.2	52.90	銅	雁首	
401	50	H31	J-5d	I'	煙管	(7.3)	(1.3)	(7.4)	9.73	銅	吸い口	
402	50	H30	K-14a	II	ボタン	1.8	1.7	8.8	0.70	銅?		
403	50	H31	K-5a	I'	蜻蛉玉	(0.9)	1.0	(9.5)	1.12	ガラス		

版



图版 1 遺構配置図

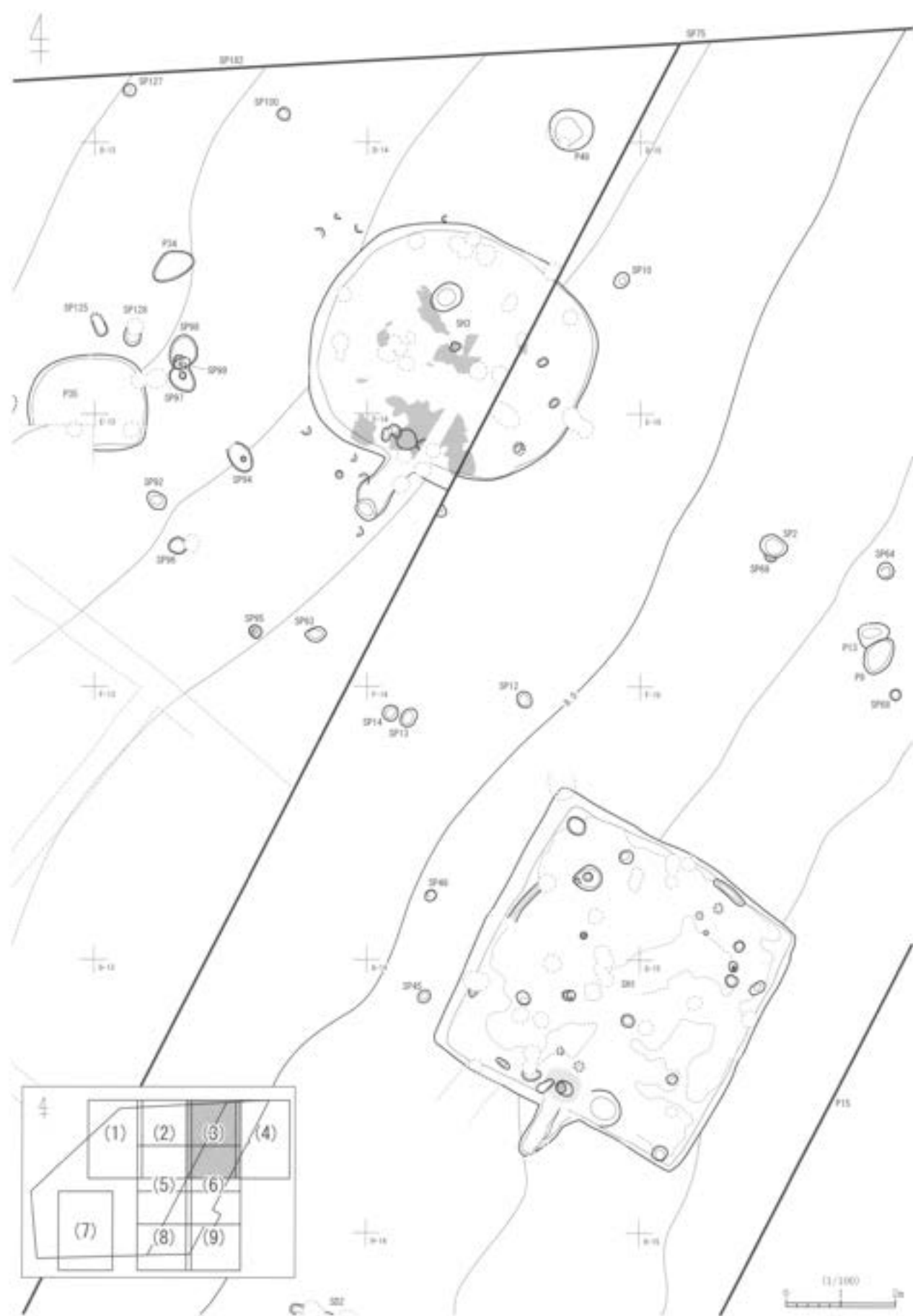




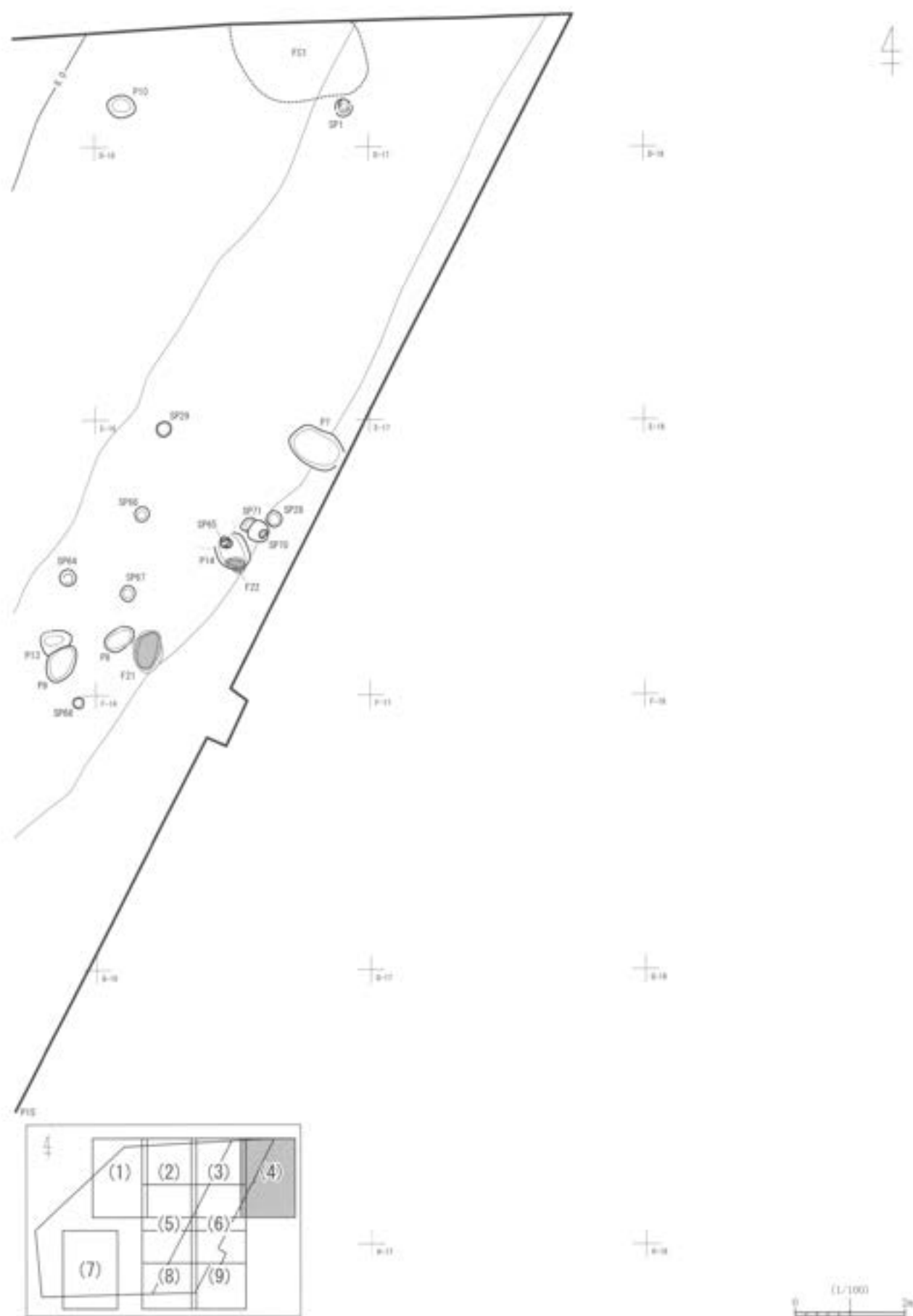
図版2 遺構分割図(1)



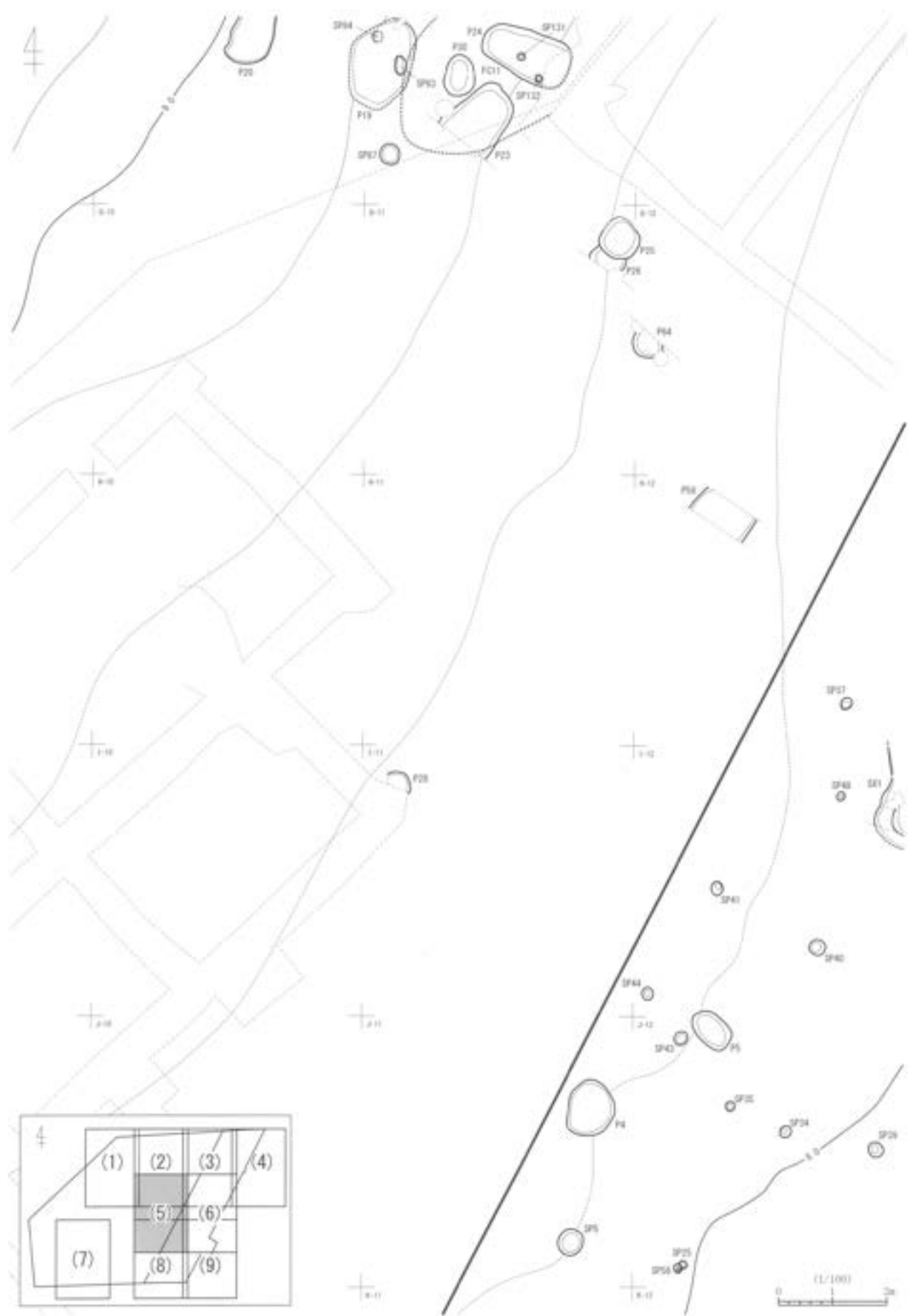
図版 3 遺構分割図 (2)



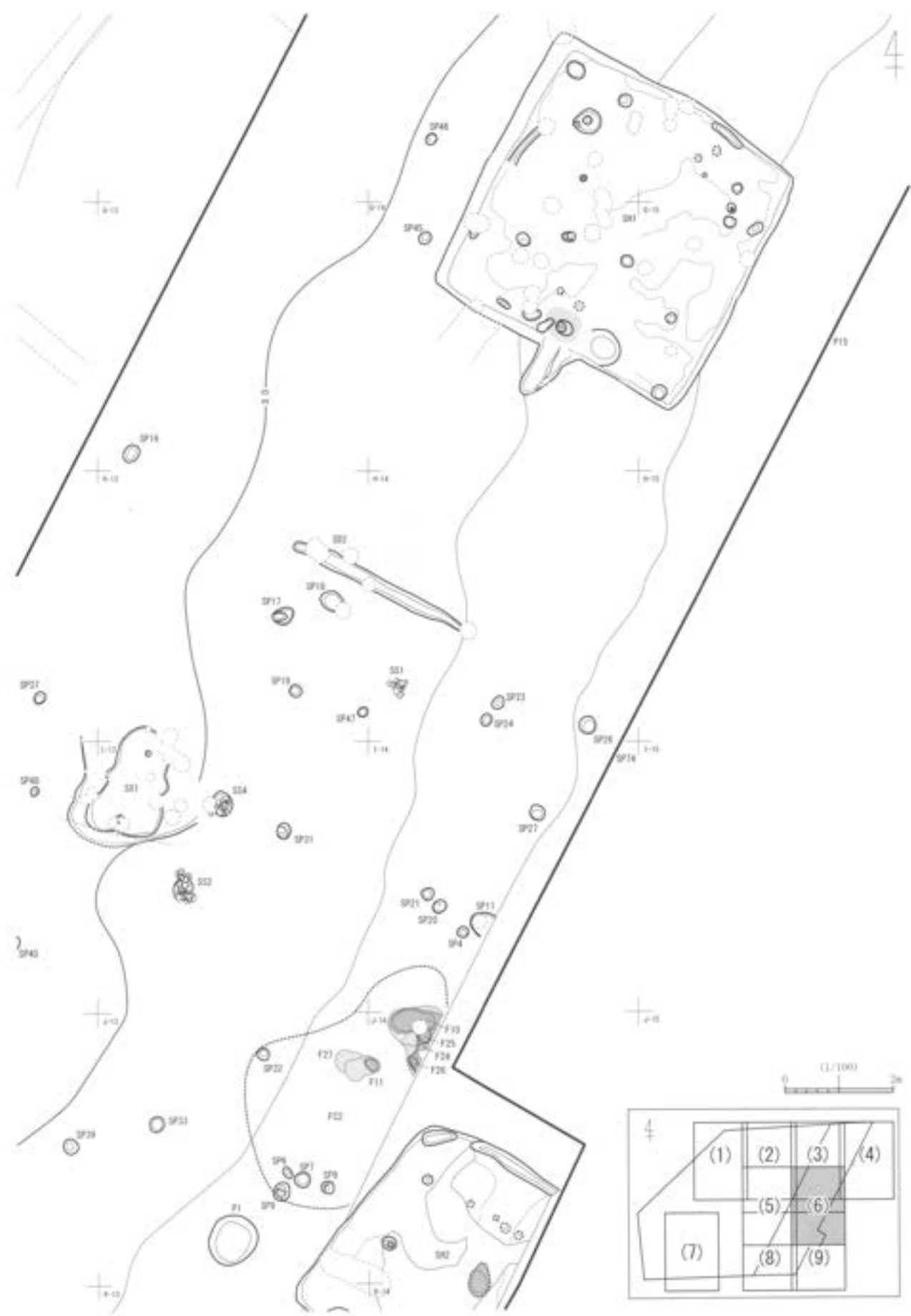
図版4 遺構分割図(3)



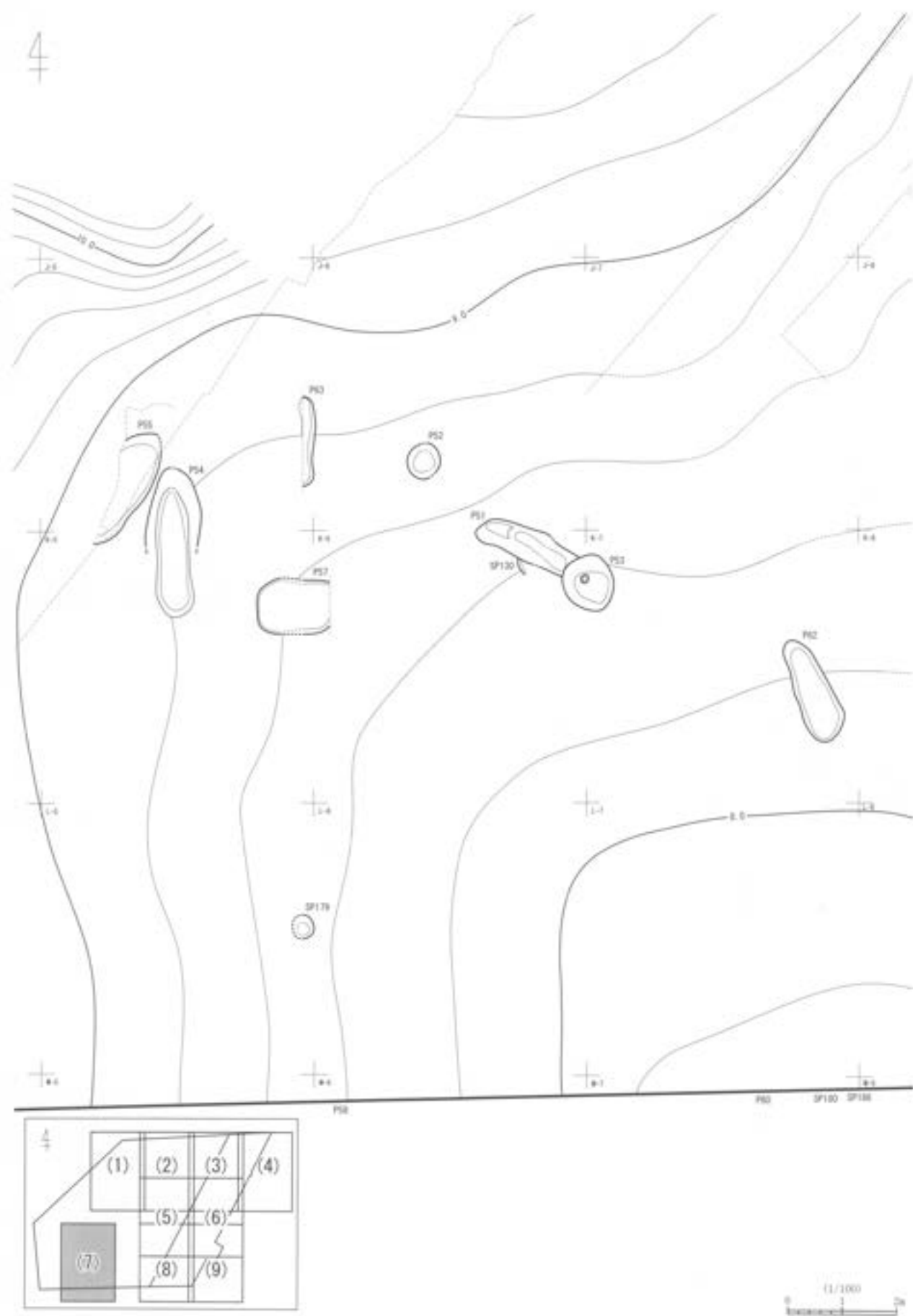
図版5 遺構分割図 (4)



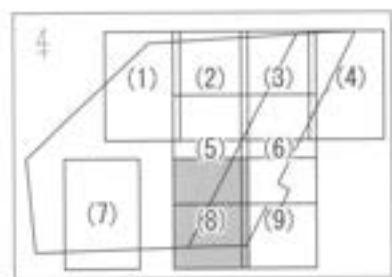
図版6 遺構分割図(5)



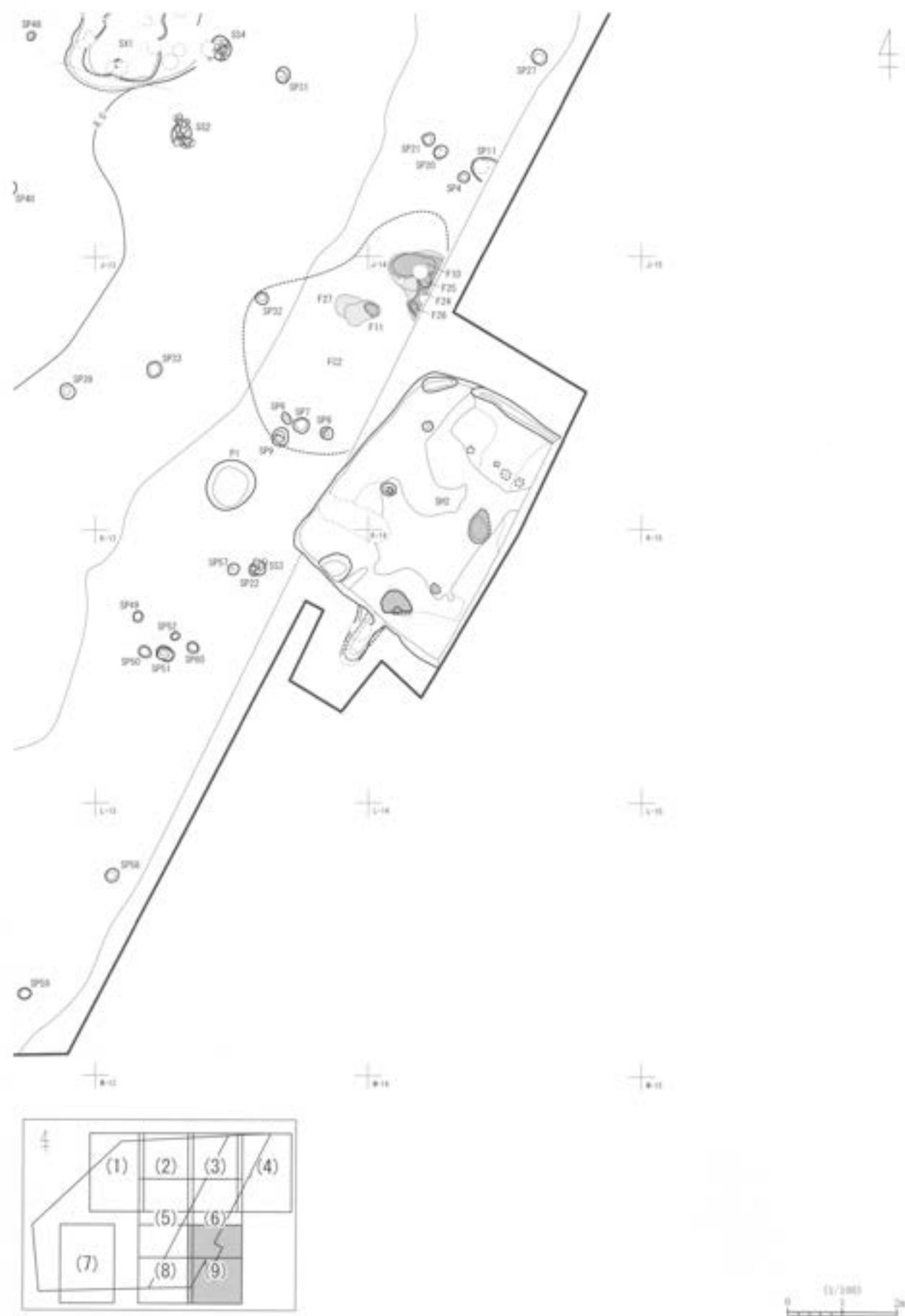
図版7 遺構分割図(6)



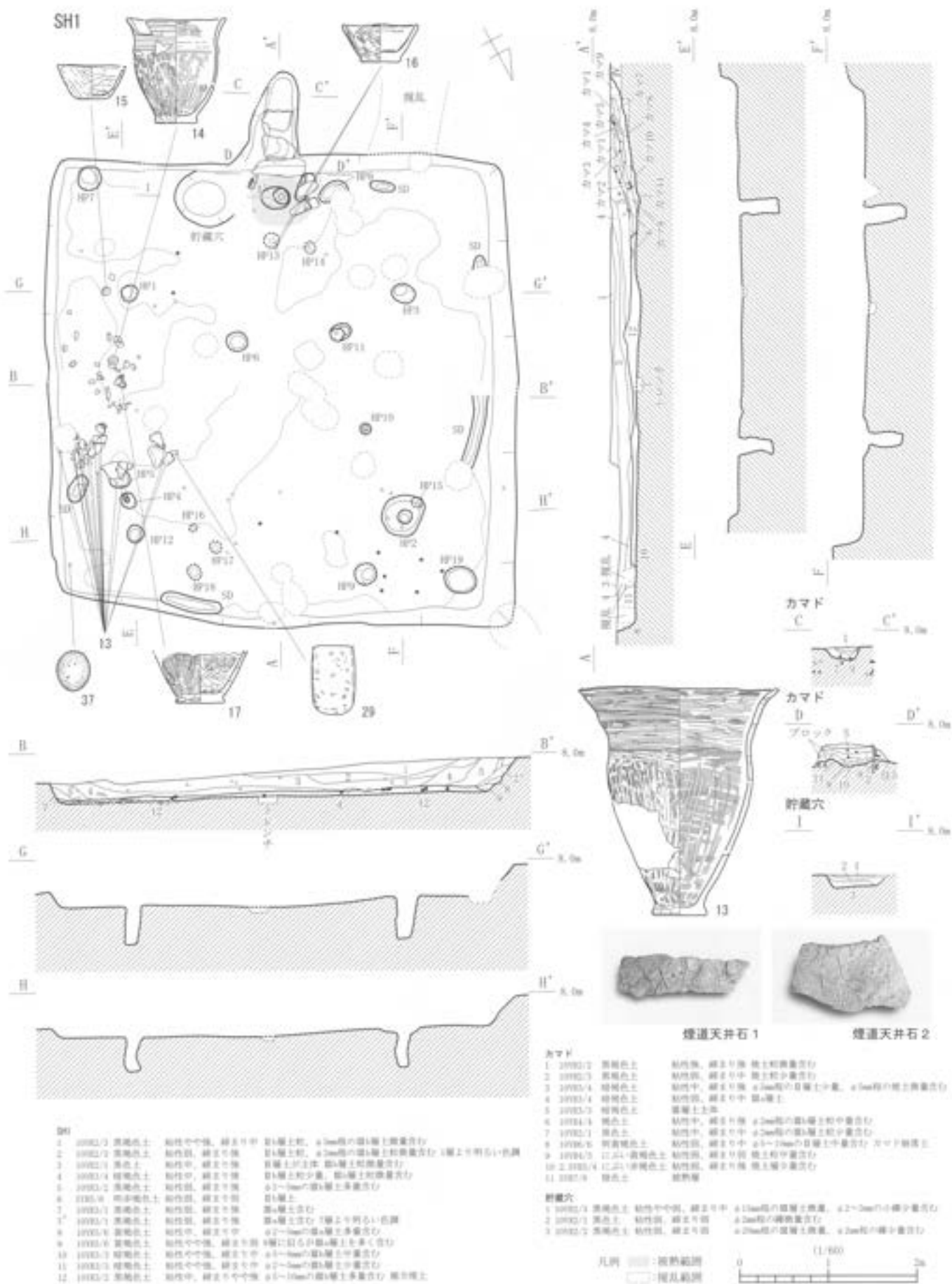
図版8 遺構分割図(7)



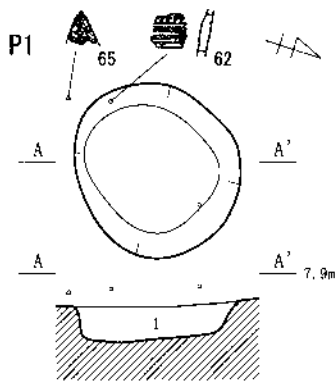
図版9 遺構分割図(8)



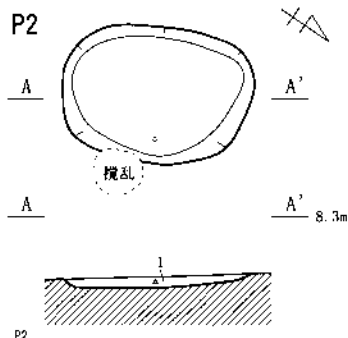
図版10 遺構分割図(9)



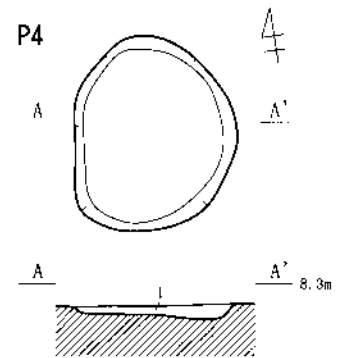
図版 11 平成30年度 SH1



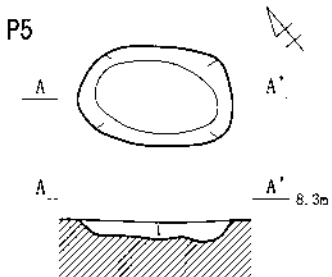
P1
1 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり弱
φ2mm程のIV層土少量含む ポソポソした土



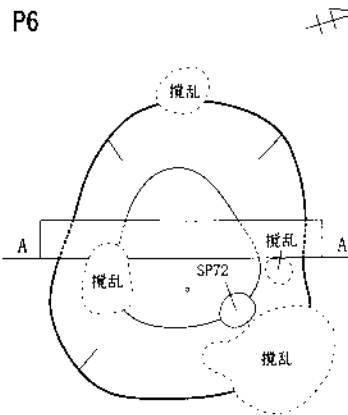
P2
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強
SPA側におよ3~10mmのIV層土微量含む 転圧を受けよく締まる



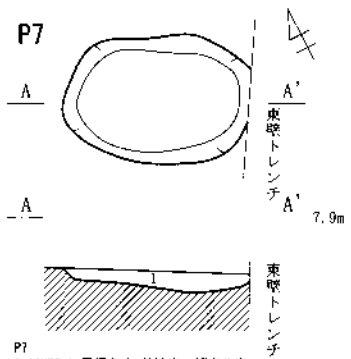
P4
1 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ3~8mmのIV層土中量含む 転圧を受けよく締まる



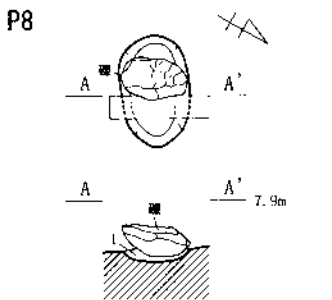
P5
1 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ3~5mmのIV層土少量含む 転圧を受けよく締まる



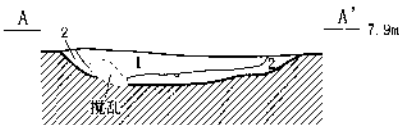
P6
1 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、締まり中
φ2mm程のIV層土粒微量含む ポソポソした土
2 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや強、締まり中
雲状のIV層土中量含む



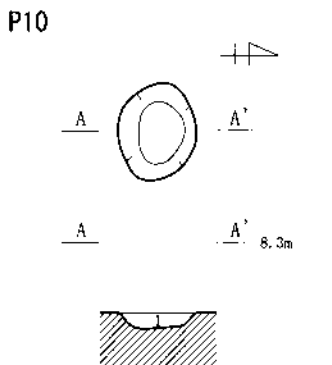
P7
1 10YR3/1 黒褐色土 粘性中、締まり中
φ5~10mmのIV層土微量含む



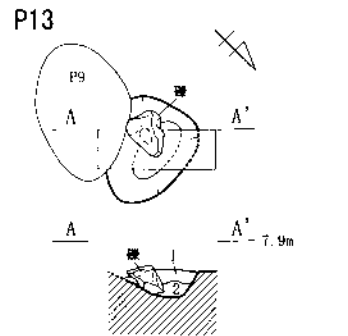
P8
1 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり中
φ10mm程のIV層土微量含む



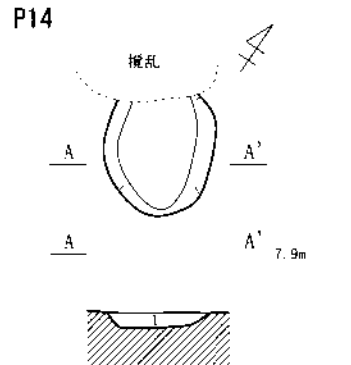
P9
1 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり中
φ10~30mmのIV層土微量含む



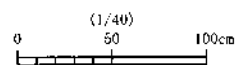
P10
1 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり中
SPA側は黒味が強くSPA'側は黄味が増す

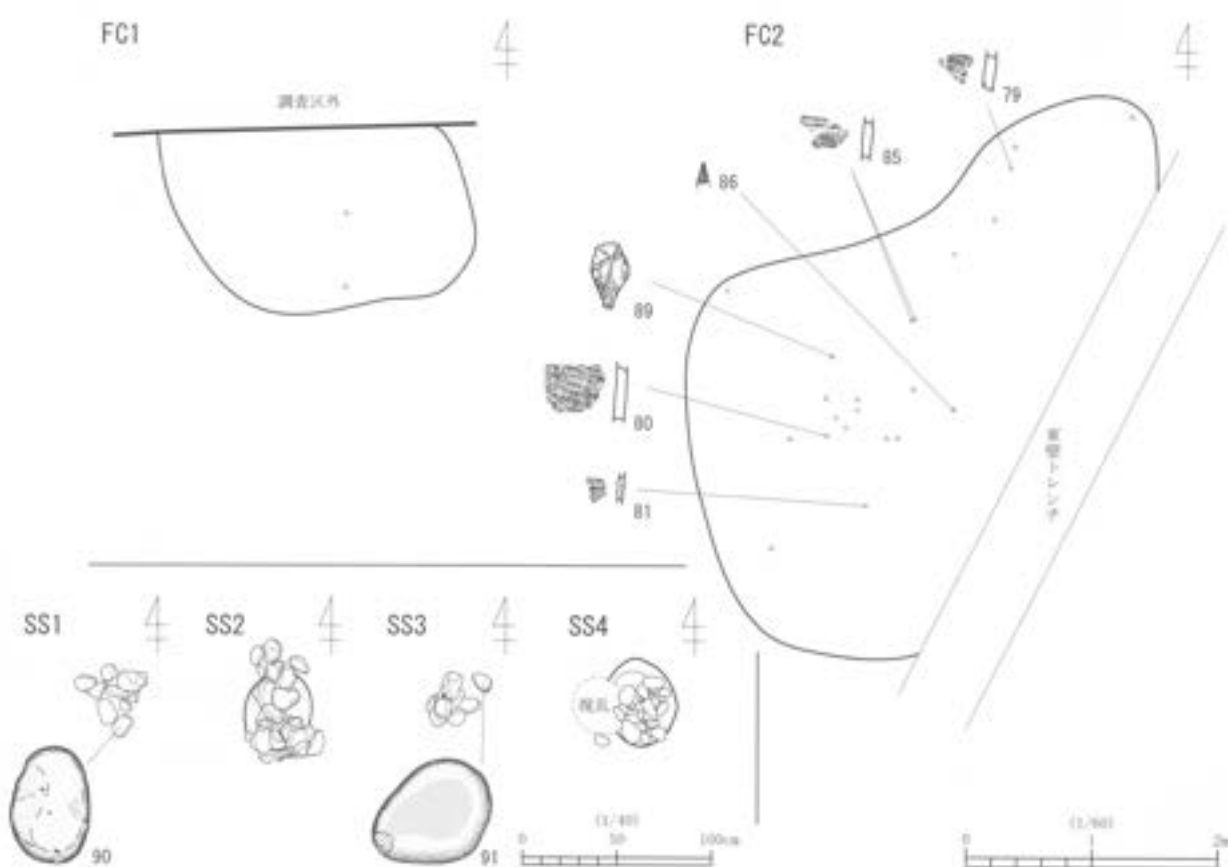
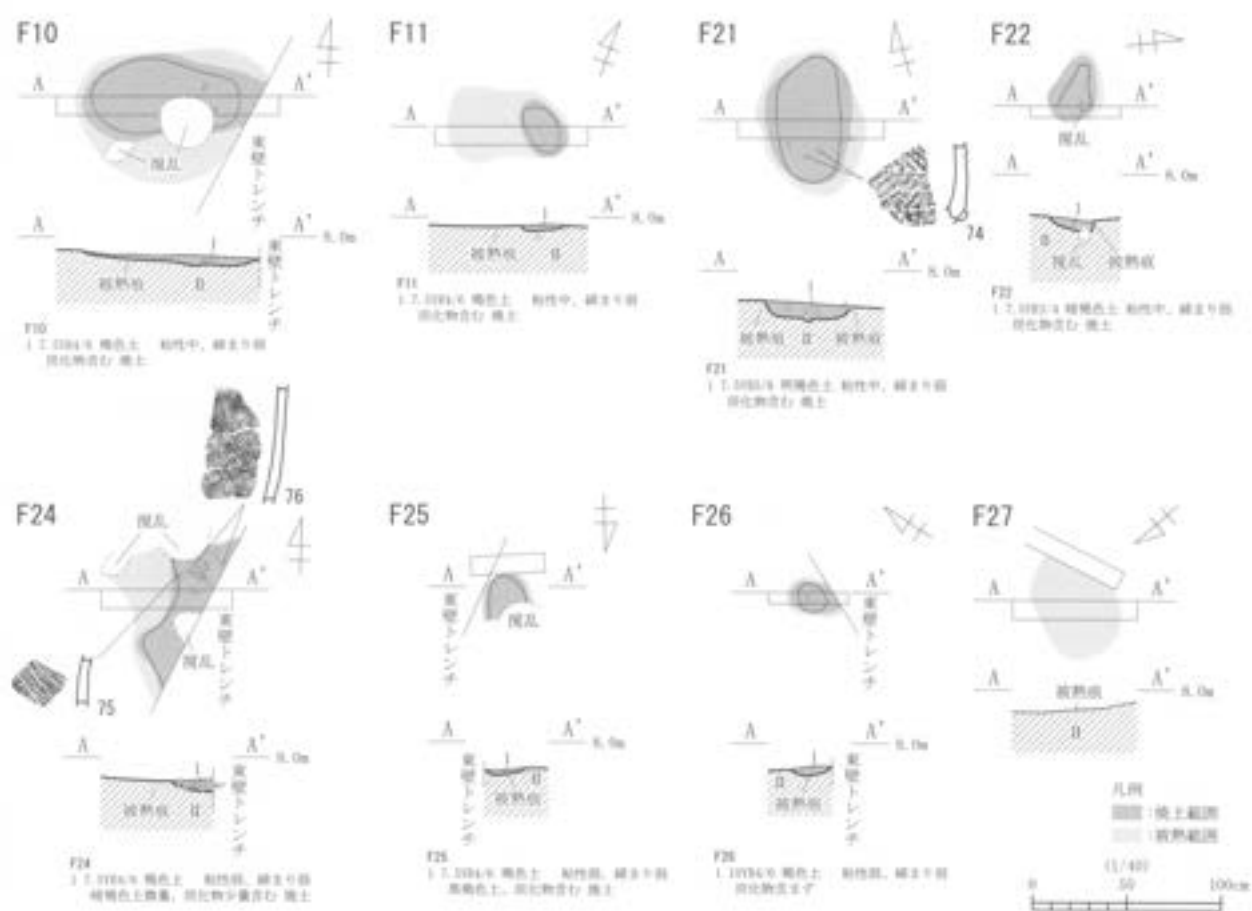


P13
1 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性中、締まりやや強
雲状のIV層土中量含む
2 10YR5/4 土に黄褐色土 粘性やや強、締まり中
IV層土とIV層土が入り混じる



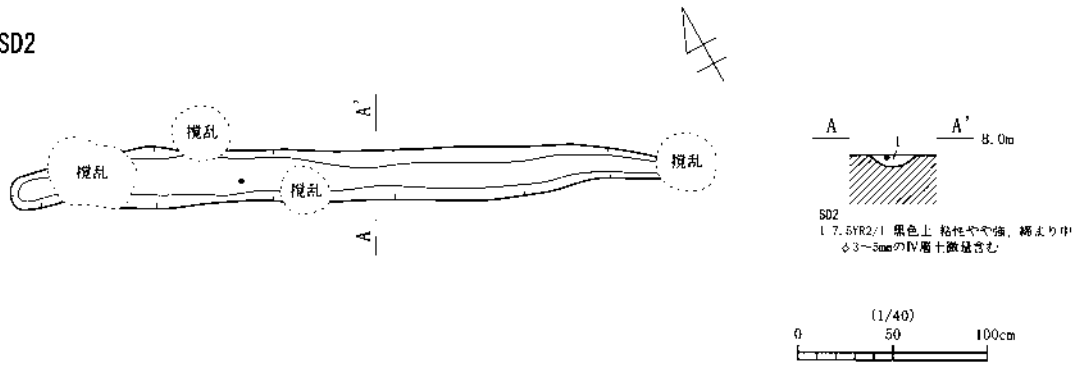
P14
1 10YR4/3 土に黄褐色土 粘性中、締まりやや強
φ20mm程のIV層土微量含む SPA側では黒味が強い



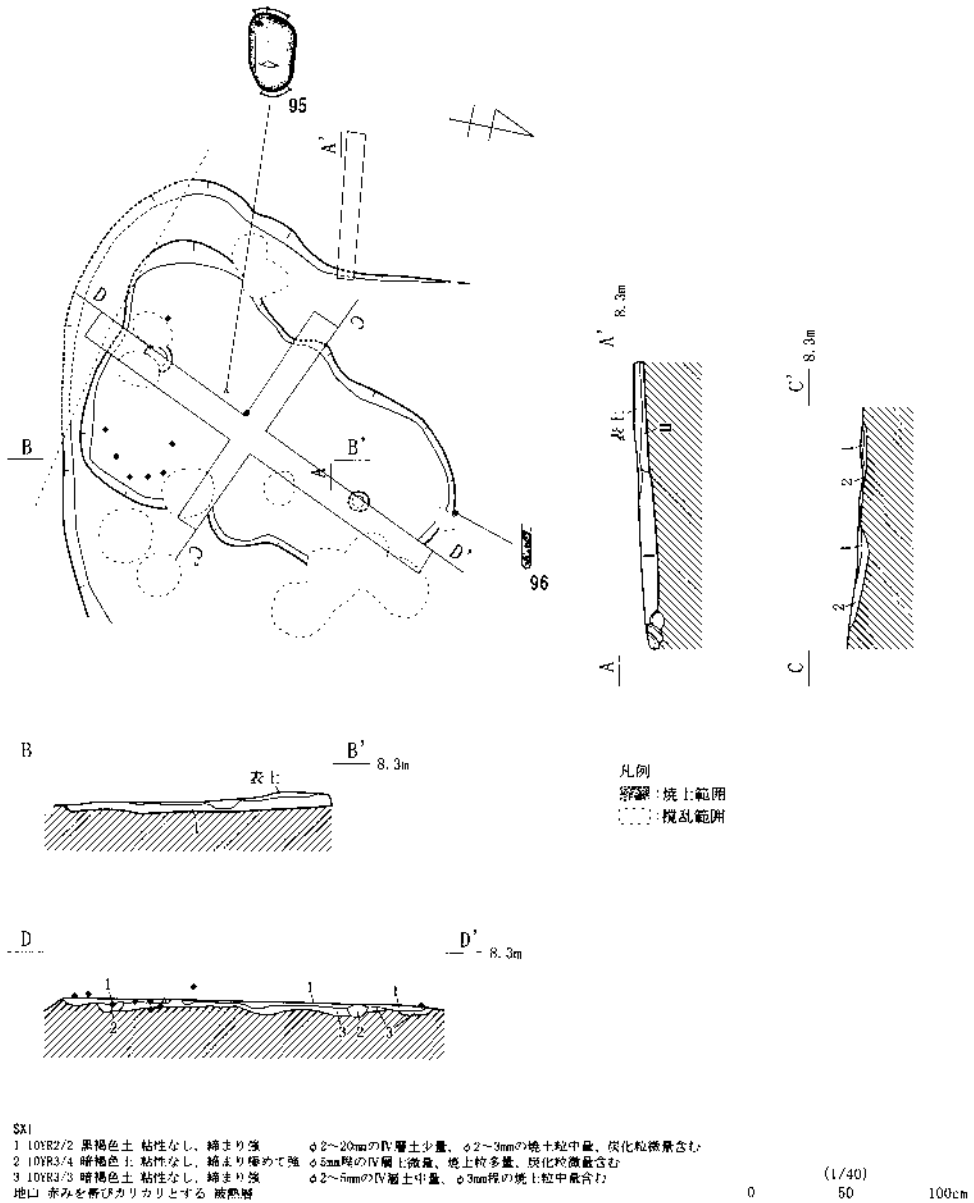


図版 14 平成30年度 F・FC・SS

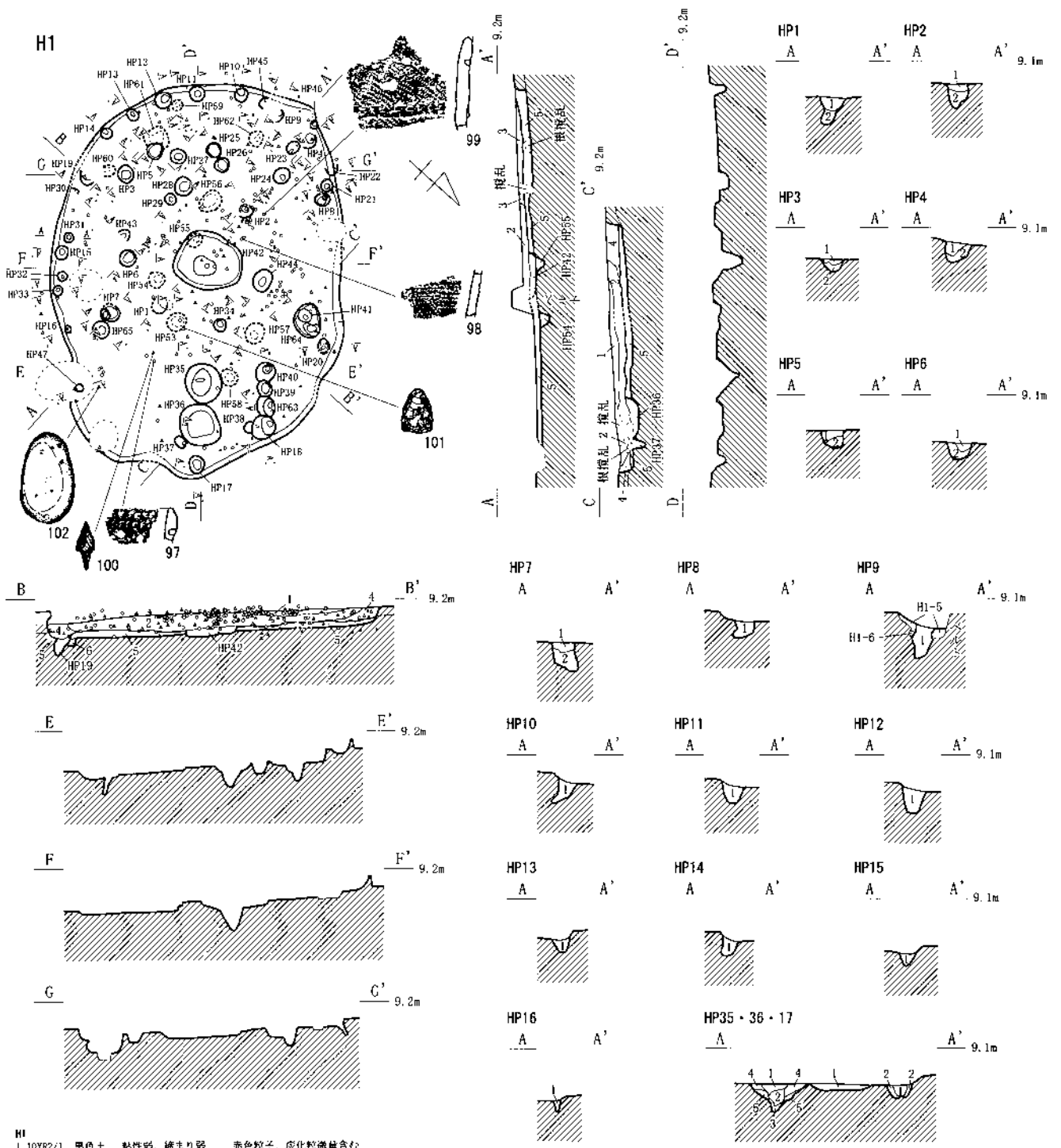
SD2



SX1



図版15 平成30年度 SD・SX

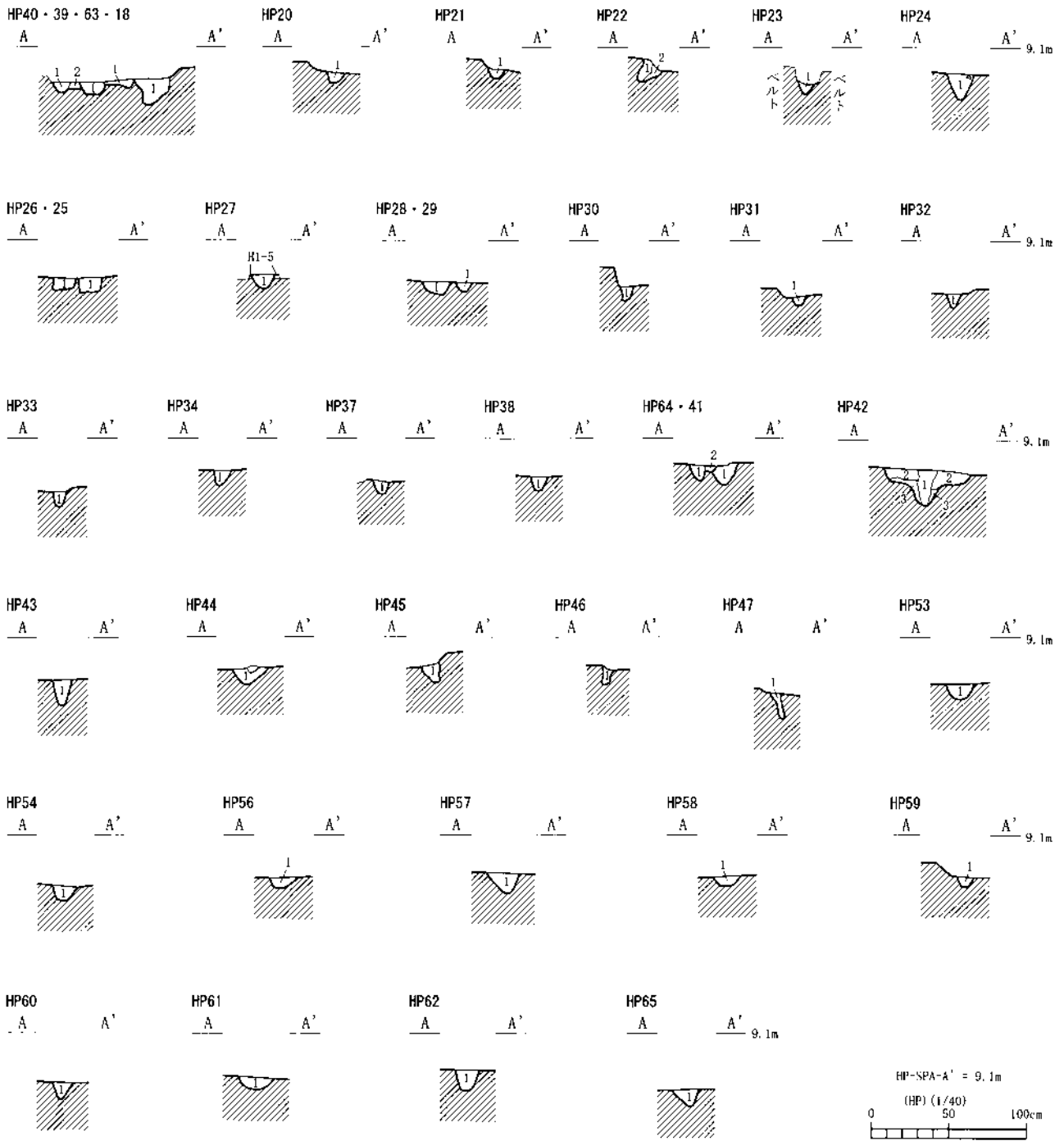


- H1
- 1 10YR2/1 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 赤色粒子、炭化粒微塵含む
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性やや強、締まり弱 炭化粒微塵含む
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
 - 4 10YR3/2 黒褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
 - 5 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや強、締まり強 炭化粒微塵含む
 - 6 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む

- HP1 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP2 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
- 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強、締まりやや弱 炭化粒微塵含む
- HP3 1 10YR2/1 黒褐色土 粘性弱、締まりやや弱 炭化粒微塵含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり弱 炭化粒微塵含む
- HP4 1 10YR3/2 暗褐色土 粘性中、締まりやや弱 炭化粒微塵含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP5 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
- 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
- HP6 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり中 炭化粒微塵含む
- 2 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり中 炭化粒微塵含む
- HP7 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- 2 10YR3/2 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP8 1 10YR4/6 褐色土 粘性弱、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP9 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む

- HP10 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP11 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP12 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP13 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP14 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
- HP15 1 10YR3/2 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP16 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP17 1 10YR4/4 褐色土 粘性やや強、締まり中 炭化粒微塵含む
- HP19 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや強、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP35 1 10YR2/3 暗褐色土 粘性中、締まり中 炭化粒微塵含む
- 2 10YR3/2 暗褐色土 粘性やや強、締まりやや弱 炭化粒微塵含む
- 3 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり弱 炭化粒微塵含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強 炭化粒微塵含む
- HP36 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まりやや強 炭化粒微塵含む

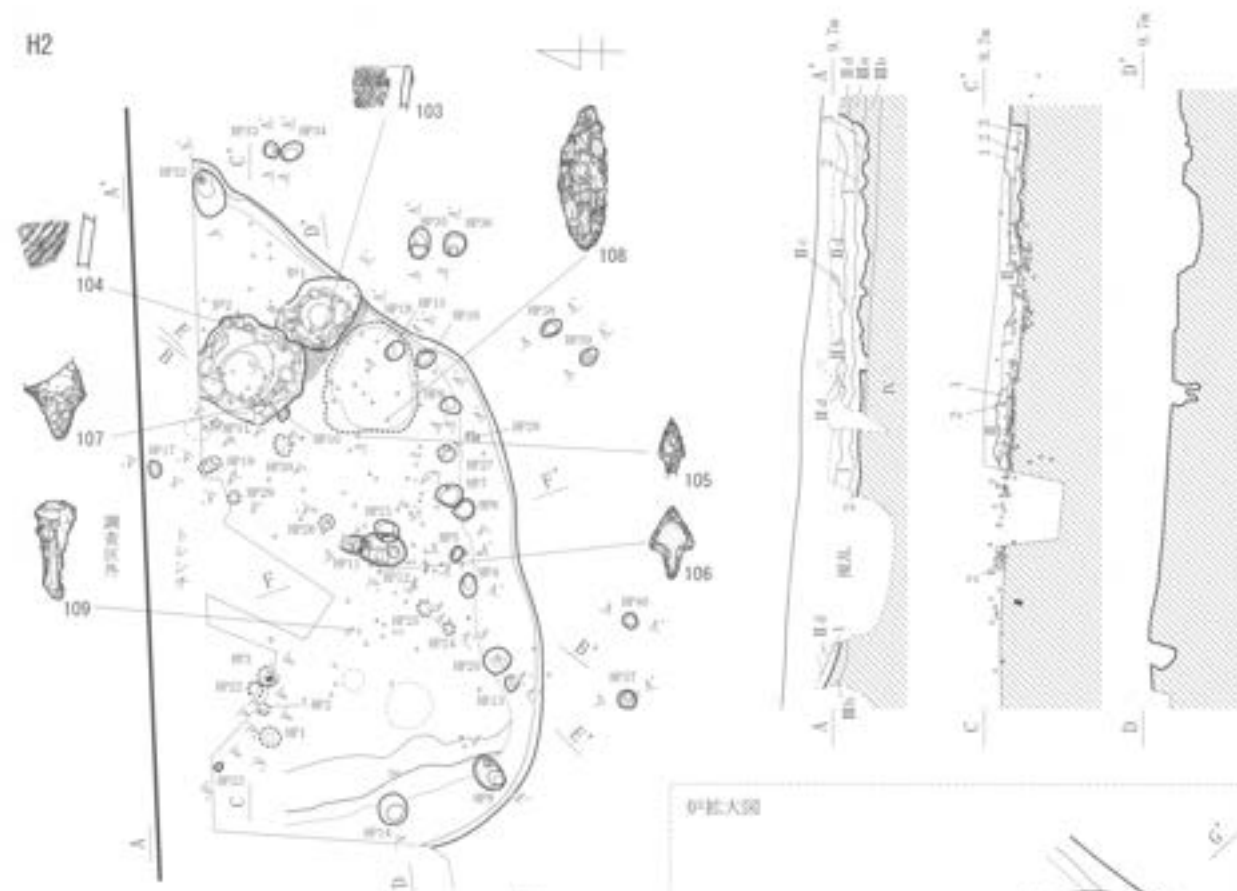
図版16 平成31年度 H1 (1)



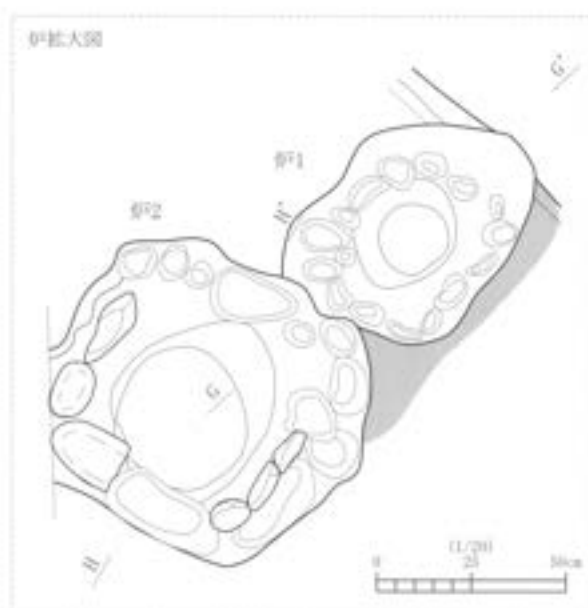
HP18	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む	HP41	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強、締まり中	φ5mm程の礫微量含む
HP20	1 10YR3/2	黒褐色土	粘性やや強、締まり弱	φ2mm程の礫微量含む	2 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫微量含む	φ10mm程の礫微量含む
HP21	1 10YR3/4	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫少量含む	3 10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性強、締まり強	φ10~20mmの団屑土中量、φ2mm程の礫微量含む	
HP22	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2~20mmの礫少量含む	2 10YR3/4	暗褐色土	粘性やや強、締まり強	φ10mm程の団屑土少量、φ2mm程の礫微量含む	
HP23	2 10YR4/6	褐色土	粘性やや強、締まり強	φ2~10mmの団屑土中量含む	3 10YR4/4	褐色土	粘性強、締まり強	φ10~20mmの団屑土少量含む	
HP24	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まりやや強	φ2~3mmの礫少量含む	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まりやや強	φ10mm程の団屑土少量、φ2mm程の礫微量含む	
HP25	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性弱、締まり強	炭状の団屑土、φ2~5mmの礫少量、灰化粒微量含む	HP44	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	炭状の団屑土、φ2mm程の礫微量含む
HP26	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性弱、締まり強	φ5mm程の礫中量含む	HP45	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2~10mmの団屑土微量、φ2mm程の礫少量含む
HP27	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性弱、締まりやや弱	φ3mm程の礫中量含む	HP46	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり弱	φ2mm程の礫微量含む
HP28	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性弱、締まりやや弱	φ2~3mmの礫、φ7mm程の団屑土少量含む	HP47	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ5mm程の団屑土微量、φ2mm程の礫少量含む
HP29	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まりやや強	炭状の団屑土少量、φ5mm程の礫少量含む	HP53	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫微量含む
HP30	1 10YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ3~10mmの団屑土中量含む	HP54	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強、締まり強	φ2~5mmの団屑土少量、φ2mm程の礫微量含む
HP31	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土中量含む	HP55	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強、締まり強	φ5mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む
HP32	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫少量含む	HP56	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強、締まり強	炭状の団屑土、φ2mm程の礫微量含む
HP33	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ5mm程の褐色土少量、φ2mm程の礫少量含む	HP57	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強、締まり強	φ2mm程の団屑土少量、φ2mm程の礫微量含む
HP34	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫微量含む	HP58	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強、締まり強	φ2mm程の礫少量含む
HP37	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む	HP59	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まりやや強	φ5mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む
HP38	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫少量含む	HP60	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2~5mmの団屑土、φ2mm程の礫少量含む
HP64	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む	2 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ3mm程の礫少量含む	
HP42	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫少量含む	HP61	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ3mm程の礫少量含む
HP43	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫、φ7mm程の団屑土少量含む	HP62	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土、φ2mm程の礫少量含む
HP44	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	炭状の団屑土少量、φ5mm程の礫少量含む	HP65	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ30mm程のIV層土中量含む
HP45	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ3~10mmの団屑土中量含む	2 7.5YR2/3	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫中量含む	
HP46	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ10mm程の団屑土中量含む	HP63	1 10YR3/2	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ2mm程の礫中量含む
HP47	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫少量含む	HP64	1 10YR3/2	暗褐色土	粘性中、締まり強	φ30mm程のIV層土ブロック少量含む
HP48	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ2~3mmの礫少量含む	HP65	1 7.5YR2/3	暗褐色土	粘性弱、締まり中	φ30mm程のIV層土ブロック少量含む

図版17 平成31年度 H1 (2)

H2



凡例
 〇 焼土被覆
 □ 埋込被覆



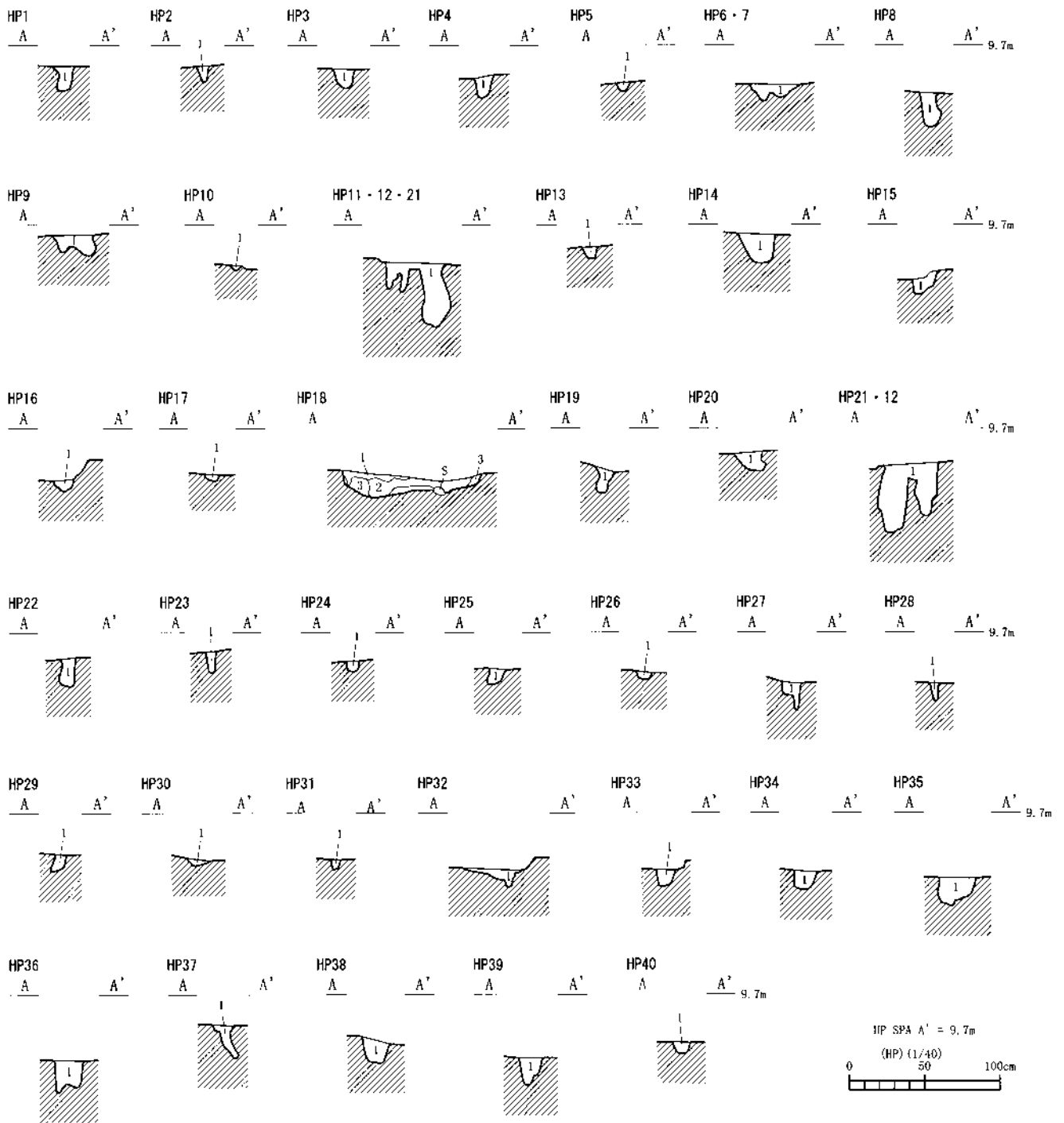
伊2
 1 T.2192-2 厚焼土 粘性强、硬多分層、表面に小穴の多い凹凸した円筒全体に及び、遺物を含む
 2 T.2192-7 厚焼土 粘性强、硬多分層、小穴の多い層土を含む全体に及び、遺物を含む
 3 T.2193-4 厚焼土 粘性强、硬多分層、小穴の多い

伊1
 1 T.2194-2 厚焼土 粘性强、硬多分層、表面に厚焼土中層、骨片、炭化物少量及び、下層に円く凹凸した層を含む
 2 T.2192-4 厚焼土 粘性强

伊2
 1 T.2195-4 厚焼土 粘性强、硬多分層、上部に厚焼土中層、骨片、炭化物少量及び、下部に円く凹凸した層を含む
 2 T.2195-14 厚焼土 粘性强 (10)
 3 T.2195-14 厚焼土 粘性强 (10)



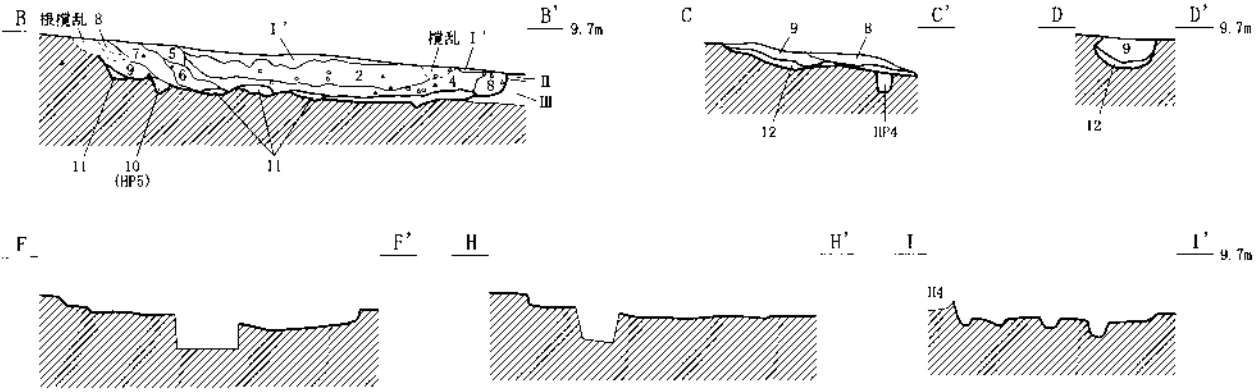
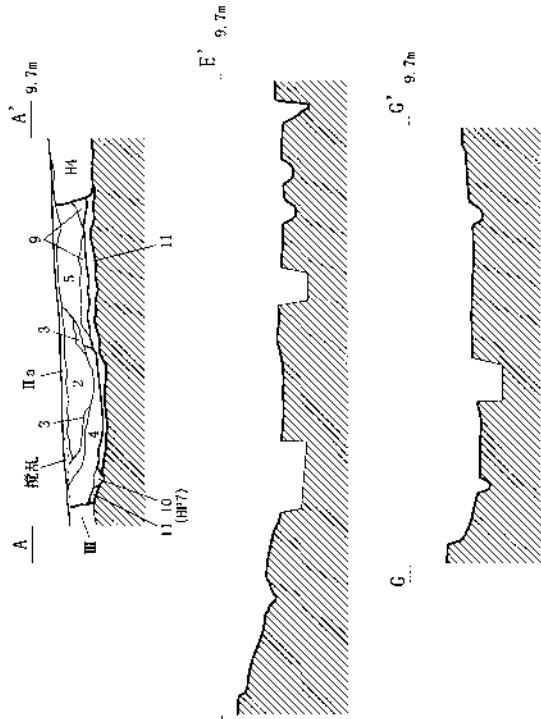
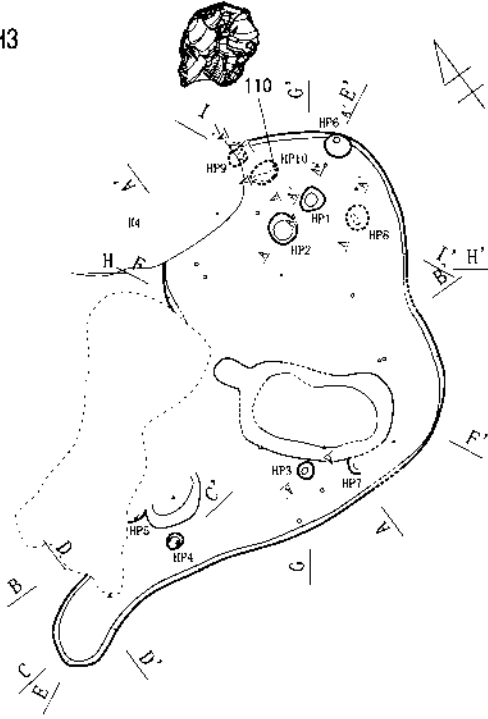
図版18 平成31年度 H2 (1)



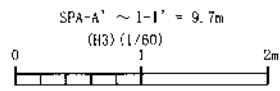
HP1	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	IV層土含む	HP19	1 10YR3/4	暗褐色土	粘性弱、締まり強	
HP2	1 10YR4/4	褐色土	粘性強、締まり強	IV層土多量含む	HP20	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり非常に強	
HP3	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	中位より下部に炭化材多量含む	HP21	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	
HP4	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強		HP22	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性弱、締まり非常に強	
HP5	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり強		HP23	1 10YR4/1	褐灰色土	粘性弱、締まり非常に強	
HP6	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり強	褐色土含む	HP24	1 7.5YR2/2	黒褐色土	粘性中、締まり中	
HP7	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強		HP25	1 7.5YR2/1	黒色土	粘性中、締まり弱	
HP8	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり強		HP26	1 10YR3/2	暗褐色土	粘性弱、締まり中	
HP9	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性弱、締まり強	IV層土多量含む	HP27	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり非常に強	
HP10	1 7.5YR4/3	褐色土	粘性弱、締まり中		HP28	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり中	
HP11	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性弱、締まり強		HP29	1 7.5YR2/1	黒色土	粘性中、締まり中	
HP12	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	IV層土多量含む	HP30	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性弱、締まり弱	
HP13	1 10YR3/3	暗褐色土	粘性中、締まり非常に強		HP31	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり弱	
HP14	1 7.5YR2/2	黒褐色土	粘性弱、締まり強		HP32	1 7.5YR2/3	橄欖褐色土	粘性弱、締まり中	
HP15	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強		HP33	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり中	
HP16	1 7.5YR2/3	暗褐色土	粘性弱、締まり中		HP34	1 10YR4/1	褐灰色土	粘性中、締まり強	剥片多量含む
HP17	1 7.5YR3/2	黒褐色土	粘性強、締まり強		HP35	1 10YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり中	φ5~10mmの団層土ブロック少量、炭化物粒子微量含む
HP18	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性中、締まり強	φ5mm程の明褐色土粒多量含む H2の粗方産土	HP36	1 10YR3/2	黒褐色土	粘性中、締まり中	φ2~10mmの団層土ブロック少量、炭化物粒子微量含む
	2 10YR4/4	褐色土	粘性中、締まり強	IV層土少量含む	HP37	1 10YR2/2	黒褐色土	粘性弱、締まりやや弱	粘性弱、締まりやや弱 III層土粒子微量含む
	3 7.5YR4/2	灰褐色土	粘性中、締まり強	IV層土多量含む	HP38	1 10YR2/1	黒色土	粘性弱、締まり強	雲状の団層土少量、φ2~5mmの礫微量含む
					HP39	1 10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性強、締まり中	
					HP40	1 10YR2/3	黒褐色土	粘性強、締まり中	

図版19 平成31年度 H2 (2)

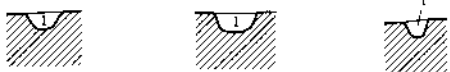
H3



- H3
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 ϕ 10mm程のIIb層(少量含む) IIa層土主体
 - 2 5YR3/6 暗赤褐色土 粘性弱、締まり弱 IIb層土
 - 3 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 雲状のIIb層土含む
 - 4 10YR1.7/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 ϕ 5~10mmのIIa層土少量含む ボンボソした土
 - 5 10YR1.7/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 ϕ 5~20mmのIIa層土少量含む 3層よりボンボソしている
 - 6 10YR1.7/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 ϕ 5mm程の礫少量含む
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 ϕ 2mm程の礫少量含む 6層よりボンボソしている
 - 8 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり中 ϕ 2mm程の礫少量含む
 - 9 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まりやや強 ϕ 2~5mmの礫少量含む
 - 10 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まりやや強 ϕ 5~10mmのII層土(少量、 ϕ 5mm程の礫少量含む) (HP5・7)
 - 11 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まりやや強 ϕ 2~3mmのII層土、 ϕ 2mm程の礫少量含む
 - 12 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まりやや強 ϕ 2mm程の礫少量含む

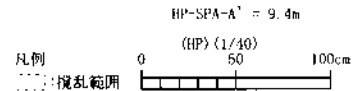


HP1 A A' 9.4m



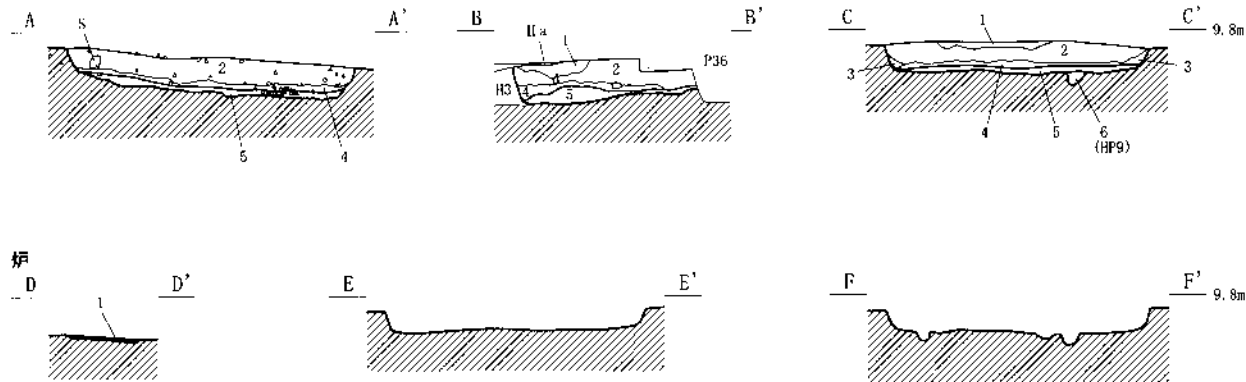
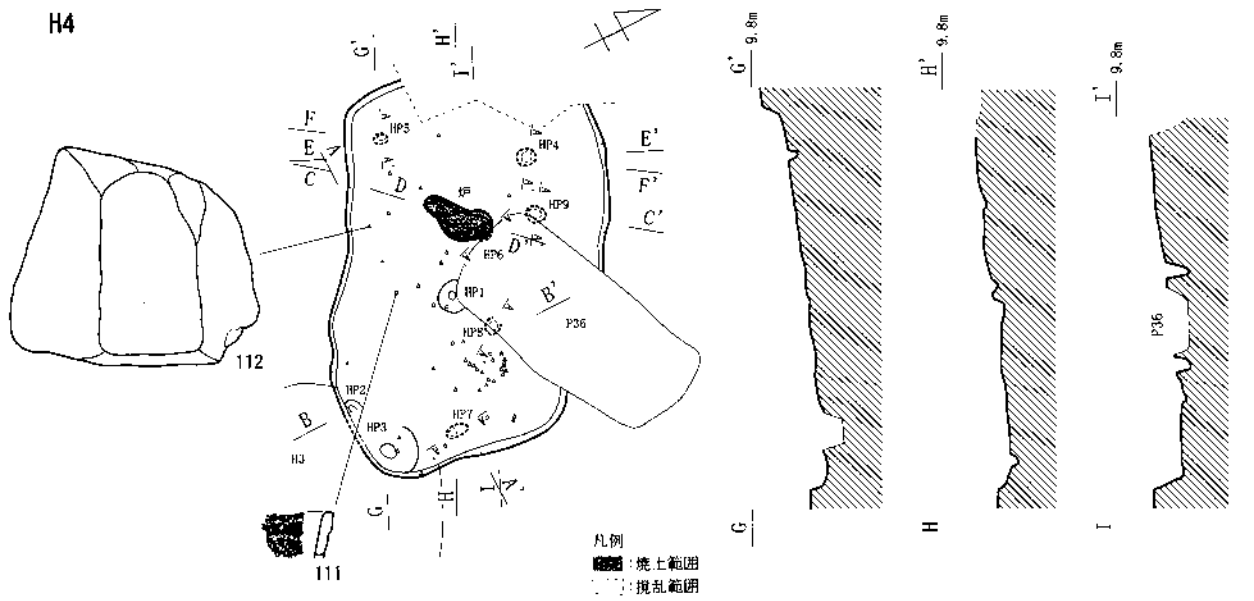
- HP1 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり中 II層土ブロック ϕ 10mm中少量含む
- HP2 1 10YR2/1 黒褐色土 粘性中、締まり中 II層土ブロック ϕ 5mm、小礫 ϕ 5mm少量含む
- HP3 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強 II層土ブロック ϕ 10mm、小礫 ϕ 2mm少量含む
- HP4 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強 II層土ブロック ϕ 5mm少量含む
- HP6 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり強 II層土ブロック ϕ 3mm少量含む
- HP8 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性強、締まり強 II層土ブロック ϕ 5~10mm少量含む
- HP9 1 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり強 小礫 ϕ 2mm少量含む
- HP10 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり中 II層土ブロック ϕ 10mmを雲状含む

HP6 A A' HP8 A A' HP9 A A' HP10 A A' 9.4m

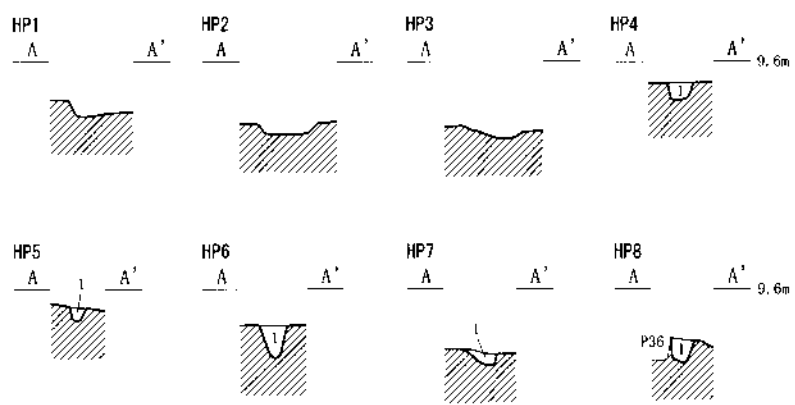
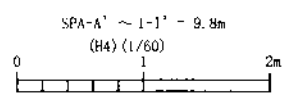


凡例
 攪乱範囲

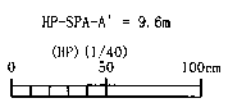
図版20 平成31年度 H3



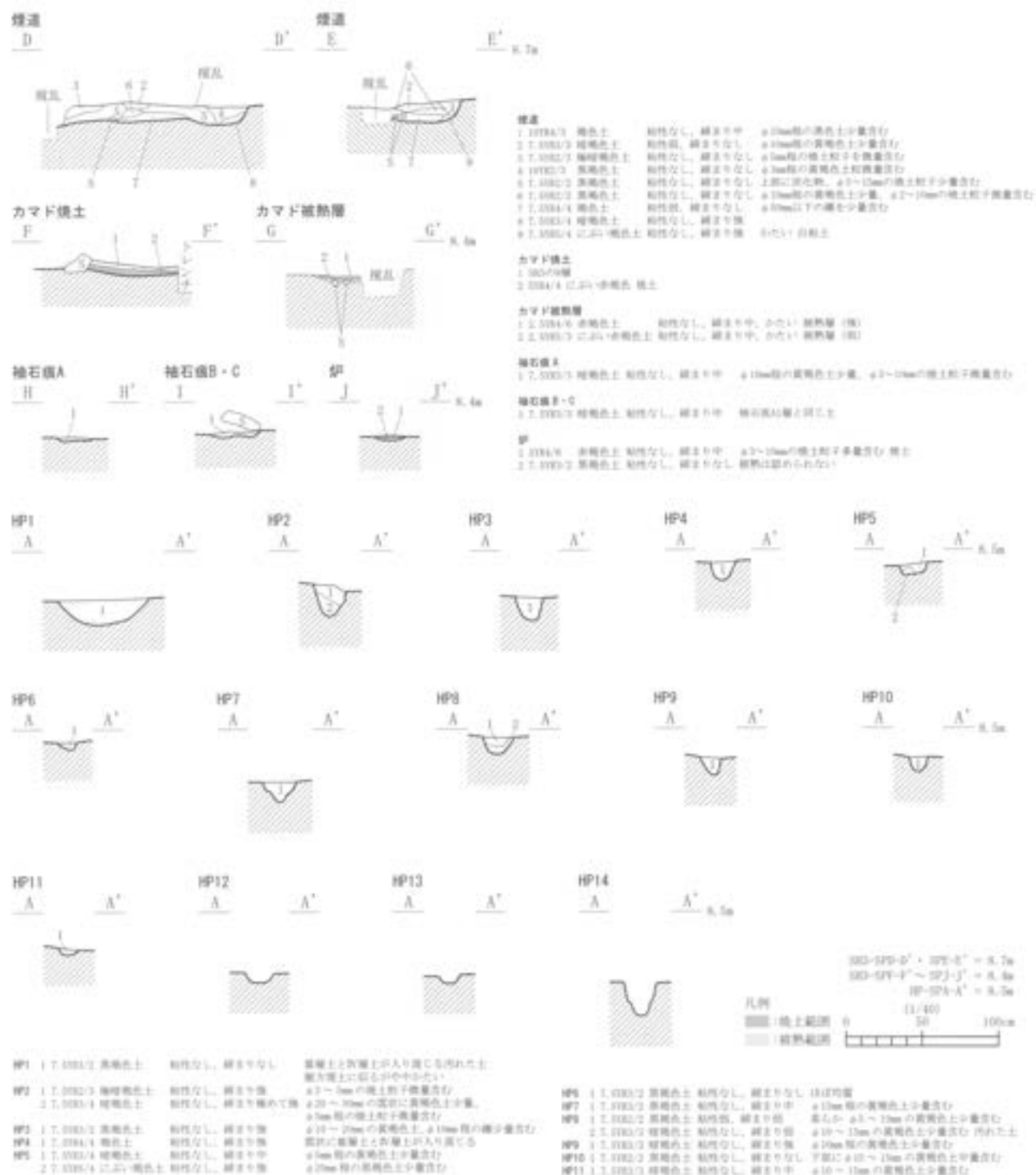
- H4
 1 : 5YR4/6 赤褐色土 粘性弱、締まり弱
 2 : 10YR2/7 黒色土 粘性強、締まり弱
 3 : 10YR4/4 褐色土 粘性中、締まり中
 4 : 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり弱
 5 : 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり強
 6 : 10YR3/4 暗褐色土 粘性強、締まり中
 炉
 1 : 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 焼土粒を微量含む
- IIb層
 φ2mm程度の礫物を含む
 φ10~20mmのIIIa層土多量含む
 網などの混入物は認められない
 φ10~30mmのIII層土ブロック多量含む 処方埋土
 III層土ブロックを雲状含む (HP9)



- HP4 1 : 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり中 小礫φ5mm少量含む
 HP5 1 : 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり中 III層土ブロックφ10mm少量含む
 HP6 1 : 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 III層土ブロックφ2mm少量含む
 HP7 1 : 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり強 III層土ブロックφ5mm少量含む
 HP8 1 : 10YR3/2 暗褐色土 粘性中、締まり強 III層土粒子少量含む



図版21 平成31年度 H4

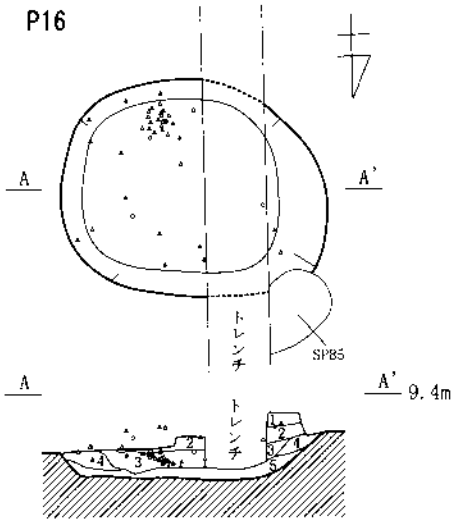


採集中出土の使用痕のある鉢

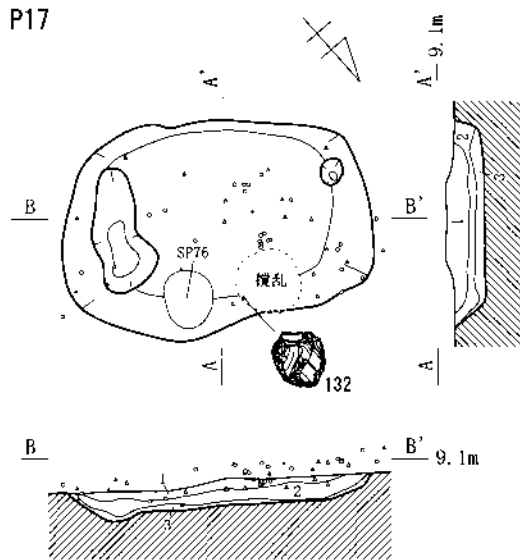


採集中出土鉢

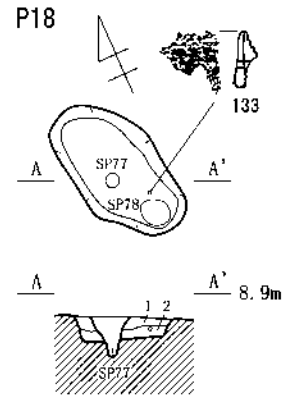
図版23 平成31年度 SH3(2)



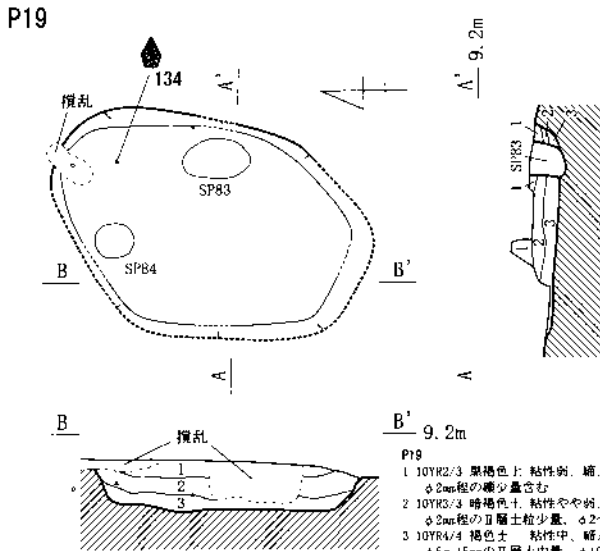
- P16
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし、締まりなし 礫少量含む
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性なし、締まりなし
 - 3 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり弱
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性弱、締まり中
 - 5 10YR6/6 明黄褐色土 粘性中、締まりやや強
 φ10~30mmのII層土ブロック多量含む



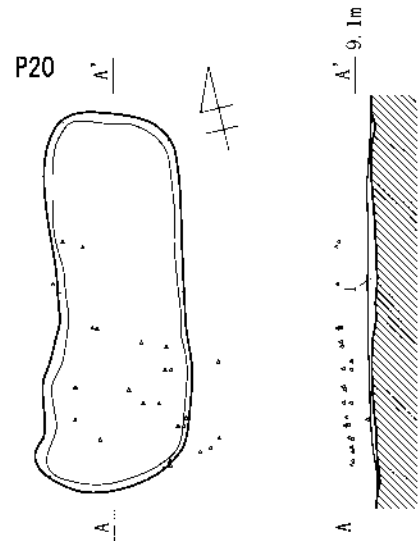
- P17
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし、締まり弱 φ2~5mmの礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり弱 φ2~5mmの礫少量含む
 - 3 10YR5/6 黄褐色土 粘性弱、締まり弱



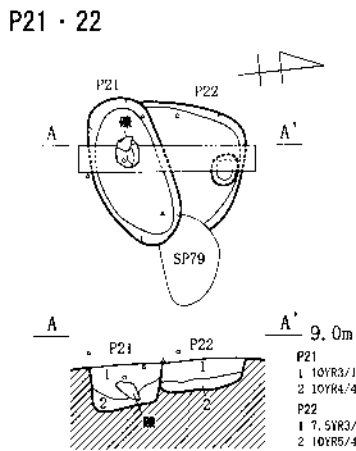
- P18
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし、締まり中
 - 2 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり中



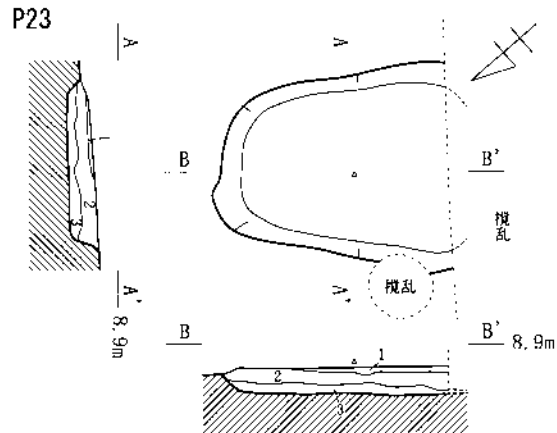
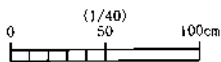
- P19
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まりやや強 φ2mm程度の礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱、締まりやや強 φ2mm程度のII層土粒少量、φ2~10mmの礫少量含む
 - 3 10YR4/4 褐色土 粘性中、締まり中 φ5~15mmのII層土中礫、φ10mm程度の礫少量含む



- P20
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性なし、締まり中 シルト質 北側でやや暗い

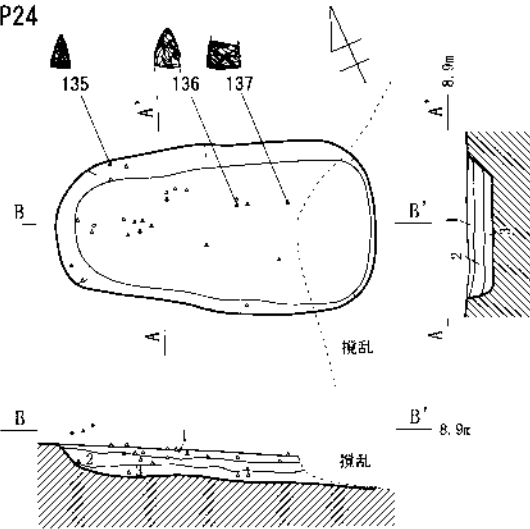


- P21
- 1 10YR3/1 黒褐色土 粘性弱、締まり中
 - 2 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり中
- P22
- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり中
 - 2 10YR5/4 にぶい褐色土 粘性弱、締まり弱



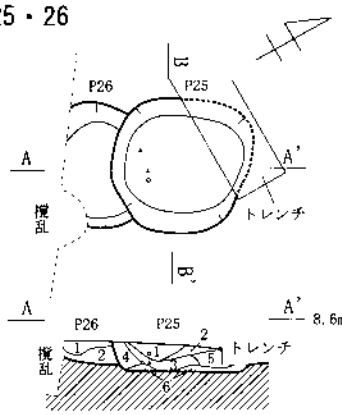
- P23
- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性中、締まり強 φ2~5mmの礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱、締まり強 φ5~10mmのII層土、φ2~7mmの礫少量含む
 - 3 10YR5/6 黄褐色土 粘性やや弱、締まり強 φ10~20mmのII層土少量、φ2mm程度の礫少量含む

P24



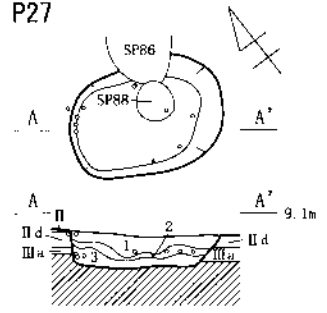
- P24
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり中 ϕ 5mm程のIIIa層土粒少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 雲状にIIa層土少量含む
 - 3 10YR5/4 に近い黄褐色土 粘性中、締まり強 ϕ 10mm程のIIa層土少量含む

P25・26



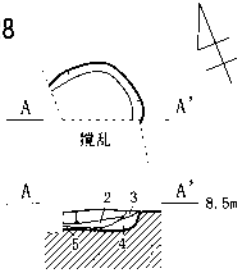
- P25
- 1 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性なし、締まり弱 ϕ 2~4mmの褐色土粒少量含む 柔らかくボソボソ、IIa層に限る
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし、締まり中 ϕ 2~4mmの黄褐色土粒少量含む 土質はI層に限るがボソボソ感あり
 - 3 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性なし、締まり弱く柔い ϕ 2~4mmの黄褐色土粒を微塵量含む
 - 4 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性なし、締まり弱 ほぼ均質
 - 5 7.5YR3/2 黒褐色土 3層に限るが黄褐色土粒を含まない
 - 6 10YR4/4 褐色土 粘性なし、締まり弱 褐色土と黒褐色土が入り混じる
- P26
- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、かたく締まる ϕ 2mm程の黄褐色土粒微塵量含む
 - 2 10YR4/6 褐色土 粘性なし、締まる 雲状に暗褐色土少量含む

P27



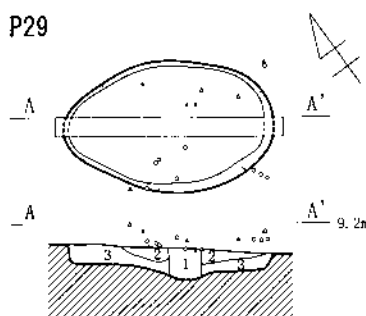
- P27
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり中 IIa層主体
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まりやや強 IIa層中量、 ϕ 2mm程の礫少量含む
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり中 ϕ 5~10mmのIII層土少量、 ϕ 2mm程の礫少量含む
- ※II、10YR3/2 黒褐色土 粘性中、締まり中 周辺の状況からIIa層か? IIb層とは色調が異なる(黒い)ため分層した

P28



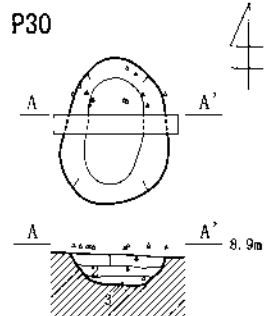
- P28
- 1 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性強、かたく締まる ϕ 2mm以下の礫少量含む
 - 2 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり中 ϕ 2mm以下の礫少量含む
 - 3 7.5YR2/1 黒色土 2層に限るが混入する礫が少ない
 - 4 10YR3/3 暗褐色土 粘性強、締まり中 ϕ 2mm以下の礫少量含む
 - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 粘性中、締まり弱 ϕ 2mm以下の礫少量含む

P29



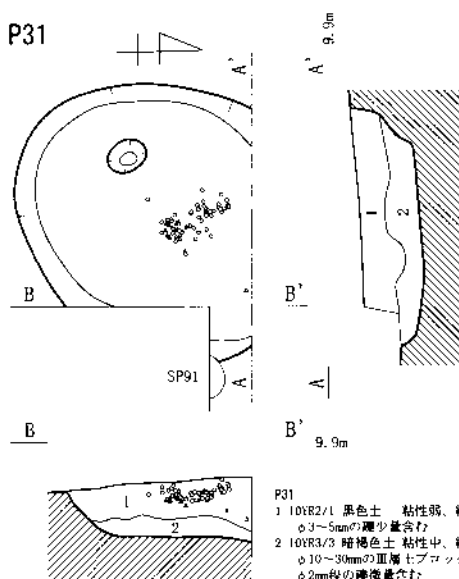
- P29
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 10~20mmの重層土少量、 ϕ 2~5mmの礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 2mm程の礫少量含む
 - 3 7.5YR4/3 褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 10~20mmのIII層土中量、 ϕ 2~5mmの礫少量含む

P30



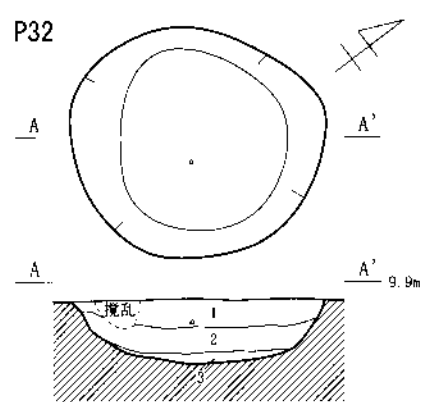
- P30
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 2mm程の礫、炭化粒子少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 2mm程のIIIa層土粒少量、 ϕ 2mm程の礫中量含む
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり強 ϕ 5mm程のIII層土少量含む

P31

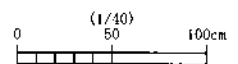


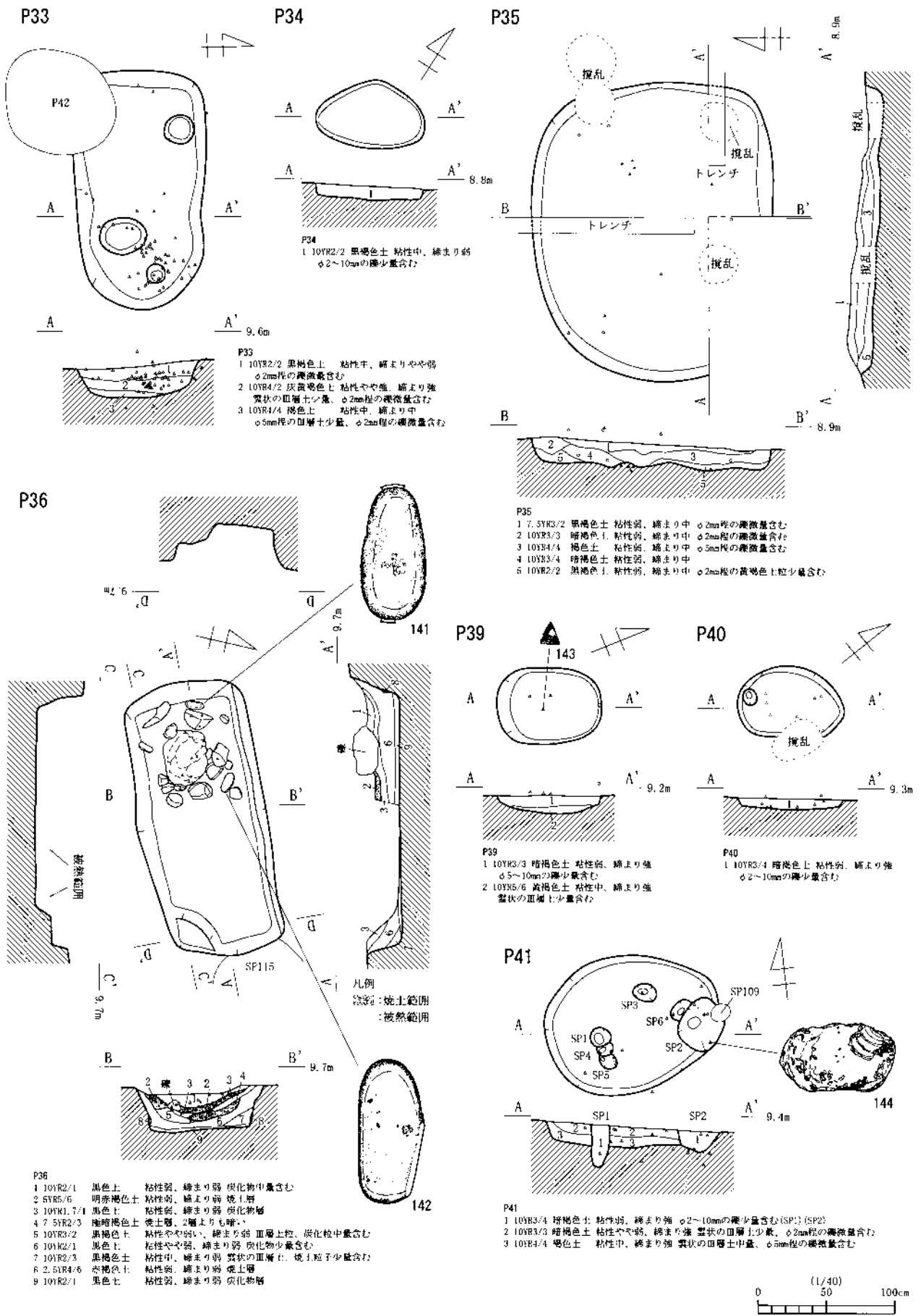
- P31
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり中 ϕ 3~5mmの礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり強 ϕ 10~30mmの重層土ブロック中量 ϕ 2mm程の礫少量含む

P32



- P32
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強、締まり中 ϕ 2~5mmの礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり強 ϕ 2~10mmの礫少量含む
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり強 雲状のIII層土、 ϕ 5mm程の礫少量含む





P33

P34

P35

P36

P39

P40

P41

- P33
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり弱
φ2mm程の礫微量含む
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性やや強、締まり強
雲状の皿層土少量、φ2mm程の礫微量含む
 - 3 10YR4/4 褐色土 粘性中、締まり中
φ5mm程の皿層土少量、φ2mm程の礫微量含む
- P34
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性中、締まり弱
φ2~10mmの礫少量含む
- P36
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 炭化物中量含む
 - 2 5YR5/6 明赤褐色土 粘性弱、締まり弱 焼1層
 - 3 10YR1.7/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 炭化物層
 - 4 7.5YR2/3 暗褐色土 硬土層、2層よりも暗い
 - 5 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや強い、締まり弱 皿層上粒、炭化粒中量含む
 - 6 10YR2/1 黒色土 粘性やや弱、締まり弱 炭化物少量含む
 - 7 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり弱 雲状の皿層土、焼1粒子少量含む
 - 8 2.5YR4/6 赤褐色土 粘性弱、締まり弱 硬土層
 - 9 10YR2/1 黒色土 粘性弱、締まり弱 炭化物層

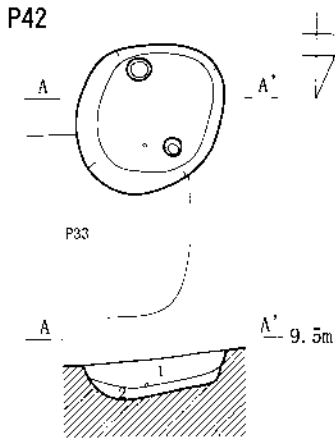
- P35
- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性弱、締まり中 φ2mm程の礫微量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり中 φ2mm程の礫微量含む
 - 3 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり中 φ5mm程の礫微量含む
 - 4 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり中
 - 5 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり中 φ2mm程の黄褐色土粒少量含む

- P39
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり強 φ5~10mmの礫少量含む
 - 2 10YR5/6 黄褐色土 粘性中、締まり強 雲状の皿層土少量含む

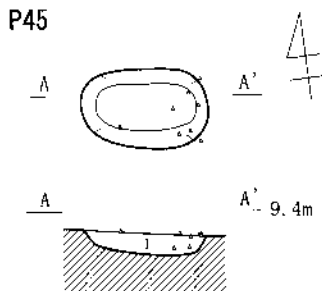
- P40
- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり強 φ2~10mmの礫少量含む

- P41
- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり強 φ2~10mmの礫少量含む (SP1, SP2)
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱、締まり強 雲状の皿層土少量、φ2mm程の礫微量含む
 - 3 10YR4/4 褐色土 粘性中、締まり強 雲状の皿層土少量、φ5mm程の礫微量含む

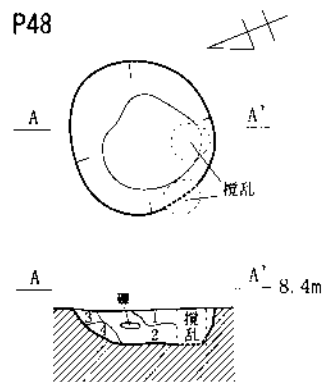
図版26 平成31年度 P(3)



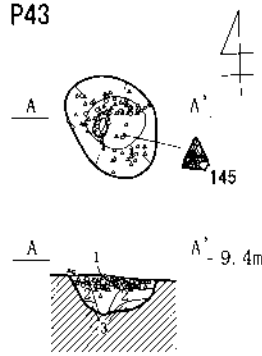
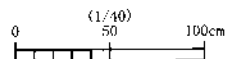
- P42
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強、締まり中
φ2mm程の礫少量含む
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強
φ2mm程の礫少量含む



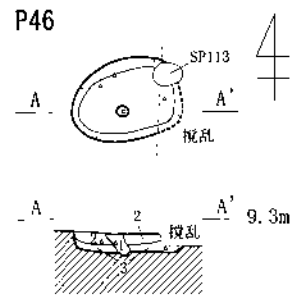
- P45
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まりやや弱
φ10mm程の瓦層土、φ2mm程の礫少量含む



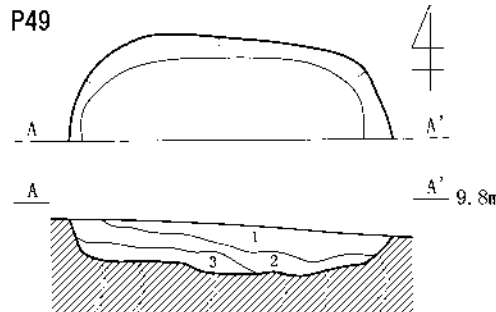
- P48
- 1 7.5YR3/2 灰褐色土 粘性弱、締まり中
φ3mm程の黄褐色土粒少量含む
 - 2 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり弱
φ30~100mmの礫少量含む
 - 3 7.5YR6/4 に近い褐色土 粘性なし、かたく締まる
φ10mm程の雲状の黄褐色土少量含む
 - 4 7.5YR3/4 暗褐色土 2層に亘るφ20mm程の雲状の
黄褐色土少量含む。礫は含まない



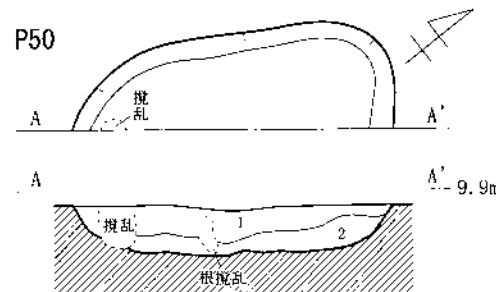
- P43
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性やや強、締まり弱
φ10mm程の瓦層土、φ5mm程の礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり中
φ10~20mmの瓦層土中層、φ2mm程の礫少量含む
 - 3 10YR5/6 黄褐色土 粘性中、締まり強
φ5~30mmの瓦層土ブロック少量含む



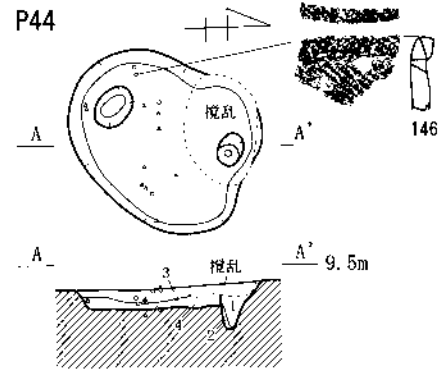
- P46
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ2mm程の礫中量含む
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ2~3mmの礫少量含む
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 粘性中、締まり強
φ10~20mmの瓦層土中量含む



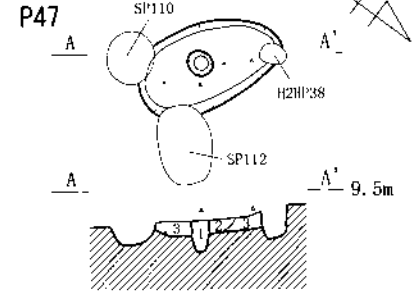
- P49
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり弱 雲状の瓦層土少量、φ2~20mmの礫中量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性中、締まり弱 雲状の瓦層土、φ3~10mmの礫中量含む
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 粘性強、締まり中 φ5~10mmの礫少量含む



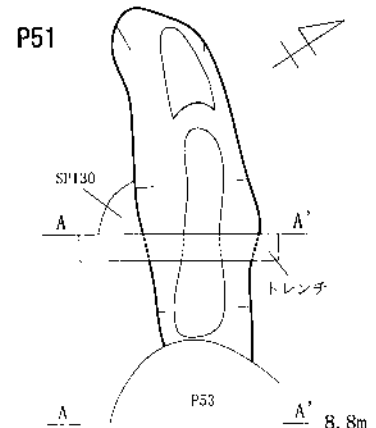
- P50
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱、締まり中 雲状の瓦層土、φ3~5mmの礫中量含む
 - 2 10YR4/4 褐色土 粘性弱、締まり強 雲状の瓦層土、φ3~10mmの礫少量含む



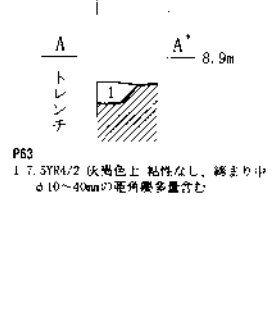
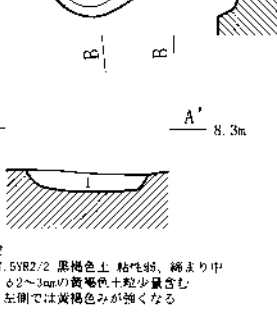
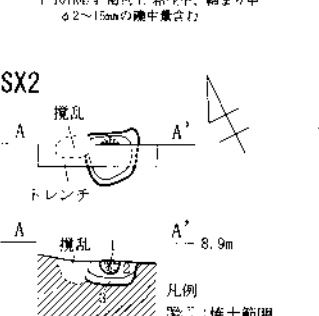
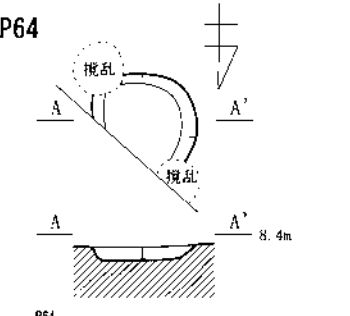
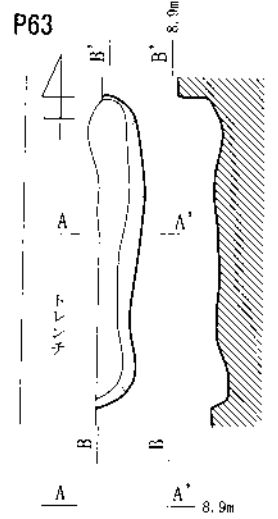
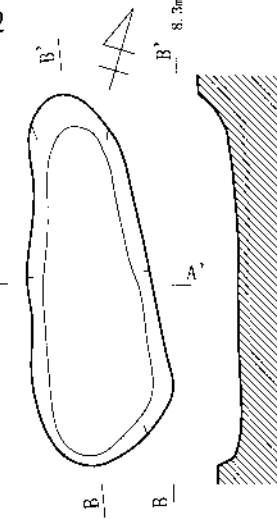
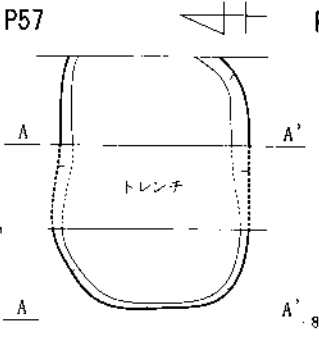
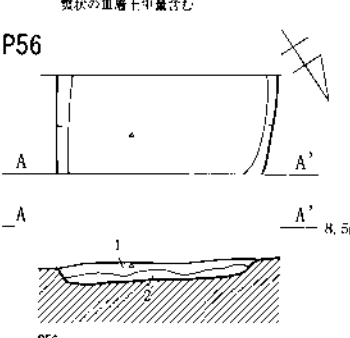
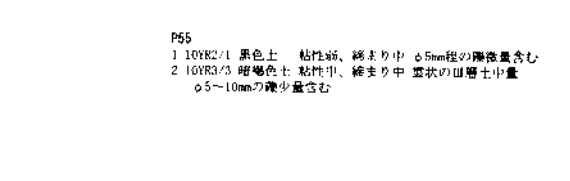
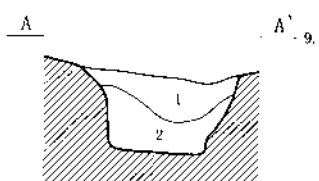
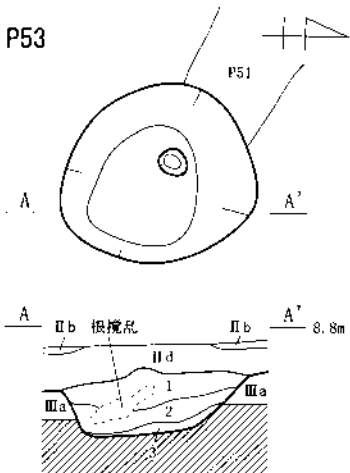
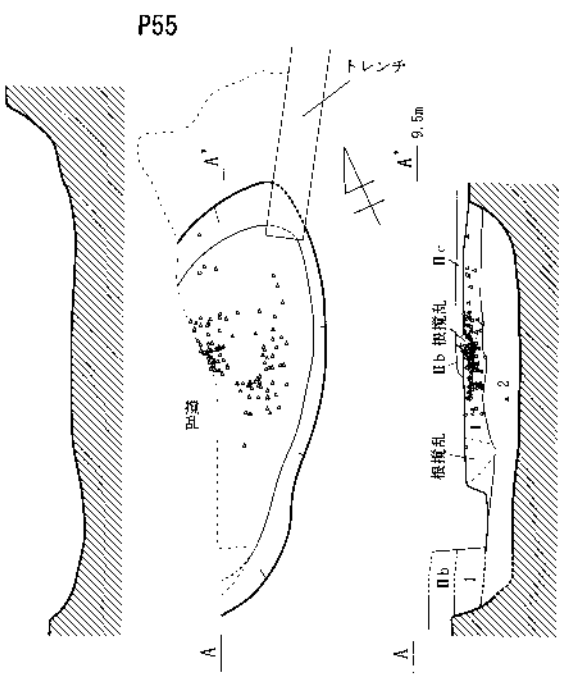
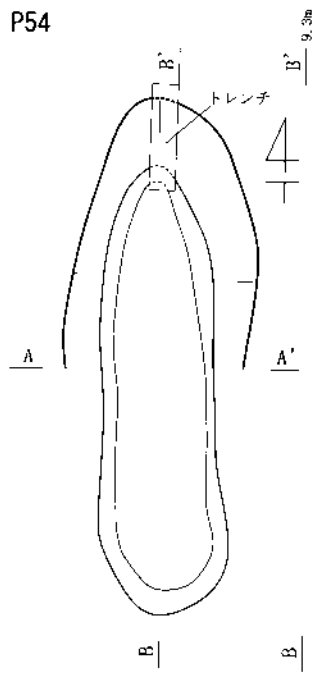
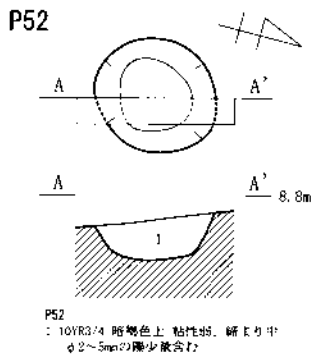
- P44
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性中、締まり強
φ20mm程の瓦層土少量、φ2mm程の礫少量含む
 - 2 10YR4/4 褐色土 粘性中、締まり強
φ10mm程の瓦層土中層、φ2mm程の礫少量含む
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり弱
雲状の瓦層土少量、φ2~5mmの礫中量含む
 - 4 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱、締まり中
φ10mm程の瓦層土少量、φ2mm程の礫少量含む



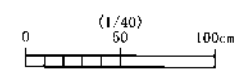
- P47
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ10mm程の瓦層土、φ2mm程の礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強、締まり強
雲状の瓦層土中層、φ2mm程の礫少量含む
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ2~3mmの礫少量含む

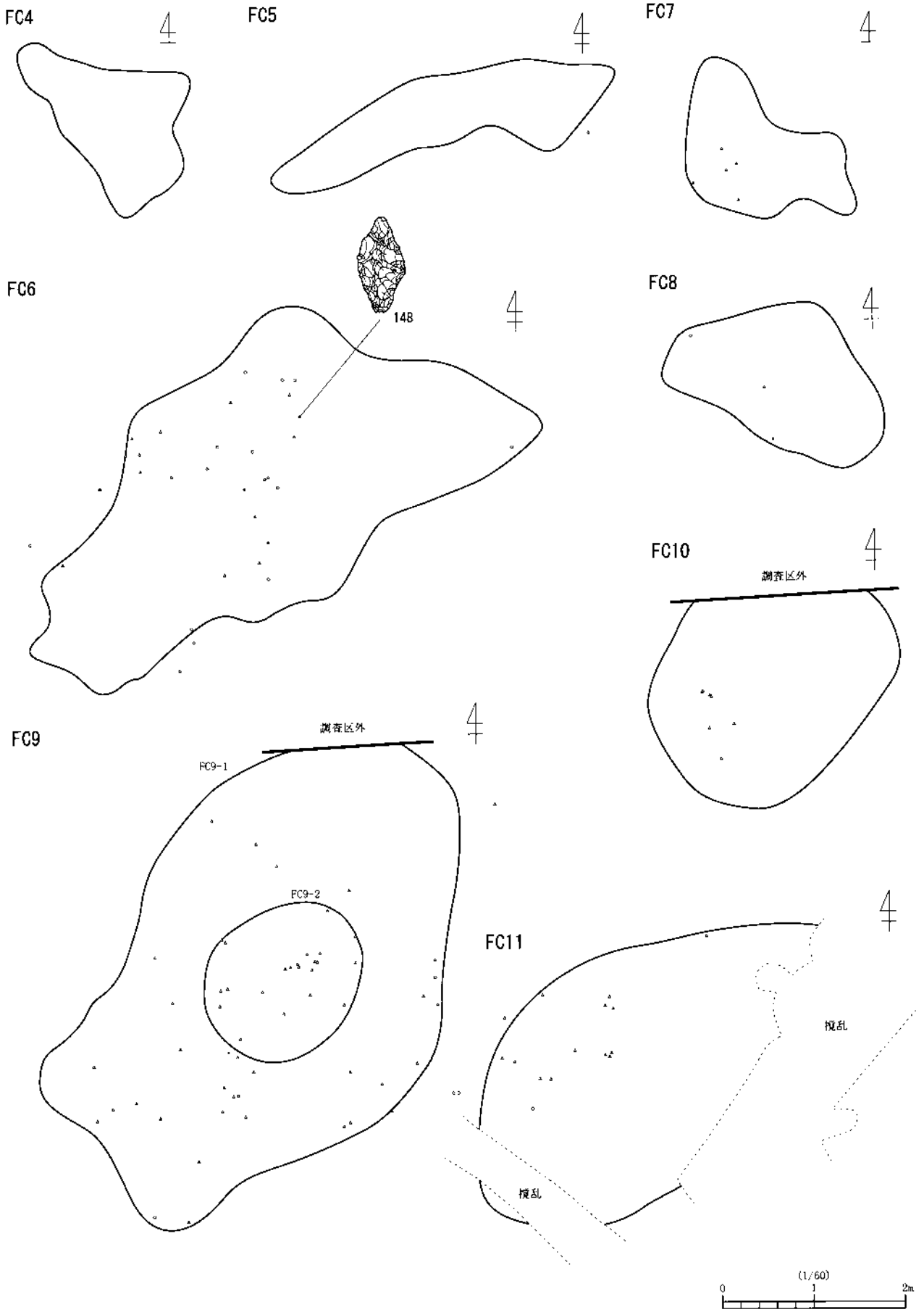


- P51
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱、締まり強
φ2~7mmの礫中量含む
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性弱、締まりやや強
φ3~5mmの礫少量含む
 - 3 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや弱、締まりやや強
雲状の瓦層土、φ2mm程の礫少量含む
 - 4 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや弱、締まり中
雲状の瓦層土中量含む
 - 5 10YR3/6 黄褐色土 粘性中、締まり強
雲状の瓦層土中量含む

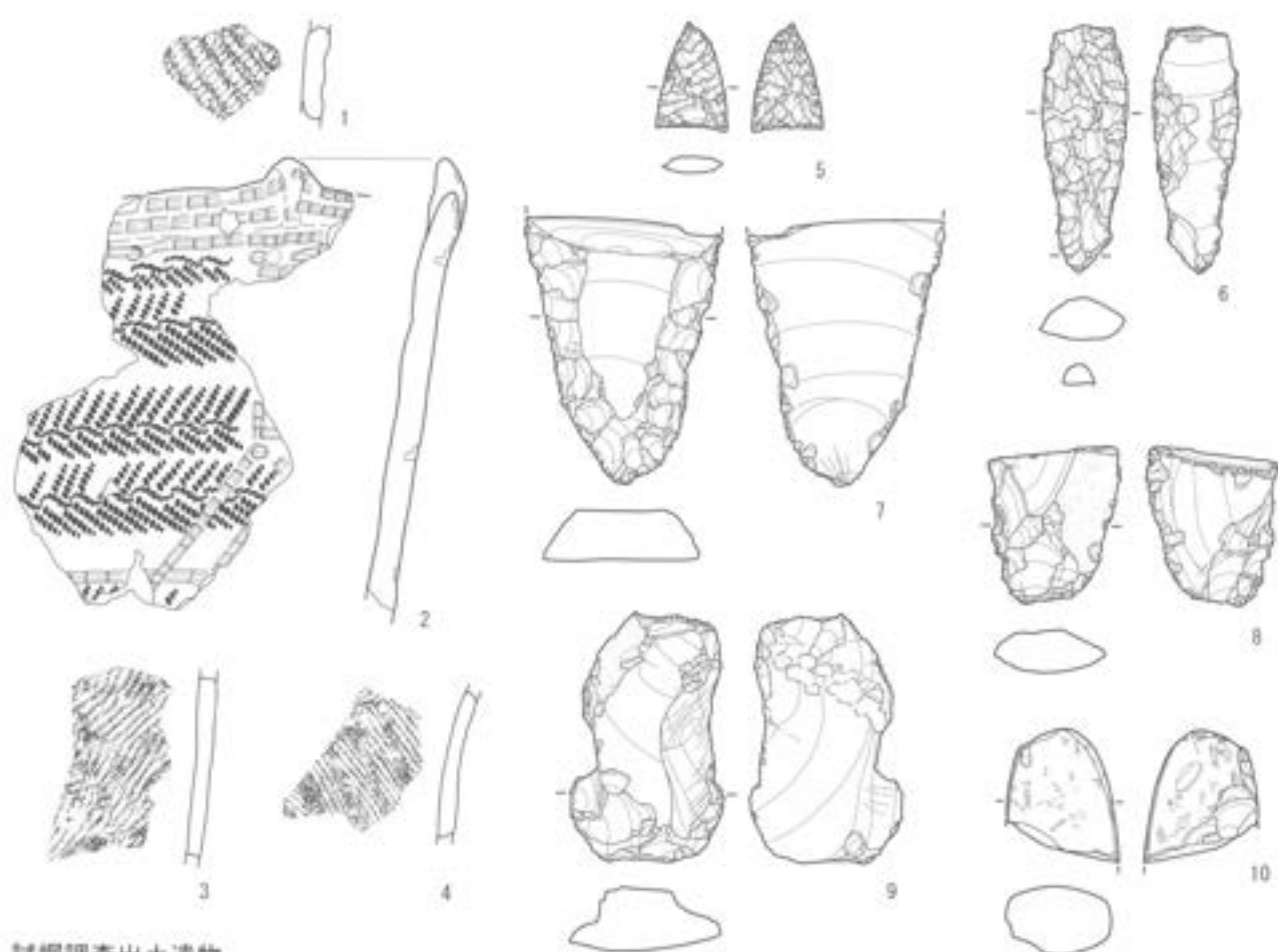


図版28 平成31年度 P(5)・SX

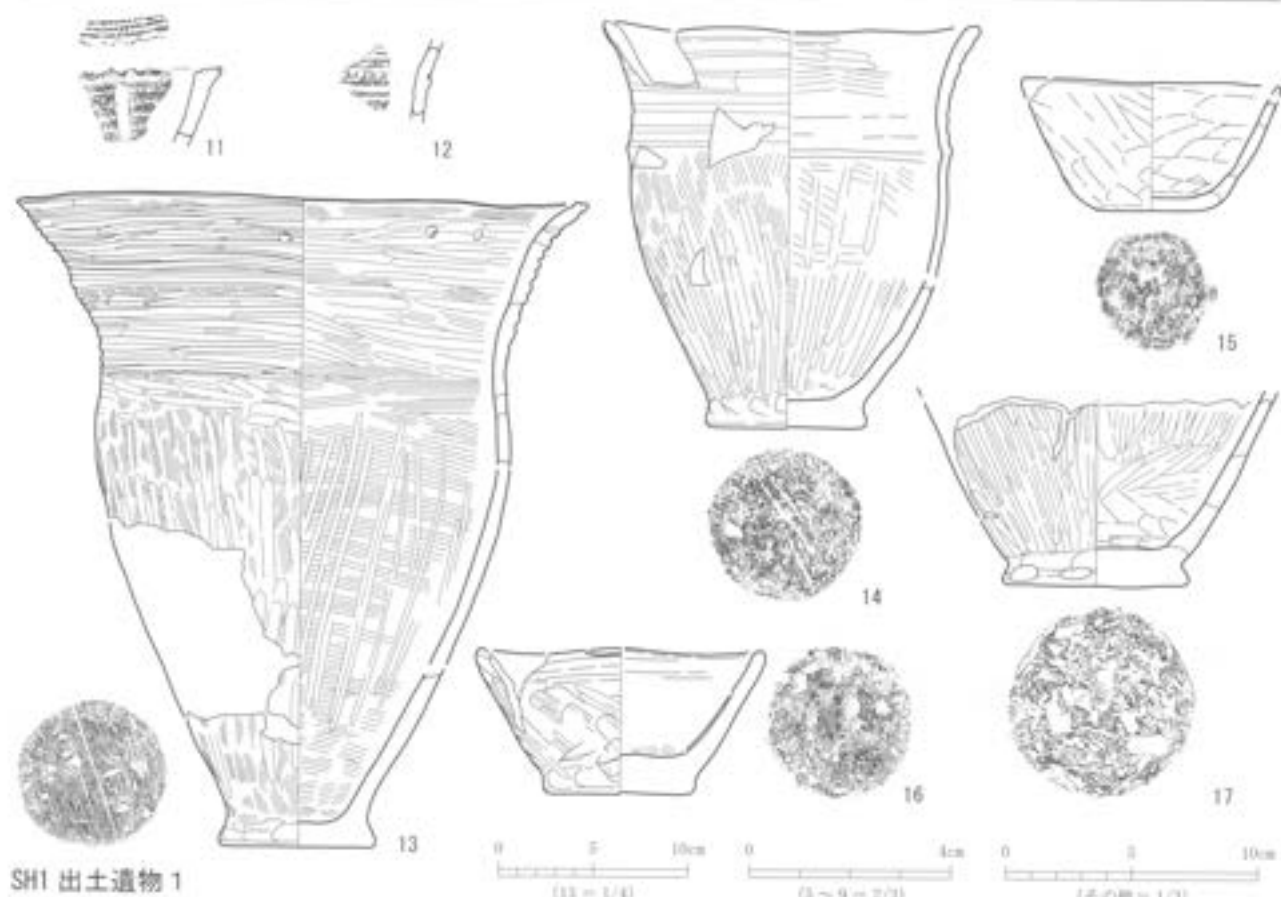




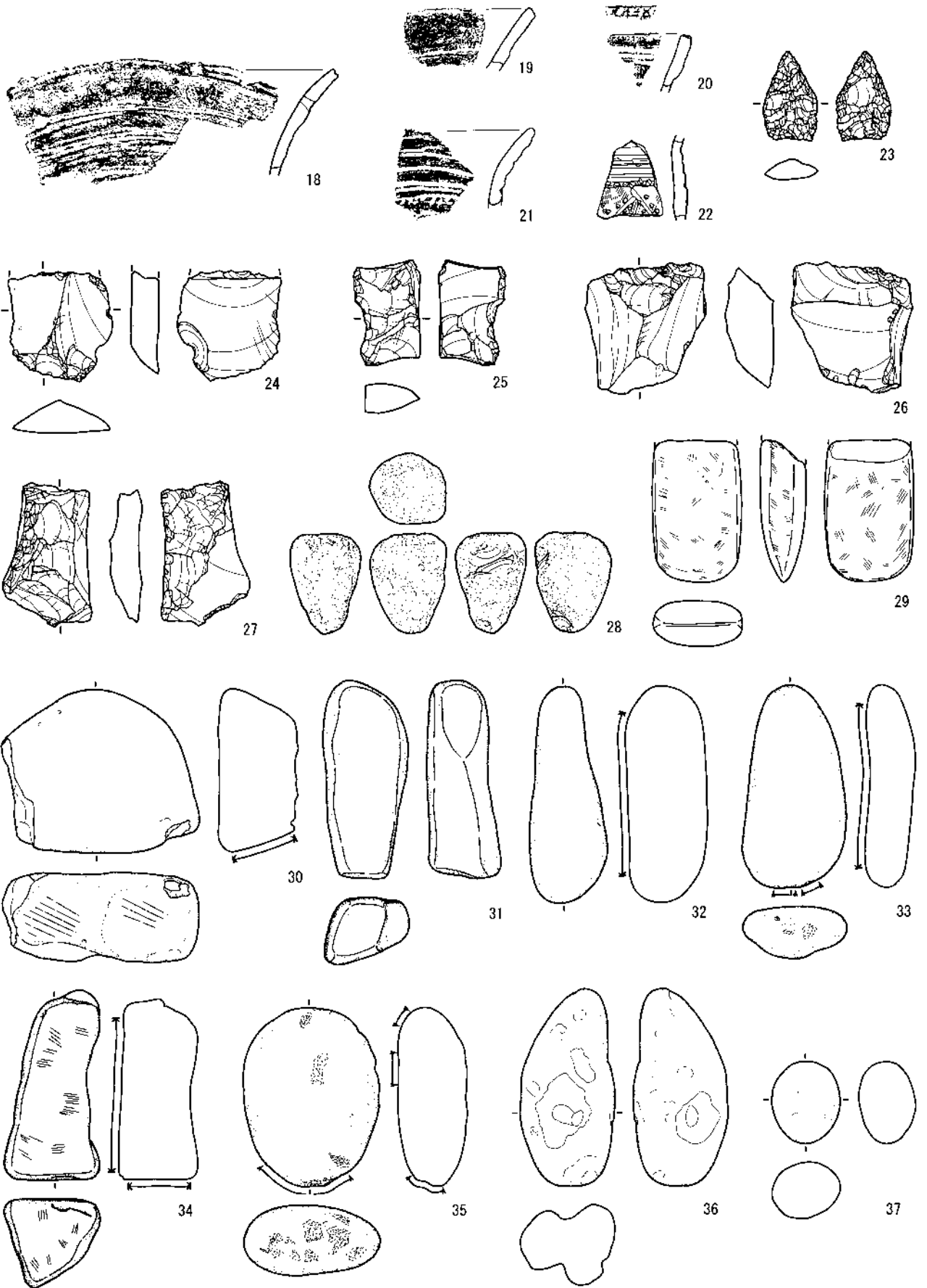
図版 29 平成 31 年度 FC



試掘調査出土遺物



図版30 試掘調査出土遺物・平成30年度遺構内出土遺物(1)



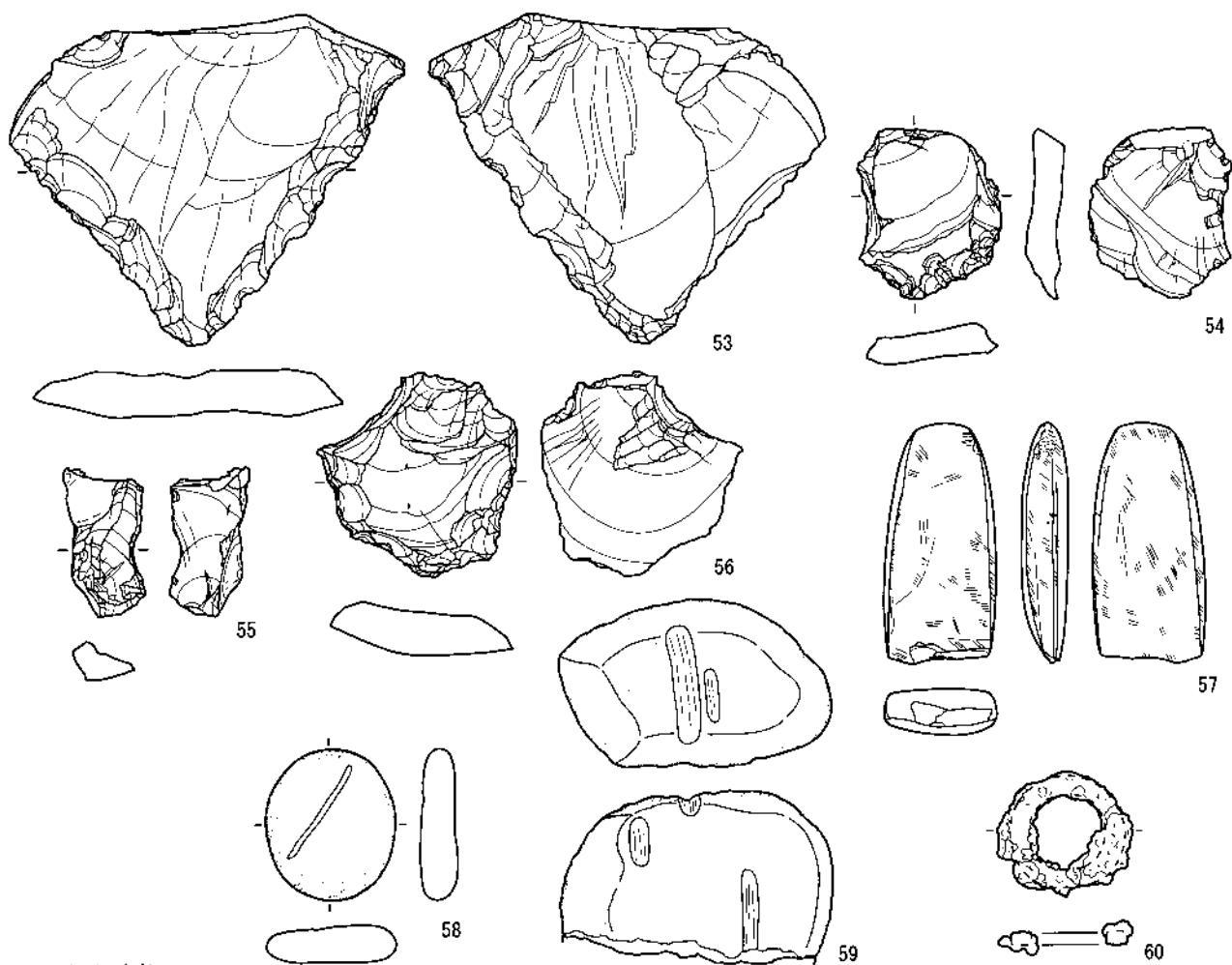
SH1 出土遺物 2

凡例
 :紙面
 0 4cm 10cm
 (23 ~ 27 = 2/3)
 (その他 = 1/3)

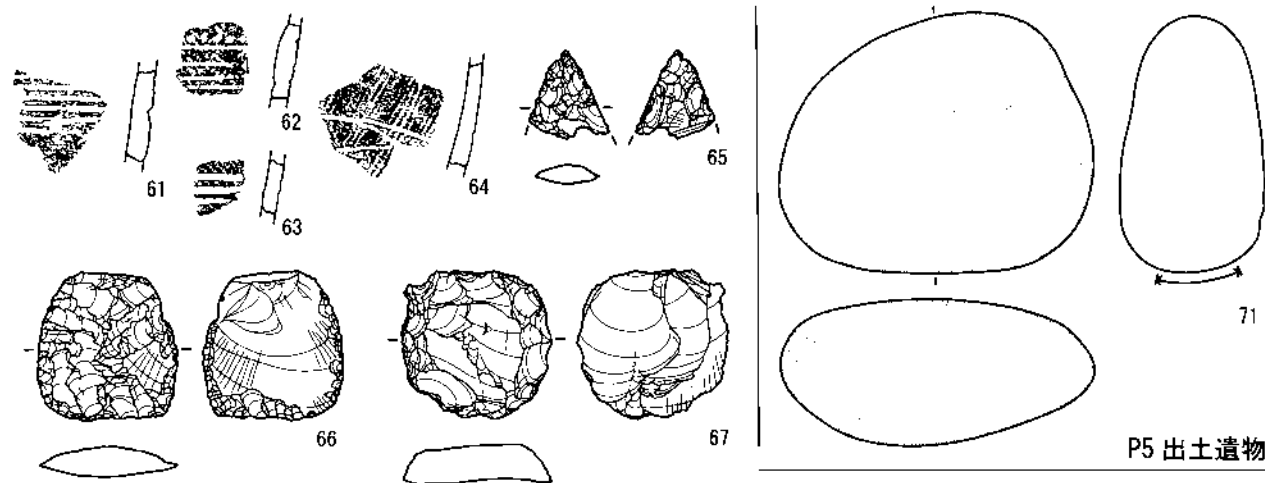
図版31 平成30年度遺構内出土遺物(2)



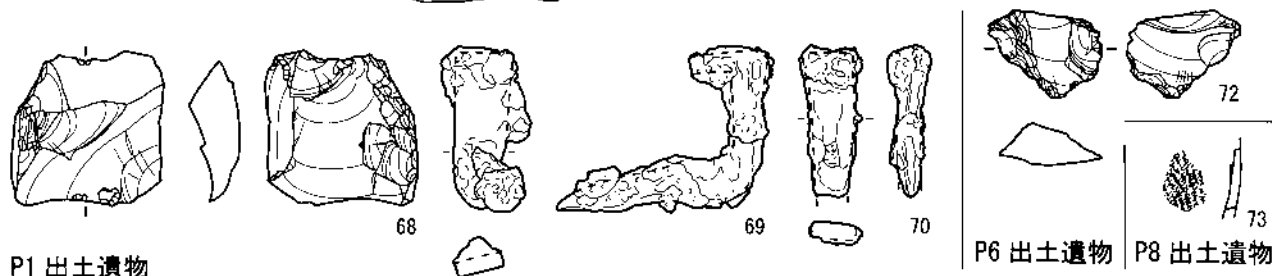
図版32 平成30年度遺構内出土遺物(3)



SH2 出土遺物 2



P5 出土遺物



P1 出土遺物

P6 出土遺物

P8 出土遺物

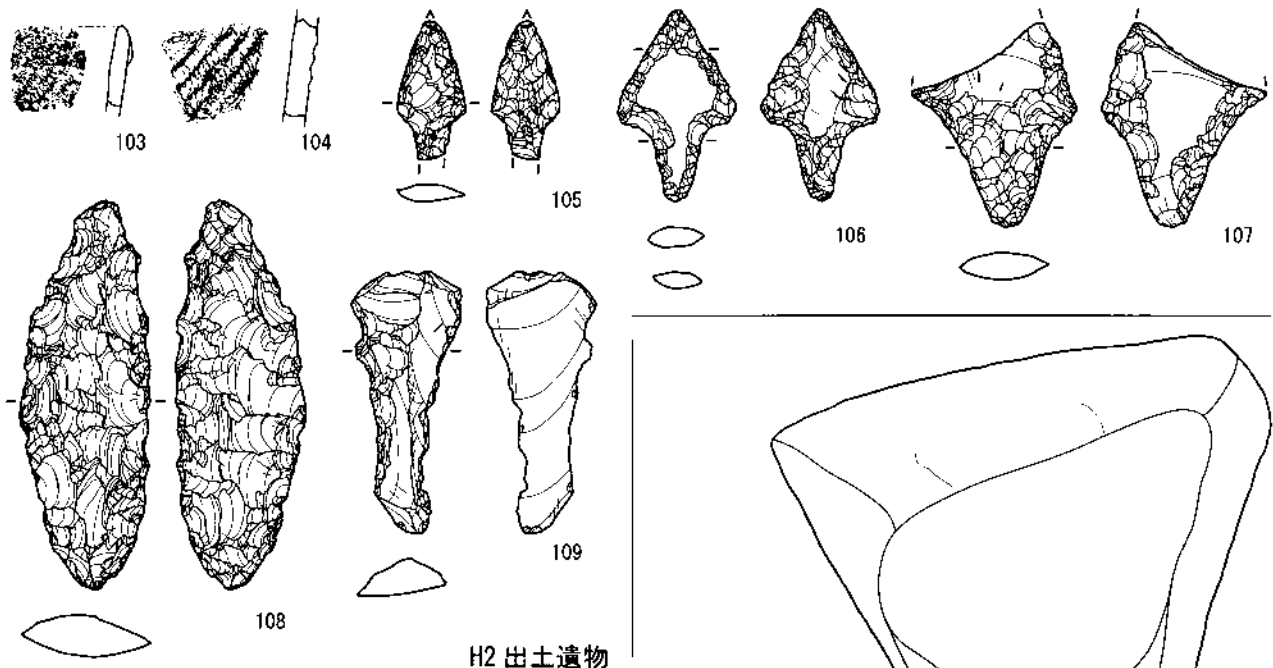
凡例
 寸り面
 0 5cm (60・69・70 = 1/2)
 0 4cm (53・56・65・68・72 = 2/3)
 0 5 10cm (その他 = 1/3)

図版 33 平成 30 年度遺構内出土遺物 (4)

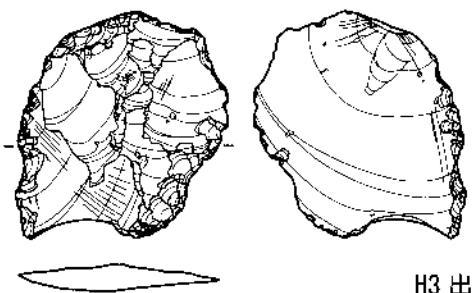


凡例 0 5cm 0 4cm 0 5 10cm
 : 紙面
 (96 - 1/2) (77・78・86 ~ 89・92 ~ 94・100・101 = 2/3) (その他 = 1/3)

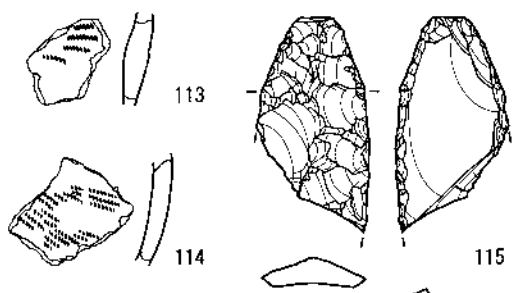
図版34 平成30年度遺構内出土遺物(5)・平成31年度遺構内出土遺物(1)



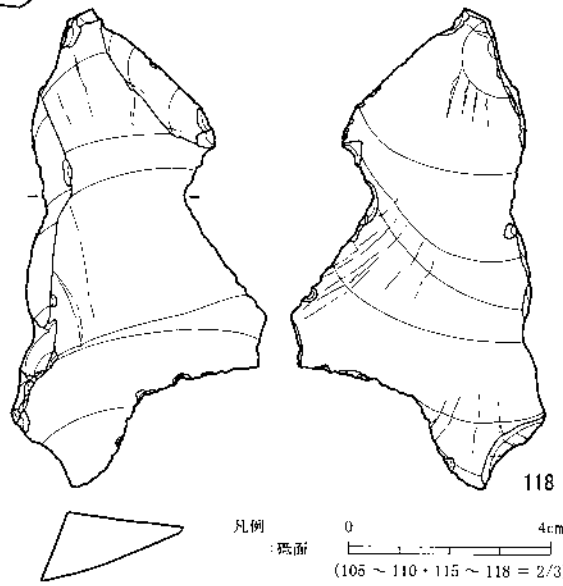
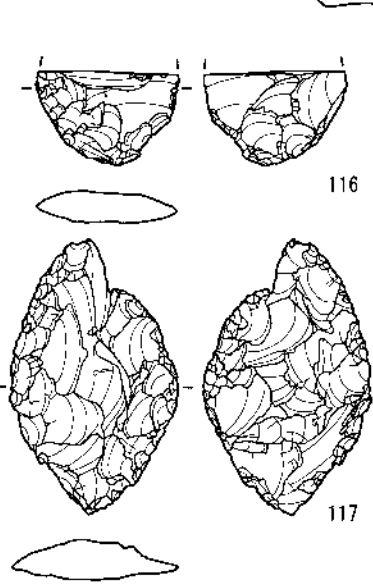
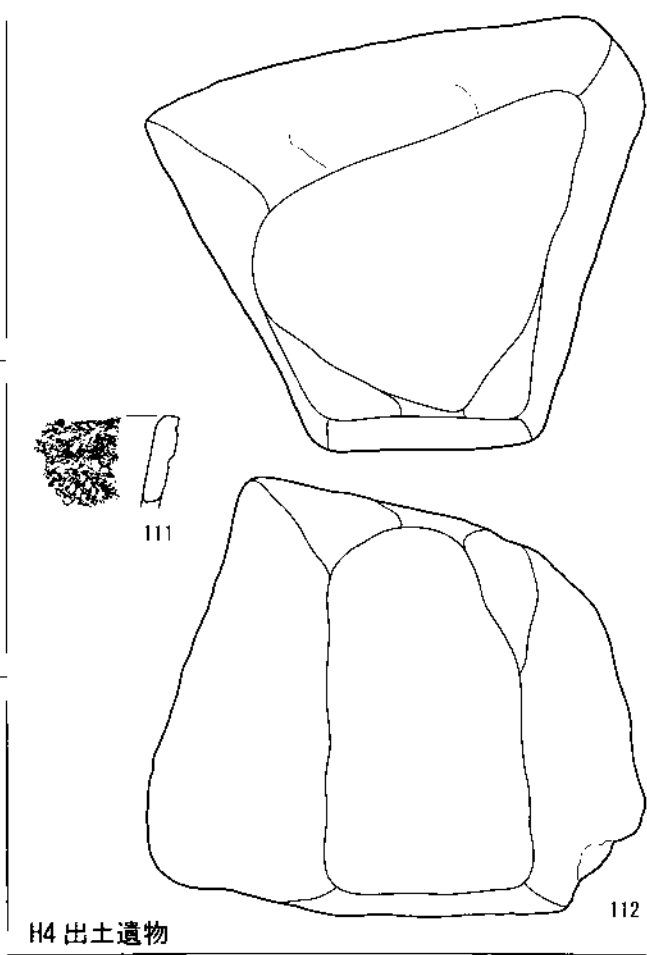
H2 出土遺物



H3 出土遺物



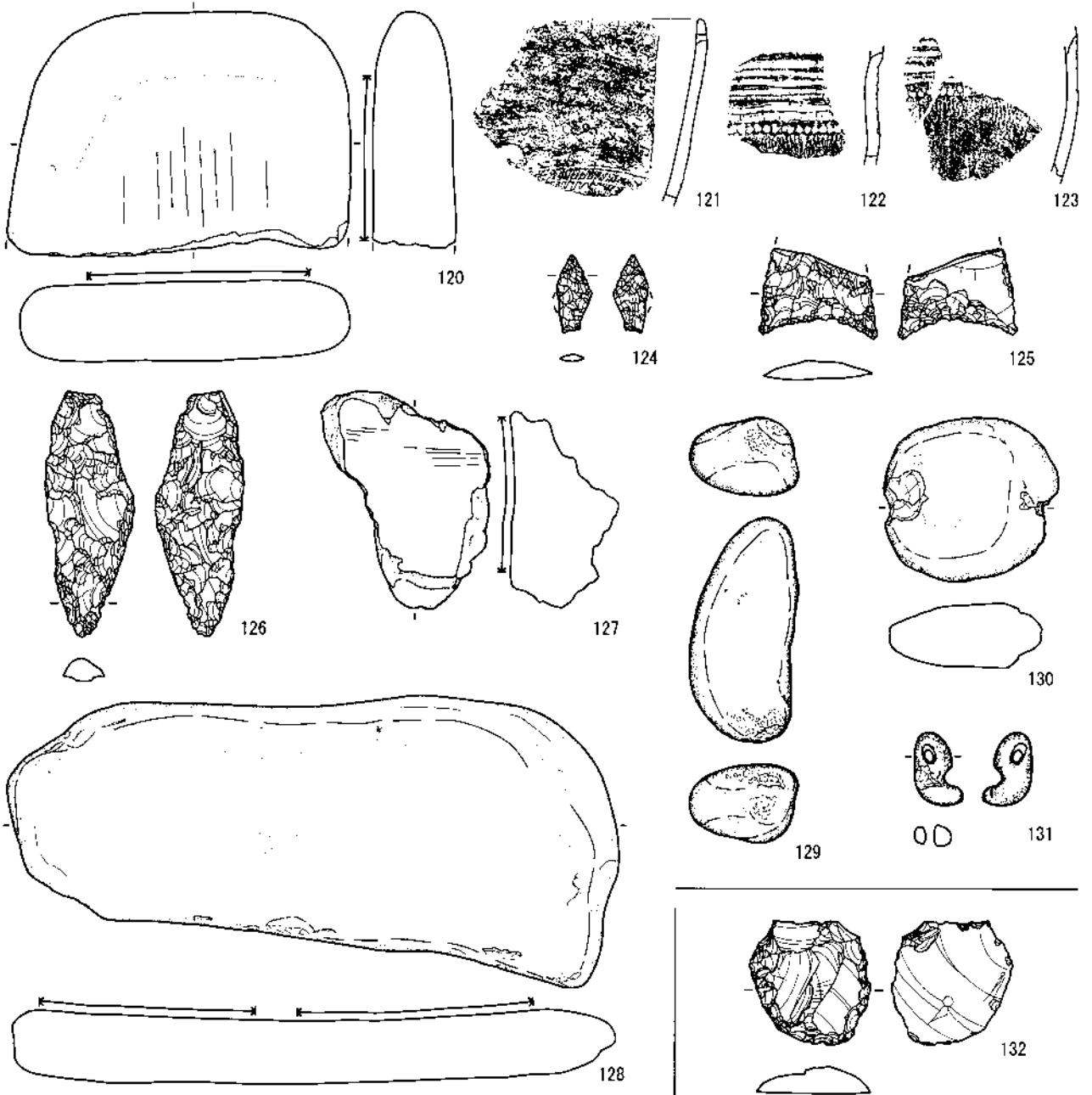
H4 出土遺物



SH3 出土遺物 1

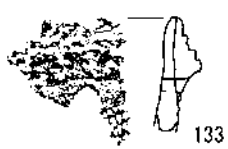
凡例 0 4cm 0 5 10cm
 : 燕面 (105 ~ 110・115 ~ 118 = 2/3) (その他 = 1/3)

図版 35 平成 31 年度 遺構内 出土遺物 (2)



SH3 出土遺物 2

P17 出土遺物



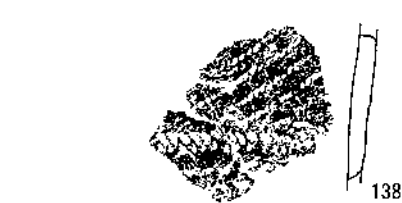
P18 出土遺物



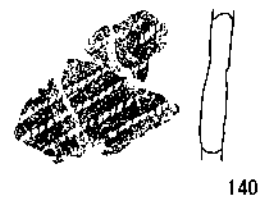
P19 出土遺物



P24 出土遺物

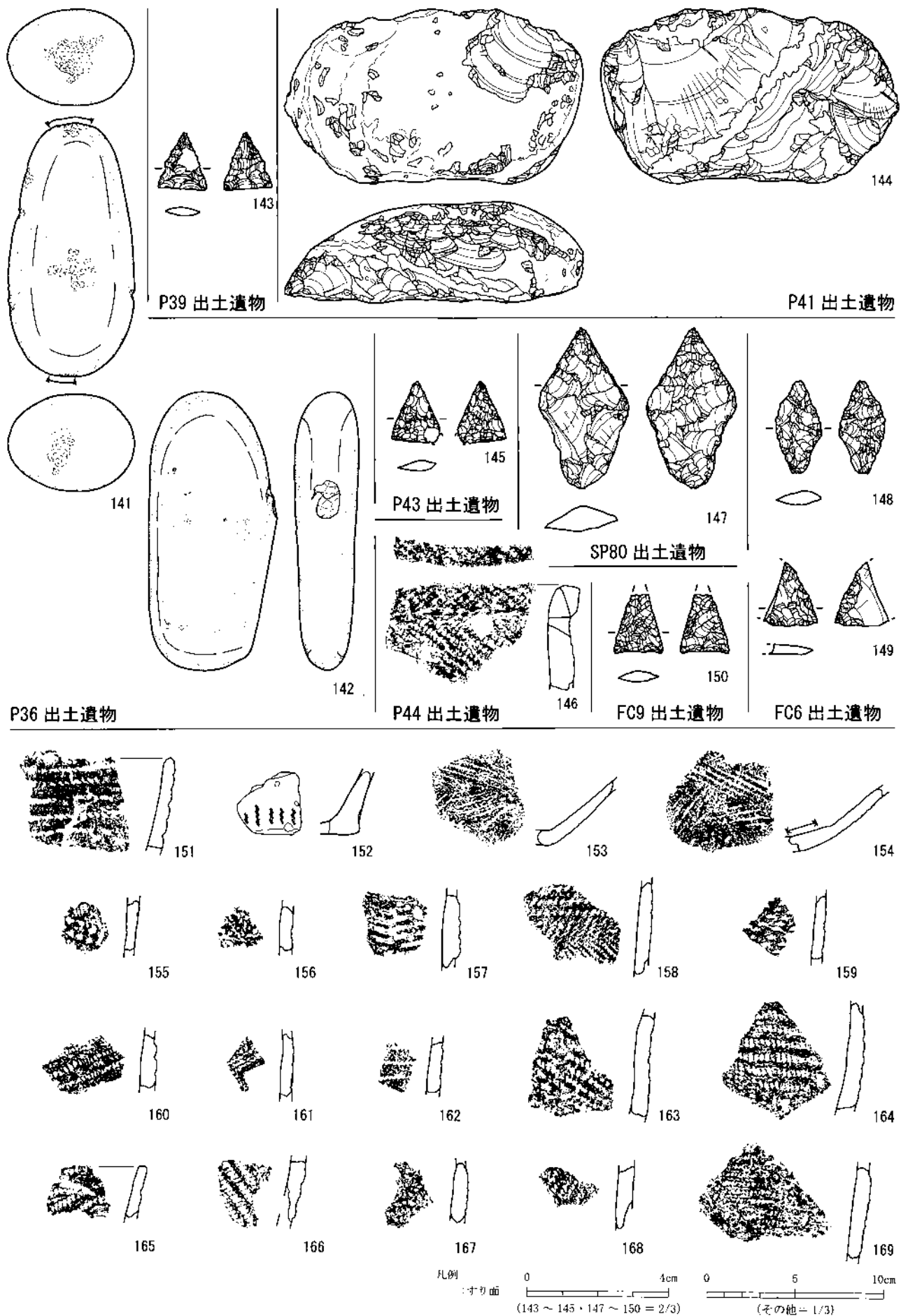


P31 出土遺物

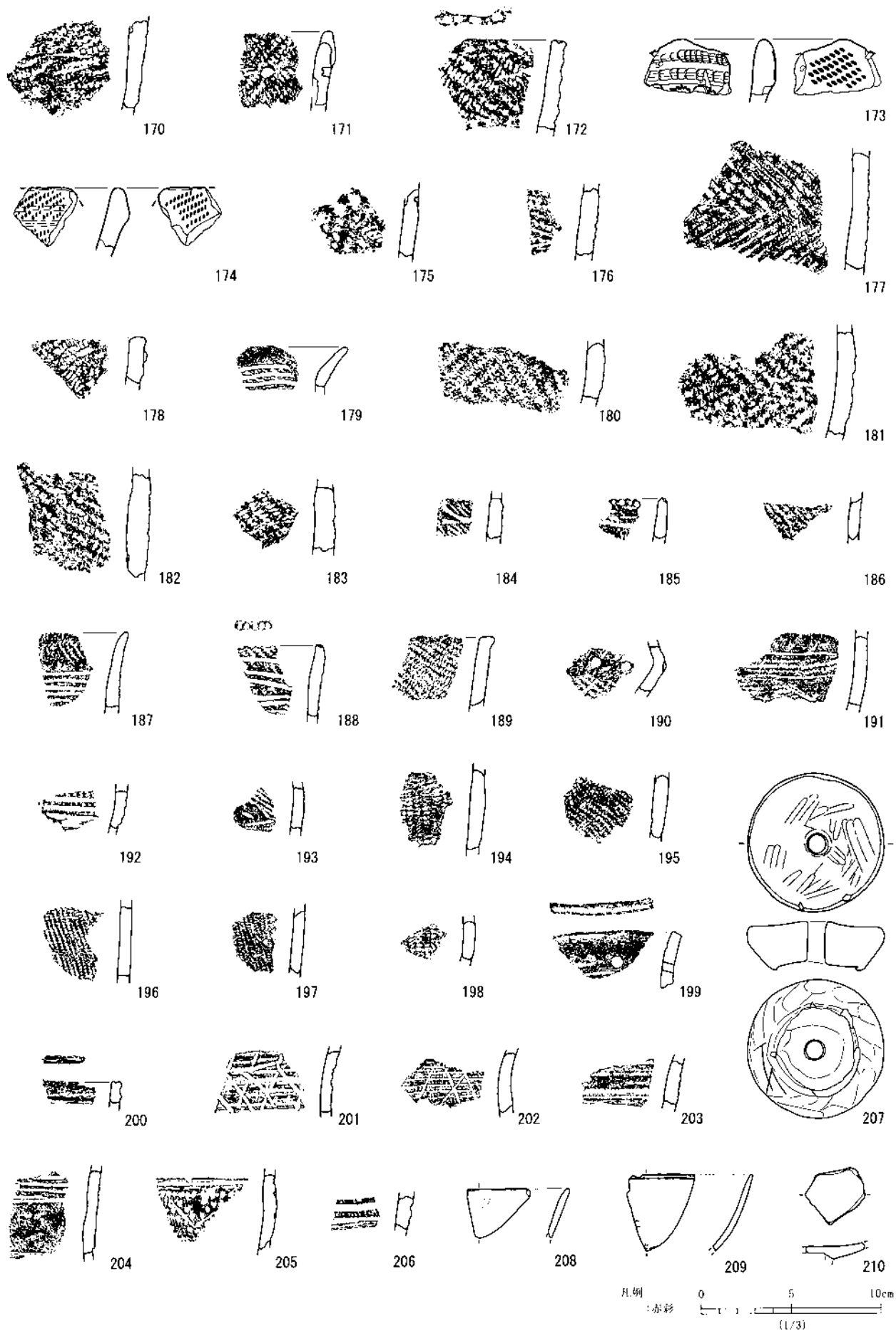


凡例 0 4cm 0 5 10cm
 紙面
 (124 ~ 126 · 132 · 134 ~ 137 = 2/3) (その他 = 1/3)

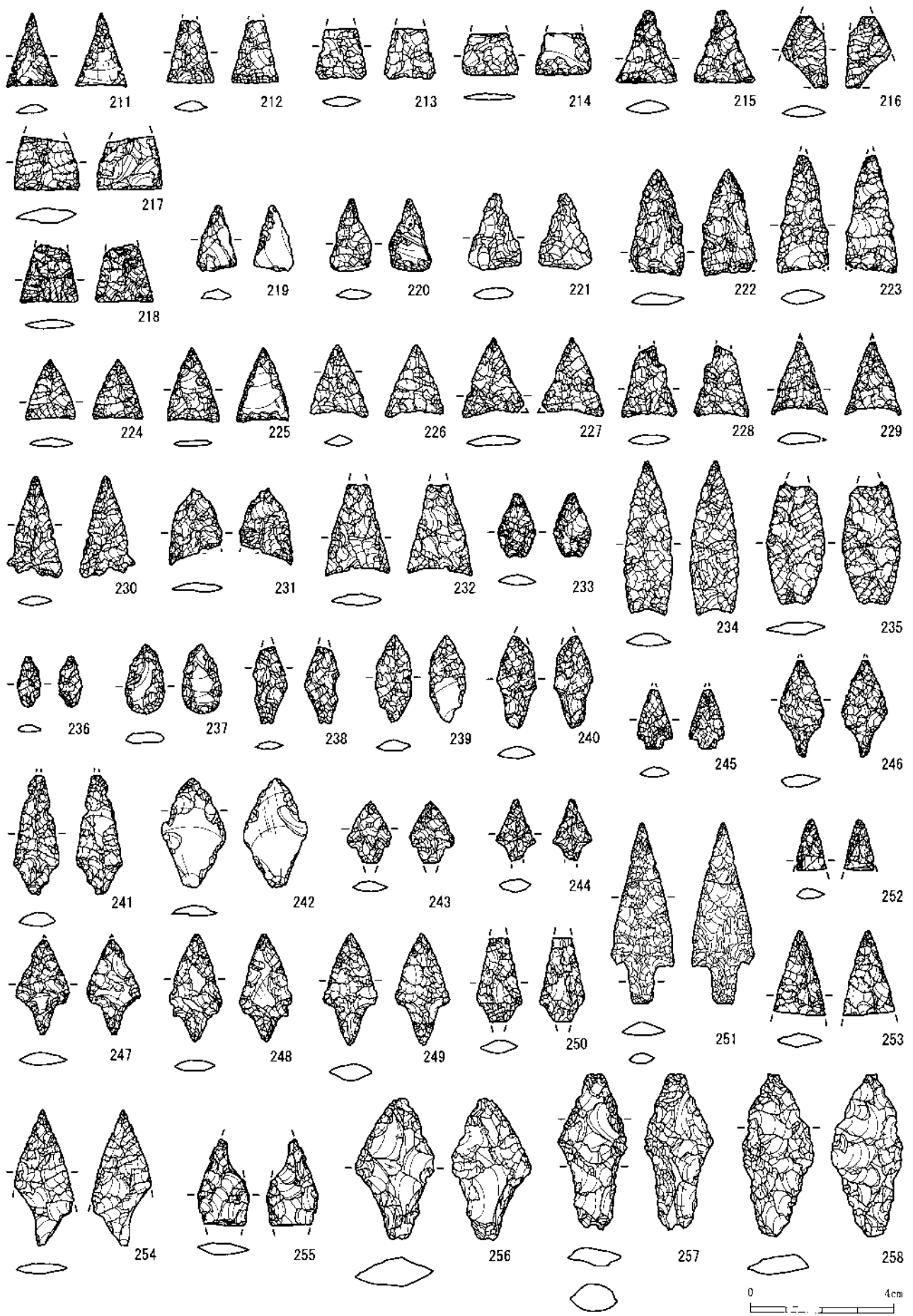
図版36 平成31年度遺構内出土遺物 (3)



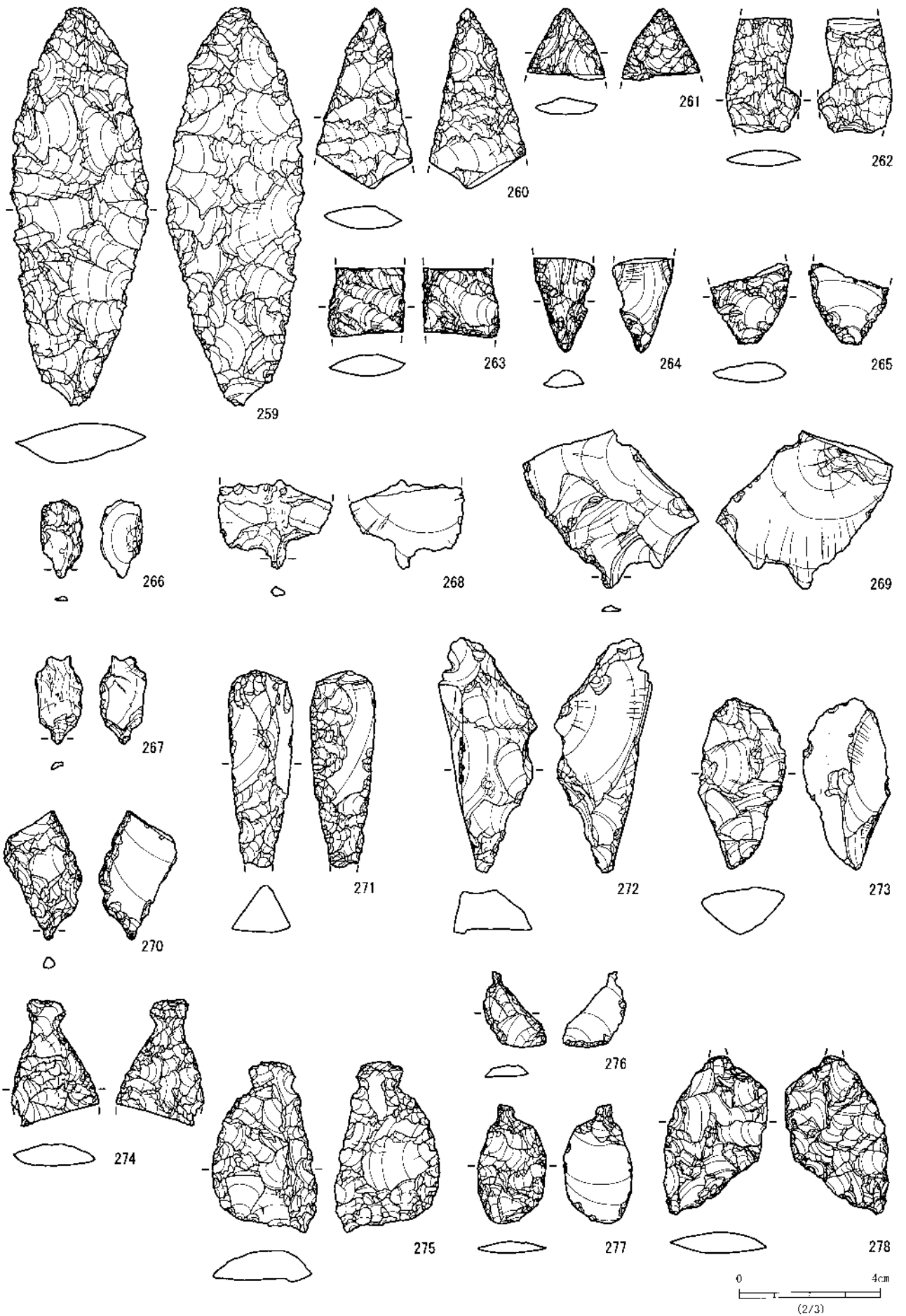
図版37 平成31年度遺構内出土遺物(4)・遺構外出土土器(1)



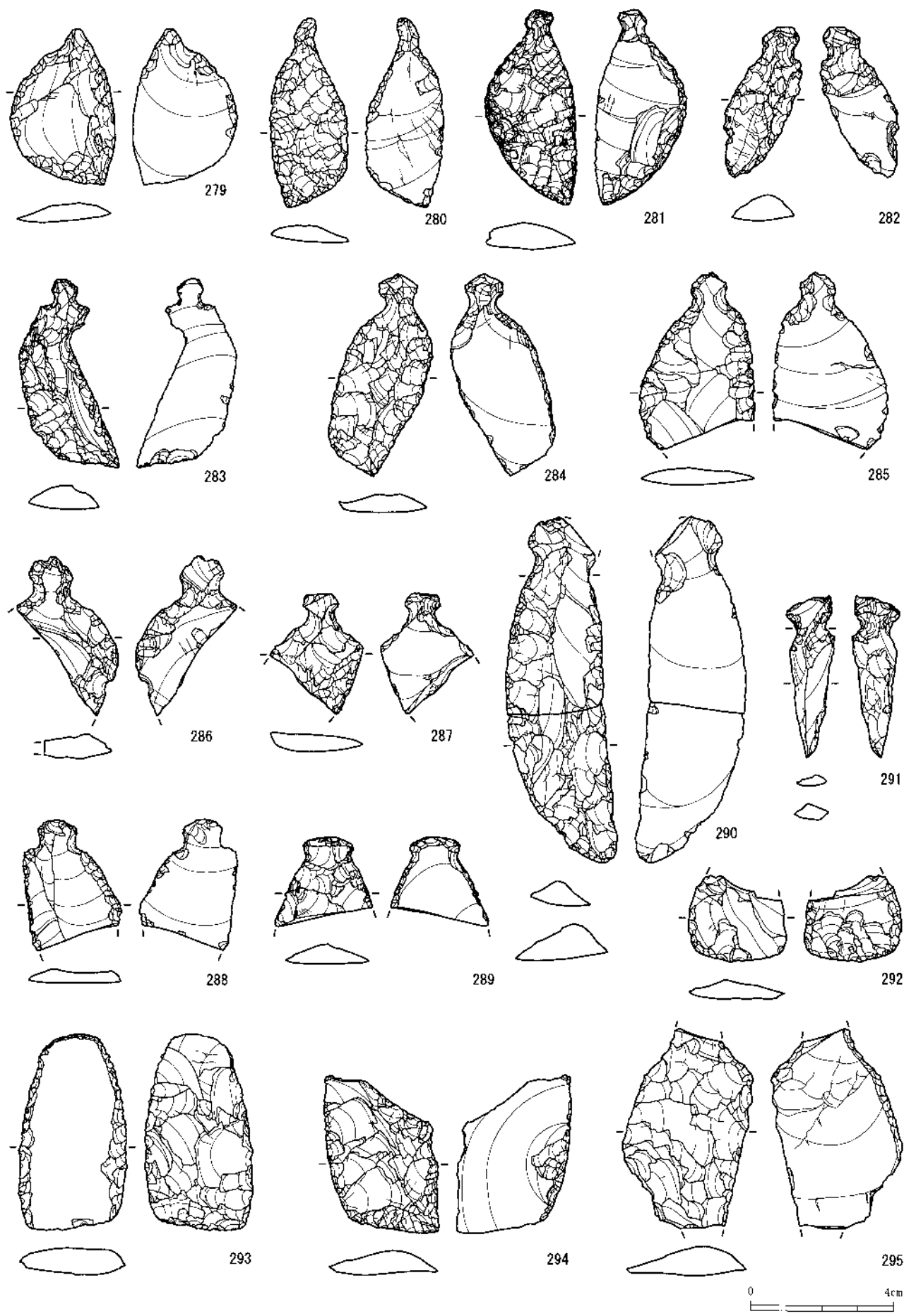
图版38 遺構外出土土器(2)・土製品・磁器



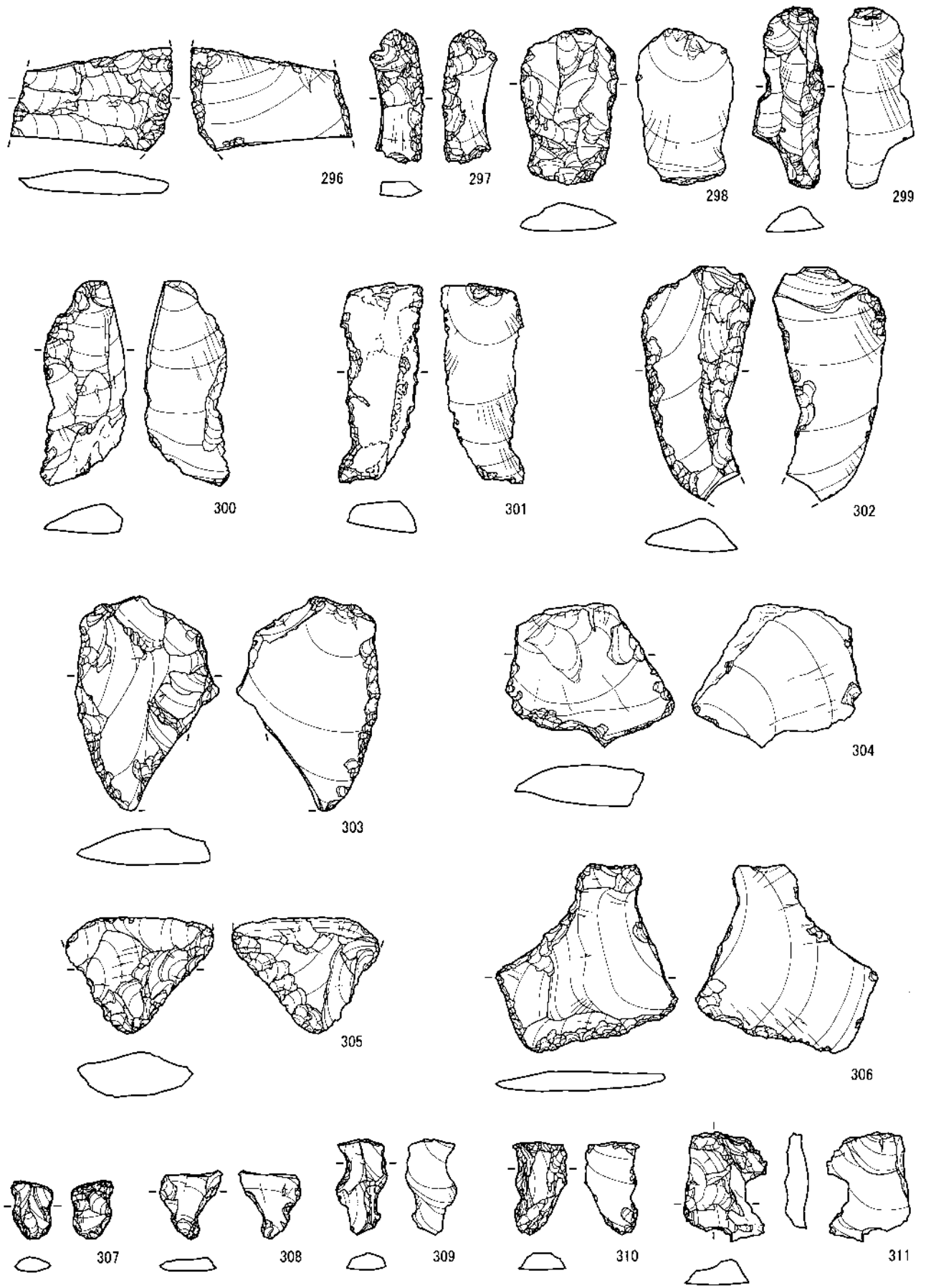
图版39 遺構外出土石器（1）



图版40 遺構外出土石器(2)

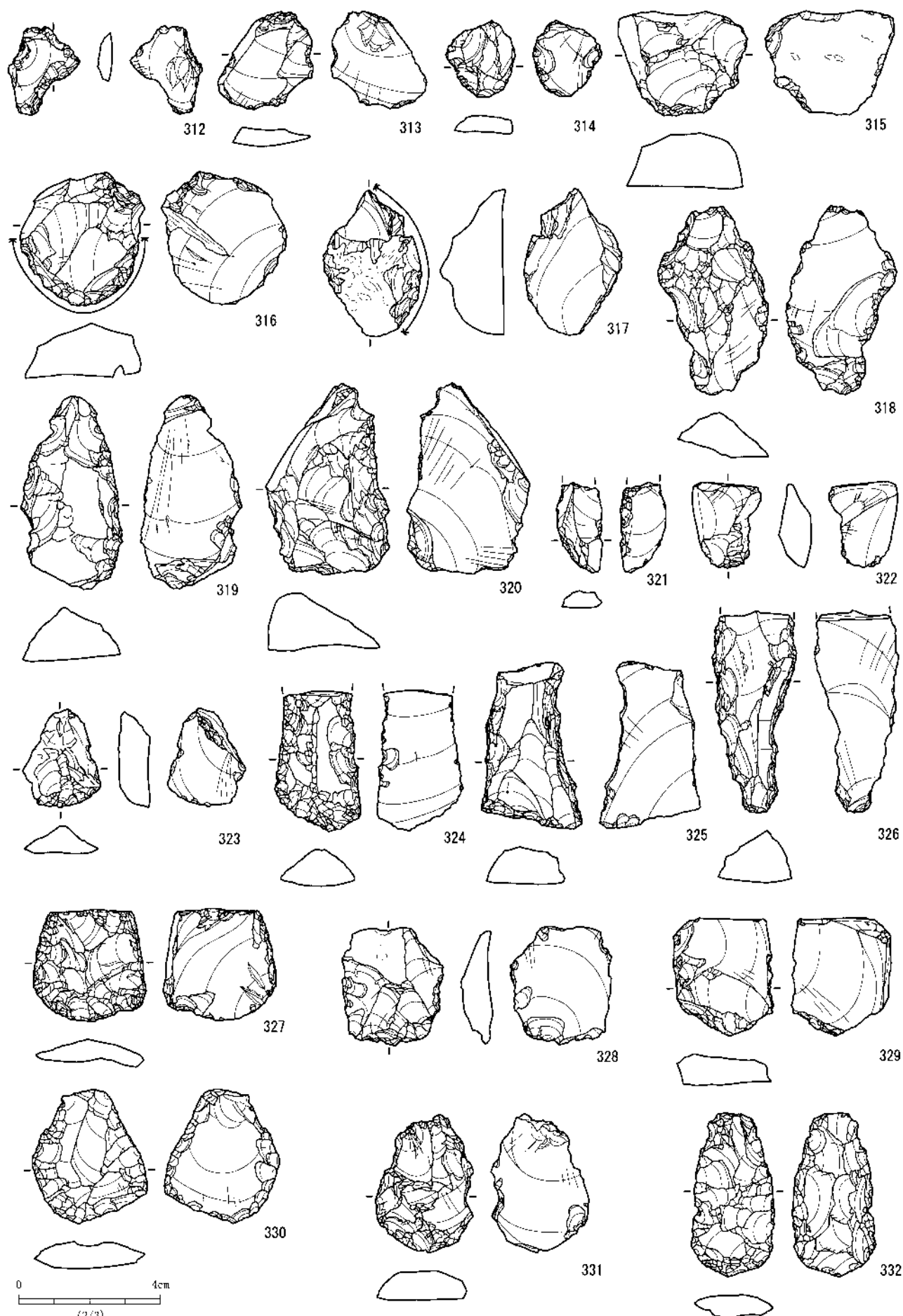


图版41 遺構外出土石器 (3)

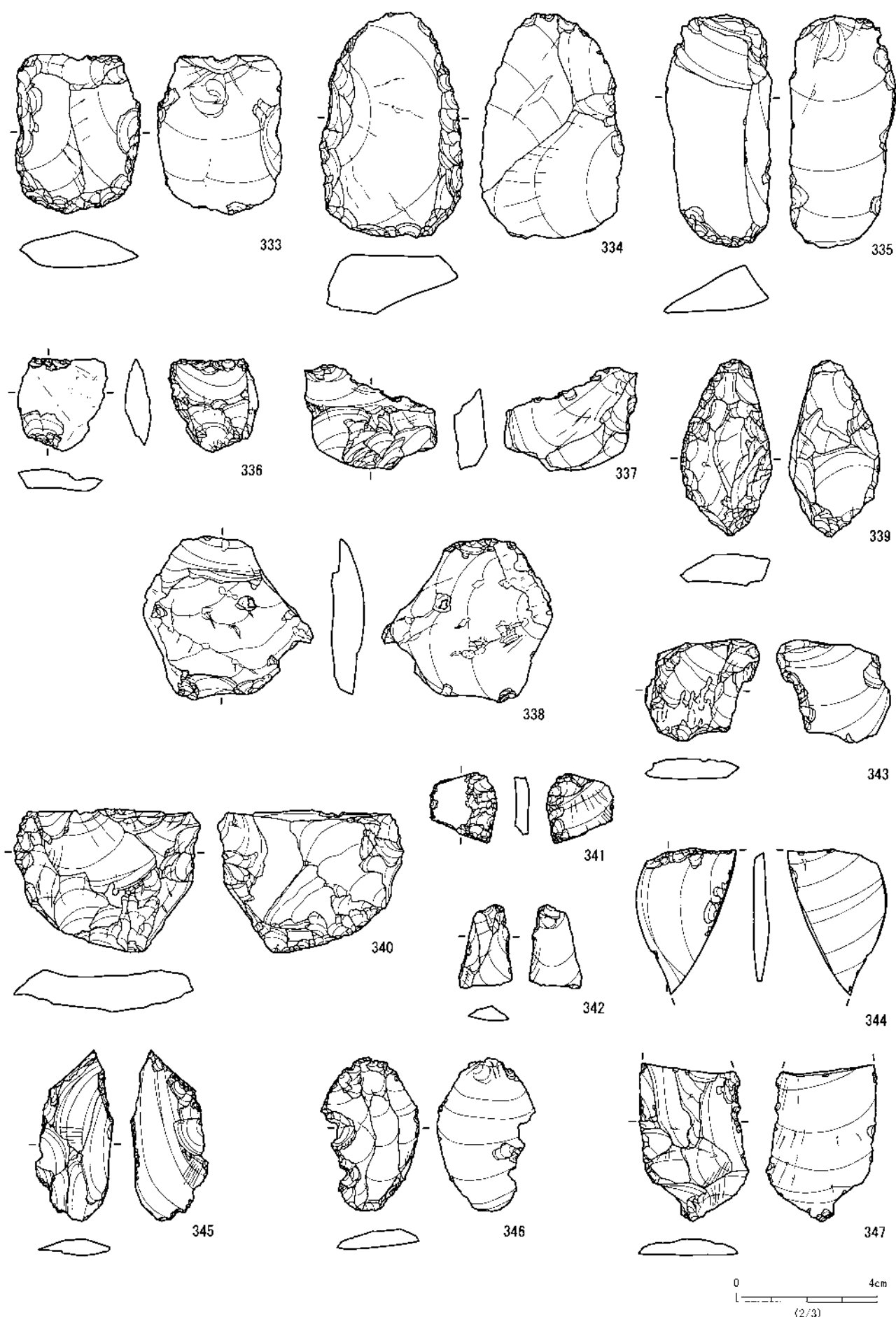


0 4cm
(2/3)

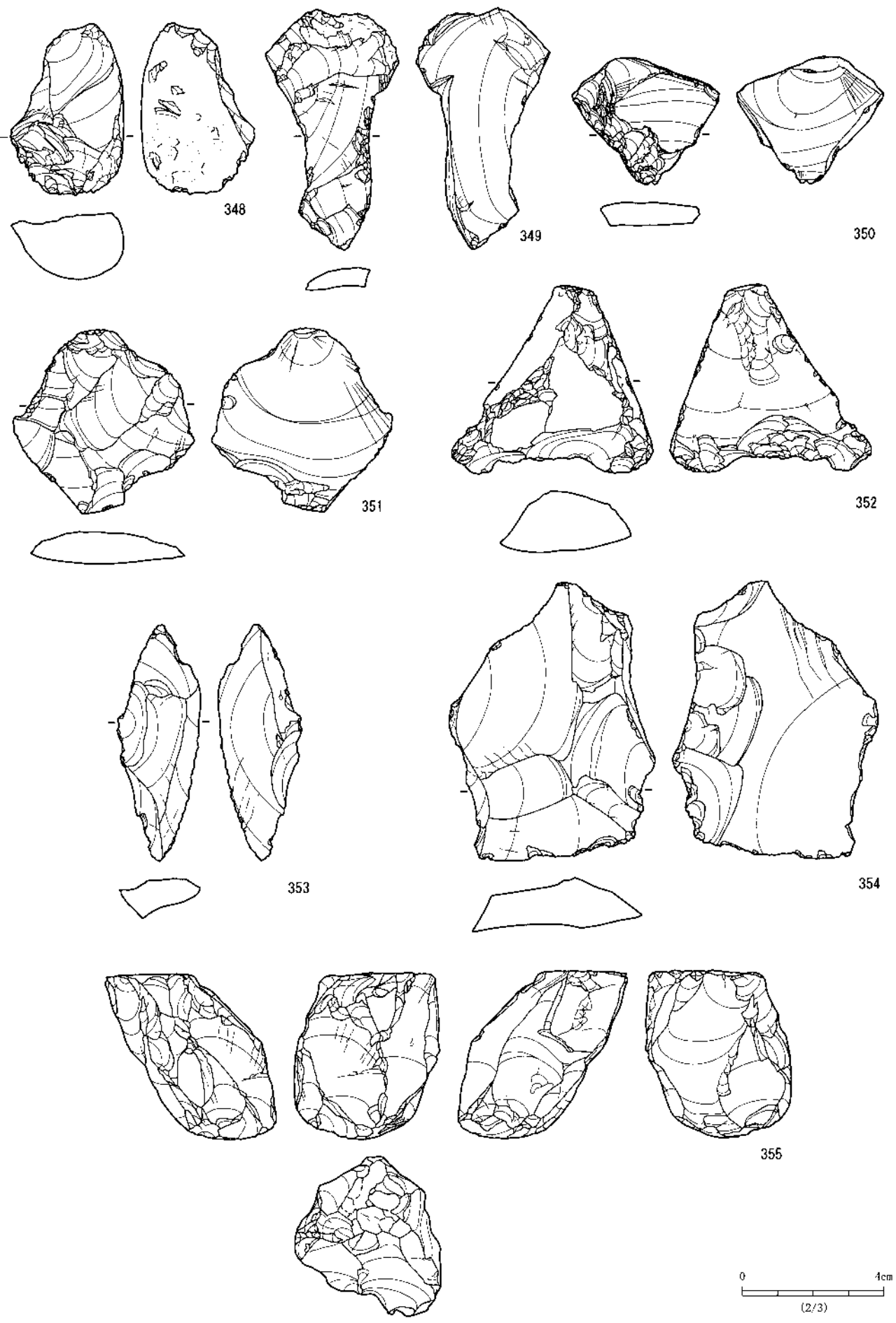
图版 42 遺構外出土石器 (4)



图版43 遺構外出土石器 (5)



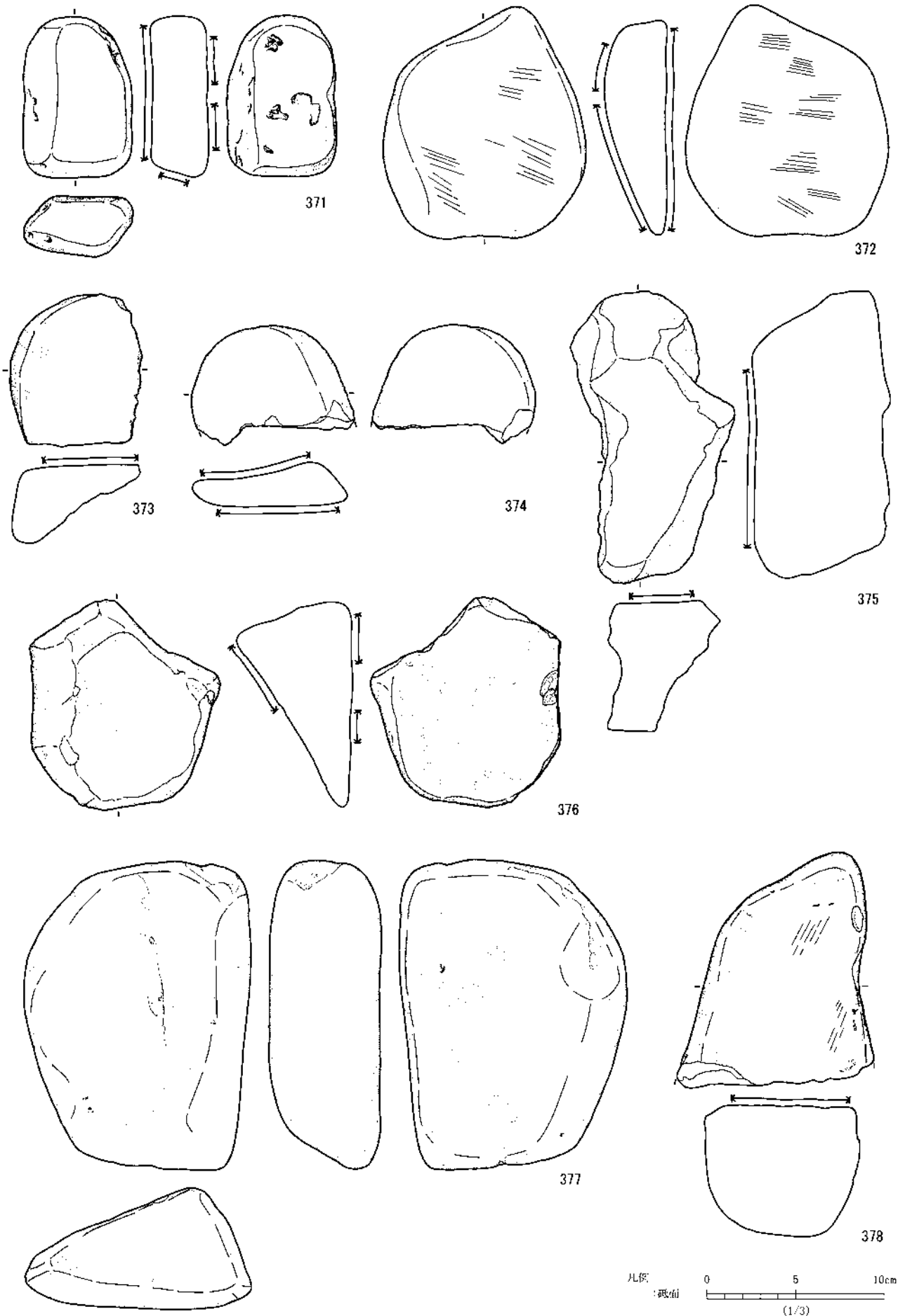
图版44 遺構外出土石器 (6)



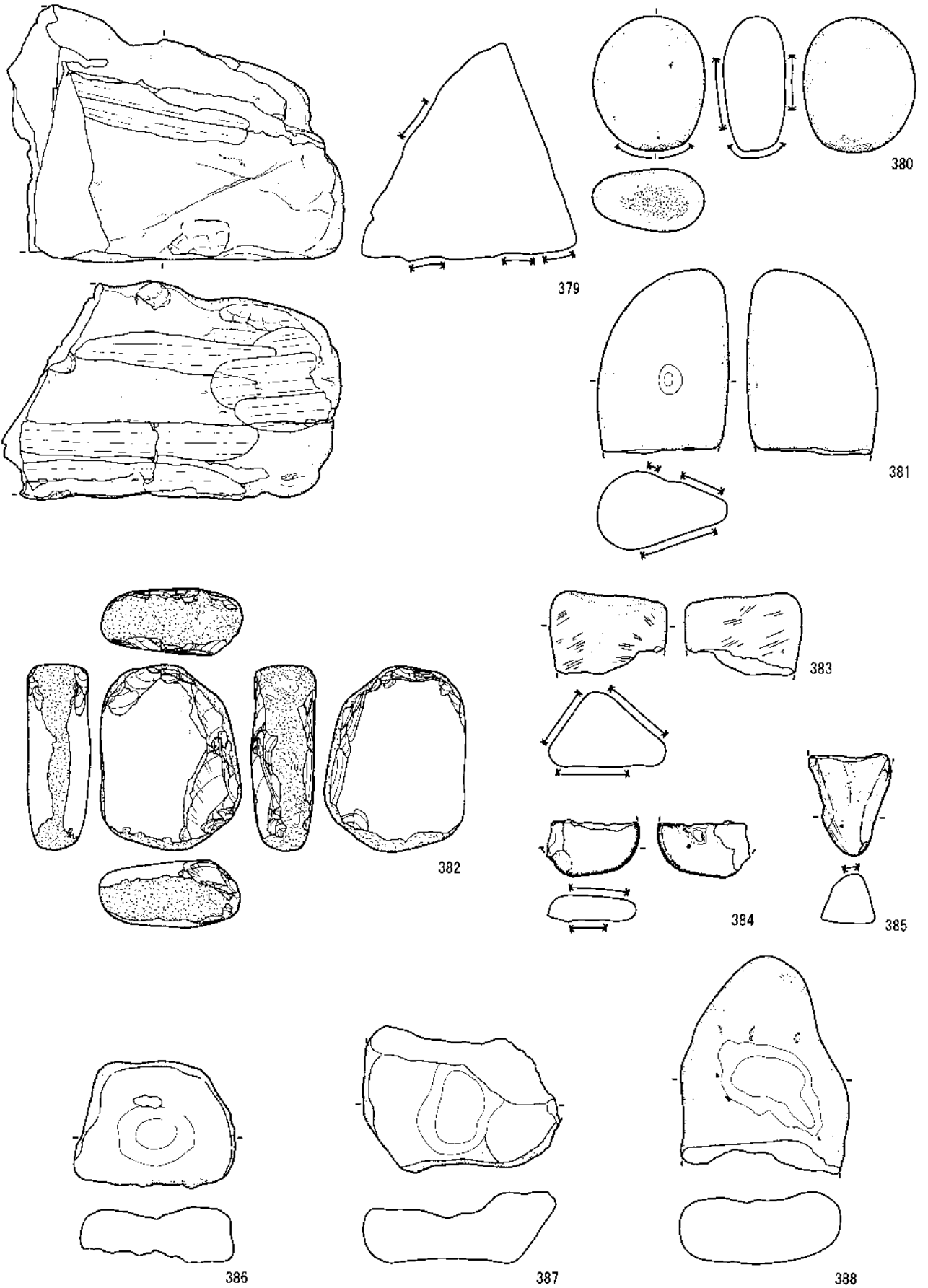
图版45 遺構外出土石器(7)



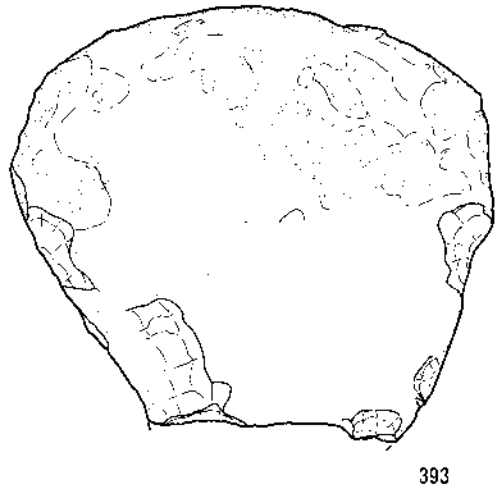
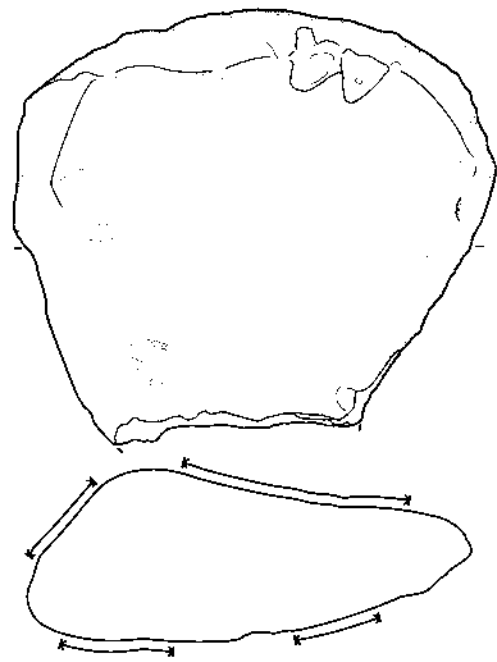
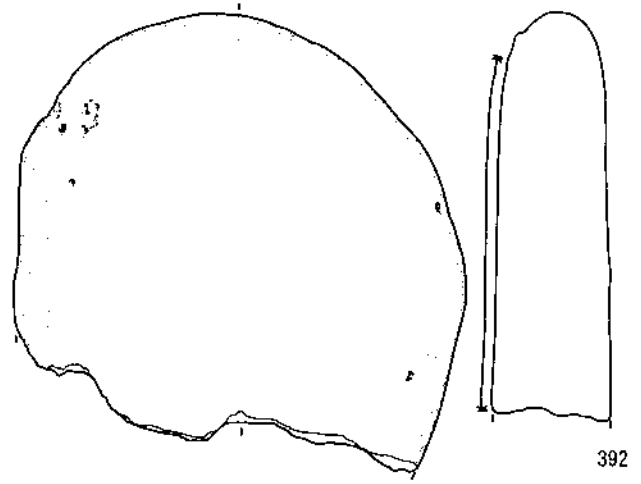
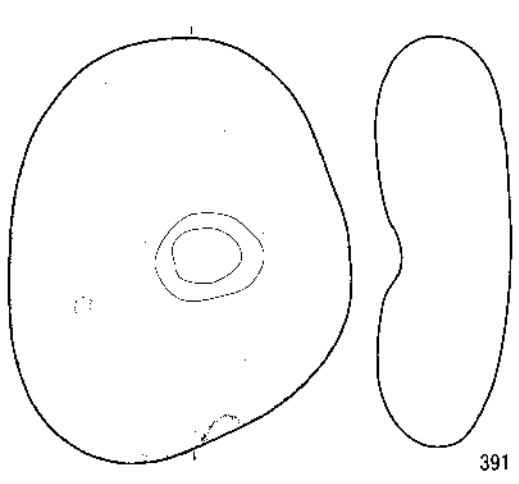
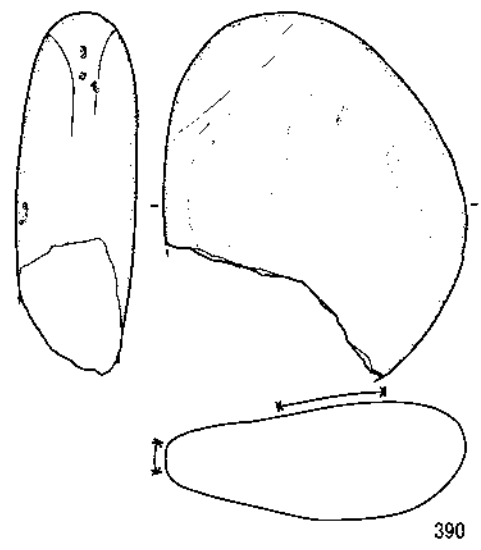
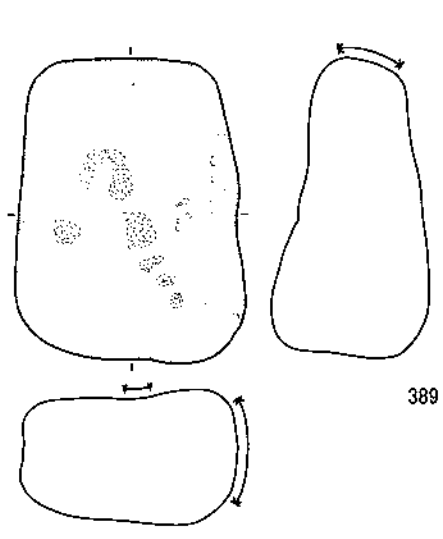
图版46 遺構外出土石器 (8)



圖版47 遺構外出土石器(9)

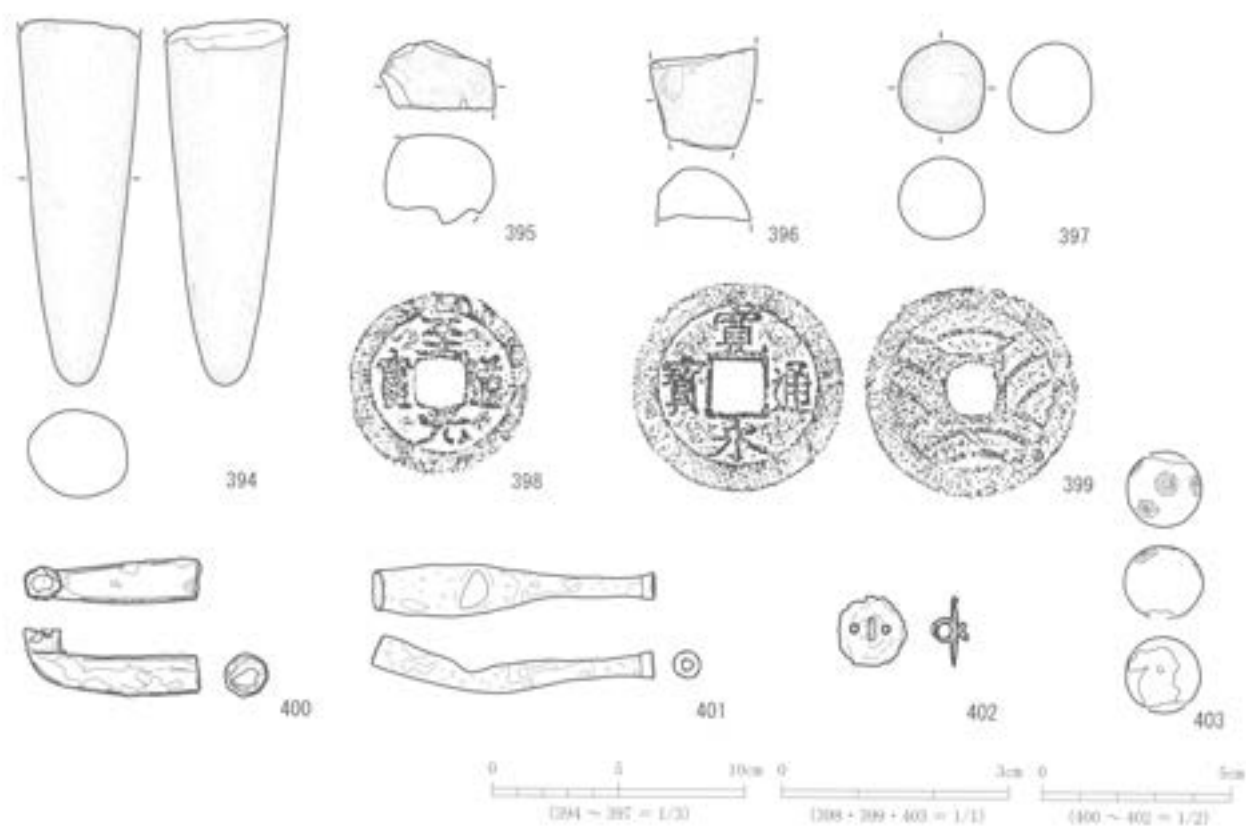


图版48 遺構外出土石器 (10)

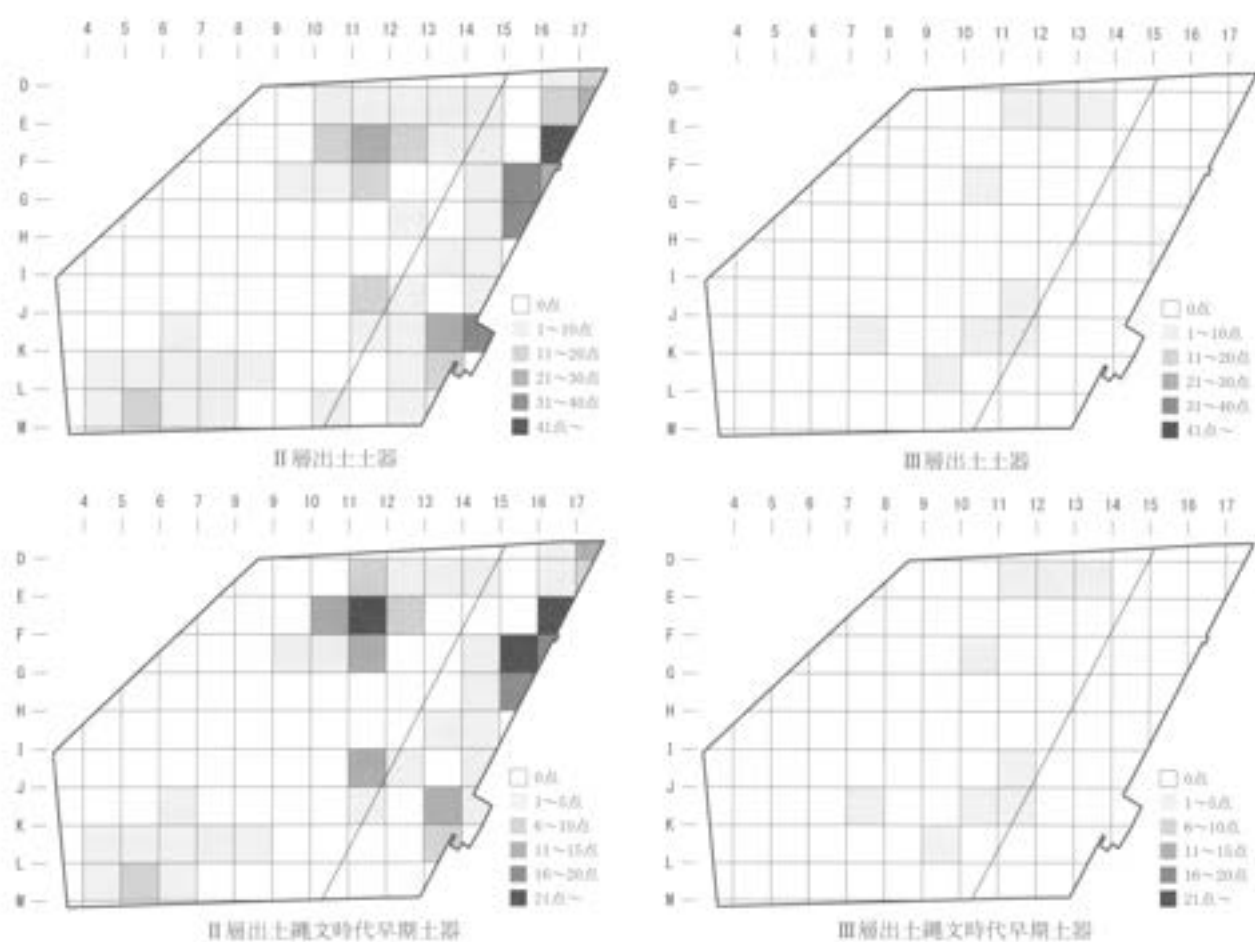


凡例 : 使用面 0 5 10cm (1/3)

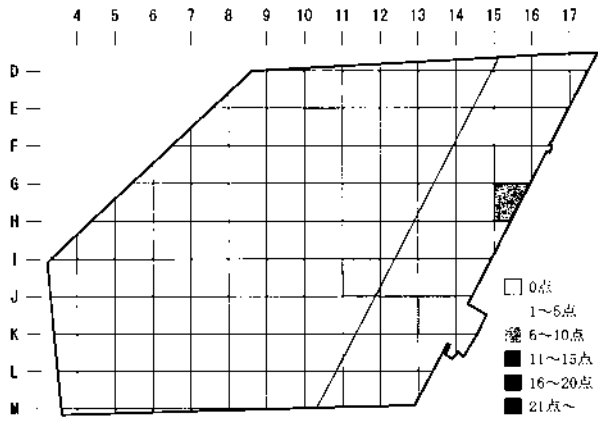
图版 49 遺構外出土石器 (11)



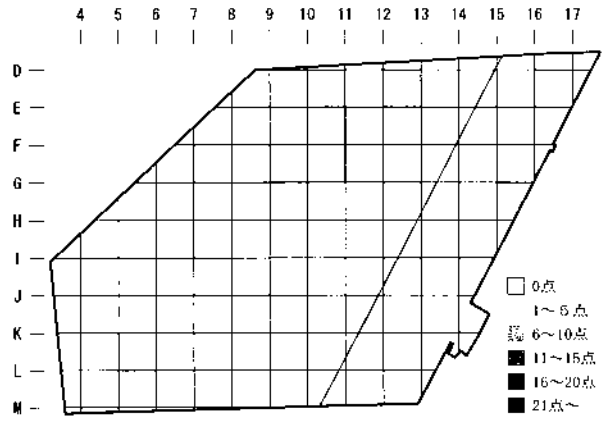
図版50 遺構外出土石製品・金属製品・ガラス製品



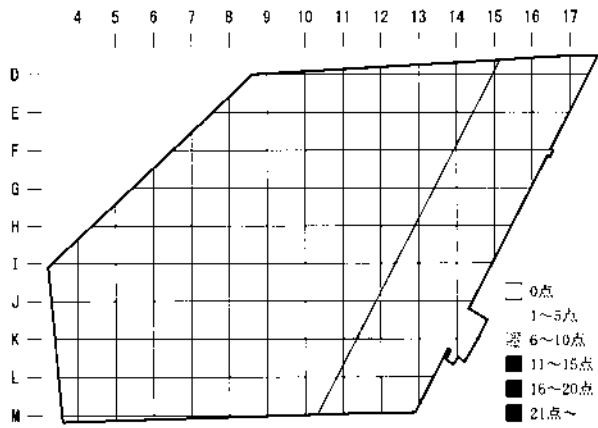
図版51 土器分布図(1)



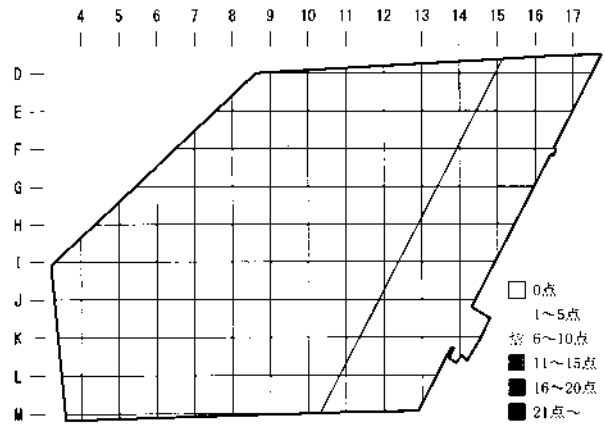
II層出土縄文時代前期土器



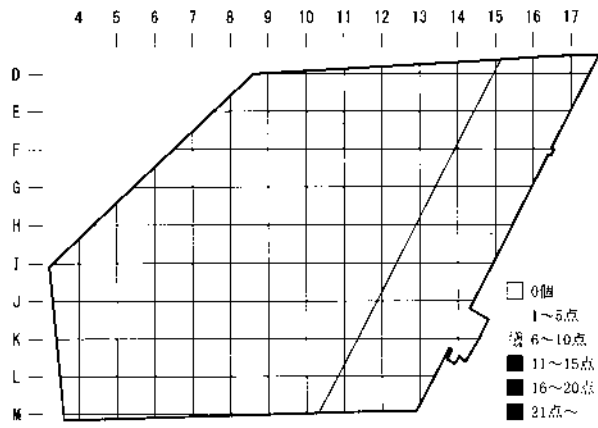
II層出土縄文時代中期土器



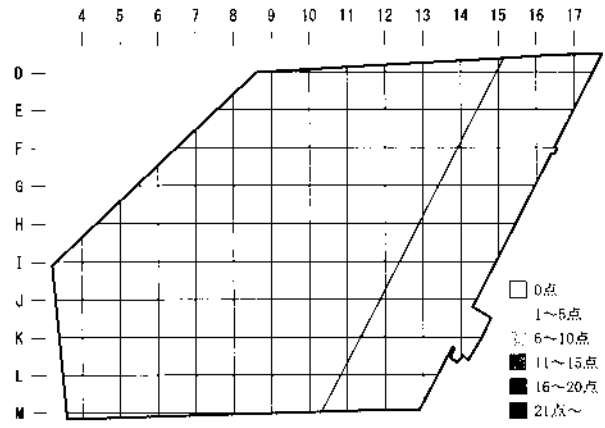
III層出土縄文時代中期土器



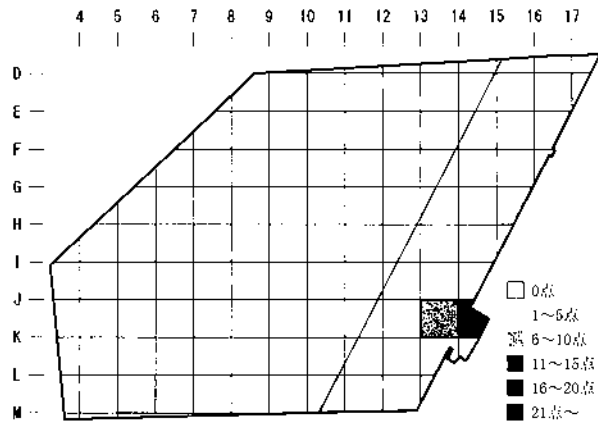
II層出土縄文時代後期土器



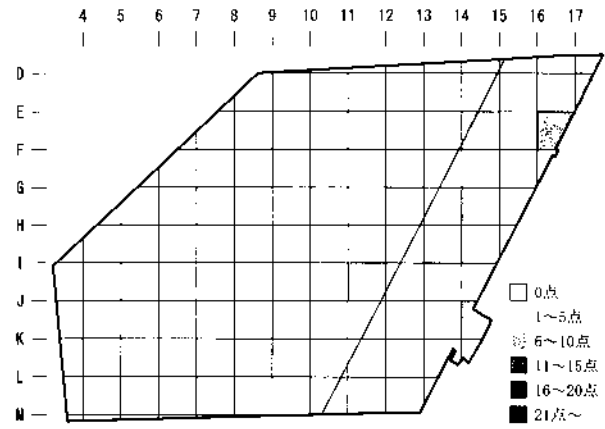
II層出土縄文時代晚期土器



III層出土縄文時代晚期土器

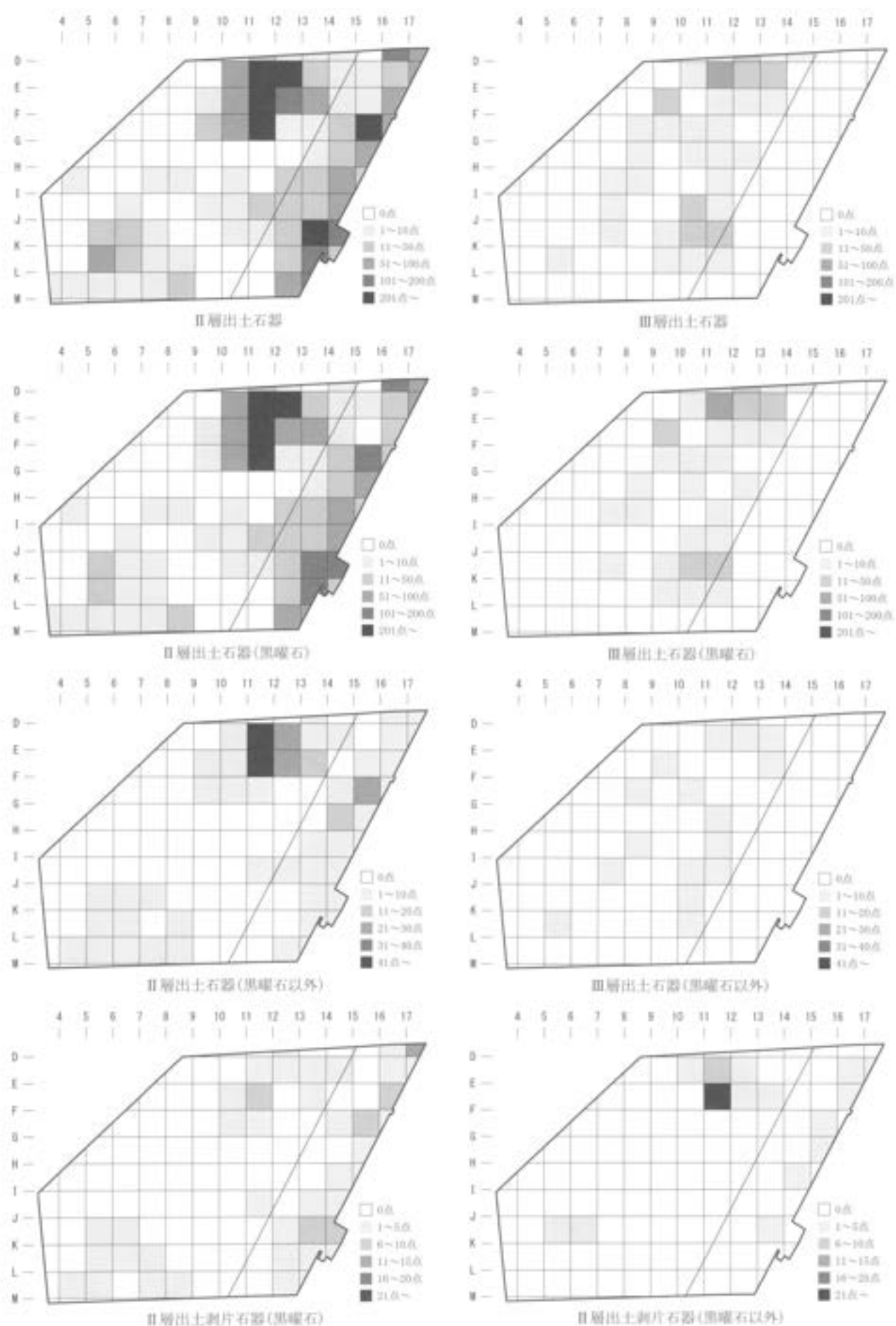


II層出土続縄文土器

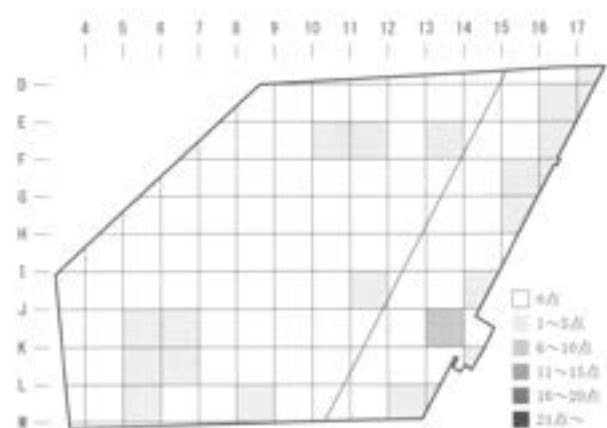


II層出土擦文土器

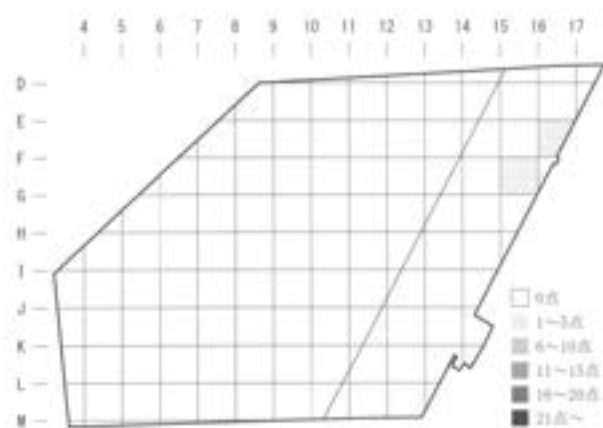
図版52 土器分布図(2)



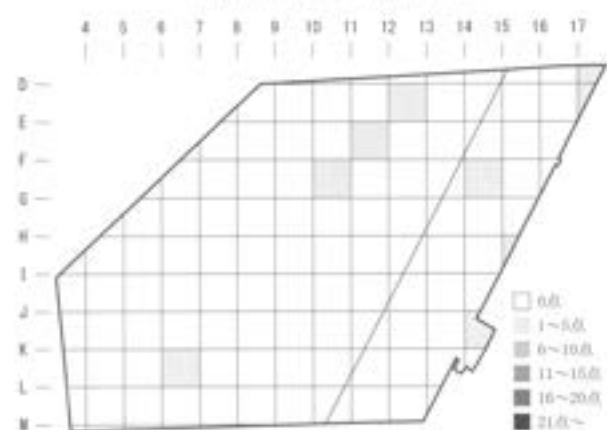
图版53 石器分布图(1)



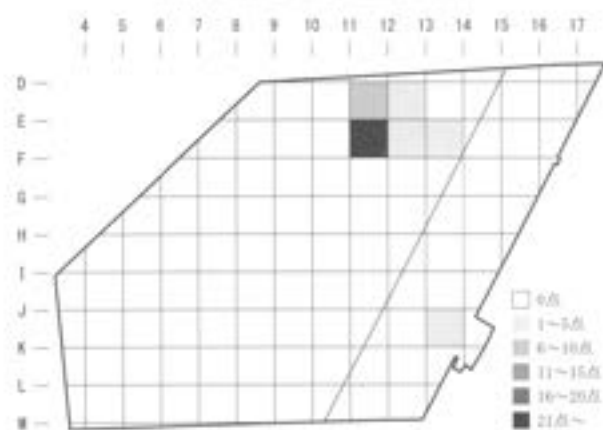
II層出土石鏃・石槍(黒曜石)



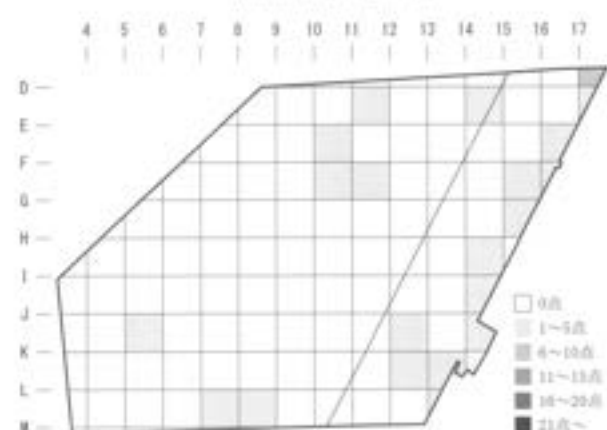
II層出土石鏃・石槍(黒曜石以外)



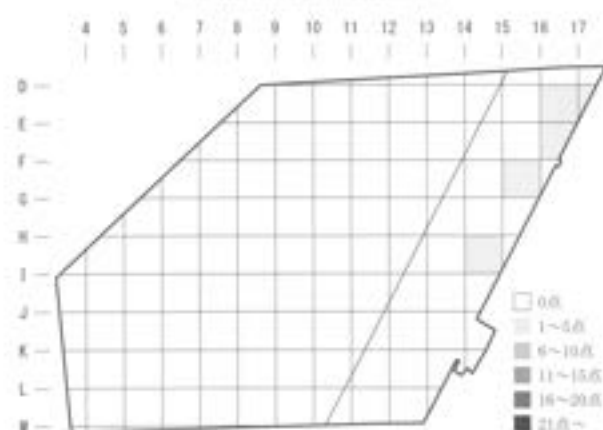
II層出土石鏃(黒曜石)



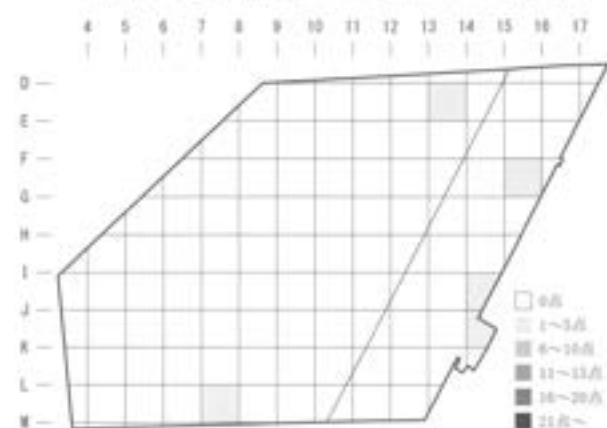
II層出土石鏃(黒曜石以外)



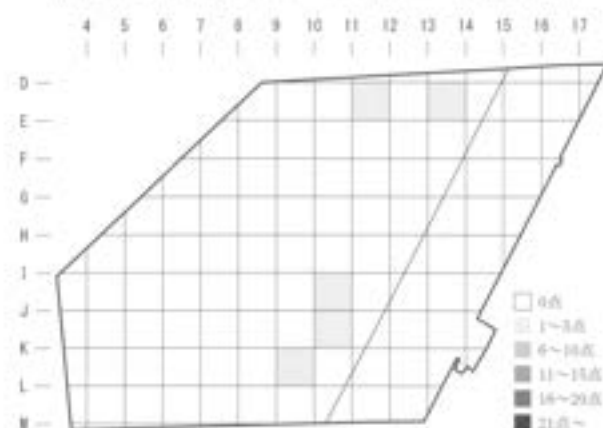
II層出土つまみ付きナイフ・スクレイパー(黒曜石)



II層出土つまみ付きナイフ・スクレイパー(黒曜石以外)

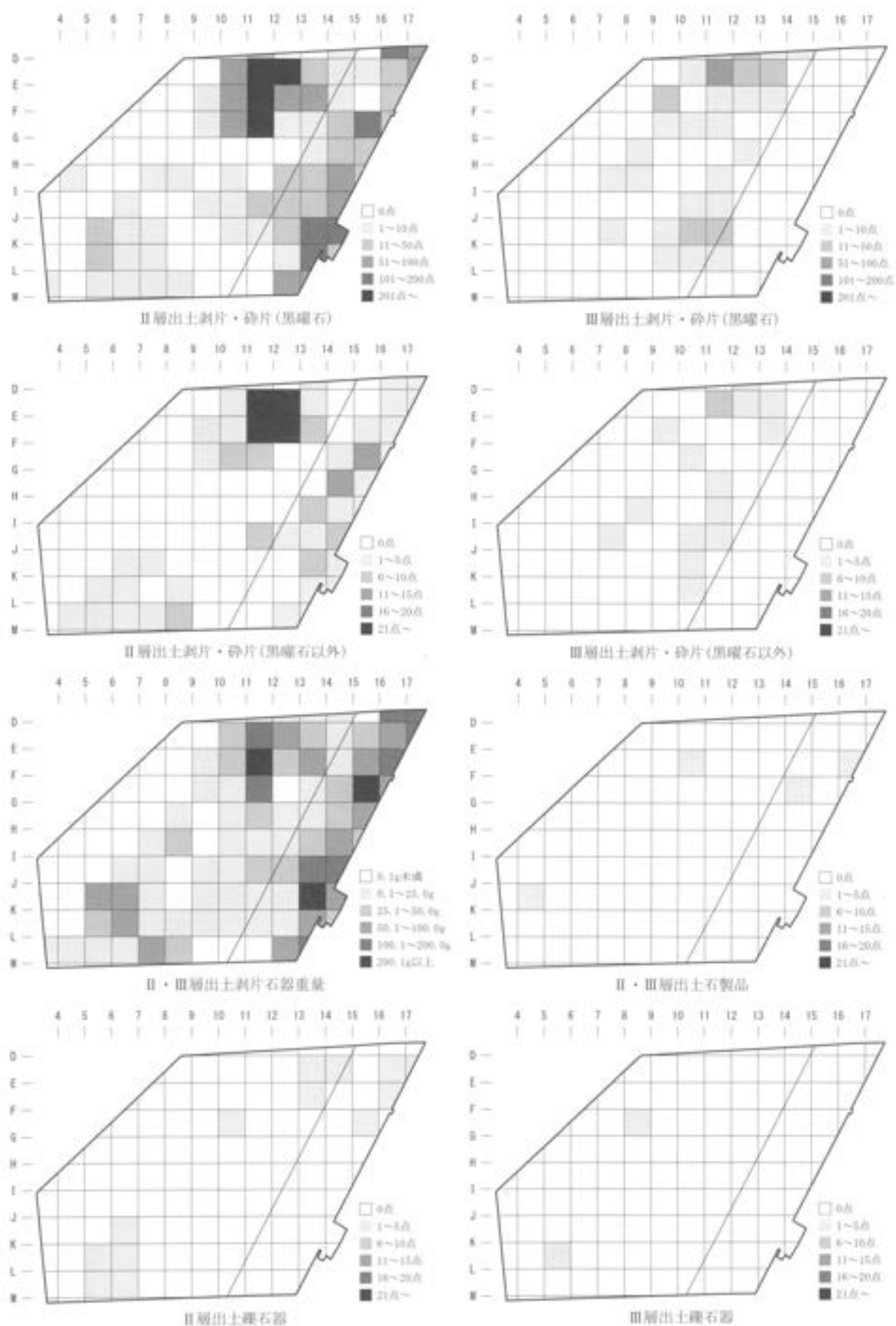


II層出土楔形石器



III層出土剥片石器

図版54 石器分布図(2)



図版55 石器分布図(3)

第七章 附 編

〈附編 1〉 花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

ここでは、八幡山遺跡における古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を実施した結果について報告する。

2. 試 料

試料は、調査区南西部 J-3 グリッド西壁より採取された 5 点である。各試料の層相を、調査時の断面写真を参考にしながら、以下に示す。

試料 1 (Ⅱ b 層) : 10YR3/2 黒褐色腐植質シルト。土壌構造が著しく発達する。亜角塊状～球状ペッドが確認される。球状ペッドの大きさは 2～3 mm 程度。土壌層位の層位 A (表土) に対比される。

試料 2 (Ⅱ c 層) : 10YR2/2 黒褐色腐植質シルト。土壌構造が著しく発達する。亜角塊状～球状ペッドが確認される。球状ペッドの大きさは 2～3 mm 程度。土壌層位の層位 A (表土) に対比される。

試料 3 (Ⅱ d 層) : 10YR2/1～2/2 黒～黒褐色腐植質シルト。土壌構造が著しく発達する。亜角塊状～球状ペッドが確認される。球状ペッドの大きさは 2～3 mm 程度。土壌層位の層位 A (表土) に対比される。

試料 4 (Ⅲ a 層) : 10YR3/3～4/2 暗褐～灰黄褐色シルト。わずかに腐植の集積がみられる。土壌構造の亜角塊状～柱状ペッドが確認される。土壌層位の層位 A 下部～層位 B (下層土) に相当する可能性が高い。

試料 5 (Ⅲ b 層) : 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色シルト。断面写真では亜角礫が多数混じることが確認され、試料はその基質より採取されている。土壌構造の亜角塊状～柱状ペッドが確認されるが、その発達はⅢ a 層に比較して弱い。土壌層位の層位 B (下層土) に相当する。

3. 分析方法

花粉化石の抽出は、試料約 5 g を 10% 水酸化カリウム処理 (湯煎約 15 分) による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理 (約 30 分) による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理 (氷酢酸による脱水、濃硫酸 1 に対して無水酢酸 9 の混液で湯煎約 5 分) の順に物理・化学的処理を施すことにより行う。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離 (臭化亜鉛を比重 2.1 に調整) による有機物の濃集を行う。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表として示す。

4. 結果及び考察

結果を表 1 に示す。今回調査を実施したⅡ b 層～Ⅲ b 層試料は、いずれも花粉・孢子化石がほとんど産出しなかった。わずかに産出した花粉化石は保存状態が著しく悪く、破損あるいは溶解しているため、形態の特徴的なイネ科以外は分類群の特定にいたらず近似種として同定した。

表 1 花粉分析結果

分類群	taxa	上段：層位 下段：試料番号				
		II b層	II c層	II d層	III a層	III b層
		試料1	試料2	試料3	試料4	試料5
木本花粉	Arboreal pollen					
サワグルミ属-オニグルミ属近似種	cf. <i>Pterocarya-Juglans</i>	1	0	0	0	0
クリ属近似種	cf. <i>Castanea</i>	1	1	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen					
イネ科	Gramineae	0	0	1	0	0
アブラナ科近似種	cf. Cruciferae	1	0	0	0	0
セリ科近似種	cf. <i>Umbelliferae</i>	2	0	0	0	0
ヨモギ属近似種	cf. <i>Artemisia</i>	1	1	0	0	0
キク亜科近似種	cf. <i>Carduoideae</i>	1	1	0	0	0
シダ類孢子	Fern spores					
単条溝型孢子	Monolete spore	2	1	2	0	0
合計	Total					
木本花粉	Arboreal pollen	2	1	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	5	2	1	0	0
シダ類孢子	Fern spores	2	1	2	0	0
同定不能花粉	unknown	7	3	1	3	1
合計	Total	16	7	4	3	1

花粉化石は、風化が進行するような場所では、物理・化学・生物的な要因により分解消失することが知られている(中村1967など)。花粉・孢子の風化作用に対する抵抗力は、花粉・孢子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致するとされ(Havinga1964)、花粉に比較して、スポロポレニンの量が多いとされるシダ類孢子や外膜が厚い針葉樹花粉が風化作用の影響を受けても化石として残りやすいとされる(徳永・山内1971; Brooks & Shaw1971; Stanley&Linskens1974など)。今回の産状は、堆積時・後の風化作用に起因するとみられ、多くの花粉化石が分解消失していることを示唆する。

調査層準であるII b層～III b層は、いずれも土壌構造が確認される。特にII b～II c層は腐植の集積が顕著な土壌層位の層位Aに対比され、その形成時に植生が成立していたことが推定される。したがって、II b～II c層中には土壌生成期の調査地ないしその近辺の植生に由来する花粉化石が取り込まれたと思われるが、土壌生成作用によって、そのほとんどが分解消失したとみられる。

土壌の花粉分析では、しばしば今回のような産状を示し、植生復元を困難にしているが、湖・池沼・湿地の堆積物に比較して、花粉の供給原から堆積物に取り込まれるまでの過程が単純で距離が短い場合が多く、調査地点近辺の局地的な植生復元において有効な場合もある。実際に森林土壌の花粉分析から、森林群落の動態に関する検討成果も存在する(三浦1990、三宅・中越1998など)。今回の場合、ほとんどの花粉が分解消失していると推定されるため、植生を復元できないが、わずかに産出した近似種として同定した分類群は、産出層準形成期の調査地近辺に生育していた植物に由来する可能性がある。調査地の土壌生成期の植生については、風化に耐性のある植物珪酸体分析を実施し、調査地の地形、土壌生成時間(年代)、発掘調査成果などを複合的に捉え、検討することが望まれる。

引用文献

Brooks, J. & Shaw, G. 1971, Recent developments in the chemistry, biochemistry, geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopollenins derived from pollen and spore exines. "Pollen: Development and Physiology"
 Havinga, A. J. 1964, Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. *Pollen et Spores*, 6 : 621-635.
 国土地理院, 2010, 治水地形分類図「新津」
 (https://www1.gsi.go.jp/geowww/lcmfc/images/84/84402_03_b.png)

- 三浦 修, 1990, 森林土壌の花粉分析—方法論的問題と森林群落の動態研究への適用, 植生史研究, 5, 3-18.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 1, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- Stanley Robert & Linakens Hans, 1974, Pollen: biology, biochemistry, management, Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York, 307p.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

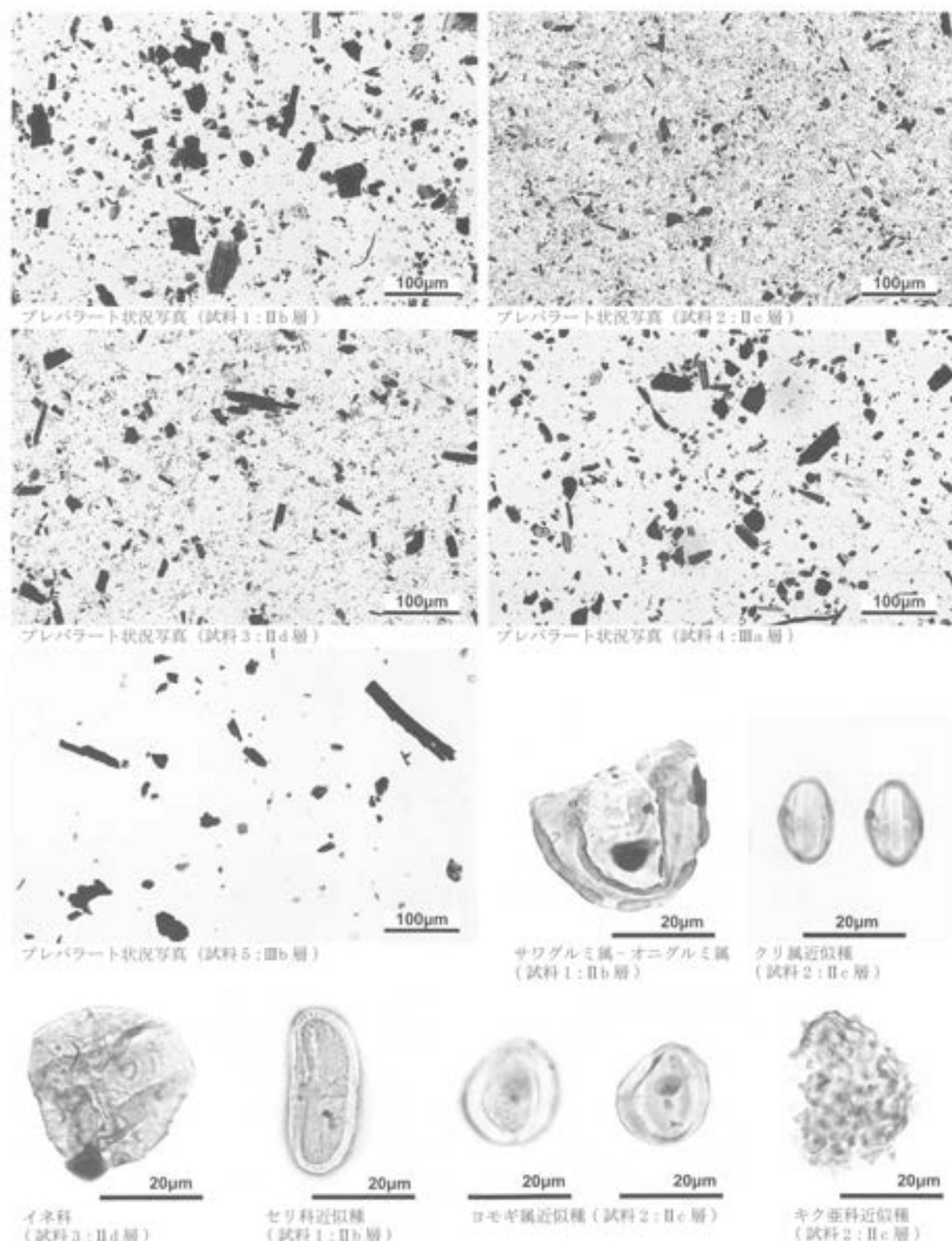


図1 花粉プレパラート状況写真・花粉化石

〈附編2〉 余市町八幡山遺跡腐植土層中の火山灰の分析と同定

岡 孝雄（アースサイエンス株式会社）・古澤 明（株式会社 古澤地質）

八幡山遺跡は余市市街の南東側の標高40m前後の丘陵の東傾斜の緩斜面上に位置しており、浅谷地形を成している。発掘層中の火山灰の鑑定・同定を行うために、現地調査・試料採取及び火山灰分析を行ない、考察を行った。

1. 現地調査及び試料採取

図1に示すように遺跡は北東-南西約70m弱×北西-南東50m弱の範囲に広がる。平成30年度に東縁の約12m幅の部分（水路施工）が発掘され、本年度（平成31年度）は残りの主部が発掘された。発掘中に立ち入り、A～K地点において発掘層序を確認した。その結果は図2（柱状対比図）に示すようであり、地質的な層序は、上位から盛土または耕作土層（i）、腐植土層（ii）、現河川氾濫原堆積物（iii）及び含火山岩礫火山灰質堆積岩層（iv；新第三系）に区分できる。各地層の内容は以下の通りである。

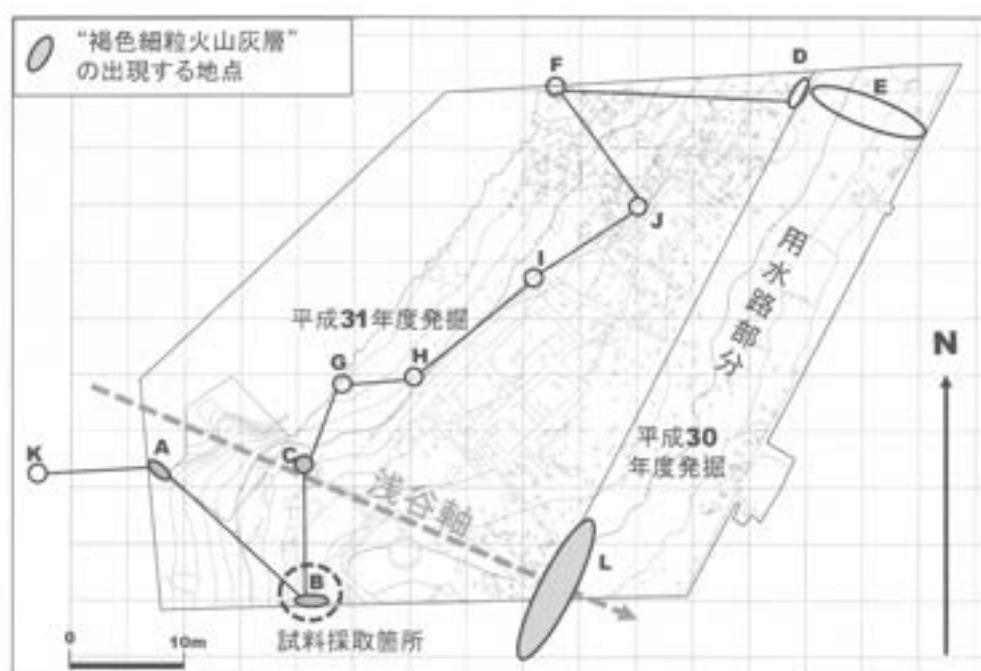


図1 八幡山遺跡発掘箇所の見取り図（調査地点、及び試料採取箇所を示す）

i) 盛土（道路敷石または耕作土）

層厚20cm前後。耕作土は腐植土及び含火山岩角礫堆積岩（褐色風化で砂質泥状）の混在部であるが、発掘による除去で欠如している地点が多い。発掘の基本土層のⅠ層（黒褐色土）に相当する。

ii) 腐植土層

発掘の主対象である遺物包含層で、層厚5～80cmで、浅谷の軸部では、“褐色細粒火山灰層”（厚さ最大15cm前後）がはさまれる。腐植土はシルト～極細粒砂サイズで、いわゆる風成のロームに植物質腐植物が混在したものである。下半部で火山岩角礫を含むことがあり、下位層とは漸移的である。“褐色細粒火山灰層”は、今回の検討対象の火山灰層である。発掘の基本土層のⅡ層（黒褐色土）及びⅢ層（暗褐色土）に相当する。

iii) 現河川氾濫原堆積物

平成30年度に発掘され、その後、用水路となった部分の北半部の切土壁面に露出する。不淘汰砂礫で構成され、火山岩の円～亜円礫に富んでいる。

iv) 含火山岩礫火山灰質堆積岩層

新第三系倶知安層(塩谷層)、の火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩または凝灰質砂岩の褐色風化層である。このような岩相は風化が進み、赤褐色を呈したものは“古赤色土”と呼ばれることがある。発掘の基本土層のIV層(黄褐色土)に相当する。

前述のように発掘箇所は緩斜面に位置し、南縁部を中軸として浅谷形態を成す。その軸部では腐植土層中に“褐色細粒火山灰層”が吹き寄せ状に集積してはさまれている。写真1～10(末尾写真集)に示すように発掘区内のA・B・C地点発掘断面及びその南東角付近の施工済の水路の壁面(L地点;西壁)に認められる。浅谷軸部から離れると、認められない(図2)。

火山灰は肌色がる赤褐色を呈し、シルト～極細粒のもので、一見、火山ガラス質である。厚さ15cmと厚く堆積するB地点の火山灰層の上半部の部分を分析試料YOHA-Bとして採取した(写真5)。

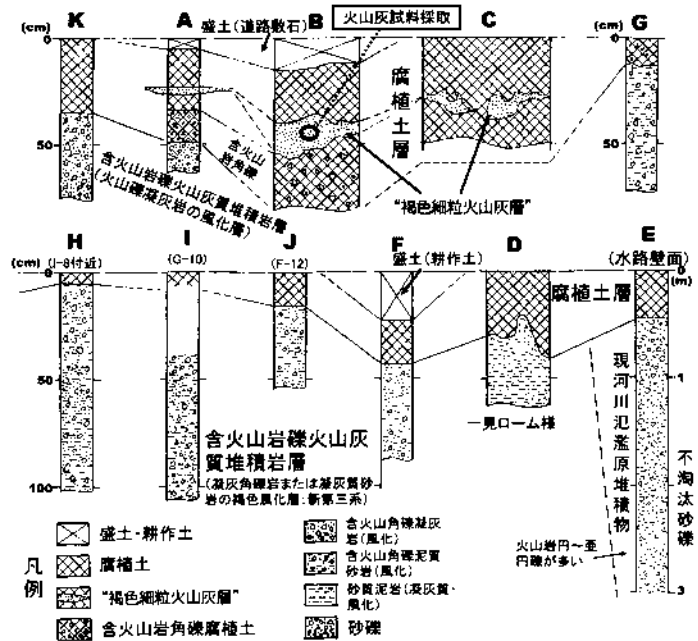


図2 調査地点柱状対比図

2. 火山灰分析

2.1 粒子組成分析、及び偏光顕微鏡観察

1) 前処理

古澤(2003)の方法を基本に前処理を行った。洗浄は、はじめにナイロン製使い捨て#255メッシュシート(糸径 $43\mu\text{m}$ 、オープニングワイド $133\mu\text{m}$)を用い、水中で篩い分けした。これにより $1/8\sim 1/16\text{mm}$ に粒度調整した試料を超音波洗浄機で洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。

2) 粒子組成分析用薄片作成

鉱物観察用スライドガラスの上に降下後、屈折率が1.545程度となる光硬化樹脂を載せる。この樹脂中に上記の洗浄・篩い分けを行った試料を攪拌・封入させて、カバーガラスで覆い薄片を作成した。樹脂の屈折率を1.545とするのは石英や長石類の識別のためである。

3) 検鏡(粒子組成分析)方法

前処理を行い、プレパラート上に封入された粒子を偏光顕微鏡(100倍)で観察し、300粒子を古澤(2003)の区分手法に従って、火山ガラス、長石類・石英、斜方輝石、単斜輝石、普通角閃石、カミングトン閃石、その他の重鉱物(カンラン石、ジルコンなど)、不透明鉱物及び岩石・風化粒に

表 1 モード測定結果 (粒子組成)

試料名	Volcanic Glass			Light Mineral	Heavy Mineral					Rock	Bio	Total	火山ガラスの屈折率	アルカリ長石の屈折率	テフラ名
	Bw	Pm	0	Fl・Qu	Opx	Cpx	Gho	Oth	Opq						
YOHA-B	18	0	10	70	3	4	4	0	32	152	7	300	1.498-1.523 (モード1.498-1.502)	1.519-1.528	

Bw: バブルウォータータイプ Fl・Qu: 長石・石英

Pm: パミスタイプ

Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Gho: 緑色普通角閃石

0: 低発泡タイプ

Opq: 不透明鉱物 Rock: 岩片・風化粒 Bio: 生物遺骸

区分けした。火山ガラスは発泡痕の大きさにより、発泡痕が0.1mm四方に2～3個しかみられず大きなものを有するバブルウォータータイプ (Bw)、同じく4個以上みられるパミスタイプ (Pm)、発泡痕同士が密着せずガラス中に細かい泡となって含まれるか全く含まれない急冷タイプ (0) の3タイプに区分した。

4) 観察結果

粒子組成については300個をカウントした (表1のモード測定結果)。ほぼ半数の152個が岩片・風化粒 (Rock) であり、その他、軽鉱物 (長石・石英) 70個、重鉱物43個 (斜方輝石3個、単斜輝石4個、緑色普通角閃石4個、不透明鉱物32個)、火山ガラス28個、生物遺骸7個である。外見上は一見黄褐色の火山灰であり、ガラス質火山灰と予想したが、火山ガラスはほぼ1割と少なかった。火山ガラスはバブルウォータータイプ (Bw) 18個、急冷タイプ (0) 10個である。

長石にはアルカリ長石が含まれることが、後述の屈折率測定で認められる。300粒子には含まれないが、磁選によりカミングトン閃石が目立って確認できる。輝石及び角閃石はいずれも円摩されており、テフラ本質鉱物とは考え難い。

2.2 屈折率測定

1) 前処理

古澤 (2003) の方法を基本に前処理を行った。洗浄は、はじめにナイロン製使い捨て #255 メッシュシート (糸径43 μm、オープニングワイド57 μm) を用い、流水中で洗浄した。残渣を #125mm メッシュシート (糸径70 μm、オープニングワイド133 μm) を用い水中で篩い分けした。これにより 1/8 ~ 1/16mm に粒度調整した試料を超音波洗浄機で洗浄し、表面に付着した粘七分などを洗い流した。

2) 屈折率測定用薄片作成

鉱物観察用スライドガラスの上に降下後、屈折率が1.545程度となる光硬化樹脂を載せる。この樹脂中に上記の洗浄・篩い分けを行った試料を攪拌・封入させて、カバーガラスで覆い薄片を作成した。樹脂の屈折率を1.545とするのは石英や長石類の識別のためである。

3) 屈折率測定方法

測定には、浸液の温度を直接測定しつつ測定する温度変化型測定装置“MAIOT” (マイオット) を使用した。測定精度は火山ガラスで±0.0001程度である (古澤1995)。

顕微鏡は、ニコン顕微鏡ECLIPSE600シリーズ (偏光・位相差装置付き)、位相差用対物レンズ (10倍及び長作動20倍) で、光源は12V100Wハロゲンランプ、全誘電体干渉フィルター (589.3nm) を使用した。温度変化装置として全面等温度透明加温板 (0.1℃の精度で制御可能)、プログラム温度コントローラー (0.1℃の精度で制御可能)、高感度熱電対 (0.1℃の精度で測定可能)、パソコンを

使用した。

測定手順は以下の通りである。

- ①顕微鏡ステージ上に設置した加温板に、浸液と試料及び熱電対とを密封したごく薄いカプセルを載せる。カプセルは、大きさ18×24mm、厚さ0.12～0.17mmのガラス板(下板)と、直径18mmで同じ厚さのガラス板(上板)との間に、熱伝導性の高いシーリング材を使用して浸液と試料及び熱電対を密封したもので、総厚が0.5～0.6mm程度である。浸液は単一化学式を有する有機化学合成液である。
- ②加温板の温度を制御して、ほぼ一定の温度変化速度で、浸液及び試料の温度を室温～60℃の範囲で変化させる。この様子を位相状態の顕微鏡で観察する。観察時の波長はナトリウムD線(589.3nm)である。この画像を観察しながら、ガラスの輪郭が消失する温度を記録する。実際には温度上昇あるいは下降時に1回パソコンに接続されたマウスを左クリックする。屈折率は、あらかじめ作成した各浸液の温度と屈折率との一次式から変換され、パソコンに記録される。測定個数はガラスが30粒である。
- ③記録された屈折率、熱電対の温度データはリアルタイムにパソコンに入力され、温度、測定個数等とともに屈折率ヒストグラムとしてモニターに表示される。

4) 測定結果

火山ガラス30粒の屈折率は表1及び図3に示すように、1.498～1.523の範囲にあり、2/3以上が1.501を主体に1.498～1.502に集中している。さらに、参考までに測定された斜方輝石40粒の屈折率は1.519～1.528の範囲にある。当初、同定の可能性を考えたB-Tmの火山ガラスの既存文献(町田ほか2003)の屈折率の値は概ね、1.504～1.524の範囲にあり、明らかにそれより低くなっており、異なる結果となっている。

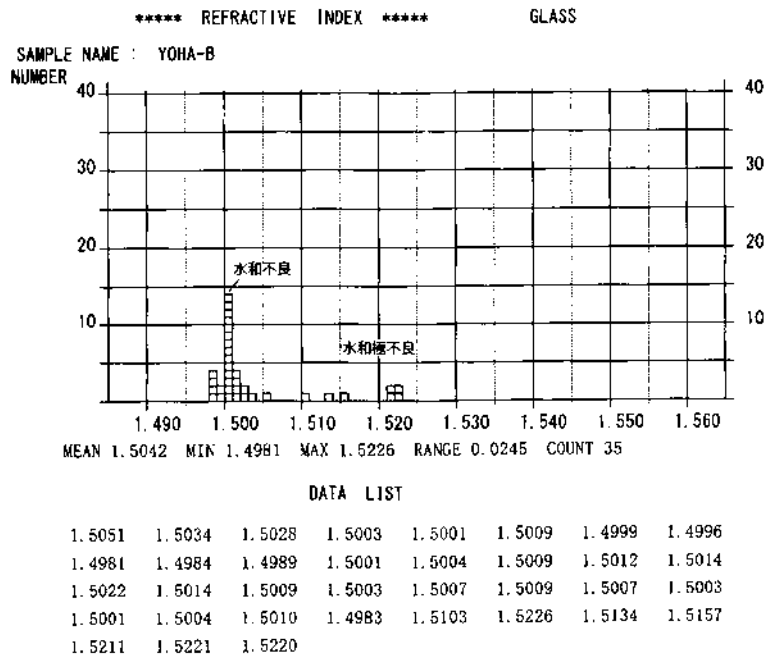


図3 火山ガラスの屈折率ヒストグラム

2.3 火山ガラスの主成分分析 (EDS 分析)

1) 前処理と主成分分析用薄片作成

2.1 の粒子分析用での試料処理過程で、偏光顕微鏡を用い火山ガラス粒のみを手選し取り出す。取り出した火山ガラスをエポキシ樹脂でスライドガラス上に包埋し、#3000 カーボランダムで研磨し、1 μm のダイヤモンドペーストにて鏡面研磨した薄片を作成した。

2) 主成分分析方法

以下の分析装置及び条件により、エネルギー分散型 X 線マイクロアナライザー (EDX) を用い、火山ガラスの主成分を分析した。

使用機材：SEM:HITACHI SU1510 EDX:HORIBA EMAXEvolution EX-270

検出器 液体窒素レス検出器 X-Max (80mm²)

加速電圧：15kV

試料電流：0.3n.A

ビーム径：4 μm 四方の範囲を約 150nm のビーム径にて走査させて測定。

ライブタイム：50sec.

主成分組成計算方法：主に ZAF 法

スタンダードには高純度人工酸化物結晶 (純度 99.99% 以上の SiO₂、Al₂O₃、TiO₂、MnO、MgO)、純度 99.99% 以上の単結晶 NaCl、KCl、CaF₂ を用いた。これを、アメリカ標準局 NIST620 ガラス、IH NISTK-961 ガラス及び glass-D (沢田ほか 1997) を用いてチェックした。また、ASTIMEX, Taylor 等のいわゆる EPMA 用標準物質などでもその精度をチェックした。K についてはニチカ製高純度 Adularia (沢田ほか 1997) を用い、ダブルチェックした。ワーキングスタンダードには AT テフラの火山ガラスを用い、測定時毎に値をチェックした。

3) 分析結果

分析結果は表 2 に示す。さらに、それに基づいて作成された SiO₂ と他の成分との関係を図 4 に示す。

表 2 火山ガラスの主成分分析結果 (EDS 分析; 15 粒)

glass																		
採取地点 余市町八幡山遺跡 YOHA-B																		
pointNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均値	標準偏差	
SiO ₂	76.54	75.50	76.93	76.17	76.83	76.71	77.90	78.56	76.36	76.99	77.25	77.44	77.22	76.76	78.40	SiO ₂	77.04	0.81
TiO ₂	0.19	0.24	0.19	0.19	0.22	0.17	0.18	0.23	0.08	0.20	0.10	0.18	0.19	0.17	0.19	TiO ₂	0.18	0.04
Al ₂ O ₃	12.22	12.04	12.17	12.75	12.08	12.16	12.37	12.49	12.15	12.24	12.20	12.24	12.34	12.26	12.35	Al ₂ O ₃	12.27	0.18
FeO	1.38	0.97	0.93	1.09	1.46	1.28	1.59	0.93	0.96	0.82	0.92	1.03	0.90	0.95	1.23	FeO	1.10	0.23
MnO	0.12	0.22	0.17	0.13	0.00	0.09	0.00	0.18	0.17	0.26	0.10	0.10	0.23	0.04	0.05	MnO	0.12	0.08
MgO	0.14	0.19	0.17	0.22	0.13	0.22	0.15	0.14	0.22	0.18	0.16	0.19	0.14	0.17	0.15	MgO	0.17	0.03
CaO	1.59	1.16	1.14	1.37	1.78	1.18	1.66	1.34	1.16	1.17	1.14	1.13	1.40	1.20	1.29	CaO	1.31	0.21
Na ₂ O	2.08	3.22	3.46	2.28	1.78	3.45	1.48	1.33	2.34	2.27	3.30	1.39	1.89	3.22	1.14	Na ₂ O	2.31	0.83
K ₂ O	4.10	3.61	3.23	3.62	4.32	3.27	3.60	3.77	3.82	4.02	3.32	4.56	3.27	3.28	3.18	K ₂ O	3.66	0.43
Total	98.36	97.15	98.39	97.82	98.60	98.53	98.93	98.97	97.26	98.15	98.49	98.26	97.58	98.05	97.98		98.17	

pointNo.																平均値	標準偏差	
SiO ₂	77.82	77.71	78.19	77.87	77.92	77.85	78.74	79.38	78.51	78.44	78.43	78.81	79.14	78.29	80.02	SiO ₂	78.47	0.65
TiO ₂	0.19	0.25	0.19	0.19	0.22	0.17	0.18	0.23	0.08	0.20	0.10	0.18	0.19	0.17	0.19	TiO ₂	0.18	0.04
Al ₂ O ₃	12.42	12.39	12.37	13.03	12.25	12.34	12.50	12.62	12.49	12.47	12.39	12.46	12.65	12.50	12.60	Al ₂ O ₃	12.50	0.18
FeO	1.40	1.00	0.95	1.11	1.48	1.30	1.61	0.94	0.99	0.84	0.93	1.05	0.92	0.97	1.26	FeO	1.12	0.24
MnO	0.12	0.23	0.17	0.13	0.00	0.09	0.00	0.18	0.17	0.26	0.10	0.10	0.24	0.04	0.05	MnO	0.13	0.08
MgO	0.14	0.20	0.17	0.22	0.13	0.22	0.15	0.14	0.23	0.18	0.16	0.19	0.14	0.17	0.15	MgO	0.17	0.03
CaO	1.62	1.19	1.16	1.40	1.81	1.20	1.68	1.35	1.19	1.19	1.16	1.15	1.43	1.22	1.32	CaO	1.34	0.21
Na ₂ O	2.11	3.31	3.52	2.33	1.81	3.50	1.50	1.34	2.41	2.31	3.35	1.41	1.94	3.28	1.16	Na ₂ O	2.35	0.85
K ₂ O	4.17	3.72	3.28	3.70	4.38	3.32	3.64	3.81	3.93	4.10	3.37	4.64	3.35	3.35	3.25	K ₂ O	3.73	0.44
Total	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00		100.00	

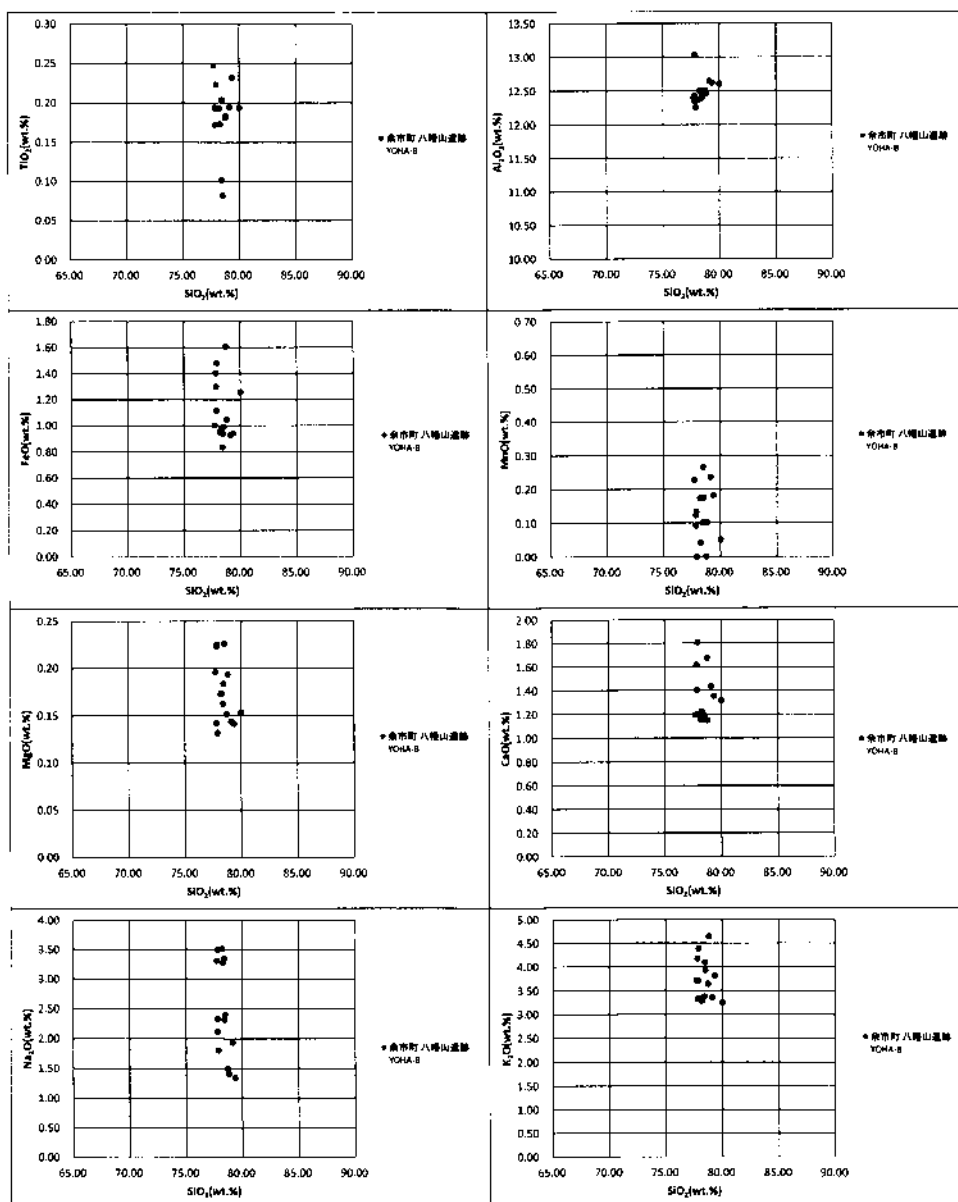


図4 火山ガラスのSiO₂含有割合と他の主成分の含有割合との関係図一覧

3. 考 察

①八幡山遺跡の火山灰はB-Tmには同定できない

粒子組成についてはカウント300個のうちほぼ半数の152個が岩片・風化粒 (Rock) であり、その他、軽鉱物 (長石・石英) 70個、重鉱物43個 (斜方輝石3個、単斜輝石4個、緑色普通角閃石4個、不透明鉱物32個) で、火山ガラス28個は1割弱に過ぎず、当初ガラス質火山灰と予想したが異なっていた。火山ガラスはほぼ1割と少なかった。火山ガラスはバブルウォータータイプ (Bw) 18個、急冷タイプ (0) 10個である。さらに、300粒子には含まれないが、磁選によりカミングトン閃石が目立って確認できる。輝石及び角閃石はいずれも円摩されており、テフラ本質鉱物とは考え難い。

火山ガラスの屈折率については、あらかじめ想定していたB-Tmのそれ (町田ほか、2003によれば1.504 ~ 1.524) とは明らかに異なっていた。

主成分分析結果についても次のようなことが言える。町田ほか (2003) に示されるB-Tmの主成分組成の概略値の一覧ではB-TmとされるものはSiO₂の含有割合が地下におけるマグマの分化を

反映してかなりばらつくが、総体としては八幡山遺跡の火山灰のそれ(表2)よりは低くなっている。各成分の分析値も異なる場合が多い。なお、図5の右及び図6の右に示すように、 K_2O と TiO_2 との関係、 Na_2O と SiO_2 との関係においても両者は異なる分布を示している(特に Na_2O と SiO_2 との関係においては分布に明瞭な違いがある)。

以上のことから、八幡山遺跡の火山灰はB-Tmには同定できない。

②尻別火山(尻別岳)の火砕流に由来する可能性について

火山灰の粒子組成解析や火山ガラスの屈折率測定から、想定していたB-Tmには同定できないことから、①の後段にも示したように、火山ガラスについて追加分析として主成分分析(EDS分析)を行うこととした。その結果は表2及び図4に示すような結果であり、この方法からもB-Tmには同定できないことが裏付けられた。

それでは、どの火山灰かということで、文献を調べていた結果、中川ほか(2018)に示される尻別火山の火砕流(Km-1、Km-2)に由来する可能性が浮上した。この火砕流の火山ガラスの主成分分析値の一覧は示されていないので、部分的な検討となるが、羊蹄山・尻別岳・洞爺・クッタラ・支笏火山関係の火山ガラスの成分間の関係図集中の K_2O と TiO_2 との関係図(図5左)及び Na_2O と SiO_2 との関係図(図6左)から、それぞれの関係位置の分布は尻別火山火砕流Km-1・Km-2の分布位置に重なる部分がある。

八幡山遺跡の火山灰(“褐色細粒火山灰層”)は丘陵緩斜面の表層の腐植土層中には含まれるものであり、含有遺物などから年代的には明らかに2,000年前以降とみなされる。一方、尻別火山の噴出物(火砕流Km-1、Km-2)の年代は支笏火砕流(Spl)前、洞爺降下火山灰(Toya)後の5~7万年前とみなされている(中川ほか2011; 2018;)。5~7万年前の火山灰が直接的には含まれることはありえないことから、尻別火山に由来するとすれば、同火山の方向・距離(八幡山遺跡から南南東へ45km)から判断して、同火山の火砕流が余市付近まで到達しており、到達火砕流から風などの作用により二次的に供給された可能性が考えられる。なお、粒子組成解析では認められないが、磁選によりカミングトン閃石が目立って確認できるとのことであるがその含有も気付きである。

③今後の課題

第一に、八幡山遺跡のような表層腐植土層中の“火山灰層”の確認調査が余市付近で必要である。次に、腐植土層中の“火山灰”が尻別火山の火砕流に由来するとした場合、余市付近でその火砕流がどのように分布するのかが問題となるが、既存文献では手がかりがない。今後、余市川の上流(南西)方向へ向かっての丘陵斜面や最終氷期頃に形成の河岸段丘上のローム・火山灰層などの調査が必要である。

参考文献

- 古澤 明(1996): 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析. 地質学雑誌, 101巻, 123-133.
古澤 明(2003): 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別. 地質学雑誌, 109巻, 1-19.
町田 洋・新井房夫(2003): 新編 火山灰アトラス[日本列島とその周辺]. 東京大学出版会, 359p.
中川光弘・宮坂瑞穂・三浦大助・上澤真平(2018): 南西北海道, 石狩低地帯におけるテフラ層序学: 支笏-洞爺火山地域の噴火履歴. 地質学雑誌, 124巻, 473-489.
中川光弘・上澤真平・坪井宏太(2011): 南西北海道, 尻別火山起源の喜茂別火砕流と洞爺火砕流の偽層序関係. 日本火山学会2011年講演予稿集, B1-10.
梅津 尚・中川光弘・上澤真平(2011): 南西北海道, 羊蹄山火山と尻別岳火山の地球化学的特徴. 日本火山学会2011年講演予稿集, B1-02.
上澤真平・中川光弘(2017): 南西北海道, 尻別岳火山の地質と岩石(第一報). 日本地質学会学術大会講演要旨集, R3-P1-1.

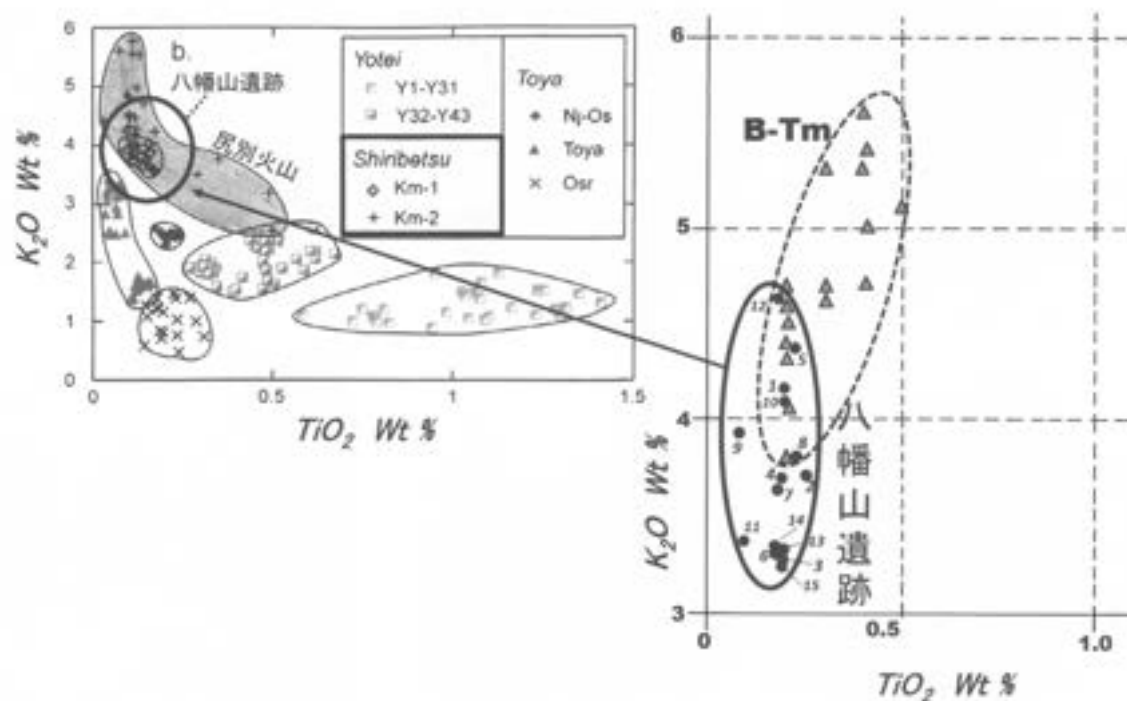


図5 左：羊蹄山・尻別岳・洞爺関係の火山ガラスの K_2O と TiO_2 との関係図（中川ほか、2018の図より引用・加筆）。右：八幡山遺跡火山灰とB-Tm（町田ほか2003収録）の火山ガラスの K_2O と TiO_2 との関係図。番号は表2に対応。

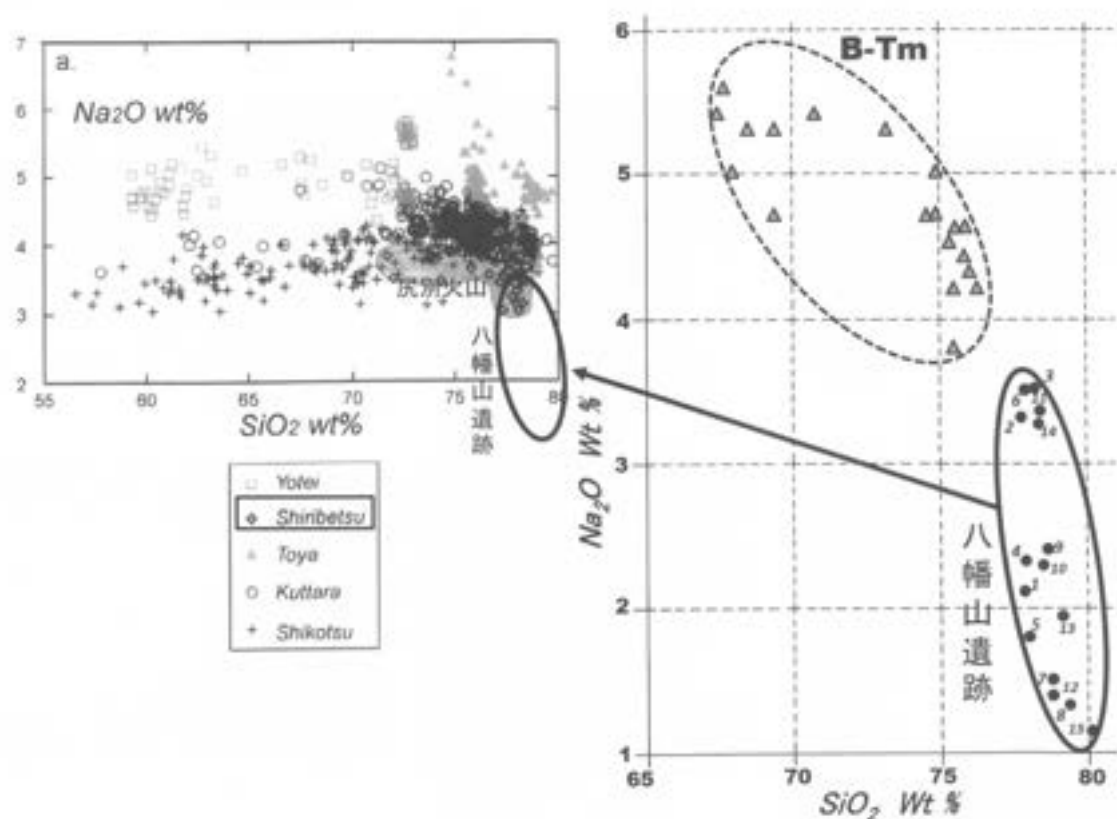


図6 左：羊蹄山・尻別岳・洞爺・クッタラ・支笏火山関係の火山ガラスの Na_2O と SiO_2 との関係図（中川ほか2018の図より引用・加筆）。右：八幡山遺跡火山灰とB-Tm（町田ほか、2003収録）の火山ガラスの Na_2O と SiO_2 との関係図。番号は表2に対応。



写真1 A地点の発掘部（柱状図作成）の全容と“褐色細粒火山灰層”



写真2 写真1に準ずる



写真3 A地点の含火山岩礫火山灰質堆積岩層（褐色風化層；新第三系）



写真4 B地点付近の連続する“褐色細粒火山灰層”

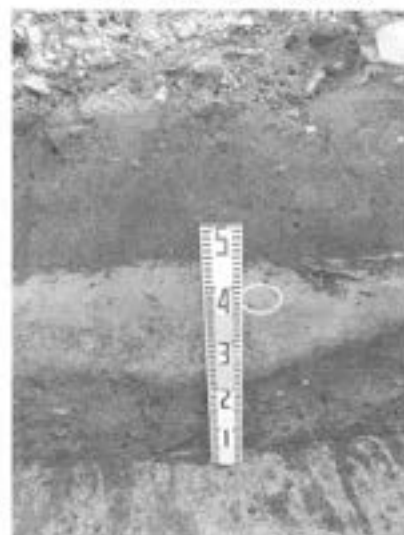


写真5 B地点の発掘部（柱状図作成）の全容と“褐色細粒火山灰層”
白線囲み部分で火山灰試料（YOH-A-B）採取



写真6 C地点の発掘部の全容と“褐色細粒火山灰層”



写真7 写真6の右側へ続く部分（腐植土層中に“褐色細粒火山灰層”がはさまれる）

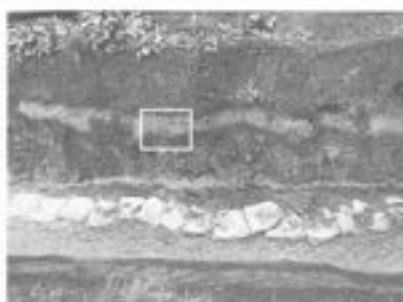


写真9 写真8の黒線囲み部分の正面からの写真。腐植土層中にはさまれる“褐色細粒火山灰層”



写真10 写真9の白線囲み部分の拡大写真。腐植土層中にはさまれる“褐色細粒火山灰層”

写真8 平成30年度発掘箇所の用水路施工部の壁面写真（左側が平成31年度発掘箇所）

〈附編3〉 放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取等により生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村2003)。

ここでは、余市町黒川町に所在する八幡山遺跡の遺構構築年代を明らかにする目的で、放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、炭化種実2点(クリ、オオムギ)と炭化材2点(ヤナギ属、クリ)の計4点である。炭化材の樹種については〈附編4〉を参照されたい。

表1に、測定試料の詳細と前処理・調整法及び測定法を示す。測定は、試料の前処理・調整後、加速器質量分析計(コンパクトAMS: NEC製 1.5SDII)を用いて行った。

表1 測定試料及び処理

測定No. (PFD-)	遺跡データ	試料	前処理・調整	測定法
39732	D-11 グリッド H2炉1 1層	炭化種実(クルミ)	超音波処理、酸-アルカリ-酸処理	AMS
39733	D-14b グリッド SH3 9層	炭化材(C39: ヤナギ属)	超音波処理、酸-アルカリ-酸処理	AMS
39734	D-10b グリッド P36 6層	炭化材(クリ)	超音波処理、酸-アルカリ-酸処理	AMS
39735	I-13 グリッド SX1 2層	炭化種実(オオムギ)	超音波処理、酸-アルカリ-酸処理	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代及び暦年代(較正年代)を算出した。表2にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

1) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は 1σ (シグマ)(68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動及び ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素(^{14}C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正

表2 測定結果

測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
39732	-27.82 \pm 0.18	1553 \pm 15	1555 \pm 15	433-489 cal AD (57.3%) 532-543 cal AD (10.9%)	427-553 cal AD (95.4%)
39733	-30.43 \pm 0.22	3872 \pm 18	3870 \pm 20	2451-2420 cal BC (16.6%) 2405-2378 cal BC (16.9%) 2350-2296 cal BC (34.7%)	2459-2292 cal BC (95.4%)
39734	-25.80 \pm 0.25	3911 \pm 17	3910 \pm 15	2466-2436 cal BC (25.9%) 2421-2404 cal BC (15.8%) 2379-2350 cal BC (26.5%)	2471-2341 cal BC (95.4%)
39735	-24.15 \pm 0.35	96 \pm 16	95 \pm 15	Post-bomb NH1 2013: 1697-1725 cal AD (24.8%) 1815-1835 cal AD (17.4%) 1878-1894 cal AD (14.8%) 1904-1917 cal AD (11.1%)	Post-bomb NH1 2013: 1694-1727 cal AD (27.4%) 1812-1863 cal AD (31.5%) 1866-1918 cal AD (36.5%)

には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値及びサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、暦年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ (68.2%確率)と2 σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。カッコ内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所 見

八幡山遺跡で出土した遺構の構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。以下、2 σ 暦年代範囲(確率 95.4%)に着目して結果を整理する。

D-11グリッドH2炉1の1層より出土した炭化種実(クルミ)は、427-553 cal AD(95.4%)、D-14bグリッドSH3の9層より出土した炭化材は、2459-2292 cal BC(95.4%)、D-10bグリッドP36の6層より出土した炭化材は、2471-2341 cal BC(95.4%)、I-13グリッドSX1の2層より出土した炭化種実(オオムギ)は、1694-1727 cal AD(27.4%)、1812-1863 cal AD(31.5%)、1866-1918 cal AD(36.5%)の暦年代を示した。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」. 日本第四紀学会, p. 3-20.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

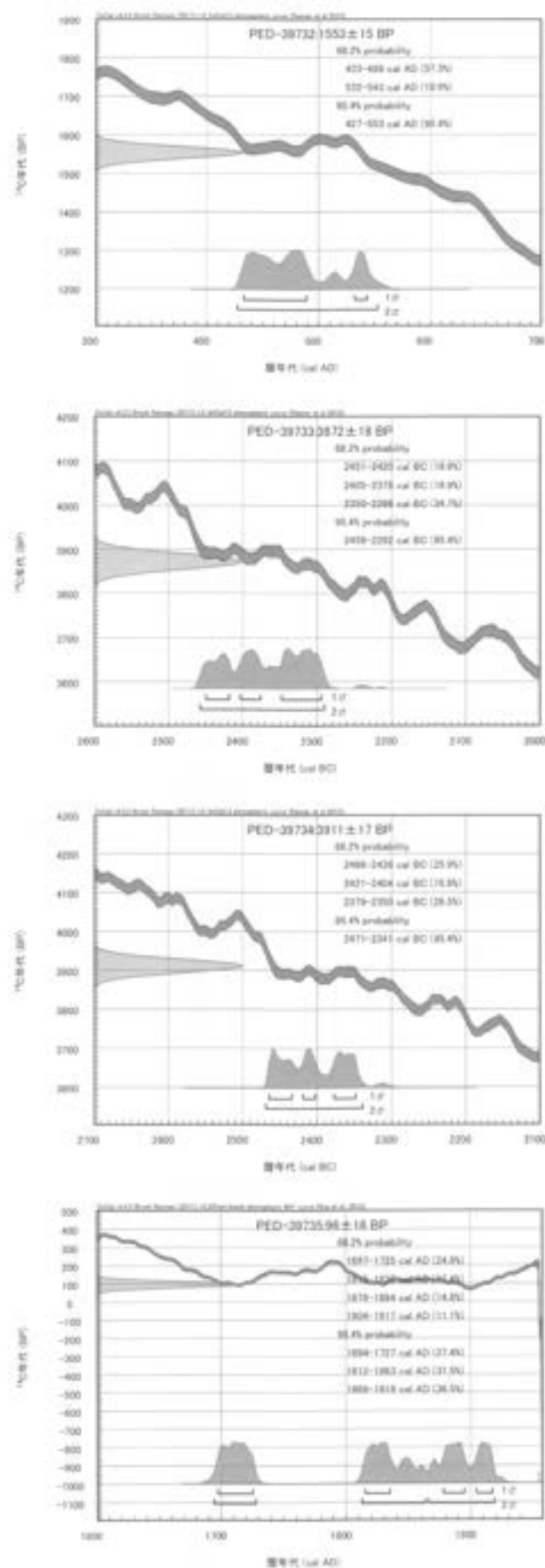


圖 1 曆年校正結果

〈附編 4〉 樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

八幡山遺跡は、縄文時代から擦文時代にかけての複合遺跡で、石鎌をはじめ、石斧、黒曜石の剥片など多くの石製遺物と炭化材が出土している。ここでは、住居跡等から検出された炭化材の樹種を同定し、当時の植物利用について検討する。

2. 試料

試料は、住居跡 (H2, SH2, SH3)、土坑 (P36)、性格不明遺構 (SX1) から出土した炭化材 5 試料 (試料 1～5) である。このうち、試料 2 は、C37 と C39 の 2 点がある。試料のうち、試料 3 を除く 4 点には接合関係の無い複数片が認められる。

3. 分析方法

一部の試料は、若干の湿り気があったため、自然乾燥させた。各試料について、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定し、周囲を紫外線硬化する樹脂でコーティングして観察試料とした。走査型電子顕微鏡 (低真空) で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定した。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) 及び Wheeler ほか (1998) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

4. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。複数片の炭化材が認められた試料のうち、試料 1 には 2 種類、試料 4 には 3 種類が認められた。試料 2 の 2 点と試料 5 は、全ての破片が同一種類であった。これらの炭化材は、広葉樹 6 分類群 (サクラ属、コナラ属コナラ節、クリ、オニグルミ、ヤナギ属、トネリコ属シオジ節) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を以下に記す。

表 1 樹種同定結果

No.	試料名	グリッド	遺構	時期	層位	取上No.	形状	種類	備考
1	試料 1	D-10a	H2 HP3 (住居跡)	縄文時代中期末	1	No. 2608	板目状 破片	トネリコ属シオジ節 オニグルミ	HP3 底
2	試料 2	D-14a	SH3 (住居跡)	擦文時代	9	C37 C39	板目状 ミカン割状	ヤナギ属 ヤナギ属	
3	試料 3	D-10b	P36 (土坑)	中・近世	6	—	分割状 ミカン割状	クリ サクラ属	水洗選別 水洗選別
4	試料 4	I-13	SX1 (性格不明遺構)	近世以降か近代	2	—	破片 破片	コナラ属コナラ節 クリ	
5	試料 5	J-14	SH2 (住居跡)	擦文時代	8	—	ミカン割状	ヤナギ属	

・サクラ属 *Prunus* バラ科

散孔材。道管は単独または 2～6 個が放射方向や接線方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3 細胞幅、1～30 細胞高。

組織の特徴から、チシマザクラ等が含まれる狭義のサクラ属 (*Cerasus*)、またはシウリザクラ等が含まれるウワミズザクラ属 (*Padus*) と考えられるが、今回の試料では分類が困難であり、広義のサクラ属とした。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が1~3列配列した後、急激に径を減ずる。晩材部では小径の道管が多数集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が2~4列配列した後、急激に径を減ずる。晩材部では小径の道管が多数集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. クルミ科クルミ属

散孔材。比較的径の大きな道管が単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

・トネリコ属シオジ節 *Fraxinus sect. Fraxinaster* モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~30細胞高。

5. 考 察

炭化材は、縄文時代の住居跡、擦文時代の住居跡、中・近世の土坑(墓)、近世以降か近代の性格不明遺構から出土している。これらの炭化材には、合計6種類が認められた。各種類の材質等についてみると、広義のサクラ属は山地や河畔等に生育する落葉高木であり、木材は比較的重硬・緻密で強度が高い。コナラ節は、台地、山地、河畔等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。クリは、縄文時代に本州から持ち込まれた栽培植物とされる落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。オニグルミは、河畔等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。ヤナギ属は、河畔等に生育する落葉小高木~高木であり、木材は軽軟で強度と保存性は低い。シオジ節は、河畔や湿地等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。

炭化材の状況について、時代別、遺構別にみると、縄文時代の住居跡であるH2は、シオジ節とオニグルミが認められ、少なくとも2種類が利用されたことが推定される。いずれも強度の高い木材であり、建築部材などに硬い木材を利用したことが推定される。

擦文時代の住居跡であるSH2とSH3の2軒から出土した炭化材3点は、全てヤナギ属に同定された。この結果から、擦文時代にはヤナギ属の木材が建築部材等に利用されたことが推定される。ヤナギ属は強度が低い、部材を太くする等して必要な強度を得ていた可能性がある。なお、伊東・山田(2012)のデータベースを用いて、北海道の建築部材について用材傾向をみると、ヤナギ

属は花岡2遺跡、美沢11遺跡、新道遺跡、野田生遺跡、茂別遺跡などの縄文時代前期～統縄文時代の試料にも散見されるが、擦文時代以降の試料で急増し、利用量が多くなる傾向がある。本遺跡の結果も、擦文時代に急増するヤナギ属の利用例の一端を示す事例と考えられる。

中・近世の土坑P36は、墓と考えられており、炭化材はクリに同定された。炭化材の用途・目的の詳細は不明であるが、中・近世の遺跡周辺にクリが生育あるいは栽培され、その木材が葬送に関連する用途・目的に利用されたことが推定される。

近世以降または近代とされる性格不明遺構SX1から出土した炭化材には、サクラ属、コナラ節、クリが認められ、少なくとも3種類が利用されたことが推定される。炭化材は、全て強度が高い木材で構成されており、利用状況の一端を示す可能性がある。

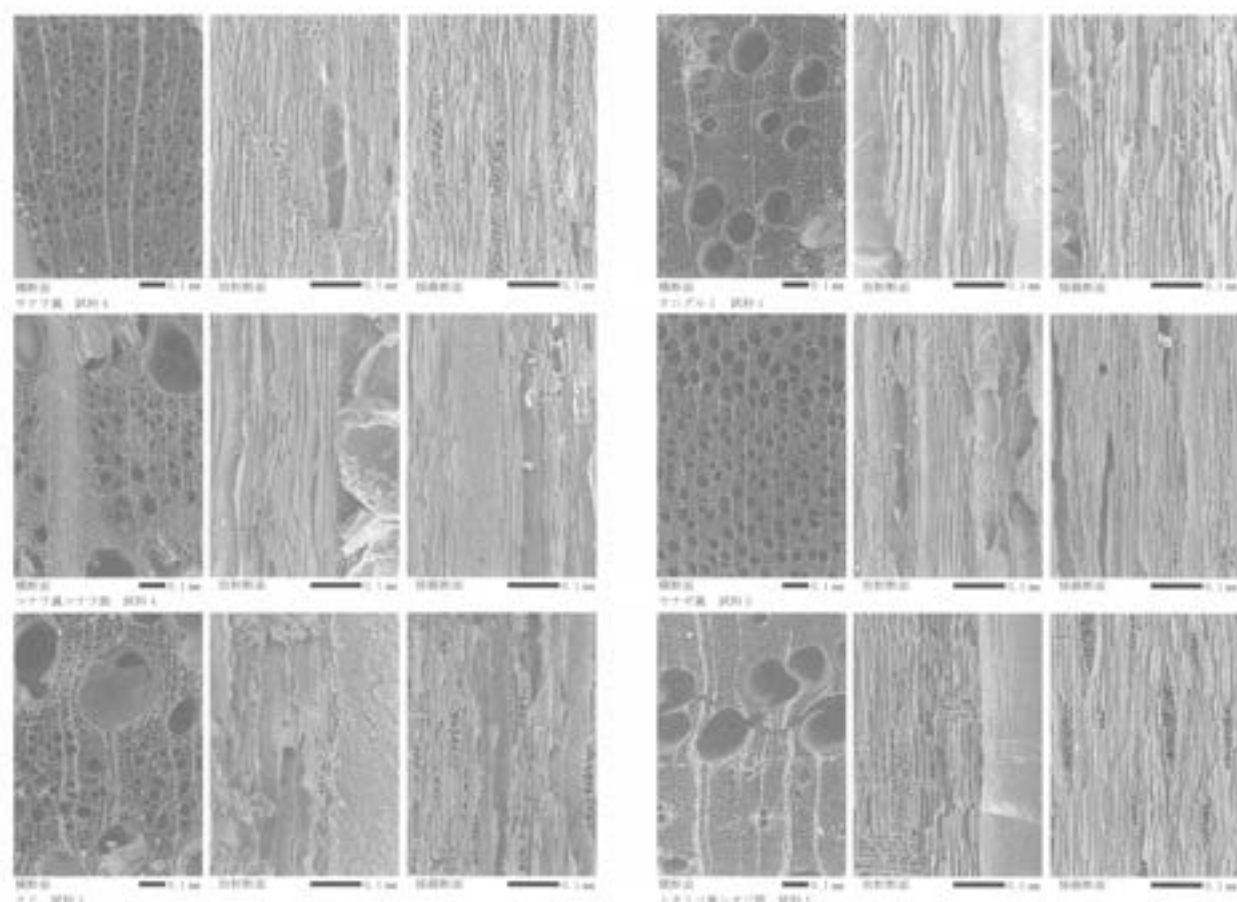


図1 炭化材

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 444p.
 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

〈附編5〉 余市町八幡山遺跡から出土した植物遺体

Project Seeds 考古植物研究会 椿坂 恭代

(1) 遺跡の所在と性格

遺跡の名称：余市町八幡山遺跡（よいちちょうはちまんやまいせき）（登載番号D-19-030）

遺跡の所在：余市町黒川町707

調査の理由：開発事業（道路）

調査の主体：余市町教育委員会

調査期間：平成30年9月3日から平成30年11月2日

令和元年5月13日から令和元年10月31日

調査面積：2,418 m² (618 m² / 1,800 m²)

調査担当者：小川康和

遺跡の立地：八幡山遺跡は余市町の市街地から5 kmほど離れた黒川町登川線沿い、標高7～10 mを測る丘陵地の緩斜面上に位置する。

主な遺跡の年代：縄文時代、続縄文時代、擦文時代

主な検出遺構：縄文時代住居、擦文時代住居、剥片集中、炉跡、溝、土坑、小土坑、性格不明遺構、集石遺構

SX1遺構から出土した炭化オオムギ[?]から、次のような¹⁴C測定値が得られている。1694-1727cal AD (27.4%)、1812-1863cal AD (31.5%)、1866-1918cal AD (36.5%)。この詳細については第Ⅶ章〈附編3〉を参照のこと。

(2) 扱った資料

分析対象として扱った資料は擦文時代（9世紀）の住居跡（SH1～3）のカマド、煙道、礫集中からと坑底（P36）、SX1遺構等から土壌を採取し、フローテーション法^{注1}で処理された後、第1次選別で炭化植物を抽出し、送付されてきたものである。資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された種子一覧表は表1に示しておく。また分析資料の対象とした遺構については本編（第Ⅲ・Ⅳ章）に記載してある。

注1：フローテーション法とは、浮遊選別法ともいわれ単なる水洗いである水洗別法とは区分される。乾燥した台地上に位置した遺跡の住居跡や焚き火跡等の遺構から炭化物を含む土壌を採取し乾燥させてから、水を張ったコンテナに土壌を入れて攪拌し、水面に浮いた炭化物をメッシュサイズが異なる複数の篩を使い分けて回収する方法

表1 八幡山遺跡出土炭化種子一覧表

資料No.	遺構	層位	土壌採取地点	アワ (粒)	キビ (粒)	オオムギ? (粒)	イネ (粒)	アズキ (粒)	ダイズ (粒)	タデ科 (粒)	ニワトコ属 (粒)	不明 (粒)
①～②	SH1	6	カマド周辺覆土			3				1		1
①～⑥	SH2	5	カマド	3	2							1
①～④	SH2	4	覆土下部			1						
①～⑤	SH3	2	カマド焼土	—	—	—	—	—	—	—	—	—
①	SH3	3	煙道	—	—	—	—	—	—	—	—	—
①～②	SH3	5	煙道	—	—	—	—	—	—	—	—	—
①～②	SH3	9	礫集中 間1・2段目	—	—	—	—	—	—	—	—	—
①	SH3	9	礫集中 間2・3段目									1
①～⑩	SX1	2				5	4	5	2	1		
①～②	P36	9	坑底								1	1

(3) 出土した炭化植物種子

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図1-1 : SH2のカマドから出土)

擦文住居 (SH2) カマドから3粒出土。果実はやや球形。背面には果長の2/3ほどの胚があり、その反対側の腹面には小さなへら型のヘソがある(椿坂1993)。出土種子はいずれも内・外穎のとれた「えい果」の状態である。煮沸と被熱による変形が著しい。計測値はL 1.10×W 1.30×T 0.80 (mm)

キビ *Panicum miliaceum* L. (図1-2 : SH2のカマドから出土)

擦文住居 (SH2) カマドから2粒出土。果実はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、その反対側の腹面にはへら形状のヘソがある(椿坂1993)。出土種子はいずれも内・外穎のとれた「えい果」の状態である。煮沸と被熱による変形が著しい。計測値はL 1.50×W 1.40×T 1.00 (mm)

オオムギ? *Hordeum vulgare* L. (図1-3 : SH2覆土下部から出土。図1-4・5 : SH1カマド周辺の覆土から出土。図1-11~14 : SX1から出土。)

擦文住居 (SH2) の覆土下部から1粒出土。果実は紡錘状楕円形。腹面中央には縦溝があり、背面はほぼ平らで楕円形の胚がある(椿坂1988)。出土種子はオオムギの形態を示すが煮沸と被熱による変形が著しいので種までの分類はできなかった。計測値はL 4.40×W 2.80×T 1.75 (mm)

擦文住居 (SH1) カマド周辺の覆土から3粒出土。写真4の出土種子(果実)は長卵形で先端が尖る。背面に円形の胚、腹面中央には縦溝がある。オオムギの形態を示すが擦文時代のオオムギと異なる形態。腹面に酸化したイネモミの破片が付着していた。写真5の種子は長楕円形で先端はゆるやかに尖る。背面に円形のやや小さい胚、腹面中央には縦溝がある。オオムギと異なる形態を示す。コムギの形態に似るが擦文時代のコムギの形態と異なる。4の計測値はL 5.00×W 2.40×T 1.80 (mm)、5 : L 4.80×W 2.50×T 1.70 (mm)

SX1遺構から5粒と破片4出土。写真11~14に示した種子の形態は長楕円形や広楕円形、変形等それぞれ異なった形態を示す。背面に胚があり、腹面中央には縦溝がある。いずれもオオムギに似た形態を示すが擦文時代、中世から出土しているオオムギの形態と異なる。写真11の背面に酸化したイネモミの破片が付着していた。11の計測値はL 5.80×W 2.65×T 2.00 (mm)、12 : L 6.00×W 3.90×T 2.50 (mm)、13 : L 3.80×W 1.80×T 1.30 (mm)、14 : L 4.40×W 3.95×T 2.00 (mm)

出土資料は種子先端の尖りと穎の剥離痕が認められず、これまで出土しているオオムギの形態と異なることから、ほかのイネ科種子の可能性がないか、これまでの調査で各時代の遺跡からササ属 *Sasa Makino et Shibata* 種子が検出されていることから(山田・椿坂2009)、検討を行った。

種子先端の尖り、護穎の剥離痕がみられない等、ササ属に類する部分もあるが、いずれも被熱による変形と種子表面のダメージを受けているので、明確にササ属と分類できる情報を得ることができなかった。したがって、今回、出土の種子はオオムギに似た形態として分類した。また遺構の状況を考えると栽培種子と野生種子の混在も考えられる。

イネ *Oryza sativa* L. (図1-6~10 : SX1から出土)

SX1遺構から5粒出土。このうち1粒は玄米(写真8)、写真6に示した秕(シイナ)や未熟(写真7・9・10)の状態出土。玄米は長楕円形で腹面の下部に胚がある。左右の側面にやや隆起した

縦の稜線が2本ある。写真9の側面(左)に酸化したイネモミの破片が付着していた。6の計測値はL 4.30×W 1.80×T 0.80(mm)、7:L 4.80×W 1.70×T 1.10(mm)、8:L 4.00×W 2.60×T 1.70(mm)、9:L 5.40×W 2.00×T 1.30(mm)、10:L 4.00×W 1.60×T 0.80(mm)

アズキ *Vigna angularis* Ohwi et Ohashi (図1-15: SX1から出土)

SX1遺構から2片出土。種子は長楕円形。写真15にみるように腹面には種子長軸に対して2/3ほどの広線形で平坦な形をしたヘソがある。ヘソの特徴からアズキ *Vigna angularis* Ohwi et Ohashi と判断される(吉崎・椿坂2001)。破片のため計測はしていない。

ダイズ *Glycine max* (L.) Merr. (図1-16: SX1から出土)

SX1遺構から1粒出土。扁平楕円形。腹面には長軸に対してやや中央部に楕円形の大きなヘソがある(吉崎・椿坂2001)。被熱による変形があるが形態とヘソの特徴からダイズ *Glycine max* (L.) Merr. と判断される。計測値はL 5.70×W 4.10×T 3.30(mm)

そのほかにSH1(カマド周辺覆土)からタデ科(POLYGONACEAE)1粒とP36(坑底)からニワトコ属(*Sambucus* L.)1粒出土しているが図示していない。

不明種子が擦文住居(SH1~3)からとP36(坑底)から合わせて4粒出土。資料の保存状態が極めて悪いので分類できなかったもので、図示していない。

(4) 若干のコメント

今回の調査では擦文時代の住居跡(SH2)カマドからアワ、キビ、オオムギが確認された。栽培植物の組成は擦文時代に一般的にみられるものである。

同時期の住居跡(SH1)のカマド周辺覆土からオオムギ?が3粒出土したが、その形態は擦文時代のオオムギと異なる。出土種子は微量の上、それぞれ形態が微妙に異なり詳細な分類ができなかった。しかし図1-4に示した種子腹面に酸化したイネモミの破片が付着していること、これと同様の資料がSX1遺構からもみつまっていること(図1-11)、被熱の程度が似ている等の様相から混入の可能性も考えられる。

SX1遺構からはイネ、オオムギ?アズキ、ダイズが確認された。このSX1遺構の性格について調査担当者の所見は不整形なプランを確認したためサブトレンチを入れて遺構の確認を行ったところ、底面は被熱しておりかなり硬化した状況であった。遺構の時期を決定づける遺物が出土しないため、土壌観察用に残したベルト部分、1層は表土や耕作土の混入がある可能性が高いため2層の土壌を採取してフローテーションを行ったという。

この遺構から出土したオオムギ?の放射性炭素年代の(¹⁴C) 1866-1918cal AD (36.5%) 測定値が得られている。出土したオオムギ?は、擦文時代、中世から出土するオオムギと形態が異なることから、ほかのイネ科種子の可能性もあるのではと検討したが、解明することができなかった。

今回、出土したイネは秕(シイナ)、玄米、未熟イネの状態を確認された。イネは本州からの輸入品として擦文時代、中世の遺跡から一般的に完熟した玄米が確認されている。北海道でイネの試作が江戸時代(1661~73)に亀田大野村で実施された記録があり、その後のコメ作りは何回もの断続期を経て近年に定着したという文献記録等で説明されている。今回このようなイネの様相をみると気になるところである。可能であればイネそのものの年代測定の検討をいただき、考古植物学の情報を蓄積していくことが必要である。



図1 八幡山遺跡出土炭化種子

引用文献

樽坂恭代

1993:「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史時代と関連科学』261-281 古崎昌一先生還暦記念論文集

1998:「オオムギについて」『時の絆 道を辿る』245-250 石附喜三男先生を偲ぶ発行委員会 札幌

2001:「先史時代の豆類について」考古植物学の立場から『豆類時報NO24』20-28 財団法人日本豆類基金協会 発行(古崎昌一と共著)

2009:「遺跡から出土したササ属種子について」『北海道開拓記念館研究紀要』13-22 北海道開拓記念館 (山田悟郎と共著)

〈附編6〉 黒曜石産地推定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

ここでは、余市町黒川町に所在する八幡山遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器5点である(表1)。

測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素

表1 分析対象

No.	試料名	グリッド	遺構	層位	調査年	取上日
1	試料1	I-14	SP4	I	平成30年度	20181024
2	試料2	I-14		II	平成30年度	20180905
3	試料3	J-14		II	平成30年度	20181026
4	試料4	F-15		II	平成30年度	20180913
5	試料5	D-11		II	平成31年度	20190912

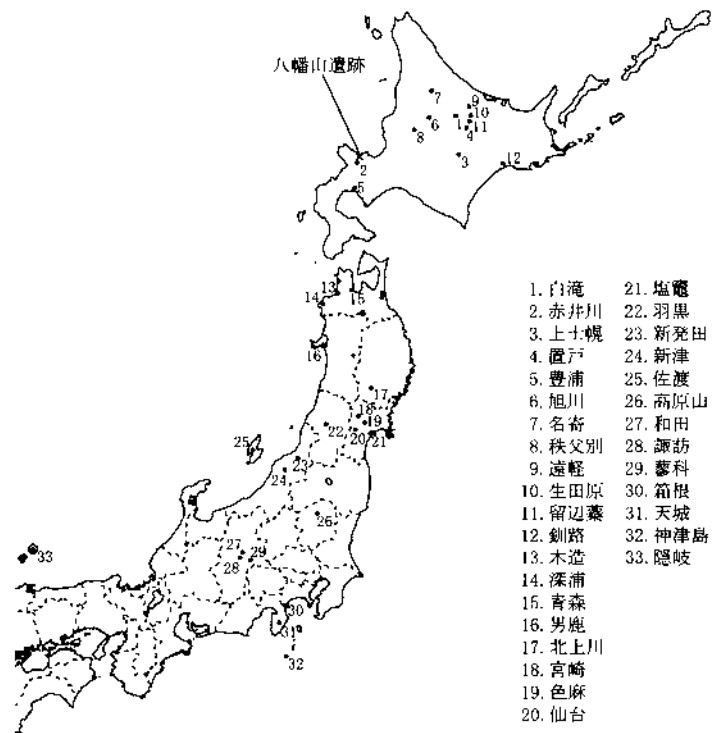


図1 黒曜石産地分布図(東日本)

のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度 \times 100 / (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度 \times 100 / (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Mn強度 \times 100 / Fe強度
- 4) log (Fe強度 / K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100 / Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log (Fe強度 / K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせるため、形状、厚み等の影響を比較的受けない

くく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe強度 / K強度) の値が減少する (望月 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表 2 に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点及び点数を、図 1 に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表 3 に石器の測定値及び算出した指標値を、図 2 と図 3 に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、5 点すべてが赤井川群 (北海道、赤井川エリア) の範囲にプロットされた。

図 2、3 の判別図では、赤井川群と上士幌群の範囲の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、赤井川群ないし上士幌群の範囲にプロットされた場合は、以下に示す Y 分率を算出している。

$$Y \text{ 分率} = Y \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$$

赤井川群及び上士幌群の原石及び石器について、横軸 Y 分率、縦軸 Mn 強度 $\times 100 / Fe$ 強度をプロットした判別図を図 4 に示す。図 4 においても、5 点いずれも赤井川群と判断できる。

表 3 に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表 2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝 1	赤石山山頂 (43), 八号沢露頭 (15)
		白滝 2	7 の沢川支流 (2), JK 露頭 (10), 十勝石沢露頭直下河床 (11), アジサイの滝露頭 (10)
	赤井川	赤井川	曲川・十木川 (24)
	上士幌	上士幌	十勝三股 (4), タウシュベツ川右岸 (42), タウシュベツ川左岸 (10), 十三ノ沢 (32)
	置戸	置戸山	置戸山 (5)
		所山	所山 (5)
	豊浦	豊浦	豊泉 (10)
	旭川	旭川	近文台 (8), 雨紛台 (2)
	名寄	名寄	忠烈布川 (19)
	秩父別	秩父別 1	中山 (65)
		秩父別 2	
		秩父別 3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床 (2)
	生田原	生田原	仁田布川河床 (10)
留辺蘂	留辺蘂 1	ケンヨマップ川河床 (9)	
	留辺蘂 2		
釧路	釧路	釧路市営スキー場 (9), 阿寒川右岸 (2), 阿寒川左岸 (6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸 (15), 鶴ヶ坂 (10)
	深浦	八森山	岡崎浜 (7), 八森山公園 (8)
	青森	青森	天田内川 (6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)
		脇本	脇本海岸 (4)
岩手	北上川	北上折居 1	北上川 (9), 真城 (33)
		北上折居 2	
		北上折居 3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉 (40)
	色麻	根岸	根岸 (40)
	仙台	秋保 1	上蔵 (18)
		秋保 2	
塩竈	塩竈	塩竈 (10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前 (24), 大越沢 (10)
		櫛引	たらのき代 (19)
新潟	新発田	板山	板山牧場 (10)
	新津	金津	金津 (7)
	佐渡	真光寺	追分 (4)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢 (22)
		七尋沢	七尋沢 (3), 宮川 (3), 枝持沢 (3)
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場 (30)
		鷹山	鷹山 (14), 東餅屋 (54)
		小深沢	小深沢 (42)
		土屋橋 1	土屋橋西 (10)
		土屋橋 2	新和田トンネル北 (20), 土屋橋北西 (58), 土屋橋西 (1)
		古峠	和田峠トンネル上 (28), 古峠 (38), 和田峠スキー場 (28)
		ブドウ沢	ブドウ沢 (20)
	牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)	
	高松沢	高松沢 (19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (35), 星ヶ塔 (20)
	蓼科	冷山	冷山 (20), 麦草峠 (20), 麦草峠東 (20)
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯 (20)
		畑宿	畑宿 (51)
		鍛冶屋	鍛冶屋 (20)
静岡	天城	上多賀	上多賀 (20)
		柏峠	柏峠 (20)
東京	神津島	恩馳島	恩馳島 (27)
		砂糠崎	砂糠崎 (20)
島根	隠岐	久見	久見パーライト中 (6), 久見採掘現場 (5)
		箕浦	箕浦海岸 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)

表3 測定値及び産地推定結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log Fe/K	Y分率	判別群	エリア	No.
1	316.7	114.9	2007.3	777.6	361.7	384.7	794.2	33.54	5.73	15.60	0.80	16.60	赤井川	赤井川	1
2	333.7	115.6	1978.7	778.6	365.5	389.1	823.0	33.04	5.84	15.51	0.77	16.51	赤井川	赤井川	2
3	270.5	96.6	1680.1	649.3	299.0	322.6	668.3	33.48	5.75	15.42	0.79	16.64	赤井川	赤井川	3
4	305.5	110.3	1962.5	731.0	336.3	353.1	733.3	33.94	5.62	15.62	0.81	16.40	赤井川	赤井川	4
5	237.0	84.0	1458.0	575.3	266.9	289.0	607.7	33.08	5.76	15.35	0.79	16.62	赤井川	赤井川	5

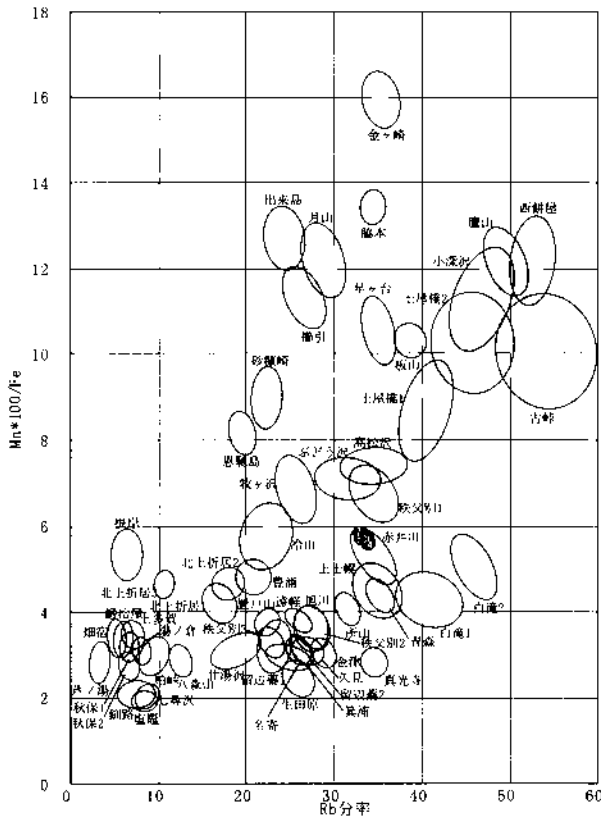


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

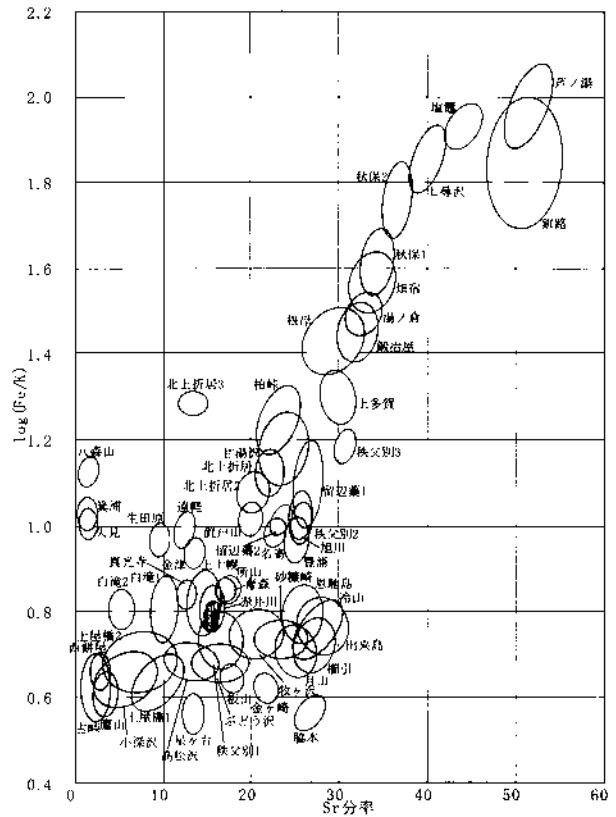


図3 黒曜石産地推定判別図(2)

4. 所見

八幡山遺跡より出土した黒曜石製石器5点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、5点すべてが赤井川エリア産と推定された。

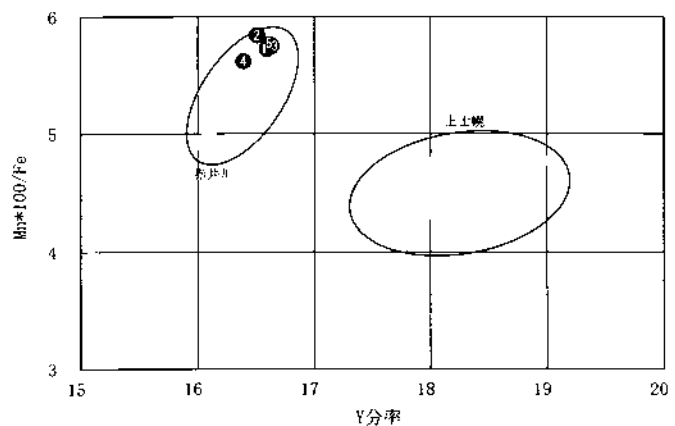


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会.

写真図版



平成30年度調査区遠景(北西から)



平成30年度調査区遠景(北から)



平成30年度調査区全景(北東から)



平成30年度調査区全景

写真2



平成30年度調査前状況(北東から)



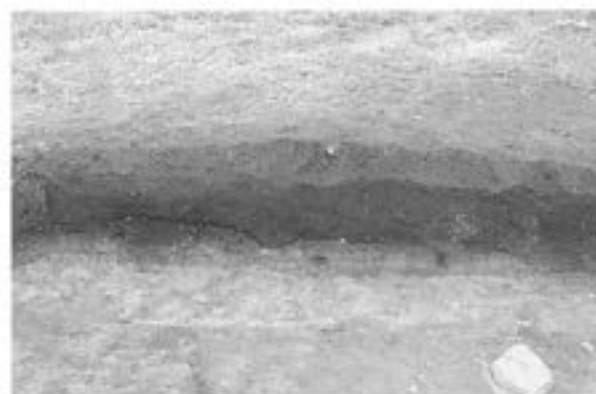
平成30年度調査前状況(南西から)



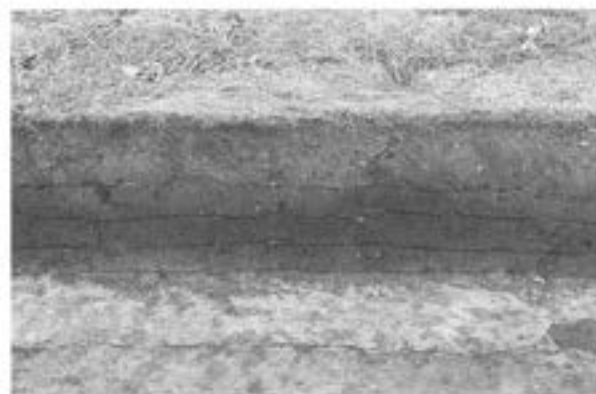
表土掘削状況(西から)



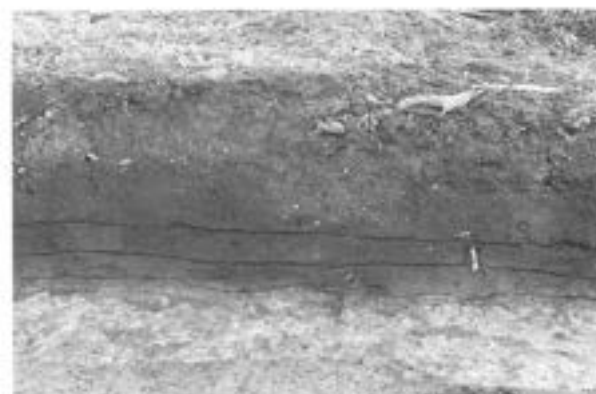
表土掘削状況(北東から)



調査区北壁土層断面E C-15グリッド(南から)



調査区東壁土層断面D D-17グリッド(北西から)

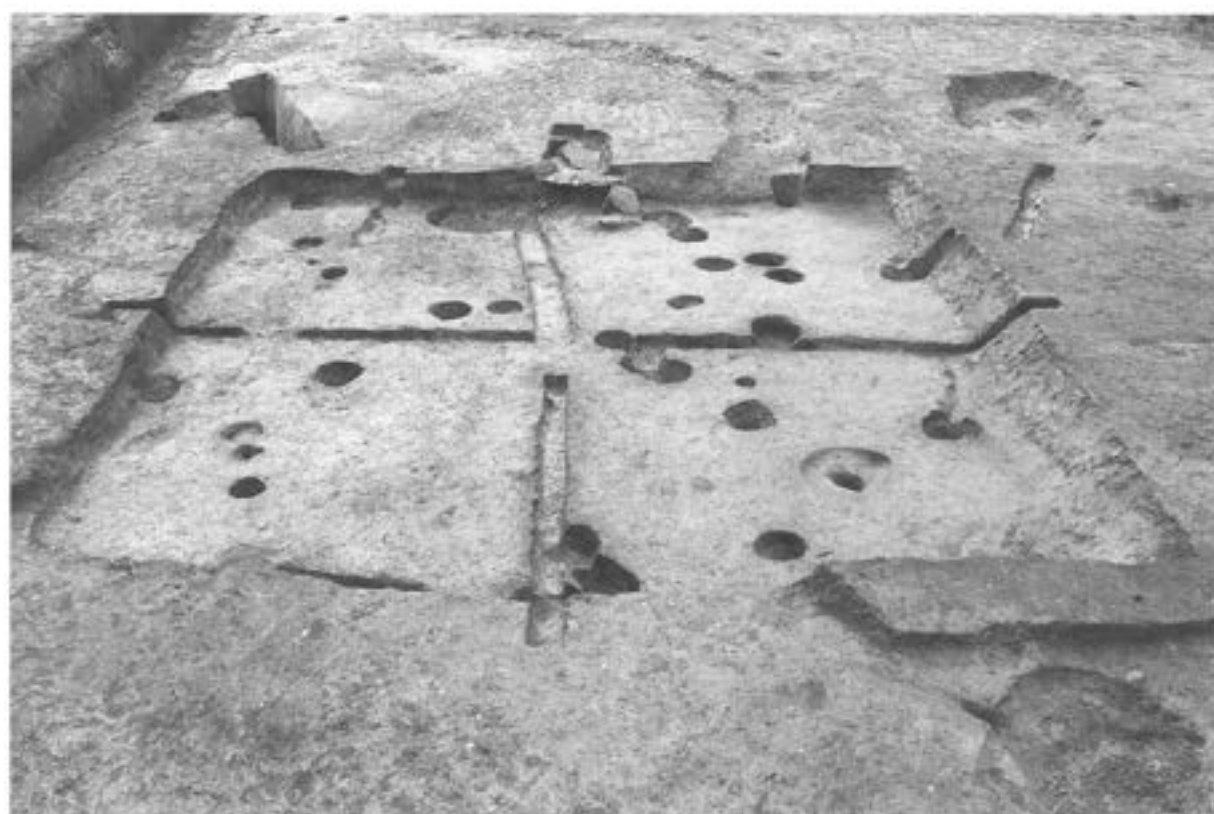


調査区東壁土層断面D I-14グリッド(北西から)



調査区東壁土層断面D L-13グリッド(北西から)

写真3



SH1 完掘(北東から)



SH1 土層断面 A-A' 南側(南東から)



SH1 土層断面 A-A' 北側(南東から)



SH1 土層断面 B-B' 西側(南西から)



SH1 土層断面 B-B' 東側(南西から)

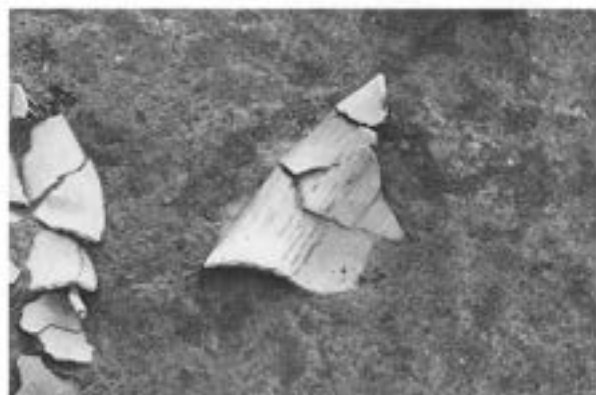
写真4



SH1 遺物出土状況 床面1 (西から)



SH1 遺物出土状況 床面2 (西から)



SH1 遺物出土状況 床面(北東から)



SH1 遺物出土状況 床面(南東から)



SH1 遺物出土状況 床面3 (西から)



SH1 遺物出土状況 カマド付近(東から)



SH1 カマド検出(北東から)



SH1 煙道土層断面 A-A' (南東から)



SH1 掘方完掘(北東から)



SH1 カマド完掘(北東から)



SH1 カマド被熱層断面 A-A' (南東から)



SH1 貯蔵穴土層断面 I-I' (北東から)



SH1 貯蔵穴完掘(北東から)

写真6



SH2完掘(北東から)



SH2検出(北東から)



SH2土層断面 A-A' (北西から)



SH2土層断面 B-B' (北西から)



SH2土層断面 C-C' (北西から)

写真7



SH2 カマド袖崩落土検出(北西から)



SH2 カマド袖崩落土土層断面(北から)



SH2 遺物出土状況(北東から)



SH2 遺物出土状況(北から)



SH2 カマド遺物出土状況 1(北東から)



SH2 カマド遺物出土状況 2(北東から)



SH2 カマド遺物出土状況 3(北東から)



SH2 カマド遺物出土状況 4(北東から)

写真 8



SH2 掘方完掘(北東から)



SH2 カマド完掘(北東から)



SH2 煙道土層断面 A-A' (北西から)

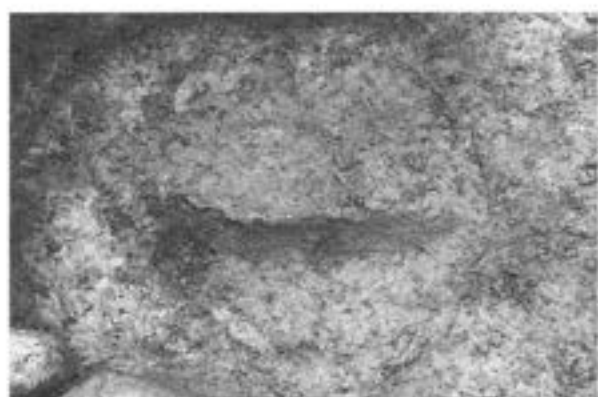


SH2 カマド土層断面 E-E' (北東から)



SH2 カマド土層断面 F-F' (南東から)

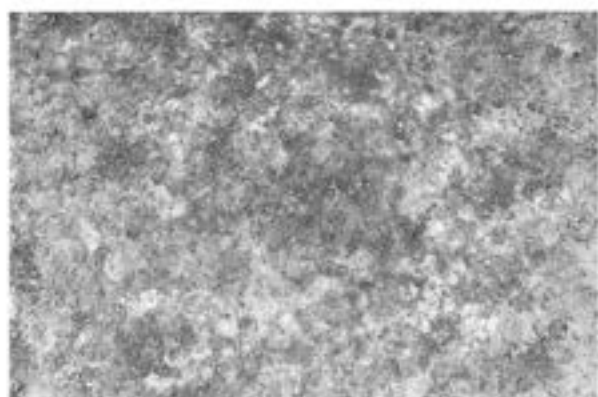
写真9



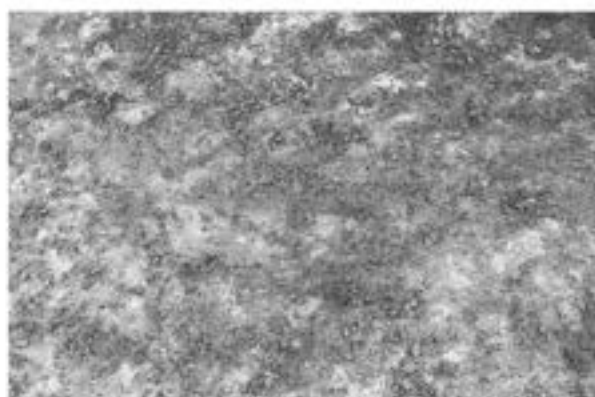
SH2 カマド火床土層断面 F-F' (南東から)



SH2 カマド掘方完掘(北東から)



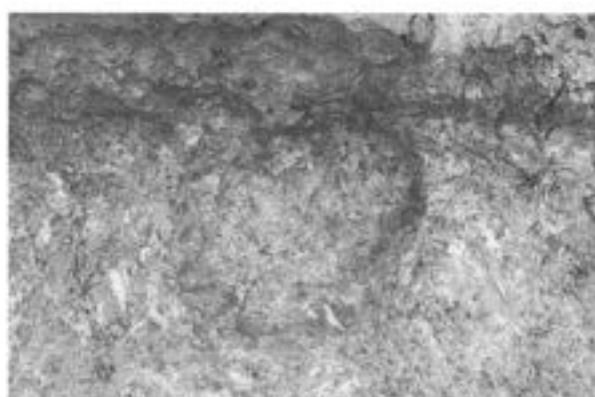
SH2 炉検出状況(西から)



SH2 炉土層断面 G-G' (西から)



SH2 貯蔵穴土層断面 H-H' (北東から)



SH2 貯蔵穴完掘(北東から)



P1 土層断面(北東から)



P1 完掘(東から)

写真10



P2土層断面(南西から)



P2完掘(南東から)



P4土層断面(南から)



P4完掘(南東から)



P5土層断面(南西から)



P5完掘(南東から)



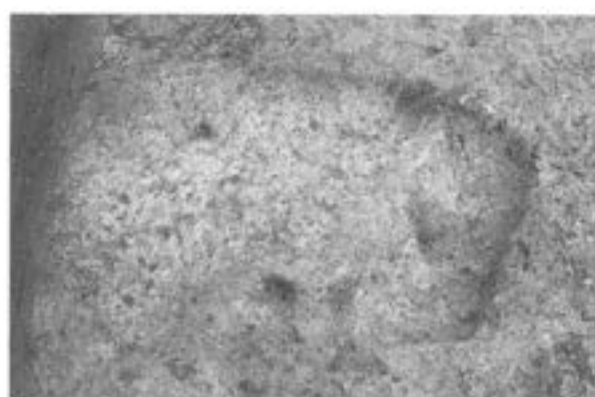
P6土層断面(東から)



P6完掘(南から)



P7 土層断面(南西から)



P7 完掘(北東から)



P8 土層断面(北東から)



P8 完掘(南東から)



P9 土層断面(南東から)



P10 土層断面(東から)



P10 完掘(東から)



P13 土層断面(北東から)

写真12



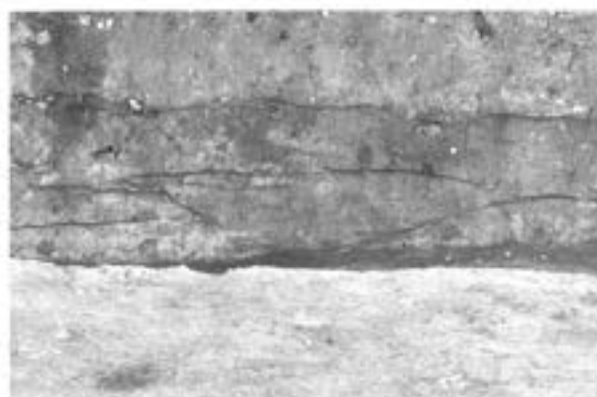
P13完掘(北東から)



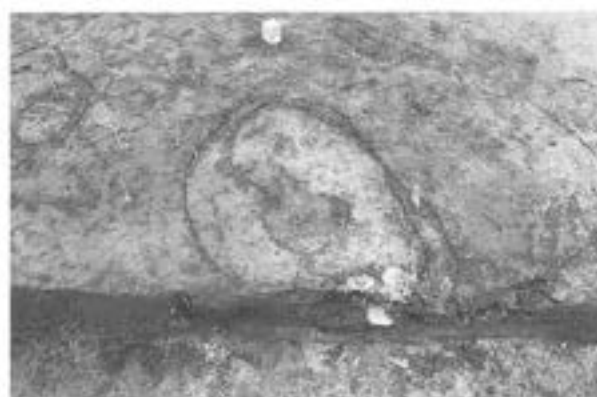
P14土層断面(南東から)



P14完掘(南東から)



P15土層断面(北西から)



F10検出(南東から)



F10土層断面(南から)



F11検出(南東から)



F11土層断面(南東から)



F21 検出(南西から)



F21 土層断面(南から)



F21 遺物出土・完掘(南から)



F22 土層断面(東から)



F24 検出(南西から)



F24 遺物出土状況(南から)



F25 検出(南東から)

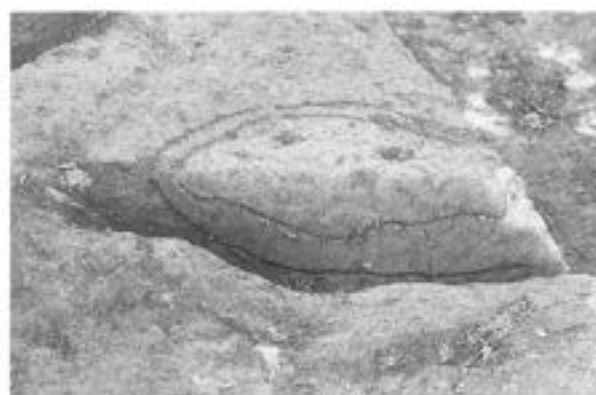


F25 土層断面(北から)

写真14



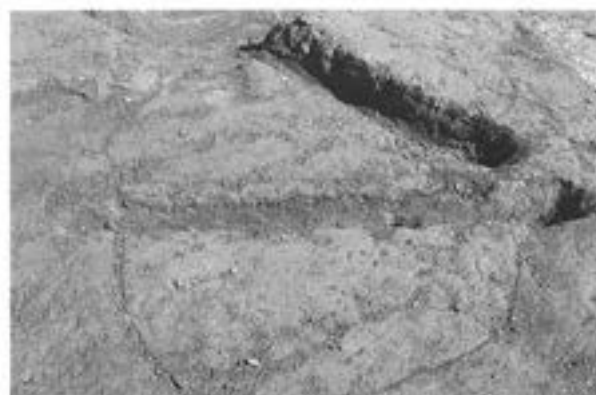
F26 検出(南東から)



F26 土層断面(南西から)



F27 検出(北西から)



F27 土層断面(北西から)



S02 土層断面(南東から)



S02 完掘(南東から)



S01 遺物出土状況(南から)



S02 遺物出土状況(南から)



SS3 遺物出土状況(北から)



SS4 遺物出土状況(東から)



FC1 検出(南から)



FC1 遺物出土状況(南から)



FC2 検出(西から)



SX1 土層断面 C-C' (南西から)



SX1 土層断面 D-D' (南東から)



SX1 完掘(北東から)

写真16



平成31年度調査区全景(北から)



平成31年度調査区全景



平成31年度調査区北側遺構分布(南東から)



平成31年度調査区北側完掘



平成31年度調査区南側完掘(南東から)



平成31年度調査前状況(南から)



表土掘削状況(北から)



作業風景(南から)



作業風景(南東から)



調査区北壁土層断面E C-11グリッド(南から)



調査区北壁土層断面E C-12グリッド(南から)



調査区北壁土層断面E C-13グリッド(南から)



調査区北壁土層断面E C-14グリッド(南から)



調査区西壁土層断面A L・M-3グリッド(東から)



調査区西壁土層断面A K・L-3グリッド(東から)



調査区西壁土層断面A J・K-3グリッド(東から)



メインベルト土層断面C I・J-6グリッド(南東から)

写真20



メインベルト土層断面C H-7~I-6グリッド(南東から)



メインベルト土層断面C F・G-8グリッド(南東から)



メインベルト土層断面C E-9グリッド(南東から)



メインベルト土層断面F G・H-12グリッド(北東から)



メインベルト土層断面F G-11・12グリッド(北東から)



メインベルト土層断面F F-10グリッド(北東から)



5ラインベルト土層断面B K-5グリッド(西から)



5ラインベルト土層断面B L-5グリッド(西から)



HI 完掘(北東から)



HI 土層断面 B-B' (西から)



HI 土層断面 C-C' (北から)



HI 遺物出土状況(南から)



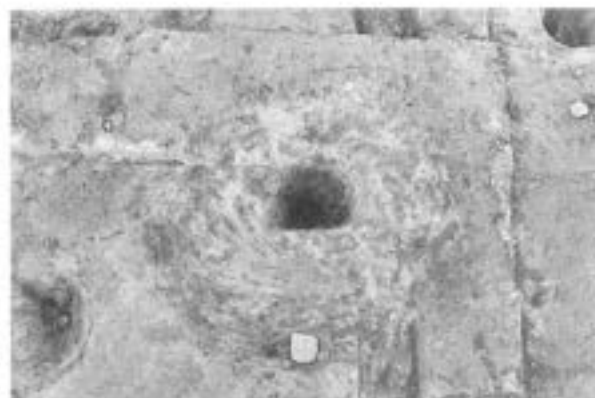
HI 遺物出土状況(北から)



H1 掘方完掘(北東から)



H1HP42 土層断面(西から)



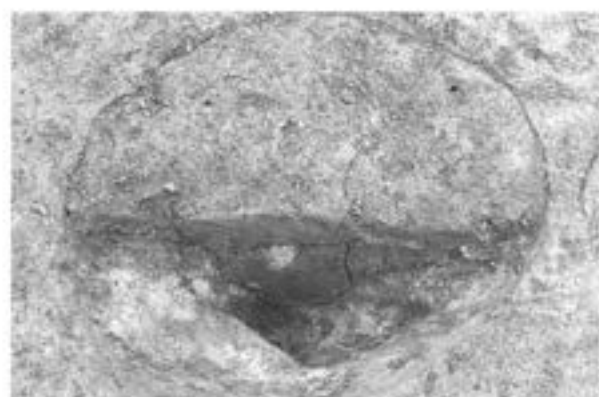
H1HP42 完掘(西から)



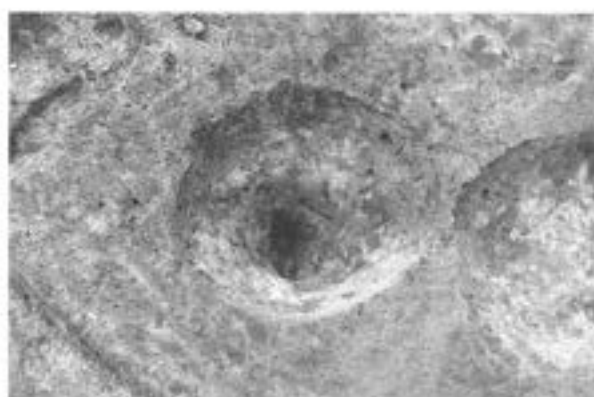
H1HP18・39・40・63 土層断面(南東から)



H1HP18・39・40・63 完掘(南東から)



H1HP35 土層断面(南東から)



H1HP35 完器(南東から)



H1HP9 土層断面(南から)



H1HP9 完器(南から)



H1HP19 土層断面(西から)



H1HP19 完器(西から)



H1HP30 土層断面(東から)



H1HP30 完器(東から)

写真 24



H2完掘(西から)



H2検出(北東から)



H2土層断面 A-A' (南から)



H2土層断面 B-B' (南から)



H2土層断面 C-C' (南東から)



H2 炉 1 遺物出土状況 1 (北東から)



H2 炉 1 遺物出土状況 2 (北東から)



H2 炉 1・2 検出 (北から)



H2 炉 1 土層断面 G-G' (南西から)



H2 炉 2 土層断面 H-H' (南西から)



H2 炉 1 完掘 (南西から)



H2 炉 2 完掘 (南西から)



H2 炉 2 掘方土層断面 H-H' (南西から)

写真 26



H2 掘方完掘(南西から)



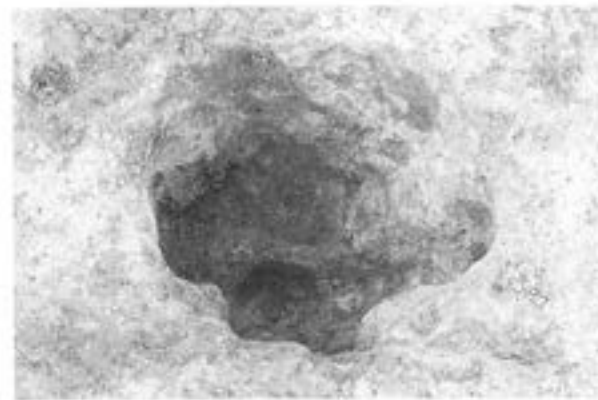
H2HP18 土層断面(南から)



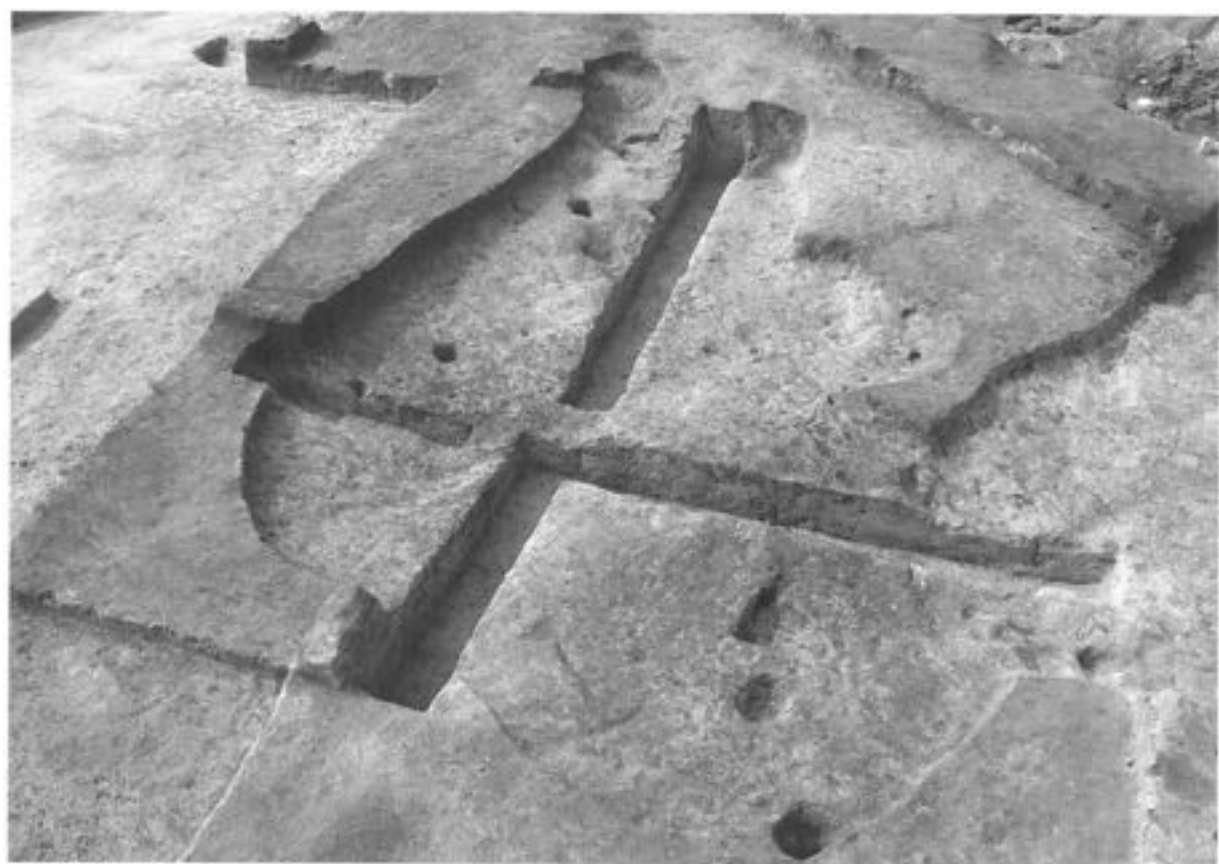
H2HP18 完掘(南から)



H2HP32 完掘(南西から)



H2HP3 炭化材出土状況(南から)



H3 完掘(北東から)



H3 土層断面 A-A' (東から)



H3 土層断面 B-B' (北から)



H3 遺物出土状況(北東から)



H3 掘方完掘(北東から)



H4完掘(南東から)



H4土層断面 A-A' (南から)



H4土層断面 B-B' (東から)



H4土層断面 C-C' (南東から)



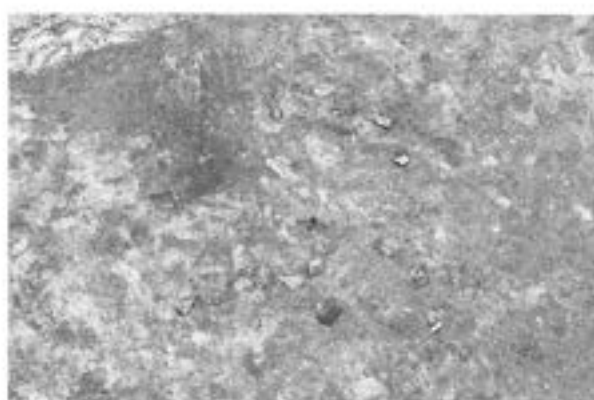
H4遺物出土状況(南東から)



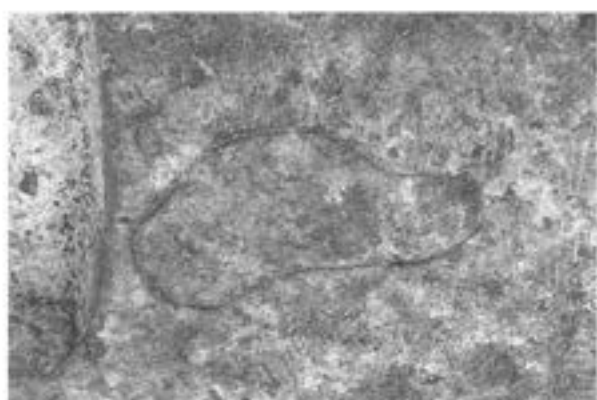
H4 掘方完掘(南東から)



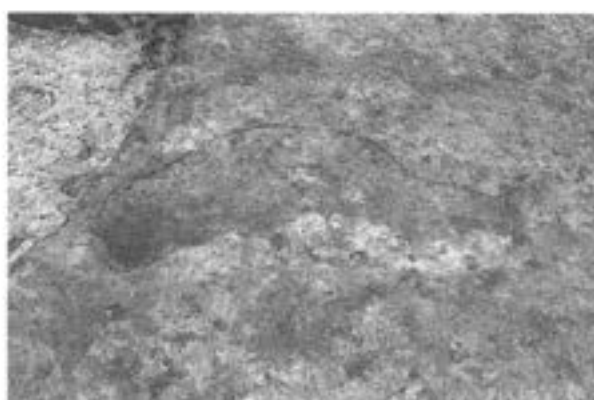
H4 遺物出土状況(東から)



H4 遺物出土状況(南から)

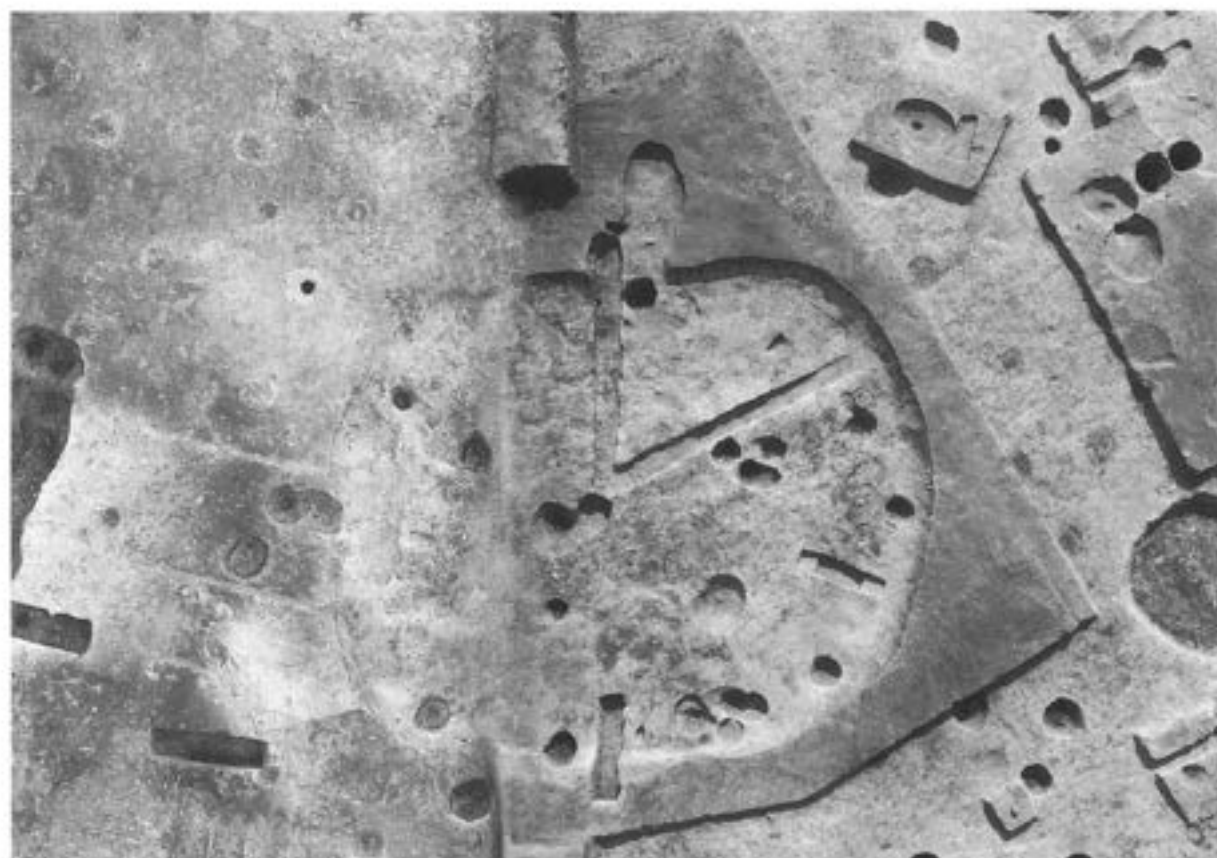


H4 炉検出(北西から)



H4 炉土層断面 D-D' (北西から)

写真30



SH3完掘



SH3遺物出土状況 平成30年度調査(南東から)



SH3土層断面 平成30年度調査 A-A' (南東から)



SH3完掘 平成30年度調査(南西から)



SH3掘方完掘 平成30年度調査(南西から)



SH3 掘方完掘(西から)



SH3 検出(北西から)



SH3 土層断面 B-B' (南から)



SH3 土層断面 C-C' 北側(北西から)



SH3 土層断面 C-C' 南側(北西から)

写真32



SH3遺物出土状況 覆土1(西から)



SH3遺物出土状況 覆土2(西から)



SH3炭化材出土状況(北から)



SH3炭化材・礫集中検出(北から)



SH3遺物出土状況(北から)



SH3礫集中検出(北から)



SH3煙道土層断面 E-E' 西側(北から)



SH3カマド完掘(北から)



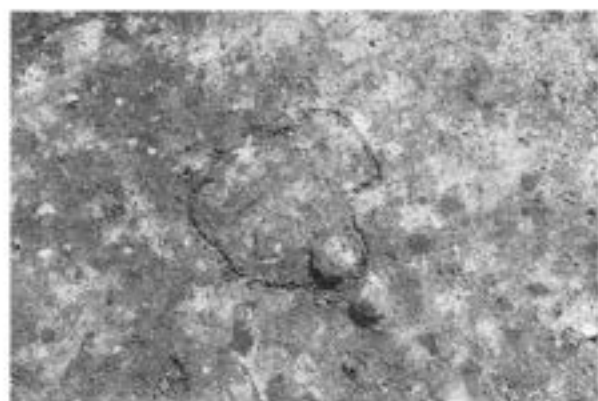
SH3 完掘(北から)



SH3 カマド焼土検出(東から)



SH3 カマド火床土層断面 F-F' (西から)



SH3 炉検出(北から)



SH3 炉土層断面 J-J' (南東から)

写真34



P16土層断面 A-A' (北から)



P16土層断面(トレンチ部分)(東から)



P16遺物出土状況(西から)



P16完掘(北から)



P17土層断面 A-A' (北西から)



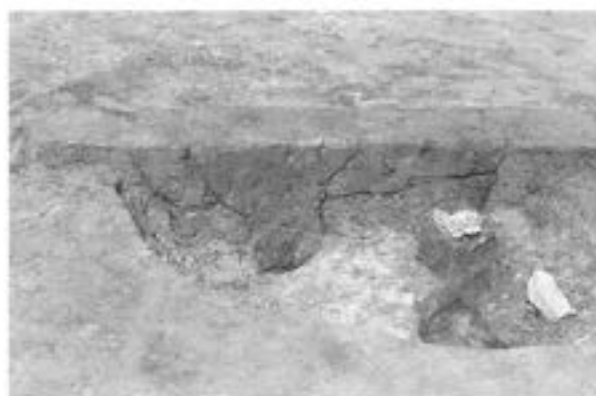
P17土層断面 B-B' (北東から)



P17遺物出土状況(南西から)



P17完掘(北東から)



P18 土層断面(南西から)



P18 完掘(南から)



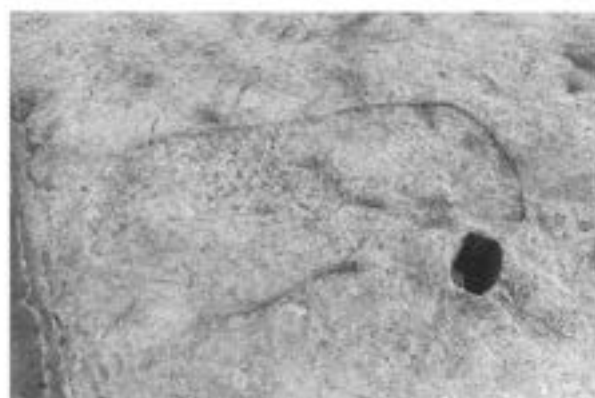
P19 土層断面 B-B' (西から)



P19 完掘(南西から)



P20 遺物出土状況(西から)



P20 遺物出土・完掘(西から)



P21・22 土層断面(東から)



P21 遺物出土・完掘(東から)

写真 36



P22完掘(東から)



P23土層断面 A-A' (北東から)



P23土層断面 B-B' (南東から)



P23完掘(南西から)



P24土層断面 A-A' (南東から)



P24土層断面 B-B' (南西から)



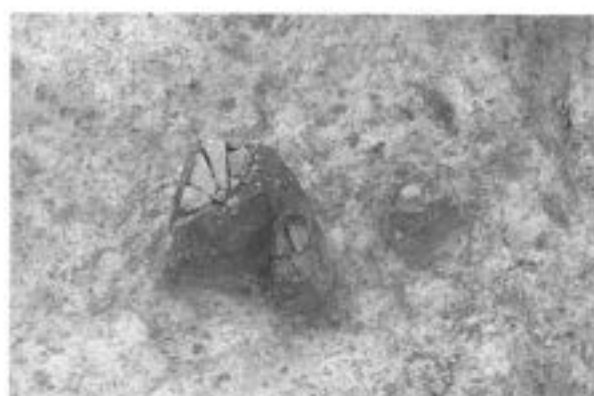
P24遺物出土状況(南東から)



P24完掘(南東から)



P25・26土層断面(南東から)



P25遺物出土状況(北東から)



P25遺物出土・完掘(南東から)



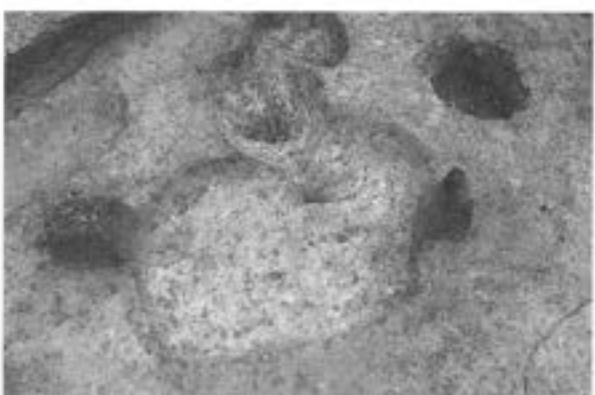
P25・26完掘(南東から)



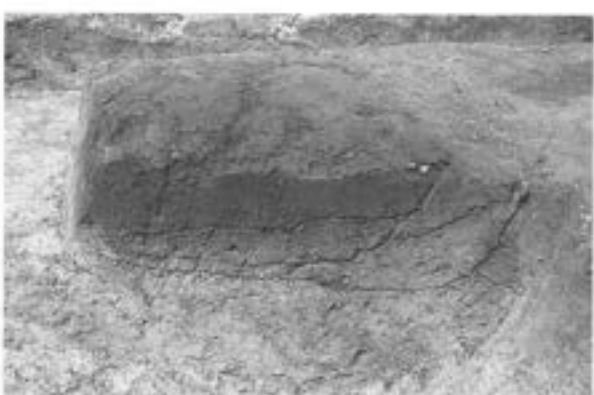
P27土層断面(南西から)



P27遺物出土状況(南西から)



P27完掘(南西から)



P28土層断面(南から)



P28完掘(南から)



P29土層断面(南西から)



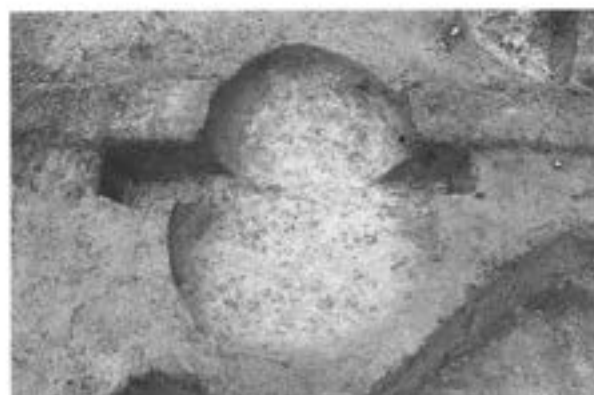
P29完掘(南西から)



P30土層断面(南から)



P30遺物出土状況(南から)



P30完掘(南から)



P31土層断面 A-A'(北から)



P31土層断面 B-B'(東から)



P31 遺物出土状況(南東から)



P31 完掘(東から)



P32 土層断面(南東から)



P32 完掘(南から)



P33 土層断面(東から)



P33 遺物出土状況(東から)



P33 遺物出土状況(北東から)

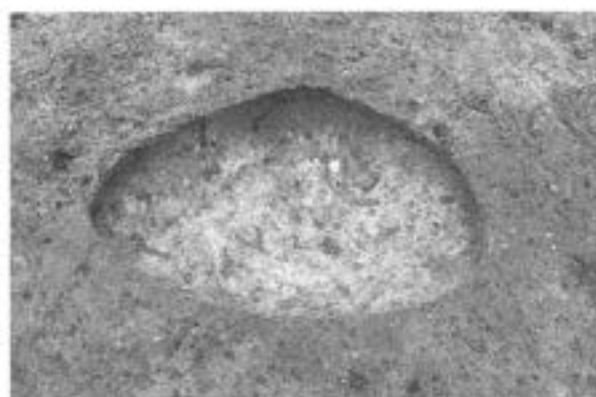


P33 完掘(東から)

写真40



P34 土層断面(南東から)



P34 完掘(南東から)



P35 土層断面 A-A' (南から)



P35 土層断面 B-B' (西から)



P35 完掘(北から)



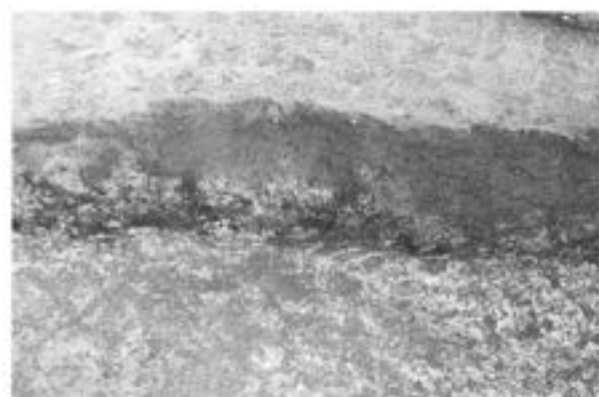
P36 遺物出土状況(北東から)



P36 土層断面 B-B' (北東から)



P36 完掘(北東から)



P36 南東壁被熱痕(北西から)



P36 南東隅テラス検出(南西から)



P39 土層断面(南東から)



P39 完掘(南東から)



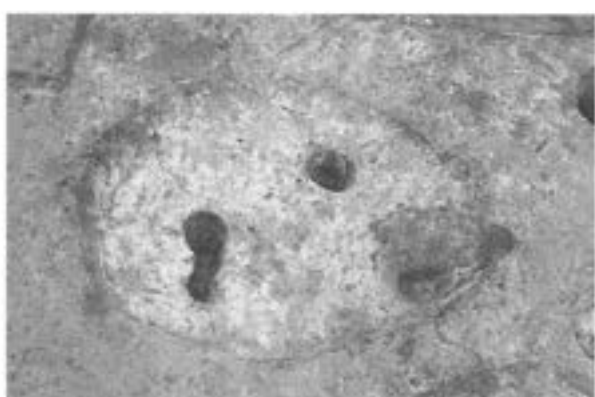
P40 土層断面(南東から)



P40 完掘(南東から)



P41 土層断面(南から)



P41 完掘(南から)

写真42



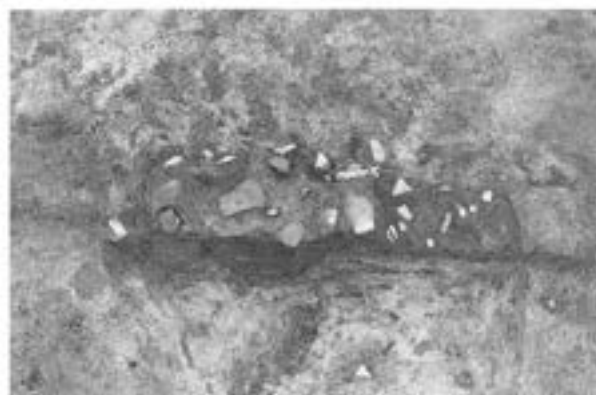
P42 土層断面(北から)



P42 完掘(東から)



P43 土層断面(南から)



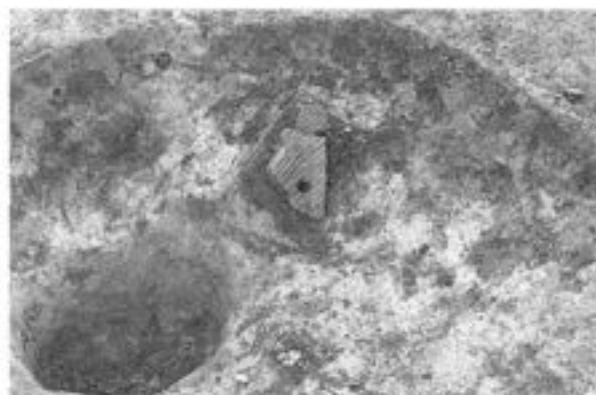
P43 遺物出土状況(南から)



P43 完掘(南東から)



P44 土層断面(東から)



P44 遺物出土状況(北東から)



P44 完掘(東から)



P45 土層断面(北から)



P45 遺物出土状況(北から)



P45 完掘(北から)



P46 土層断面(南から)



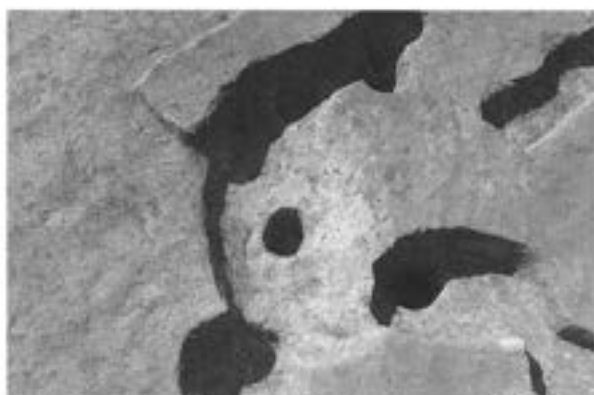
P46 完掘(南から)



P47 土層断面(北東から)



P47 遺物出土状況(北西から)



P47 完掘(南東から)

写真44



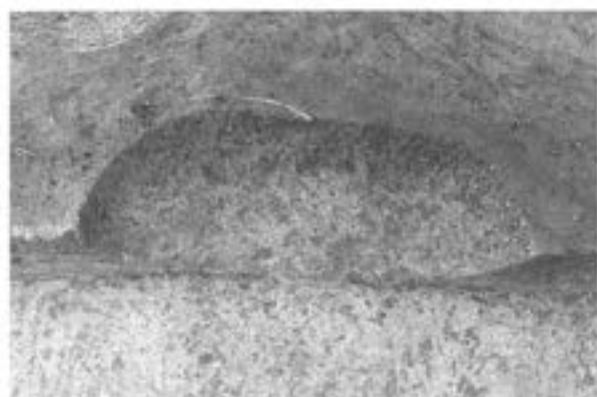
P48 土層断面(北西から)



P48 完掘(北西から)



P49 土層断面(南から)



P49 完掘(南から)



P50 土層断面(南東から)



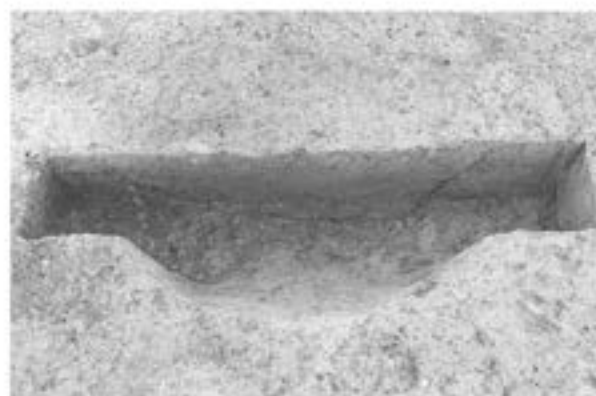
P50 完掘(南東から)



P51 土層断面(南東から)



P51 完掘(南東から)



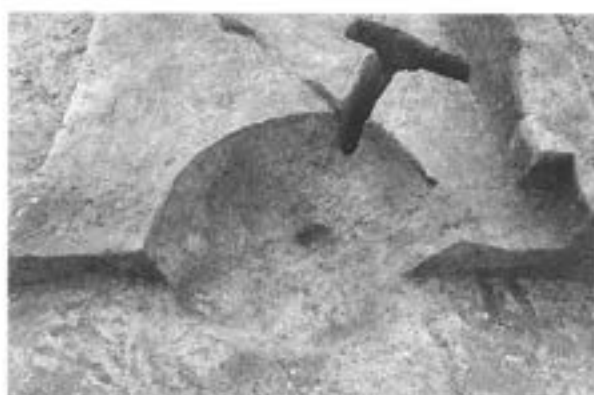
P52 土層断面(東から)



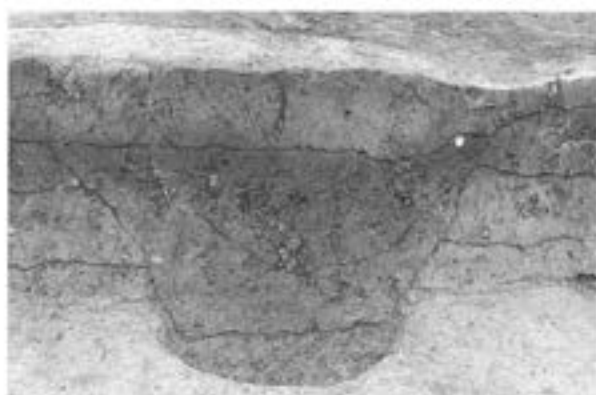
P52 完掘(東から)



P53 土層断面(東から)



P53 完掘(東から)



P54 土層断面(南から)



P54 完掘(南から)



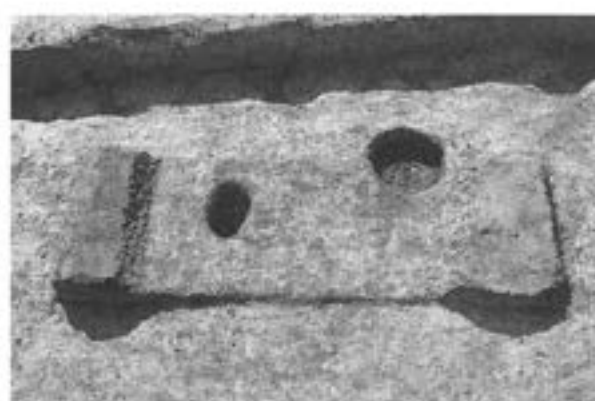
P55 土層断面(北西から)



P55 完掘(北東から)



P56 土層断面(北東から)



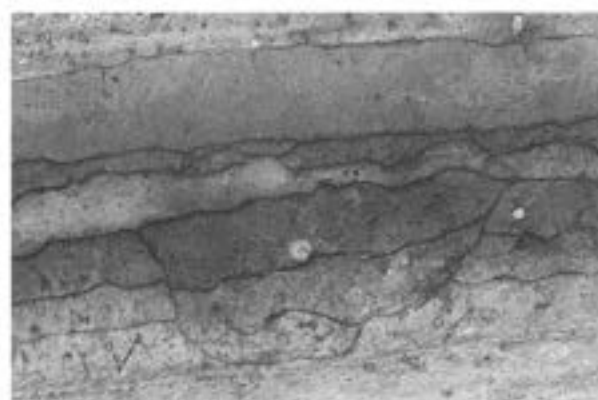
P56 完掘(北東から)



P57 土層断面(西から)



P57 完掘(西から)



P58 土層断面(北から)



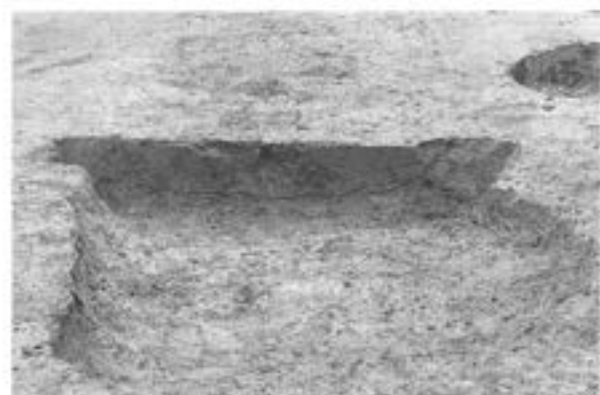
P59 土層断面(東から)



P60 土層断面(北から)



P61 土層断面(南から)



P62 土層断面(南東から)



P62 完掘(南東から)



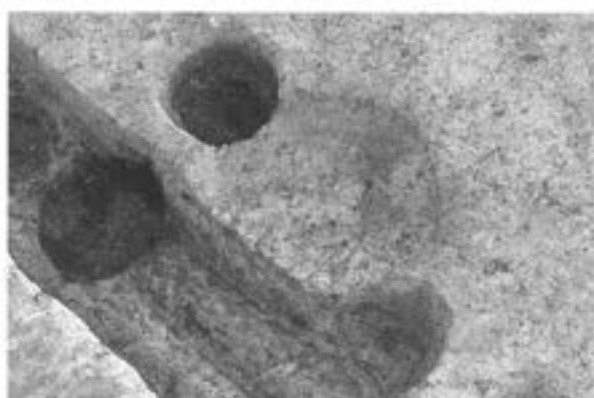
P63 土層断面(南から)



P63 完掘(南から)



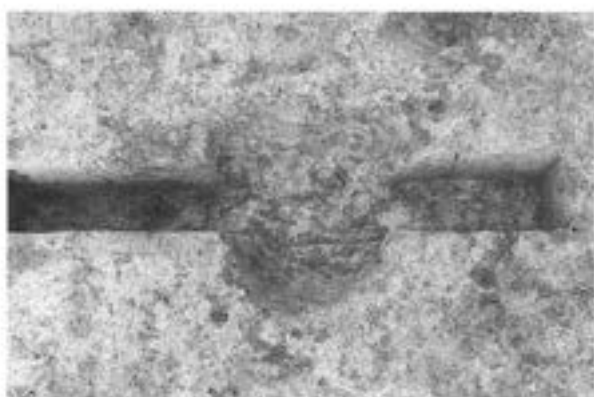
P64 土層断面(北から)



P64 完掘(北から)



SX2 土層断面(南西から)



SX2 掘方完掘(南西から)



FC4 検出(南から)



FC5 検出(南東から)



FC6 検出(南東から)



FC6～8 検出(北西から)



FC9-1 検出(南から)



FC9-2 検出(南西から)



FC10 検出(南東から)



FC11 検出(東から)



現場見学 1



現場見学 2



近隣小学校 現場見学 1



近隣小学校 現場見学 2



遺跡現場見学会 1



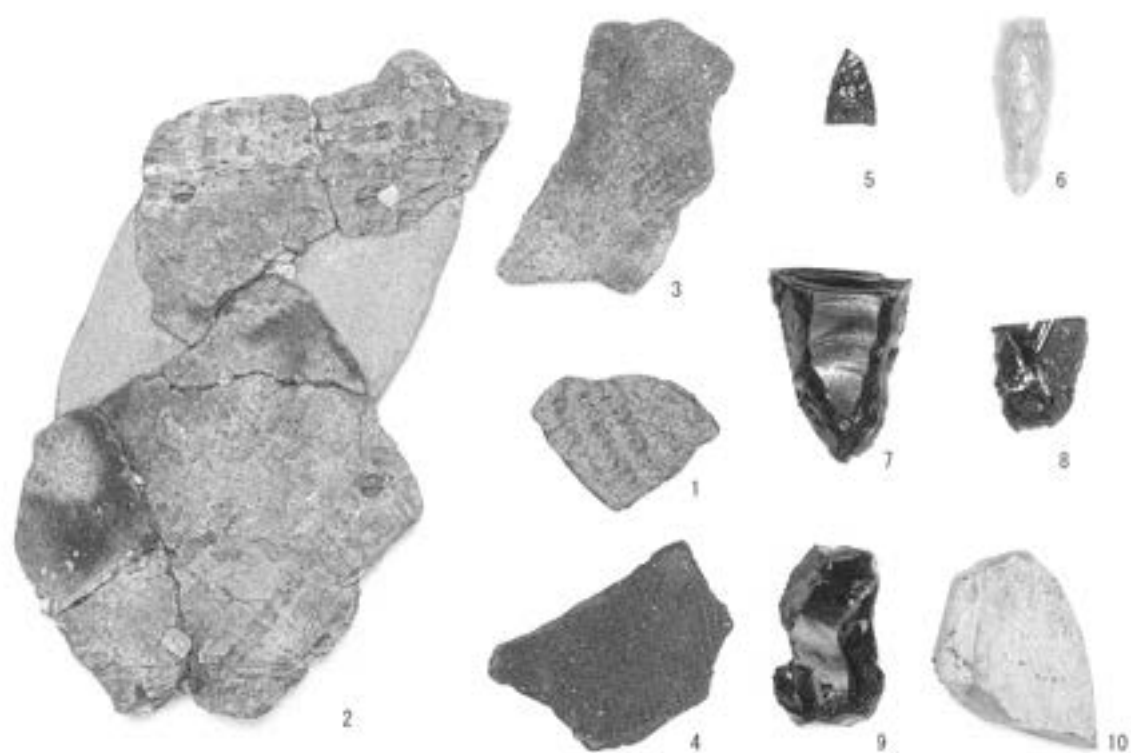
遺跡現場見学会 2



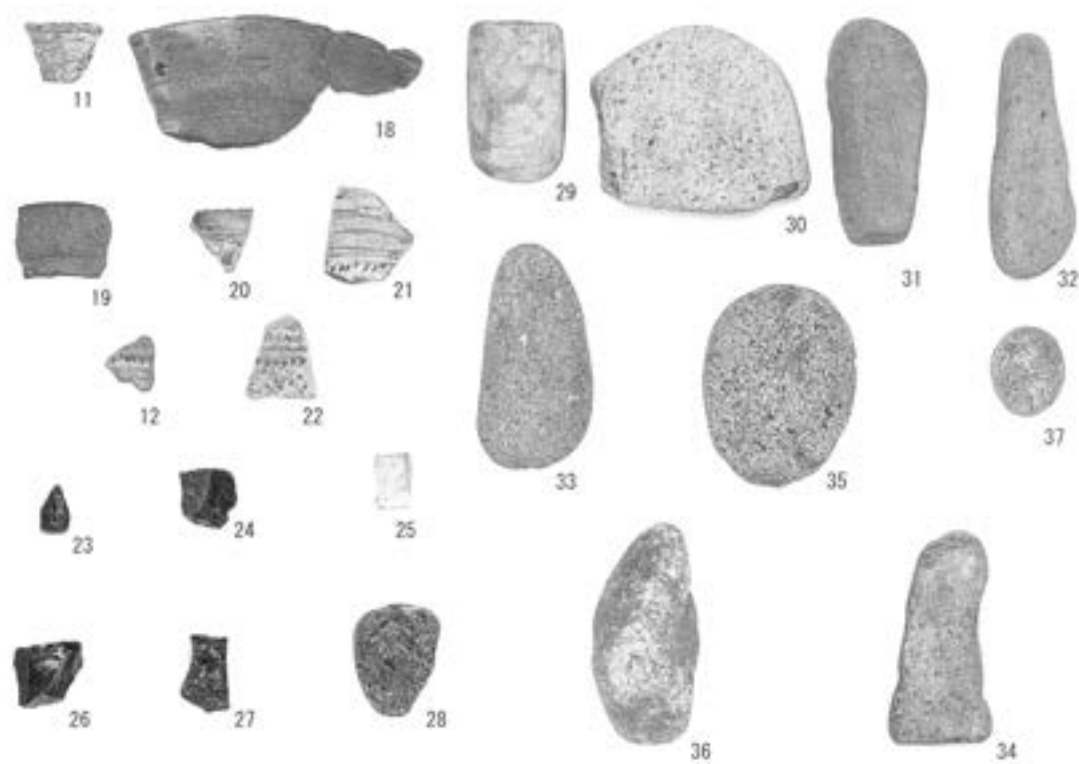
遺跡現場見学会 3



遺跡現場見学会 4

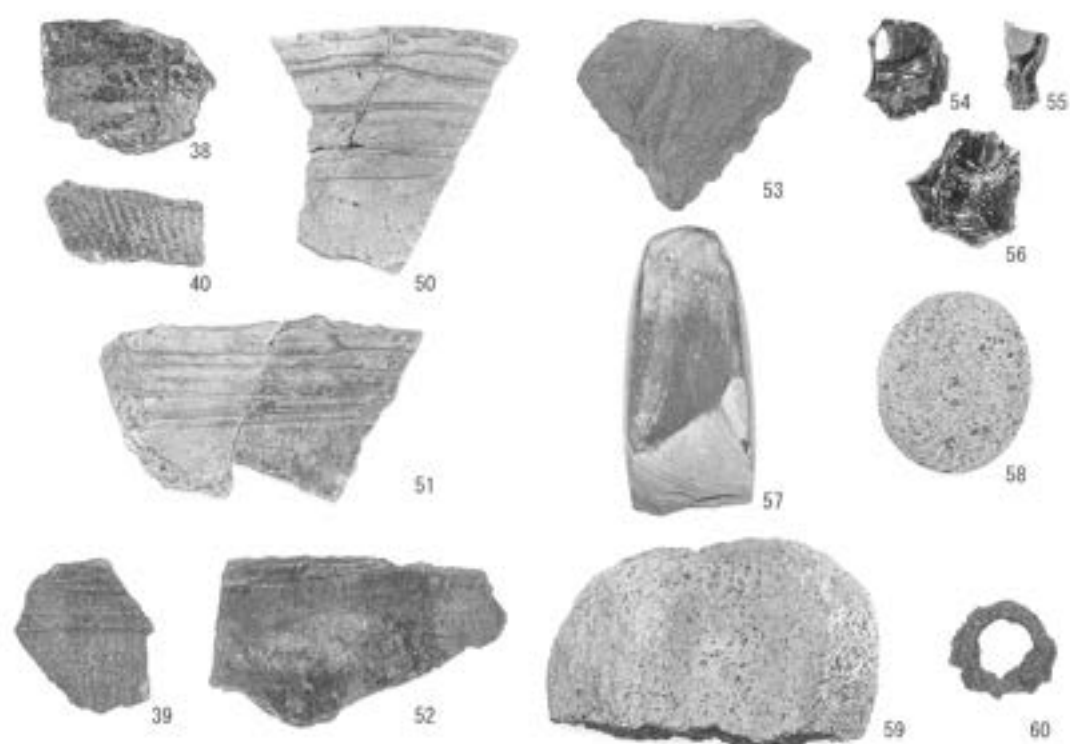


試掘調査出土遺物

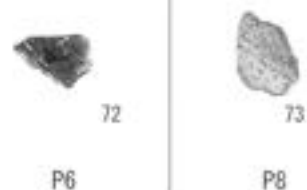
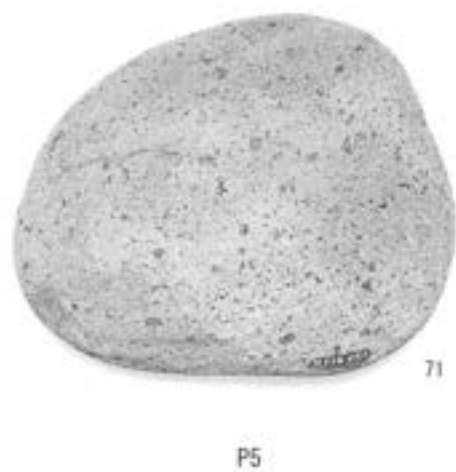
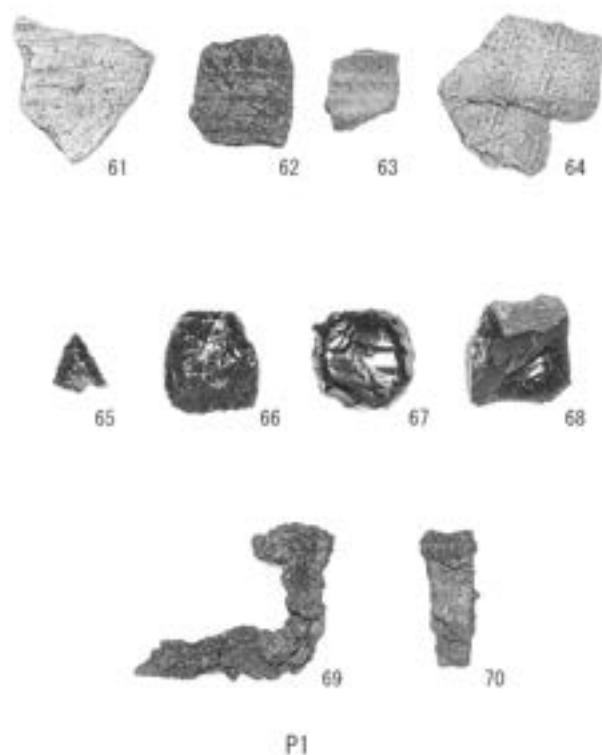


SHI 出土遺物

写真51 試掘調査出土遺物・平成30年度遺構内出土遺物(1)

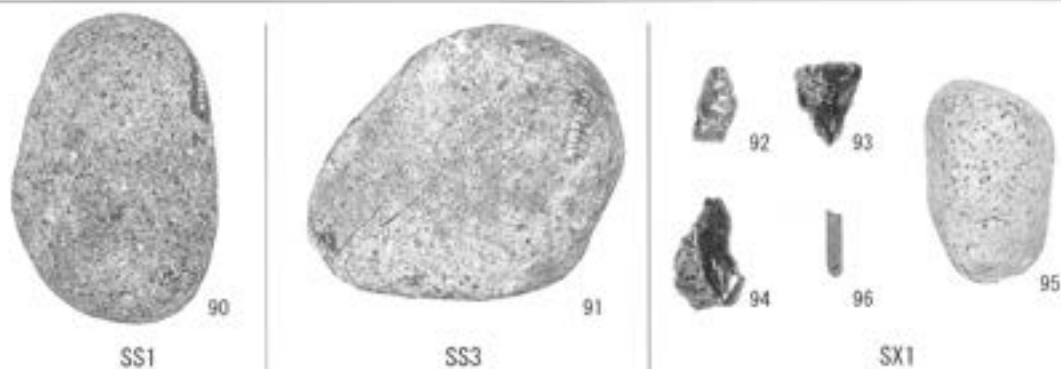
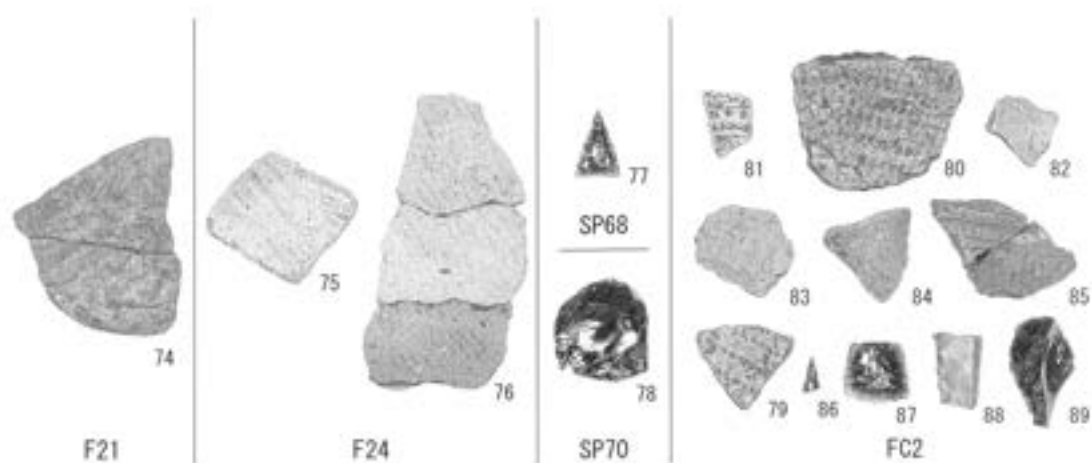


SH2 出土遺物

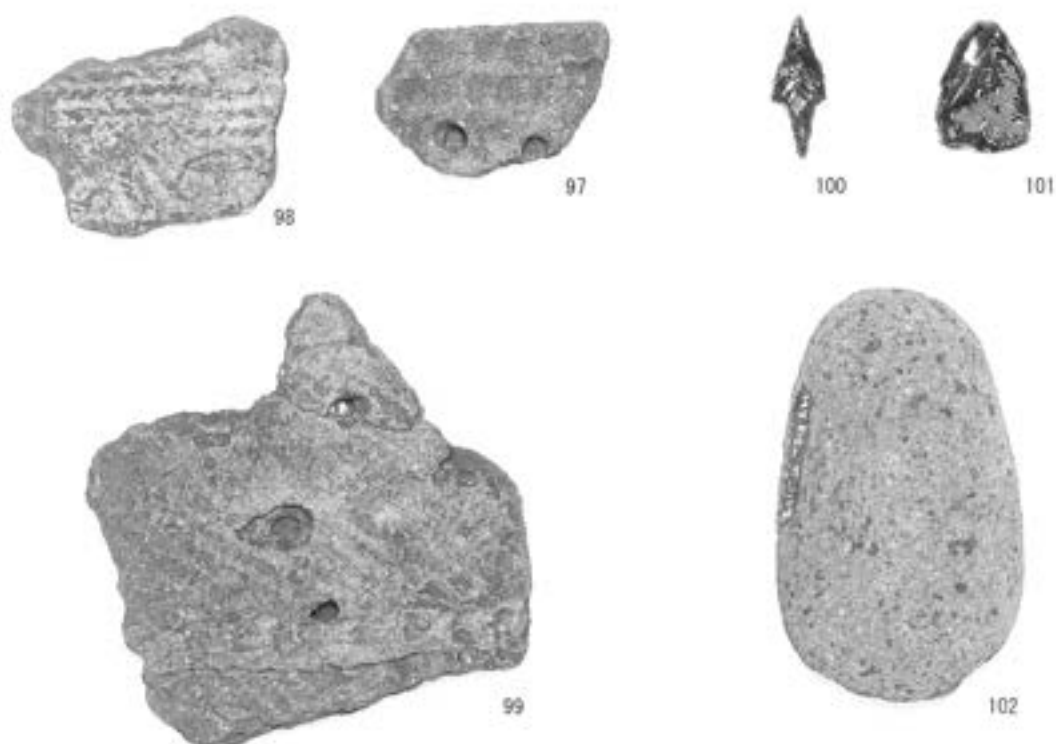


P 出土遺物

写真52 平成30年度遺構内出土遺物(2)

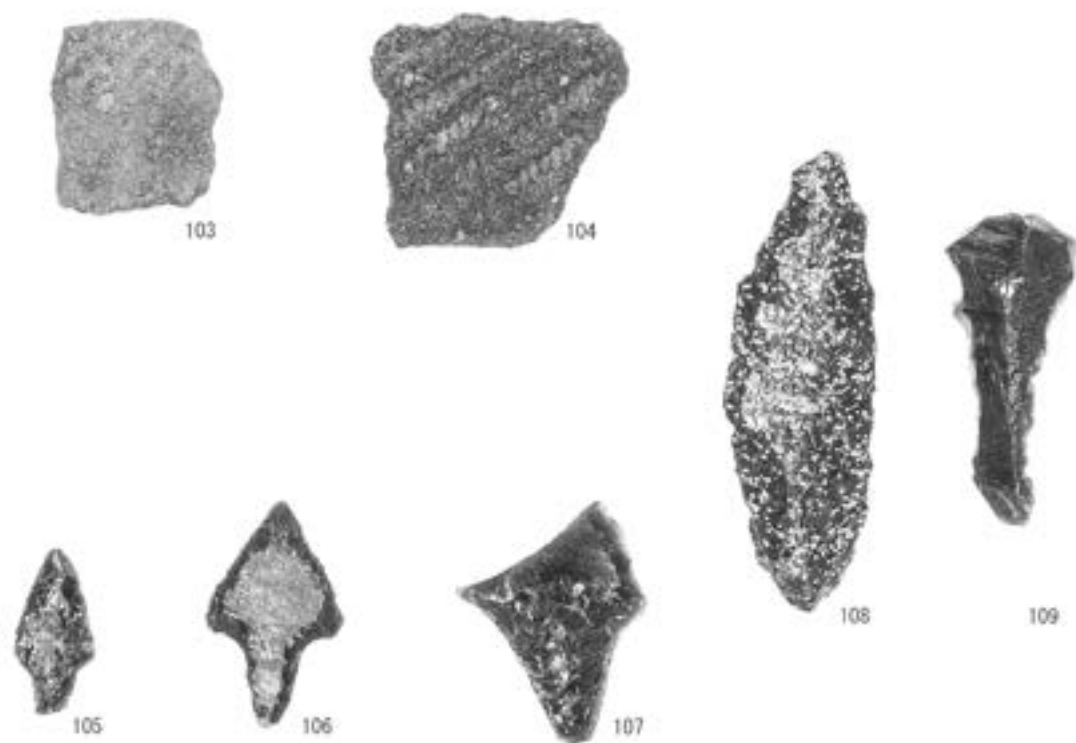


F・SP・FC・SS・SX 出土遺物



H1 出土遺物

写真53 平成30年度遺構内出土遺物(3)・平成31年度遺構内出土遺物(1)



H2 出土遺物

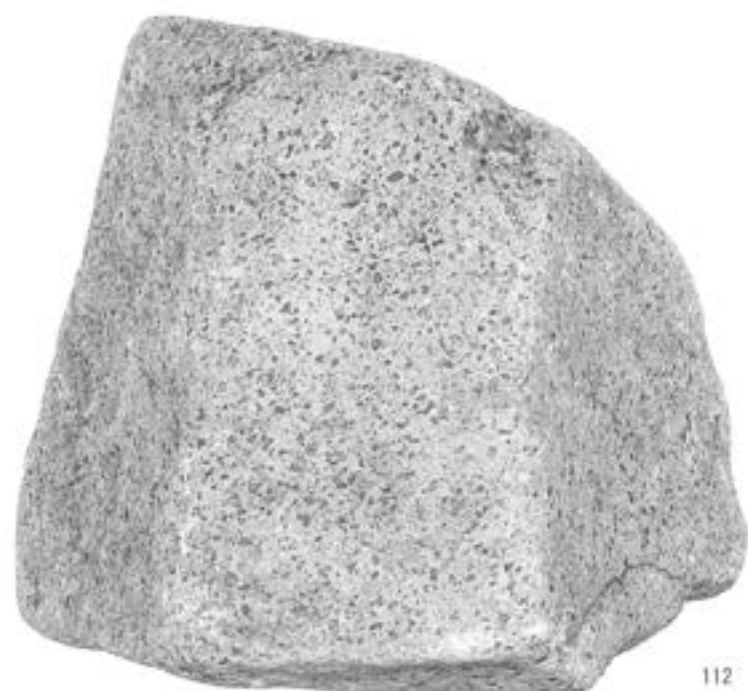


110

H3



111

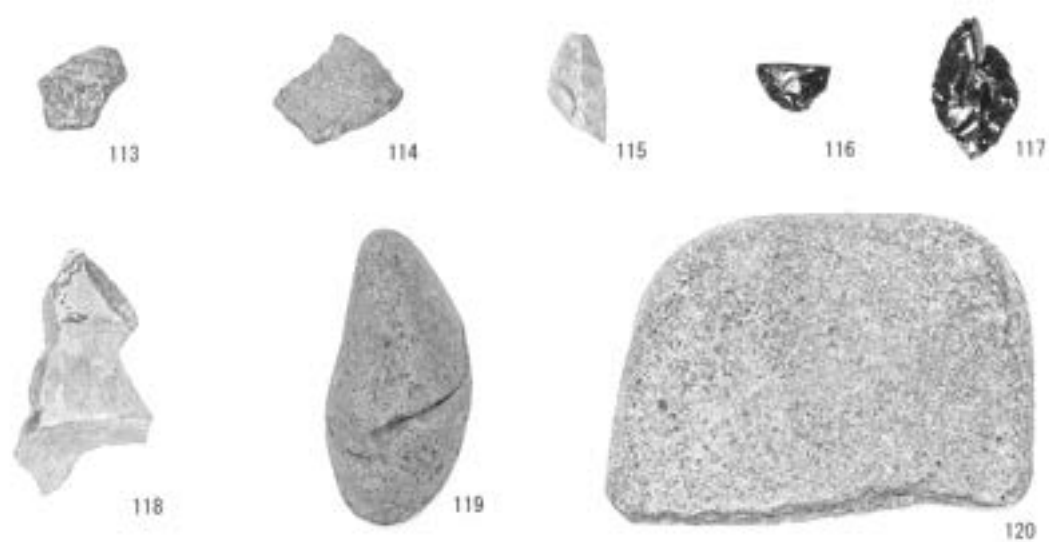


112

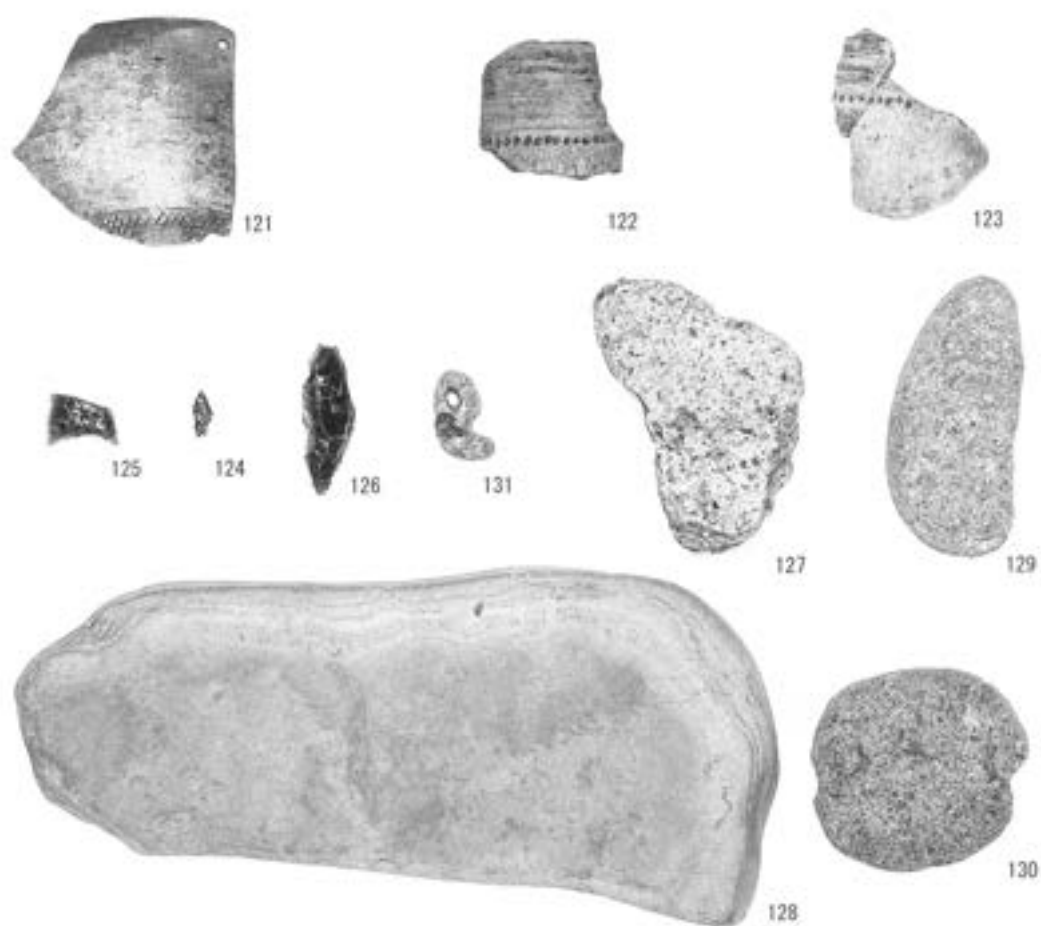
H4

H3・H4 出土遺物

写真54 平成31年度遺構内出土遺物(2)



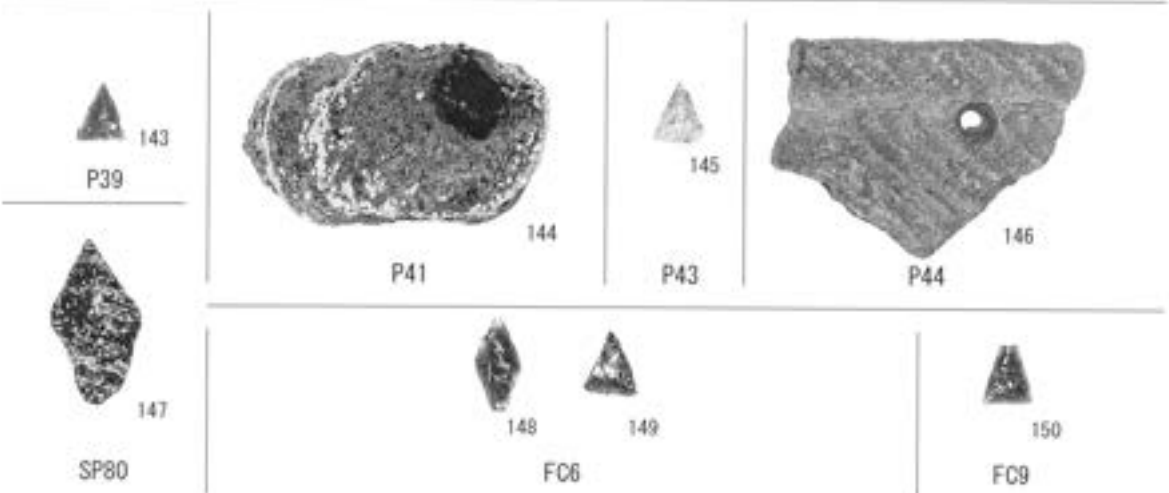
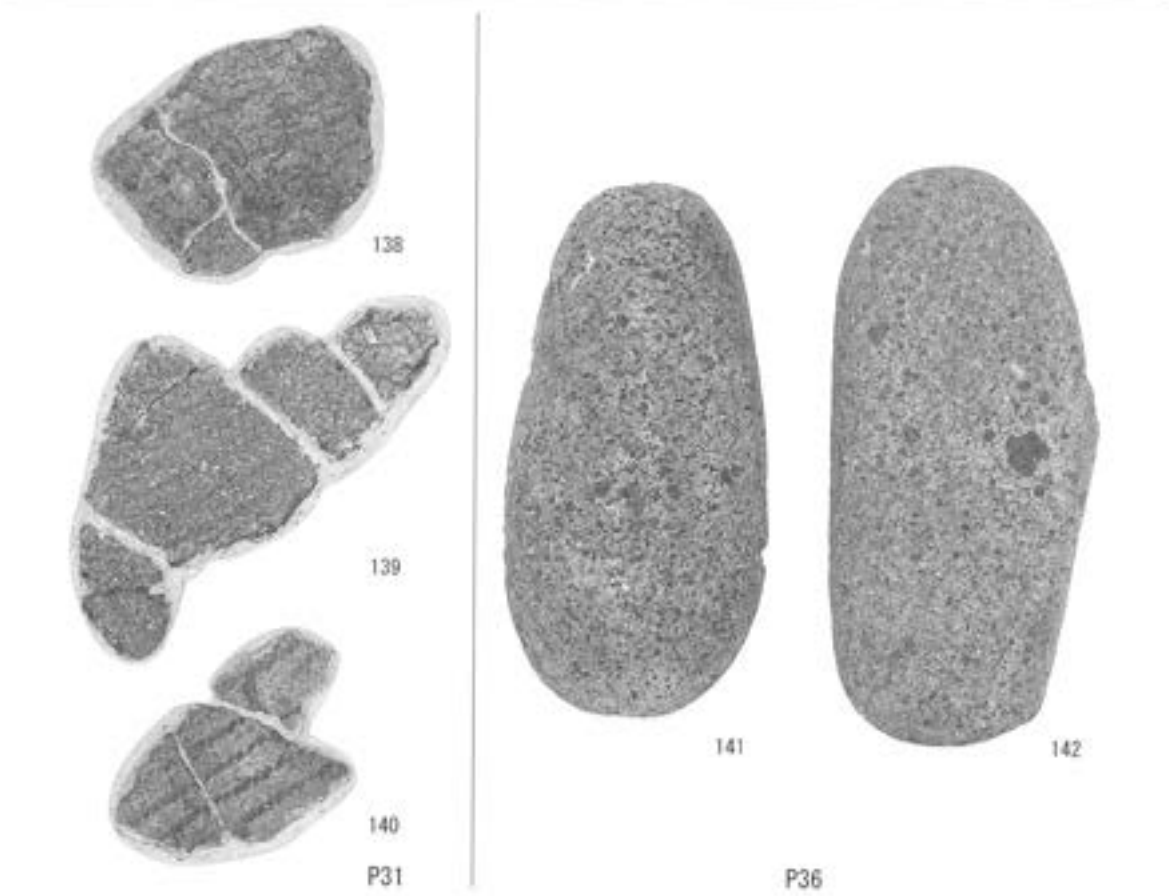
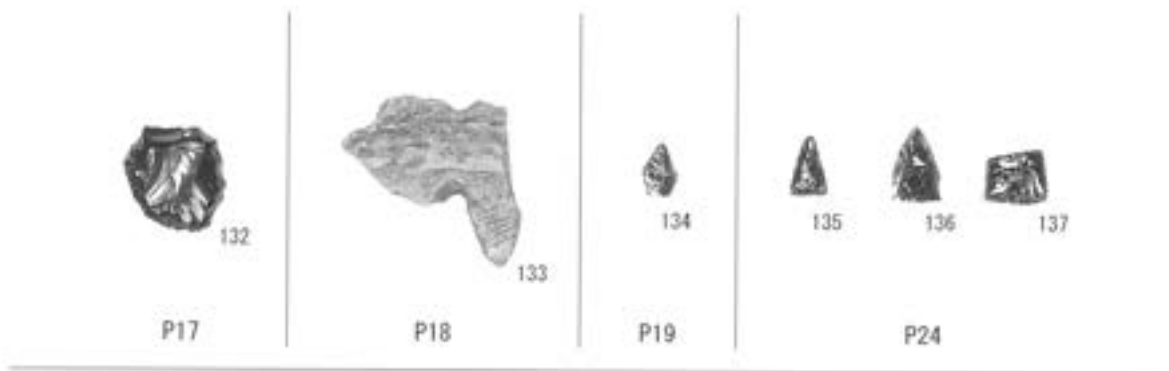
平成 30 年度出土分



平成 31 年度出土分

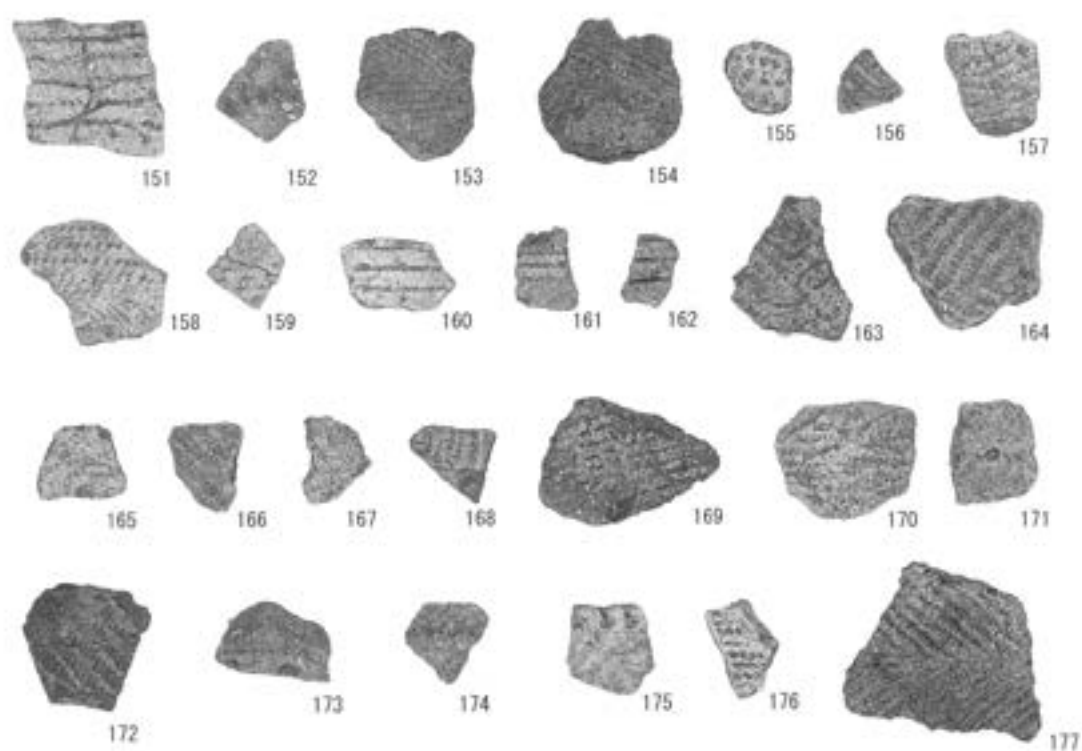
SH3 出土遺物

写真 55 平成 31 年度遺構内出土遺物 (3)

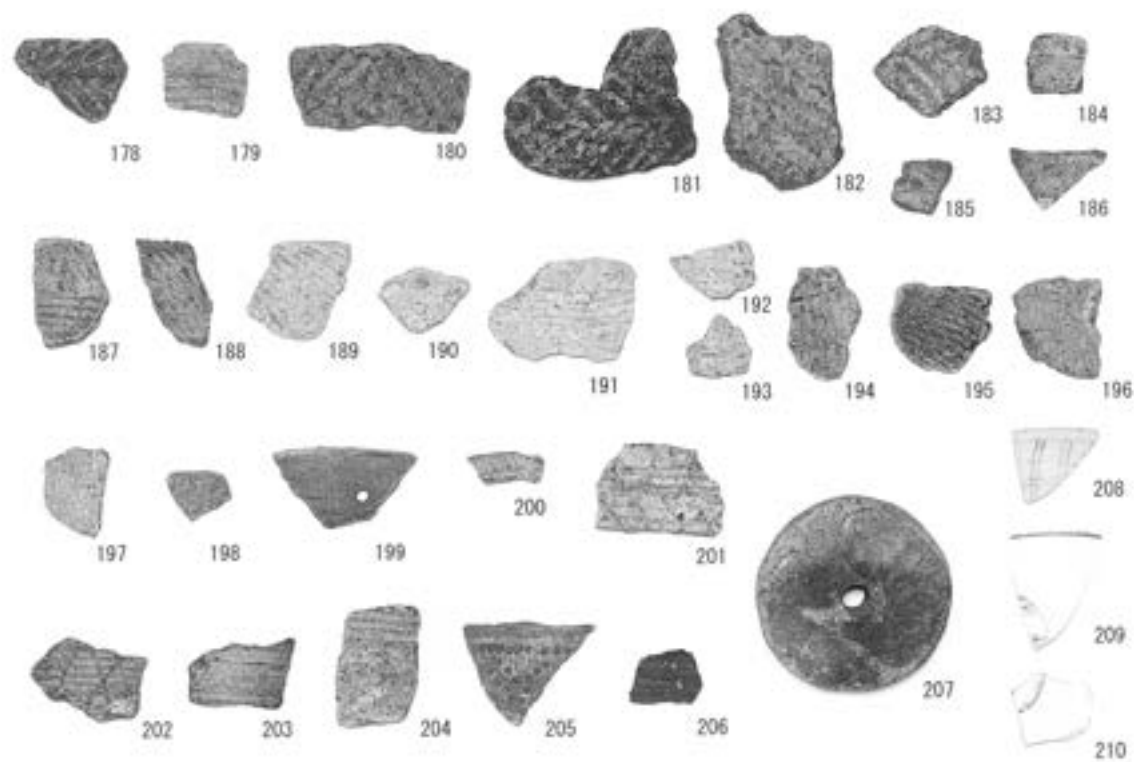


P・SP・FC 出土遺物

写真56 平成31年度遺構内出土遺物(4)

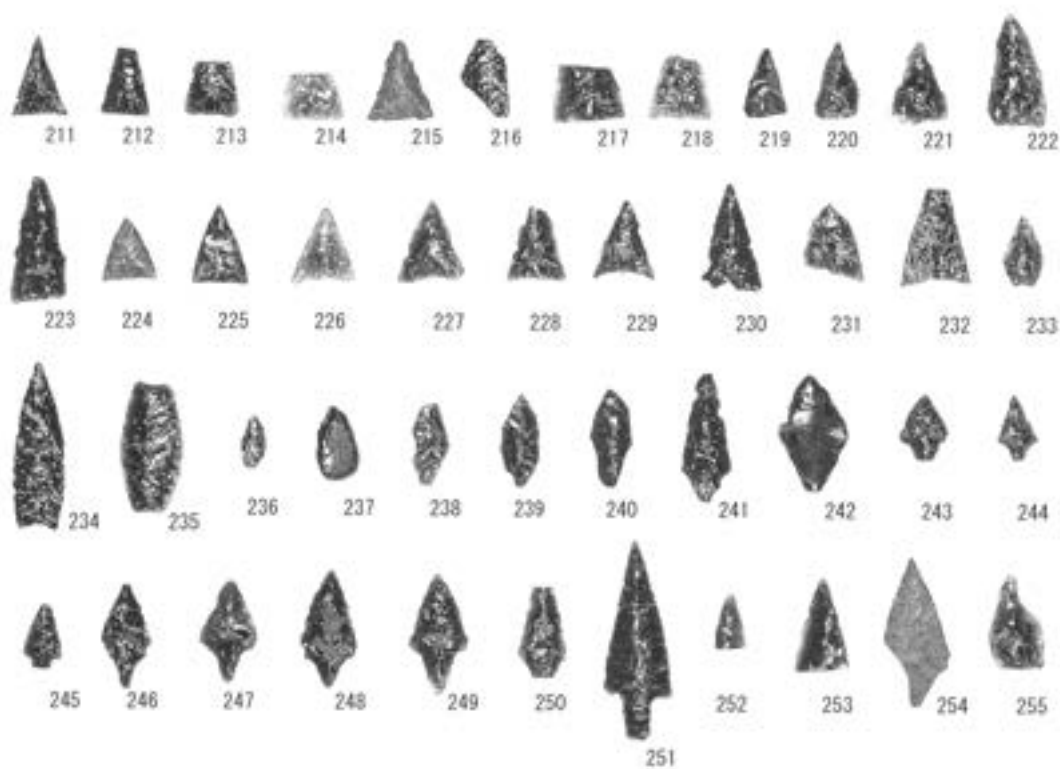


遺構外出土土器（縄文時代早・前・中期）

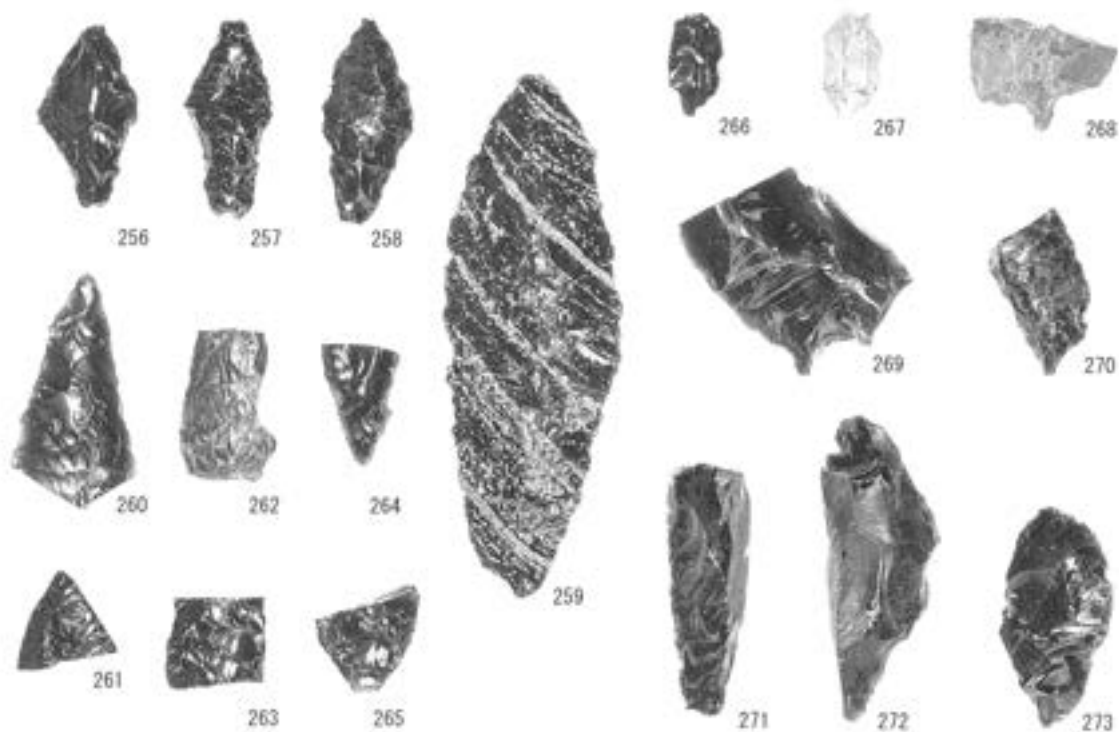


遺構外出土土器（縄文時代後・晩期・続縄文・擦文）・土製品・磁器

写真57 遺構外出土土器・土製品・磁器

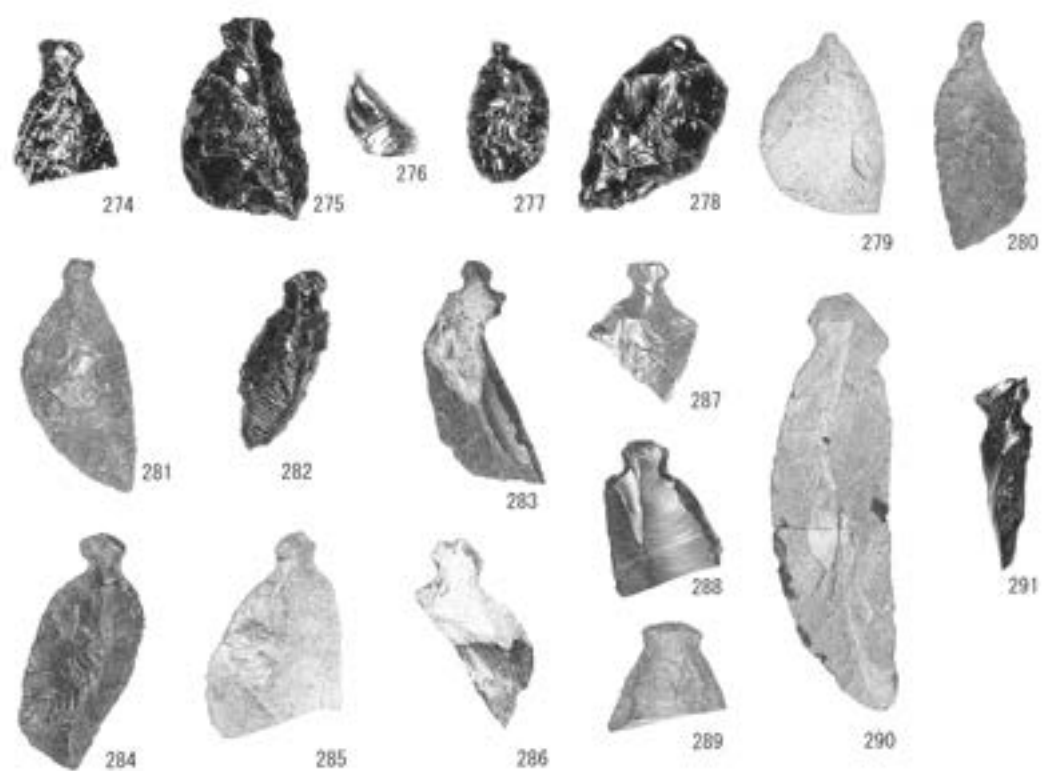


石鏃

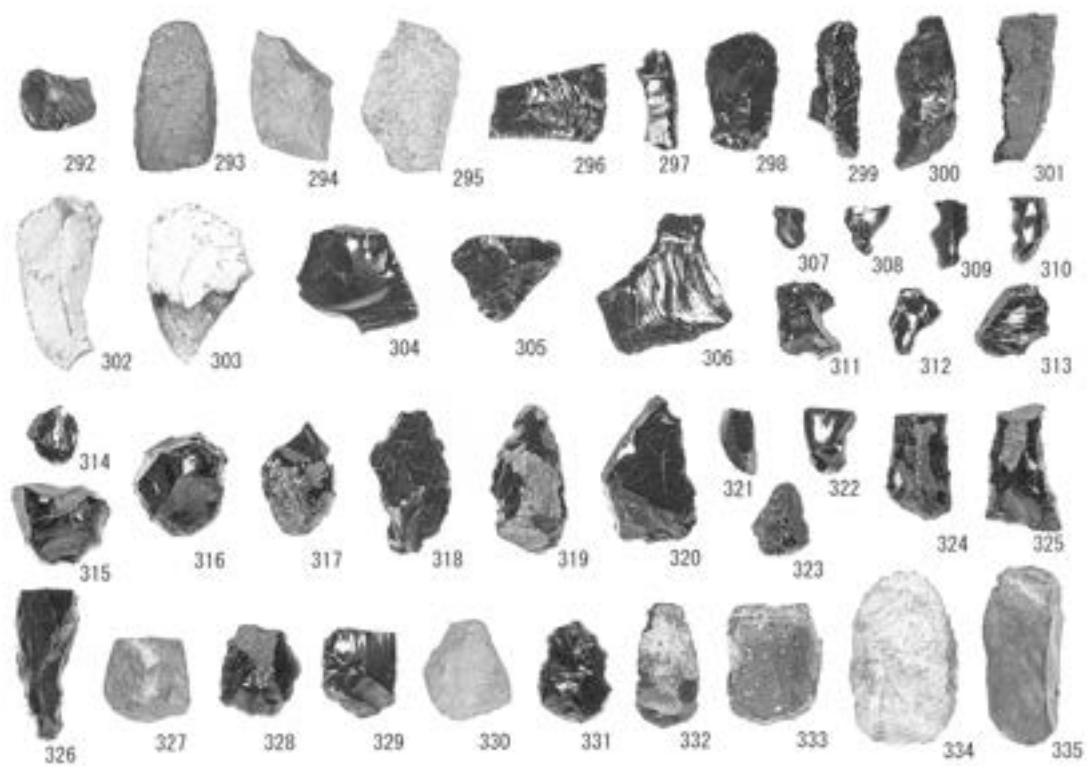


石槍・ナイフ・石鏃

写真58 遺構外出土石器(1)

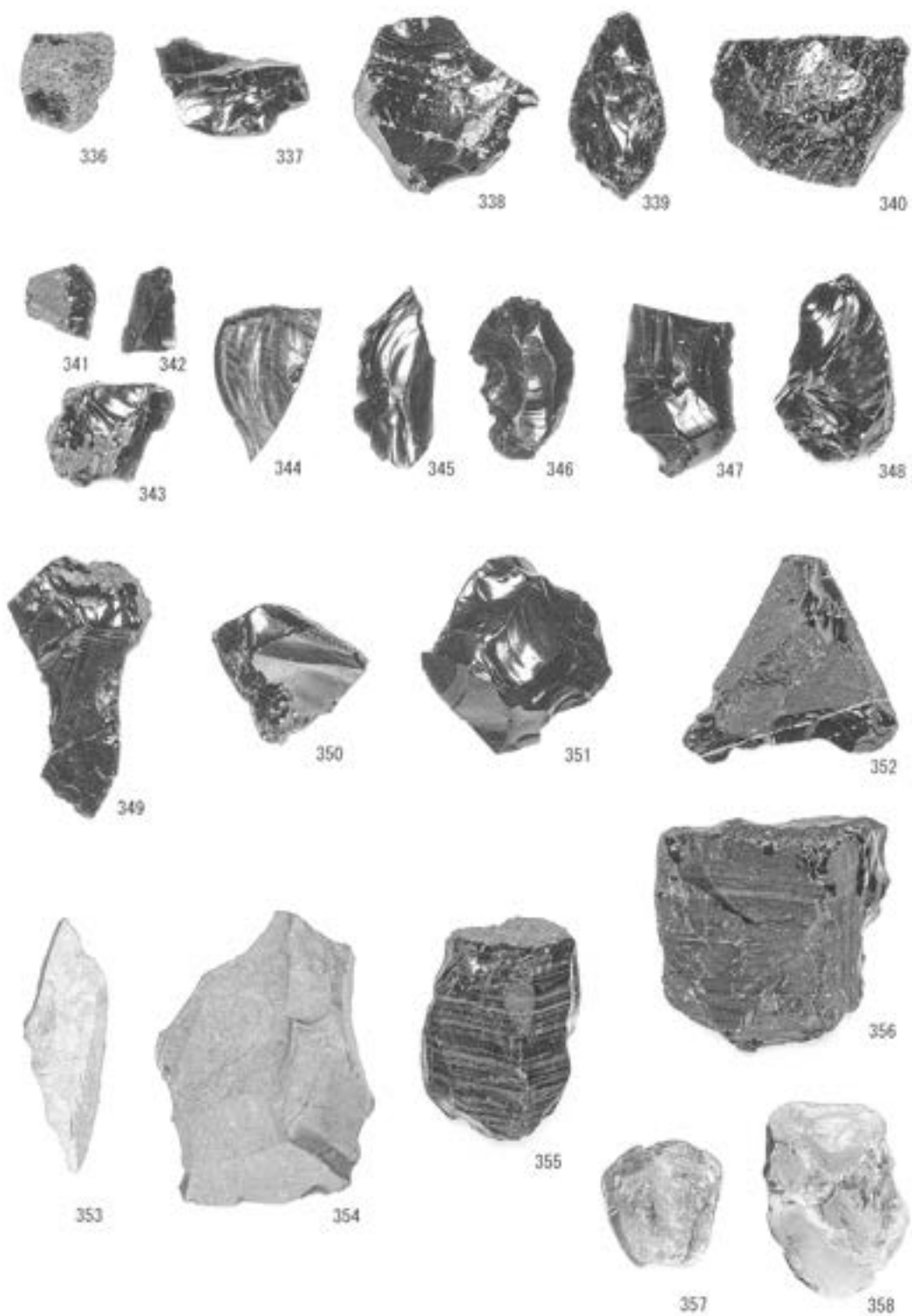


ナイフ a 類



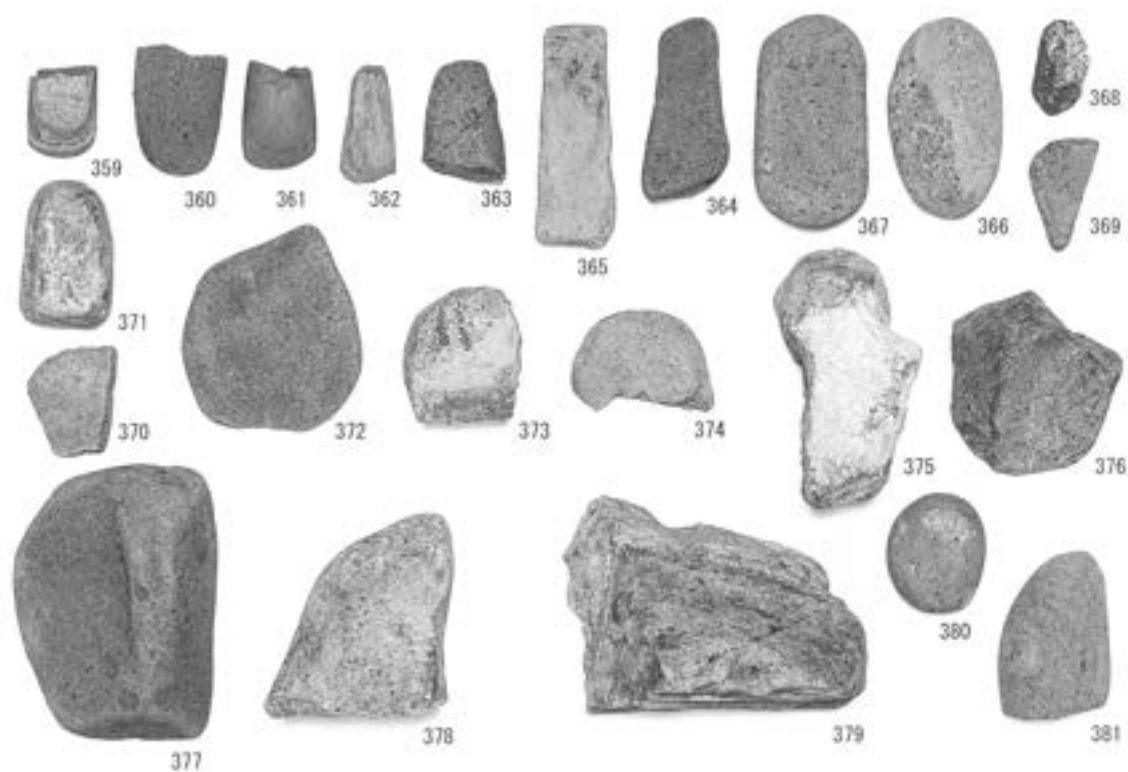
スクレイパー

写真 59 遺構外出土石器 (2)

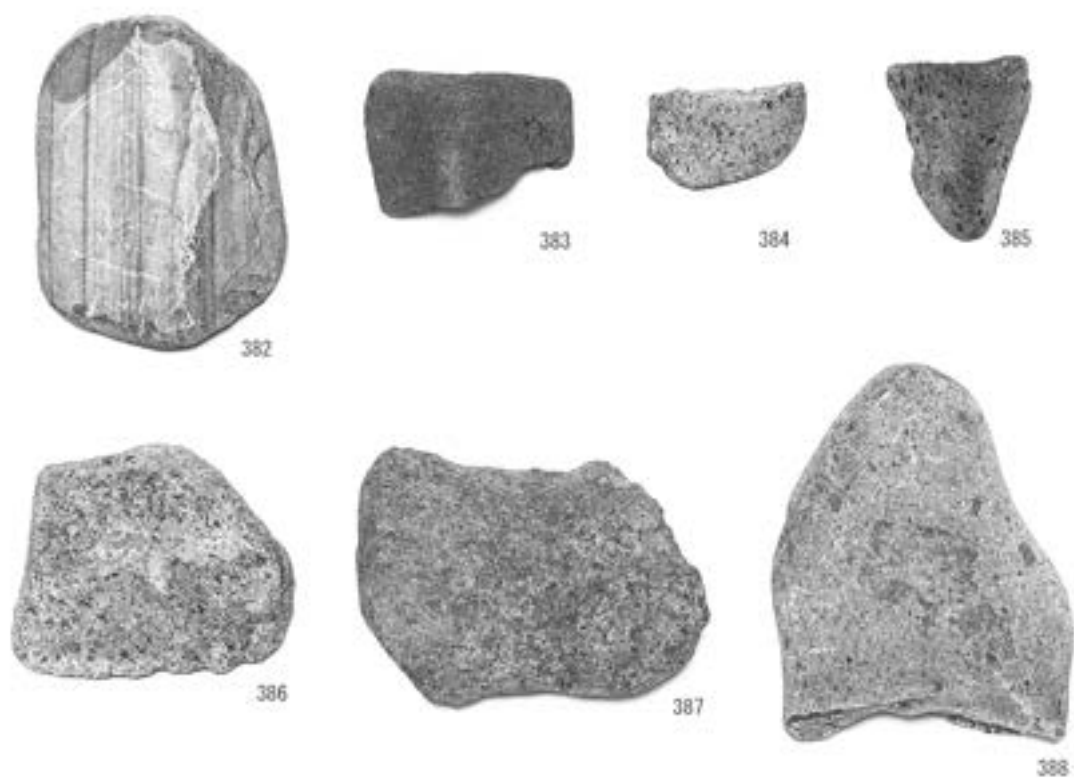


楔形石器・両面調整石器・Rフレイク・石核・原石

写真60 遺構外出土石器(3)



石斧・砥石

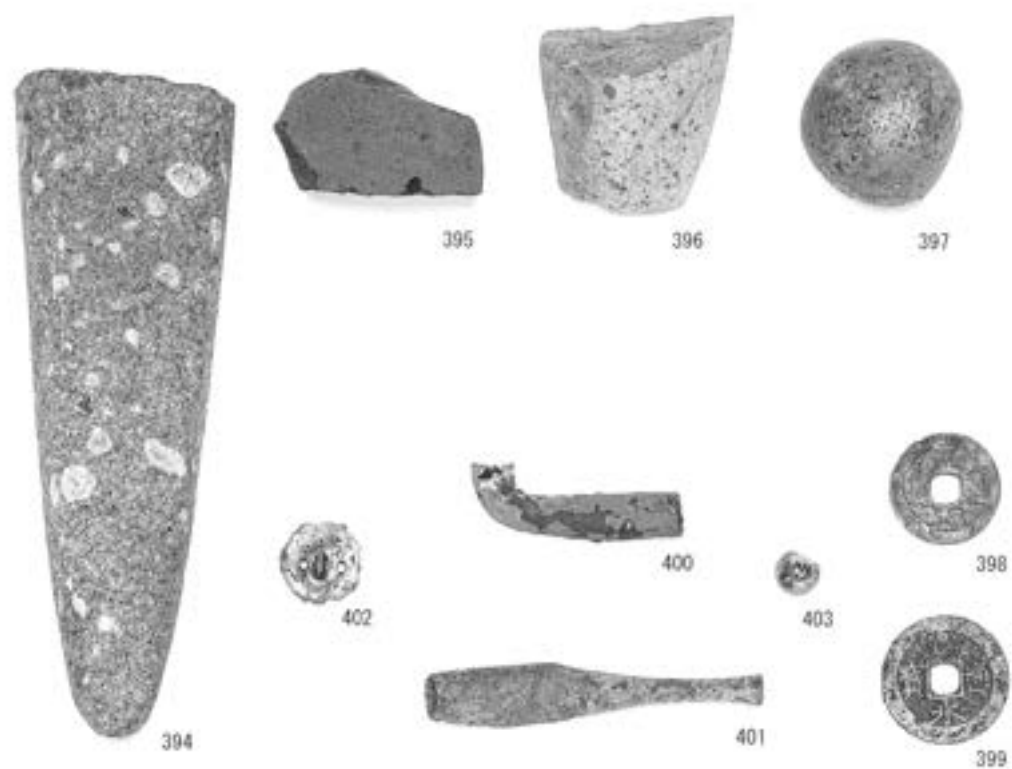


たたき石・すり石・くぼみ石

写真61 遺構外出土石器(4)



石皿・台石



石製品・金属製品・ガラス製品

写真62 遺構外出土石器(5)・石製品・金属製品・ガラス製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	はちまんやまいせき							
書 名	八幡山遺跡							
副 書 名	一般国道5号根知安余市道路(共和-余市) 工事施工に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編 著 者 名	小川康和・中塚風沙・石川博行・岩橋由久・高橋 理・田中哲郎・飯浜幹広							
編 集 機 関	余市町教育委員会							
所 在 地	〒046-8546 北海道余市郡余市町朝日町26番地							
発行年月日	2020年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はちまんやまいせき 八幡山遺跡 (平成30年度)	ほっかいどうよいちぐん 北海道余市郡	01408	D-19-030	43°	140°	2018.9.3 ～ 2018.11.2	618㎡	道路建設
はちまんやまいせき 八幡山遺跡 (平成31年度)	よいちろうくろかわちよう 余市町黒川町 707ほか			10′	49′	47″		
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
八幡山遺跡 (平成30年度)	集 落	縄文時代 統縄文時代 擦文時代		擦文住居 2軒 土坑 12基 炉跡 8基 小土坑 66基 剥片集中 2基 集石 4基 溝状遺構 1基 性格不明遺構 1基	土器片 土製品 陶磁器 剥片石器 礫石器 石製品 金属製品 古銭 ガラス製品	擦文住居が3軒検出された。住居の床面やカマドからは完形土器が数点出土した。時期は9世紀で、当該期の一括性の高い資料として特筆される。		
八幡山遺跡 (平成31年度)	集 落	縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代後期 擦文時代		縄文住居 4軒 擦文住居 1軒 土坑 47基 小土坑 106基 剥片集中 8基 性格不明遺構 1基	土器片 陶磁器 剥片石器 礫石器 石製品 金属製品 古銭 ガラス製品	縄文時代の住居4軒が検出された。石囲いを持つ縄文住居(112)からはイノシシの幼獣の骨片が確認された。 平成30年度に検出された擦文住居の床面の続きからは機織りに使用されたとみられる礫が多量にみつかった。		
要 約	<p>八幡山遺跡は登川左岸の丘陵上に立地する縄文時代・統縄文時代・擦文時代の複合遺跡である。丘陵の頂上付近には縄文時代後期の環状列石が確認されており、本調査地点は標高7～10m付近の緩斜面上に位置する。</p> <p>検出された主な遺構は、縄文住居・擦文住居・土坑・炉跡・剥片集中・集石等である。縄文時代と擦文時代は、遺構の分布状況に違いがみられる。</p> <p>出土した遺物は、土器・土製品・石器・石製品・金属製品等で、中でも石器の出土量が目立つ。</p> <p>登川流域に位置する本遺跡の今回の調査によって、縄文時代や擦文時代の生活を知る上で、重要な調査成果が得られた。</p>							

八幡山遺跡

一般国道5号倶知安余市道路(共和-余市)工事施工に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 令和2年3月10日
編集 余市町教育委員会社会教育課文化財係
〒046-0011
北海道余市郡余市町入舟町21番地
TEL 0135-22-6187

発行 余市町教育委員会
〒046-8546
北海道余市郡余市町朝日町26番地
TEL 0135-21-2111(代)

印刷・製本 株式会社 おおはし
北海道余市郡余市町大川町14丁目14番地
